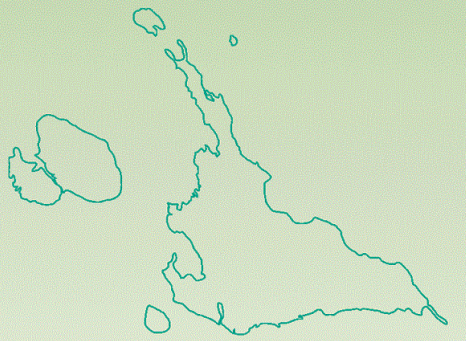
国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈全文〉 南琉球宮古方言調査報告書：消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木部, 暢子, ペラール, トマ, 林, 由華, 五十嵐, 陽介, かりまた, しげひさ, 松浦, 年男, 中島, 由美, 徳永, 晶子, 諸岡, 大悟 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002456

国立国語研究所共同研究報告書　12-02　　ISSN 2185-0127

消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究
南琉球宮古方言調査報告書



木部暢子［編］

2012年8月

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立国語研究所
National Institute for Japanese Language and Linguistics

はじめに

「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」は，国立国語研究所の基幹型共同研究プロジェクトとして 2009 年 10 月にスタートしました。2010 年度からは毎年１回，共同研究者や若手研究者が１カ所に集まって共同で調査を行う合同調査を実施しています。これまで，２回の合同調査を行いました。それは，次のとおりです。

第１回合同調査　鹿児島県喜界島方言調査（2010 年９月）

第２回合同調査　沖縄県宮古方言調査（2011 年９月）

本書は，このうち，第２回合同調査　宮古方言調査の調査報告書です。

調査の折りには，たくさんの方にお世話になりました。まず，暑いなか，また，お忙しいなか，公民館まで足を運んでくださり，親切に宮古のことばを教えてくださった方々に深く御礼申し上げます。みなさんのおかげで，このような報告書を作成することができました。また，川上哲也宮古島市教育長をはじめとして，教育委員会生涯学習部生涯学習振興課のみなさんには，調査の準備から，調査の実施，文化講演会に至るまで，大変お世話になりました。特に，生涯学習振興課文化財係主任主事の新城宗史さんには，地元の方々のご紹介や日程調整などで，お世話をおかけしました。深く感謝申し上げます。

この報告書の内容は，宮古のことば全体から見ると，ごく一部のわずかなものにすぎませんが，宮古のことばの研究や記録・保存の資料として，少しでも多くの方々に使っていただけると幸いに存じます。また，国立国語研究所ホームページの「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」のページで，本書のPDF版を公開しています。こちらもぜひ，ご覧ください。

2012年８月１日

国立国語研究所　木部　暢子

消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究
南琉球宮古方言調査報告書

目　次

はじめに

１　プロジェクトの概要（木部 暢子） ---------- 1

２　調査の概要（木部 暢子） ---------- 5

３　宮古方言の概要

宮古諸方言の音韻―体系と比較―（トマ ペラール・林 由華） ----------13

南琉球宮古語与那覇方言の名詞アクセント体系：初期報告（五十嵐 陽介） ------53

宮古語の動詞活用－代表形、否定形、過去形、中止形－

（かりまた しげひさ） ----------69

４　宮古方言の特徴

宮古諸方言の音声実現に関する予備的検討（松浦 年男） ---------- 111

宮古群島若年層による方言音声認識の実態－老人（ウイブストゥ）と若者（バカムヌ）の間－

（中島 由美・徳永 晶子・諸岡 大悟） ---------- 127

５　宮古方言データ集

凡例および表記について（木部 暢子） ---------- 149

宮古方言基礎語彙ａ データ ---------- 161

宮古方言基礎語彙ｂ データ ---------- 195

宮古方言文法項目 データ ---------- 217

宮古方言基礎語彙　共通語索引 ---------- 261

宮古方言文法項目 一覧 ---------- 267

６　宮古方言研究文献目録 ---------- 273

７　文化講演会 ---------- 281

執筆者紹介

1　プロジェクトの概要

木部　暢子（国立国語研究所）

1　プロジェクトの目的

「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」は，国立国語研究所の基幹型共同研究プロジェクトとして2009年にスタートした。プロジェクトの目的は以下のとおりである。

グローバル化が進む中，世界中の少数言語が消滅の危機に瀕している。2009 年 2 月のユネスコの発表によると，日本語方言の中では，沖縄県のほぼ全域の方言，鹿児島県の奄美方言，東京都の八丈方言が危険な状態にあるとされている。これらの危機方言は，他の方言ではすでに失われてしまった古代日本語の特徴や，他の方言とは異なる言語システムを有している場合が多く，一地域の方言研究だけでなく，歴史言語学，一般言語学の面でも高い価値を持っている。また，これらの方言では，小さな集落ごとに方言が違っている場合が多く，バリエーションがどのように形成されたか，という点でも注目される。

本プロジェクトでは，フィールドワークに実績を持つ全国の研究者を組織して，これら危機方言の調査を行い，その特徴を明らかにすると同時に，言語の多様性形成のプロセスや言語の一般特性の解明にあたる。また，方言を映像や音声で記録・保存し，それらを一般公開することにより，危機方言の記録・保存・普及を行う。

（国立国語研究所ホームページより）

2　研究方法

消滅危機方言の調査は緊急を要する。そのため，フィールド調査に実績を持つ国内外の研究者を組織化し，調査研究を効率的に進める必要がある。また，質の高いデータを残すために，これまで，必ずしも統一的でなかった方言（言語）の調査方法や記述方法に統一性を持たせる必要がある。さらに，将来の方言（言語）研究を担う若手研究者の育成も必要である。以上を踏まえて，本プロジェクトでは次の２種類の調査をベースとして研究を進めている。

(1) 共同研究者が各自のフィールドで行う各地点調査研究
(2) 共同研究者が一同に会して行う合同調査研究

(1) はそれぞれの共同研究者がそれぞれのフィールドで行う調査研究で，共同研究者はその成果をプロジェクトの共同研究発表会で発表し，自分の調査研究を発展させるきっかけとしている（共同研究発表会では，若手研究者の研究を支援するために，共同研究者以外の若手研究者が発表を行うこともある）。

(2) は調査地点を定め，その地点の音声・アクセント・文法・基礎語彙・談話等を総合的に記述する調査である。この調査には，共同研究者だけでなくポスドク，学振特別研究員，大学院生といった若手研究者も参加し，参加者が共同で調査・データ整理・報告書の作成を行っている。これまで，鹿児島県喜界島方言調査（2010 年９月），沖縄県宮古方言調査（2011 年９月）の２回の調査を行った。

３　共同研究発表会

フィールド調査のほかに，年２・３回，公開の共同研究発表会を開催し，研究者同士の意見交換を行っている。平成23年度は以下のような研究会を開催した。

■平成 23 年度　第１回（「語彙の音韻特性」と合同開催）
日時：平成 23 年 5 月 21 日（土）・5 月 22 日（日）
場所：神戸大学

5 月 21 日（土）［公開シンポジウム］Ｎ型アクセントの原理と成立

1. 上野善道（東京大学名誉教授 / 国立国語研究所客員教授）
「Ｎ型アクセントとは何か」
2. 木部暢子（国立国語研究所 時空間変異研究系教授）
「九州２型アクセントの実態」
3. 窪薗晴夫（国立国語研究所 理論・構造研究系教授）
「鹿児島県甑島方言のアクセント規則」
4. 松森晶子（日本女子大学教授 / 国立国語研究所客員教授）
「隠岐島３型アクセントの再解釈」
5. 新田哲夫（金沢大学教授 / 国立国語研究所プロジェクト共同研究員）
「福井市周辺部のＮ型アクセント」

ディスカッション
司会:ウエイン・ローレンス（ニュージーランド オークランド大学／国立国語研究所プロジェクト共同研究員）

5 月 22 日（日）プロジェクト共同研究発表会

1. まつもと ひろたけ（「危機言語」プロジェクト共同研究員）
「奄美喜界島方言のアリ・リ系のかたちをめぐって」
2. 髙橋 康徳（東京外国語大学大学院・日本学術振興会特別研究員）
「上海語変調におけるピッチ下降現象」

■平成 23 年度　第２回（「語彙の音韻特性」と合同開催）
日時：平成 23 年 7 月 16 日（土）・7 月 17 日（日）
場所：国立国語研究所

7 月 16 日

1. 青井隼人（東京外国語大学大学院／日本学術振興会特別研究員）

「舌端の狭めを伴う母音の音声的記述: 宮古多良間方言の事例研究

2．又吉里美（志學館大学）

「沖縄津堅島方言の文末詞について」

7 月 17 日

3．新永 悠人（東京大学大学院/JSPS）・小川 晋史（国立国語研究所）

「北琉球奄美湯湾方言のアクセントについて」

4．五十嵐陽介（広島大学）田窪行則（京都大学/国立国語研究所客員教授），林由華（京都大学非常勤講師），久保智之（九州大学）

「琉球語宮古池間方言の三型アクセント体系」

■平成 23 年度　第３回「方言研究とテキストー現状と展望」

日時：平成 24 年 2 月 18 日（土）　13:00～17:35

場所：2 月 19 日（日）　10:00～15:30

2 月 18 日

1．日高水穂（関西大学）

「昔話の「語りの型」とその地域差」

2．新田哲夫（金沢大学）

「日本語史資料としての方言テキスト」

3．高木千恵（大阪大学）

「関西方言の自然談話にみるワ行五段動詞ウ音便形の衰退と残存」

2 月 19 日（日）

パネルディスカッション

1．大槻知世（東京大学学部４年生）

「津軽方言における推量形式『ビョン』の使用状況」

2．麻生玲子（東京外国語大学大学院／日本学術振興会特別研究員）

「八重山波照間方言における動詞の屈折と派生をテキストから考察する」

3．白田理人（京都大学大学院）

「喜界島方言―テキストから見る動詞形態論上の問題」

全体討議　コメンテーター

中山　俊秀（東京外国語大学）

風間伸次郎（東京外国語大学）

木部　暢子（国立国語研究所）

４　共同研究員

本プロシェクトの共同研究員は，以下のとおりである（2012年4月1日現在）。

ウエイン・ローレンス（オークランド大学），上野善道（国立国語研究所客員教授），大西拓一郎（国立国語研究所），金田章宏（千葉大学），狩俣繁久（琉球大学／国立国語研究所客員教授），久保智之（九州大学），窪薗晴夫（国立国語研究所），クリス・デイビス（琉球大学），下地賀代子（沖縄国際大学），下地理則（九州大学／国立国語研究所客員准教授），田窪行則（京都大学／国立国語研究所客員教授），竹田晃子（国立国語研究所プロジェクト非常勤研究員），ダニエル・ロング（首都大学東京），トマ・ペラール（フランス国立科学研究所），中島由美（一橋大学），仲原穣（琉球大学），西岡敏（沖縄国際大学），新田哲夫（金沢大学），又吉里美（岡山大学），町博光（広島大学），松本泰丈（別府大学），松森晶子（日本女子大学／国立国語研究所客員教授），三井はるみ（国立国語研究所）（五十音順）

2　調査の概要

木部　暢子（国立国語研究所）

1　宮古諸島の概要

宮古諸島は，沖縄本島から南に 300 ㎞のところに位置する島々で，宮古島，池間島，大神島，伊良部島，下地島，来間島，多良間島，水納島らなる（地図１・２参照）。2005 年 10 月 1 日に，旧平良市と宮古郡伊良部町・上野村・城辺町・下地町の 5 市町村が合併して宮古島市となったために，現在では，宮古島，池間島，大神島，伊良部島，下地島，来間島が宮古島市に所属し，多良間島，水納島が宮古郡多良間村に属している。

宮古島市は，面積 204.59 ㎢（宮古島：159.26 ㎢，池間島：2.83 ㎢，大神島：0.24 ㎢，伊良部島：29.08 ㎢，来間島：2.84 ㎢），人口 55,036 人（平良地区：36,138 人，城辺地区：6,780 人，下地地区：3,065 人，上野地区：3,128 人，伊良部地区：5,925 人）で，サトウキビやマンゴーなどの果物類の栽培，観光，酒造などを主な産業としている（数字は，宮古島市ホームページ「23 年度版統計みやこじま」から引用した。人口は 2010 年 12 月現在の人口）。

多良間村は，面積 19.75㎞の多良間島と，面積 2.153ｋ㎡の水納島からなり，人口は多良間島が 1,273 人，水納島が 6 人である（平成 24 年 6 月現在の多良間村ホームページによる）。

地図１　宮古島の位置

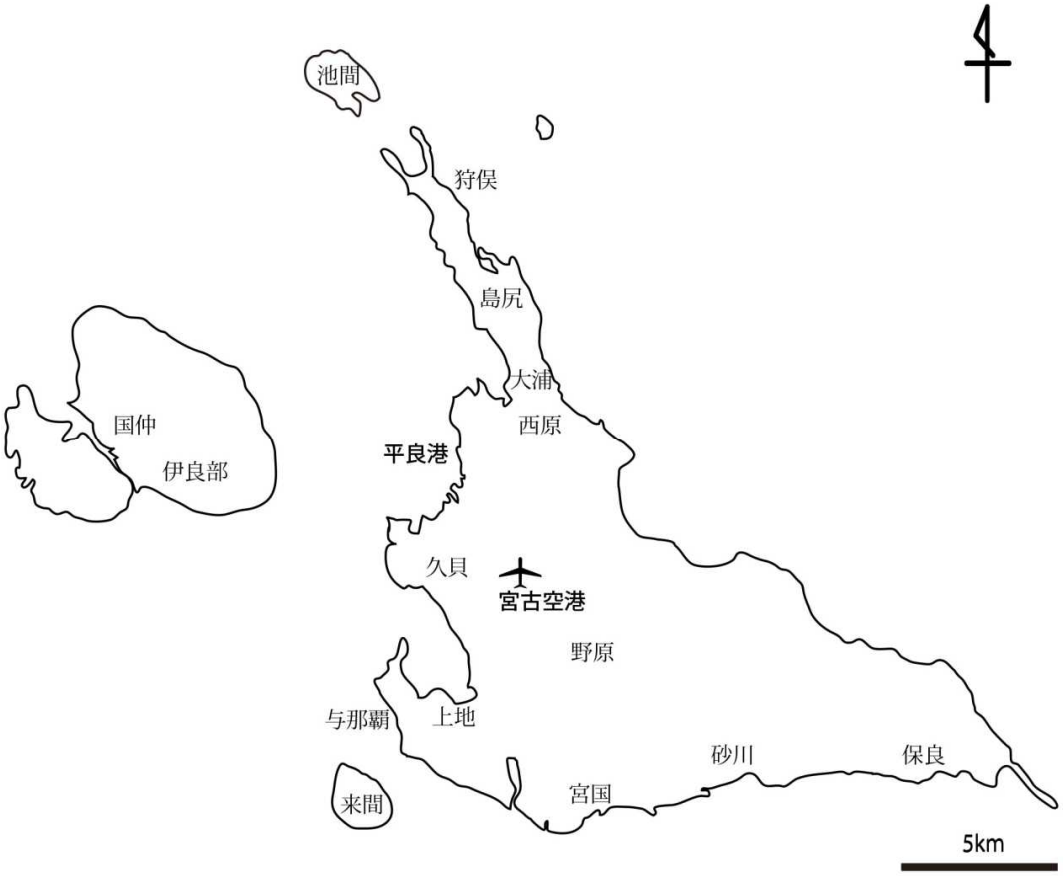
地図２　宮古諸島

２　調査の概要

2011 年 9 月の調査では，宮古島市に属する宮古島，池間島，伊良部島，下地島，来間島の方言調査を行った。調査の概要は以下のとおりである。

２．１　調査地点

調査地点は，池間，狩俣，島尻，大浦，西原，久貝（平良地区），与那覇，上地，来間（下地地区），野原，宮国（上野地区），砂川，保良（城辺地区），伊良部，国仲（伊良部地区）の 15 地点である（地図３参照）。



地図３　宮古方言調査地点

２．２　調査日時，調査項目，担当者

調査は2011年9月4日～9月7日に行った。調査地点・調査項目・調査者・話者を以下にあげる。

宮古方言調査における調査地点・調査項目・調査者・話者

日付	地点	調査項目	調査者	話者
9 月 4 日 13：00～	池間	基礎語彙 a	ローレンス，荻野，平子，青井	勝連昭子
		基礎語彙 b	新田，平山，松浦，川瀬	仲原好子
		文法（前）	野原，仲原，デイビス，内海	濱川マサ子
		文法（後）	又吉，山田，白田，當山	濱元照子
9 月 5 日 14：00～	狩俣	基礎語彙 a	ローレンス，中澤	根間昌明
		基礎語彙 b	中島，竹田	花城ヒデ
		文法（前）	仲原，松本	上原正行
		文法（中）	仲間(恵)，デイビス，内海	狩俣昌喜
	大浦	基礎語彙 a	林，竹村	下地ハツ子
		基礎語彙 b	平子，久保薗	大里正行
	上地	基礎語彙 a	新田，井上，川瀬	上地清勝
		アクセント	上野，松浦，青井	上地繁男
		談話	田窪，荻野，山田，白田	仲原トミ 下地文
	野原	基礎語彙 b	野原，徳永，又吉，平山	久貝シゲ
	保良	文法（後）	狩俣，金田，山田，諸岡	下地良子
	西原	アクセント	五十嵐，仲間(博)，田窪	仲原君枝
9 月 6 日 14：00～	砂川	基礎語彙 a	狩俣，木部，平山，竹村	砂川俊雄
		文法（前）	仲間(恵)，井上，荻野	宮里久男
		文法（中）	西岡，内海，デイビス	砂川渡
	久貝	基礎語彙 a	ローレンス，仲原，川瀬，久保薗	与那覇金吉
		文法（前）	野原，林，仲間(博)，松本	与那覇義彦
	宮国	文法（前）	金田，竹田	宮国キク
		文法（中）	田窪，中島	松岡秀子
19：30～	保良	基礎語彙 a	白田，徳永，ペラール	砂川春美
		基礎語彙 b	新田，平子，中澤	平良盟子
		アクセント	五十嵐，上野，松浦，青井	下地博盛
		文法（前）	狩俣，當山	砂川辰夫
		文法（中）	下地，諸岡	平良恵雄

9月7日 14：00～	来間	基礎語彙a	ローレンス，平子	川満キク 玉城千代
		文法（前）	狩俣，内海，デイビス	砂川ウメ
		文法（中）	金田，井上，竹田	砂川ハル
	国仲	基礎語彙a	新田，中澤	仲宗根玄信
		基礎語彙b	諸岡，徳永	仲宗根チヨ子
		文法（後）	中島	吉浜ヨシ子
	伊良部	基礎語彙a	ペラール，竹村	川満恵宏
		基礎語彙b	木部，仲間(博)，當山	下地方幸 平良玄輔
	与那覇	基礎語彙a	白田，小川	幸地昇良
		アクセント	五十嵐，上野，青井，松浦	池村豊助
		文法（前）	下地	与那覇重夫
		文法（中）	林	垣花武一
19：30～	島尻	語彙a	白田，ペラール	辺土名豊一
		語彙b	下地，林	池間貞夫

２．３　調査内容と調査方法

調査項目は，基礎語彙ａ，基礎語彙ｂ，アクセント，文法の４種類である。基礎語彙ａと基礎語彙ｂは，人体，親族，動物，植物，自然，時間，空間，道具，数詞などの日常よく使用する基礎的な語彙項目からなる。ａとｂの違いは，ａが諸言語・諸方言に共通する基礎的な語彙，ｂは民俗的な意味合いを持つ語彙であるという点にある。項目数は，基礎語彙ａが 189 項目，基礎語彙ｂが 149 項目。調査方法は，調査者が共通語で尋ね，話者が方言で回答するという翻訳式の質問法で，例えば，調査者が「〇〇は方言でどのようにいいますか？」と質問し，話者が方言に直して答えるというものである。

アクセントは，２モーラ，３モーラ，４モーラの名詞 71 語をリストアップし，その単独発話と「Ｘがない / いない」というキャリア文にこれらの名詞を挿入した発話を収録し，分析を行うという調査を行った。なお，本報告書では，一つ一つのアクセント調査データは掲載していない。アクセントの概要については，本書掲載の五十嵐陽介「南琉球宮古与那覇方言の名詞アクセント体系：初期報告」を参照されたい。

文法は，動詞活用を中心とする項目からなり，「飛ぶ」「漕ぐ」などの 38 の動詞について，断定（肯定），否定，過去，シテ中止，アリ中止などの形を尋ねる項目で構成されている。項目数は全部で 190 項目。ただし，２時間の調査時間では，190 項目すべてを調査することは不可能なので，190 の項目を３つに分け，１グループが３分の１（約 60 項目）ずつを担当する形で調査を行った。上の表の文法（前），文法（中），文法（後）は，文法項目の「前の部分」「中の部分」「後の部分」という意味である。従って，同じ地域で

も，調査票の前半，中，後半で話者と調査者が異なっている。動詞活用のように，体系を問題とする事象を扱う場合，できれば，同一話者にすべての項目を回答してもらうのが望ましいが，調査時間の関係で，やむを得ずこのような方法をとった。調査方法は，基礎語彙に同じく翻訳式である。

この他，上地で談話資料を収録した。談話資料に関しては，分析にはまだ時間がかかるため，本報告書には掲載していない。

２．４　調査参加者

調査参加者は以下の39名である。内訳は，本プロジェクトのリーダーとプロジェクト研究員３名，プロジェクト共同研究員14名，共同研究員以外の大学教員，または研究所教員９名，大学院生９名，学振PD４名である。

木部暢子（国立国語研究所，プロジェクトリーダー），小川晋史（国立国語研究所，本プロジェクト研究員（PD）），盛思超（国立国語研究所，本プロジェクト奨励研究員），（以下五十音順。*は調査時のプロジェクト共同研究員）五十嵐洋介（広島大学），井上文子（国立国語研究所），*ウエイン・ローレンス（オークランド大学），内海敦子（明星大学），*上野善道（国立国語研究所客員教授），荻野千砂子（大分大学），*金田章宏（千葉大学），*狩俣繁久（琉球大学），*下地賀代子（沖縄国際大学），*田窪行則（京都大学），*中島由美（一橋大学），*仲原穣（琉球大学非常勤講師），仲間恵子（琉球大学非常勤講師），仲間博之（加計学園 広報室参与(元宮古高校長），*西岡敏（沖縄国際大学），*新田哲夫（金沢大学），野原優一（琉球大学非常勤講師），林由華（京都大学非常勤講師），平山真奈美（立命館大学），*又吉里美（志学館大学），松浦年男（北星学院大学），*松本泰丈（別府大学），*竹田晃子（国立国語研究所プロジェクト研究員），竹村亜紀子（国立国語研究所プロジェクト研究員(PD),青井隼人(東京外大大学院博士後期課程/学振研究員),川瀬卓（九州大学大学院博士後期課程），久保薗愛（九州大学大学院博士後期課程/学振研究員），白田理人（京都大学大学院博士前期課程），クリス・デイビス（学振PD/京都大学），當山奈那（琉球大学大学院博士前期課程），徳永晶子（一橋大学大学院博士前期課程），中澤光平（東京大学大学院博士前期課程），平子達也（京都大学大学院博士後期課程/学振研究員），トマ・ペラール（学振PD/京都大学），諸岡大悟（一橋大学大学院博士前期課程），山田真寛（学振PD/京都大学）

２．５　話者

話者は以下の方々である（年齢は調査当時）。

池間	濱元照子さん（86 歳），勝連昭子さん（83 歳），仲原好子さん 濱川マサ子さん（90 歳）
狩俣	狩俣昌喜さん（88 歳），根間昌明さん（78 歳），花城ヒデさん（84 歳） 上原正行さん（68 歳）
大浦	下地ハツ子さん（87 歳），大里正行さん（80 歳）
上地	上地　繁男さん（84 歳），仲原トミさん（89 歳），下地文さん（90 歳） 上地清勝さん（79 歳）
野原	久貝シゲさん（86 歳）
砂川	砂川俊雄さん（83 歳），砂川渡さん（75 歳），宮里久男さん（84 歳）
久貝	与那覇義彦さん（69 歳），与那覇金吉さん（84 歳）
宮国	宮国キクさん，松岡秀子さん
保良	下地良子さん（82 歳），砂川辰夫さん（55 歳），平良恵雄さん（77 歳） 下地博盛さん（61 歳），平良盟子さん（79 歳） (新城)砂川春美さん（59 歳）
西原	仲原君枝さん（63 歳）
来間	砂川ハルさん（86 歳），砂川ウメさん（83 歳），川満キクさん（90 歳） 玉城千代さん（81 歳）
国仲	中曽根チヨ子さん（83 歳），吉浜ヨシ子さん（84 歳） 仲宗根玄信さん（86 歳）
伊良部	川満恵宏さん（87 歳），下地方幸さん（69 歳），平良玄輔さん（81 歳）
与那覇	垣花武一さん（76 歳），幸地昇良さん（75 歳），与那覇重夫さん（77 歳） 池村豊助さん（75 歳）， 島尻　辺土名豊一さん（72 歳），池間貞夫さん（73 歳）

※ 上記の方々には，お忙しい中，本調査に協力してくださり，ありがとうございました。この場を借りて御礼申し上げます。

３　宮古方言の概要

宮古諸方言の音韻
―体系と比較―

トマ　ペラール・林　由華

1　はじめに

宮古諸方言は，沖縄県宮古島市および多良間村で話される南琉球諸方言の一種である。集落ごとに方言が異なり，差異の程度の違いはあるが 30～40 の方言があると考えられる。本稿では，このうち，2011 年 9 月に調査を実施した上地，与那覇，久貝，伊良部，保良，国仲，大浦，島尻，来間，池間，狩俣，砂川，野原の 13 地点からのデータを中心として，宮古諸方言の音韻を歴史言語学上の音対応に基づいて整理し，その全体像を示す。従来，音対応というと，日本（古）語との対応の考察が主になっているが，ここでは必ずしも日琉祖語まで遡るわけではなく，主に方言間の比較のための宮古祖語の段階における対応関係を見る[1]。（特に指定されていない場合，祖形の標識である*は宮古祖形を示している。）

宮古諸方言の音韻についての先行研究としては，平山・大島・中本(1967)，中本 (1976)，平山(編)(1983)，名嘉真 (1992) などに，各地の音素や音韻の特徴がまとめられている。最近でも，中本 (2000), 仲原 (2002)，下地 (2003), かりまた (2005), Shimoji (2008, 2011), Pellard (2009, 2011)，Hayashi (2011) など，個別の方言の音韻体系の調査・研究も進められており，各地の音韻が明らかにされつつあるが，宮古諸方言の音韻の解釈については研究者ごとに大きく異なっている。宮古諸方言には，子音的噪音が自由変異として現れる母音や，特定の母音の存在を音声・音韻的に認めることが困難な音節が存在し，その音価や音韻的解釈を巡ってさまざまな議論がなされている。この議論の中心にあるのが，中舌母音もしくは舌先（尖）母音と呼ばれたり，[s～z] の音価を持つ成節子音として分析されることもある，子音的要素と母音的要素の両方ををあわせもつ音素である。このほかに，v や ɾ ([ɽ]) が成拍的になりえること，また音声的にも広母音であっても無声化しやすいという性質などがあり，（少なくとも音声上の）音節の中核を子音的要素が占めることが多く，「子音性が強い」（沢木 2000）方言群とされる。これらを含めた音韻解釈に関する問題は，北村 (1960)，かりまた (1986, 1987), 加治工 (1989)，沢木 (2000) などでも考察されているが，未だ多くの課題がある。この問題の多くには，子音と母音のあり方が日本語などと大きく異なるため，どのような分析の枠組みを用いるのかの違いに由来した意見の相違も含まれていると考えられる。本稿で扱えるのはこの問題のごく一部であるが，研究史上で詳細に議論さ

[1] 宮古祖語の再建形については Pellard (2009)，琉球祖語の再建形については Thorpe (1983) を基にしている。

れることの少なかった形態音韻現象について考察を加え，宮古諸方言の音韻特徴の一端を示したい。

上述の問題に対する議論も含めつつ，本稿では，宮古祖語で想定される各音素が各地でどのように現れているのかを見ることにより，宮古諸方言としての共通点と方言間の相違点をまとめる。また，ここでの表記は簡易音声表記であり，表中のデータにはそれぞれの調査者によるものを用いた[2]。本稿で扱うのは分節音のみであり，アクセントなどの音調は考慮しないため，データ中に音調上の特徴が記録してあっても，それは本稿中には含めていない[3]。

２　母音

２．１　母音の種類と特徴

ここでは，宮古諸方言の各母音音素ごとに，調査により得られた各地の語例と音価を示す。また，各地で個別に起こった音変化や例外的音対応については，別途語例を提示する。

本稿で用いる調査結果から得られる宮古諸方言の母音の種類は，/a, e, i, o, u, ɿ/ の 6 種類である。これらは長短の区別をもつが，/e, o/ については母音連続から変化したものであり，借用語をのぞいて基本的に長母音のみである。また，本稿の対象方言にはないが，これに加えて多良間方言には /ë:, ü:/ が認められる（下地 2003 など）[4]。調査対象となっていた方言のうちでは，/a, i, u, ɿ/ の 4 つの母音を持つもの，/a, i, o, u, ɿ/ の 5 つのもの，/a, e, i, o, u, ɿ/ のものがある。また，/ɿ/ は，中国語やバンツー諸語にみられるような fricative vowel といえる (Ladefoged and Maddieson 1996) 音素であり，子音的噪音を持ち合わせた母音である。なお，本稿では母音としているが，子音ととらえる解釈も存在する。

２．１．１　広母音

/a/ 非円唇広母音[a]～[ɑ]　< *a

宮古祖語の *a にあたる音で，各方言で [a]～[ɑ] で現れる[5]。

---

[2] 一度の調査で主に一人の話者から得られた発話の音声的表記である性質上，誤記と思われるものも存在する。解釈にあたっては，著者の知識の範囲内で修正したものもあるが，その場合は都度明示している。

[3] 音調については，五十嵐ほか (2012) などによって，これまで 2 型とされてきた池間方言が 3 型であることが示されるなどの研究の進展がある。

[4] さらに、大神方言には*ɿ を由来としつつも摩擦音を伴わない /ɯ/ も存在し，また母音体系も他方言と異なり /ɑ, ɛ, i, u, ɯ/ となっている (Pellard 2009)。

[5] 後述するように，方言によってはこれに対応する音が /u/ で現れる場合があるが，体系的な音変化の結果ではない。

表 1　非円唇広母音

	A-187 あそこ	A-062 蚊	A-174 砂	B-060 羽	B-002 歯
上地	kama	gadʑam	m̩nagu		paː
与那覇	kʰama	gadzam	nnagʊː		
久貝	kʰama	gadzam	mˑnagu		
伊良部	kʰama	gadzam	mnagu	pani	paː
保良	kʰama	gaᵈzam	nnagʊː	pʰani	pʰaː
国仲	kama	kadam̩	m̩nagu		
大浦	kʰama	gaᵈzaŋ	nnagu	pani	paː
島尻	kama	gadaŋ	nnagu	pʰaɲi	pʰaː
来間	kama	gadʑam	mːnagu		
池間	kama	kadʑaŋ	nnagu	hani	haː
狩俣	kama	gaᵈzaŋ	nnagu	pani	pa
砂川	kʰḁma:	gadzam̩	n̩nagu		
野原				pani	paː

２．１．２　狭母音

/i/ 非円唇前舌狭母音[i]～[ɪ]＜宮*i

宮古祖語*i に対応する音で，各地で [i]～[ɪ] で現れる。狩俣では，*i が/ɿ/ に対応している語がある。池間では，宮古祖語*ɿ が/ts/，/z/，/s/ の後を除き/i/と合流している（/ɿ/ の項目で後述）。また，伊良部においては，宮古祖語で *(C)ja にあたる音が ii に変化している語がある。

表 2　狭母音

	A-170 海	A-059 女	A-129 風	B-093 箆	A-110 木
上地	im̩	midum	kadʑi		kiː
与那覇	im	midʊmʊ	kʰadʑi		kiː
久貝	im	midum	kʰadʑi		kiˑ
伊良部	im	midum	kʰadʑi	piɾa	kʰiː
保良	im	midʊm	kʰaᵈʑi	pʰiɾa	kʰiː

国仲	iṃ	miduṃ	kadʑi		kiˑ
大浦	iŋ	miduŋ	kʰadʑi	piɾa	kʰiː
島尻	iŋ	miduŋ	kʰadʑi	piɾa	kiː
来間	im	midumu	kʰadʑi		kiː
池間	iŋ	miduŋ	kʰadi	hiɾa	kiː
狩俣	iŋ	miduŋ	kʰadʑi	piɾa	kiː
砂川		miduṃ	kadʑi		kiː ～ ki̥ː
野原				piɾa	

表 3　i の一部が ɿ に対応：狩俣

	A-016 髭・毛	A-103 にんにく
上地	pᶜɨgi	pʰil
与那覇	pᶻɿgi	pʰiᶻɿ
久貝	psgi	pʰiz
伊良部	pˢɿgi / fu̥tsɿpˢɿgi	pʰiɿ
保良	pˢɿgi	pʰiᶻɿ
国仲	pʰɨgi	pʰiɿ
大浦	pˢɿgi ～ pɿgi	pʰiɿ
島尻	bᶻɿgi	pʰiᶻɿ
来間	psgi	piz
池間	higi	hiː
狩俣	bzgɯ ～ bzgï ～ bïgï	pˢïː
砂川	psgi ～ pˢɿ̥gi	piz̩ ～ pi̥z̩
野原		

表 4　*(C)ja＞ii：伊良部

	A-165 昔	A-189 ない	B-029 一人
上地	ŋ̩kjaːŋ		
与那覇	ŋkʲaːŋ		tɔʊkʲaː
久貝	ŋkjaːŋ	nʲaːŋ	tḁfkeː

伊良部	mkiːŋ	niːŋ	taʊkiː
保良	ŋkʲaːŋ	nʲaːŋ	taʊkʲaː
国仲	ŋkjaːŋ		taᵛkʲaː
大浦	ŋkʲaːŋ		tavkʲaː
島尻	ŋkjaːŋ		tʰafkjaː
来間	ŋkjaːŋ	nʲaːŋ	
池間	ŋkʲaːŋ	nʲaːŋ	taukaː
狩俣	ikjaːŋ	nʲaːŋ	taɸkʲaː
砂川	ŋkjaːŋ		tavkʲaː
野原			taʊkjaː

/u/ 円唇後舌狭（緩み）母音[u]～[ʊ]＜宮*u

宮古祖語 *u に対応する音で，各地で[u]～[ʊ]で現れる。また，各地でこれに対応する音が a で現れている語が散見されるが，規則的な対応ではない。

表 5　円唇後舌狭母音

	A-028 骨	A-030 心臓・肝	A-060 人	A-071 馬	B-069 穂
上地	puni	kçɨmu ～ kɨmu	pɨ̥su	nuːma	
与那覇	puni	kˢɭ̥mu	pˢɭ̥tʰu	nʊːma	
久貝	pʰuni	kˢᶻïmu	pstu	nuːma	
伊良部	pʰuni	tsɭmu	pstu	nuːma	puː
保良	pʰʊni ～ pʊni	kˢɭmʊ	pstʊ	nʊːma	pʰuː
国仲	puni	tsɨmu	pʰɨ̥tu	nu̥ːma	
大浦	pʰuni	kˢɭmu	pstu	numa	pʰuː
島尻	pʰuni	kˢɭmu	ttu	nuːma	puː
来間	pʰuni	tsïmu	pstu	nuːma	
池間	huni	tsïmu	pʰɨ̥tu ～ çtu ～ çto	nuːma	huː
狩俣	pʰuni	kˢïmu	pstu	nuːma	puː
砂川	pu̥ni ～ pʰuni	ksmu ～ kˢɭmu	pstu̥ ～ pstu̥	nuːmḁ	
野原					puː

表 6　u : a の不規則的な対応の例

	A-132 雲	A-032 膝	A-079 卵	A-115 福木
上地	kumu	tsɨgusɨ	tunaka	pu̥kukugi
与那覇	fʊm	tsɻgʊsɻ	tʰʊnaka	pʰu̥kʊgiː
久貝	fumu	tsïgusï	tunak̟ʰa	pʰukaɖʑgiː
伊良部	fumu	tsɻgusɻ	(kʰuːga)	kuputsɻgi
保良	fʊmʊ	tsɻgʊsɻ	tʰʊnaka	fu̥kʊkɻgiː
国仲	fumu	tsɨgusɨ	tunuka	pu̥kutsɨgiˑ
大浦	kʰumu	sugasɻ	tʰunaka	pʰukagi
島尻	fuma	tugusɻ ～ tugasɻ	tʰunaʁa	kʰu̥pagᶻɻgiː
来間	fumu	tsïgusï	tʰunuka	pukutsïgiː
池間	m̥mu	sïgusï	tunuka	kutsïgi
狩俣	fumu	tsïgasï	tunuga	pʰu̥kagagiː
砂川 野原	ɸu̥mu	tsgusɻ ～ tsɻgusɻ	tu̥naka	pu̥ku̥kukiː ～ pu̥kukug̊i

２．１．３　半狭母音と二重母音

宮古諸方言における半狭母音は，主に母音の融合に由来している。/e/ については *ai や *Cja，/u/ については *au や *ua がその由来である。ただし，*au ＜ oː 以外の変化については，必ずしも一方言内の同一環境内全てで起こっている訳ではない場合がほとんどで，例外も多い。

/e/ 非円唇前舌半狭母音

/e/ については，以下の二つの由来がある：

- *ai：一部の語彙に見られる
- *Cja：-i で終わる単語の主題形から変化したものの例が中心

この融合の結果生じる /e/ については，現れない方言の方が多い。なお，下記のデータには/i/ [ɪ]の誤記例もある。

表 7　*ai 由来の /e/：与那覇，久貝，来間の一部の語彙
（*ai ＞ e の変化を受けていない語彙も参考にあげている）

	A-131	A-146	A-157	A-004		
	地震	南	夜	額	も	へ
上地	nai	pʰai				
与那覇	nai	pai	jʊnai		mai / meː	ŋkai / ŋkeː
久貝	nai	pʰai	junʲaːŋ / juneː	ftai	mai	ŋkai
伊良部	nai	pʰai	juᶻɿnaᶻɿ	fʊ̥tai	mai	
保良	nai	pʰai	jʊnai	fʊ̥tai	mai	ŋ̩kai
国仲	naɪ	paɪbaɾa	jʉ̩nai	fʉ̥taɪ	mai	ɴkai
大浦	nai	pʰai		fʉ̥tai ～ ftai		
島尻	nai	pʰai				
来間	nai	pʰai	juneː	ftẹ˙	meː	ŋkeː
池間	nai	haibaɾa		ftai	mai	ŋkai
狩俣	naɯ	pʰai		ftai	mai	ŋgai
砂川	nai	pʰai	junai		mai	ŋkai
野原						ŋkai

表 8　*Cja 由来の /e/：久貝の一部の語彙のみ

	A-165	A-189	B-029	
	昔	ない	一人	-i＋は
上地	ŋ̩kjaːŋ			
与那覇	ŋkʲaːŋ		tɔʊkʲaː	jaː
久貝	ŋkjaːŋ	nʲaːŋ	tḁfkeː	eː
伊良部	mkiːŋ	niːŋ	taʊkiː	
保良	ŋkʲaːŋ	nʲaːŋ	taʊkʲaː	jaː
国仲	ŋkjaːŋ		taᵛkʲaː	jaː
大浦	ŋkʲaːŋ		tavkʲaː	
島尻	ŋkjaːŋ		tʰafkjaː	
来間	ŋkjaːŋ	nʲaːŋ		jaː
池間	ŋkʲaːŋ	nʲaːŋ	taukaː	(j)aː
狩俣	ikjaːŋ	nʲaːŋ	taɸkʲaː	jaː
砂川	ŋkjaːŋ		tavkʲaː	jaː
野原			taʊkjaː	

/o/ 円唇後舌半狭母音[o]

/o/ には以下の二つの由来がある：

- *au：特に-a で終わる単語の対格形に多く見られる
- *ua：-u で終わる単語の主題形のみに見られると考えられる

*au 由来のものについては安定して /o/ で現れる方言が多いが，他の例と同じように語彙によって異なる方言もある（保良，来間）。なお，下記の例には /u/ [ʊ] の誤記例もある。

表 9　*au 由来の /o/：上地，与那覇，久貝，保良，大浦，来間，狩俣

*ua 由来の /o/：久貝，国仲，来間，狩俣，砂川

	A-027	A-093	A-130	A-136	A-183		
	痒い	食べる	竜巻	青い	門	-a ＋ を	-u ＋ は
上地		foː	amainoŭ	oː	ʤoˑ		
与那覇		foː	amainoː	oːnʊ	ʤoː	oː	aː
久貝	kʰoːmunu	foː	ama.inoː	oː	ʤoː	oː	oː
伊良部	kʰoːmunu	foː	amainoː	oː	ʤoːvtsɿ		
保良	kʰaʊkaʊ	faʊ	amainoː	aʊaʊ	ʤoː（保良）/ ʤaʊ（新城）	au	aː
国仲	kau̯munu	fau	amaɪnaʊ	aŭ	dau̯	ao	uː / oː
大浦		foː	amainoː	oːoː	ʤoːfutsɿ		
島尻		fau	amainoː	aukaŋ	dau		
来間	koʔokoː		ama.inoː	au	ʤoː	aː / oː / au	oː / ua
池間	kaumunu		amaunau	aumunu	ʤau	au	uː
狩俣	koːgaŋ		inoː	oː	ʤoː	au / oː	oː
砂川		fau ～ faʊ	amainau	au ～ aʊ	ʤau	au	oː
野原							

２．１．４　特殊母音 /ɿ/

宮古祖語 *ɿ に対応する音で，前より中舌狭母音[ɨ]～非円唇後舌狭母音[ɯ]の音色に加え，歯茎の摩擦噪音をもつ，いわゆる fricative vowel （摩擦母音）に類する母音である[6·7]。頭

[6] *ɿ に対応する音価については，長年その調音特徴を元にこれがどんな母音であるかという議論が続いていた（詳細はかりまた 1986 を参照）。ネフスキーによる宮古調査以来，中舌母音とするのが主流であったが，崎山(1963, 1965) や上村 (1997) かりまた (1996, 2005) などでは，これが調音音声学的に舌先（尖）母音であると主張している。近年，一部の方言については，それが中舌母音的音色をもち（大野ほか 2000，青井 2010）かつ s～z に近い位置での調音もなされており（青井 2010），中舌母音と舌先母音両方の性質を持っていることが，機器分析・実

子音が無声子音の場合はその噪音も無声 [s] となり（例：上地「髭」pᶜɨgi），頭子音が有声もしくは頭子音を持たない場合は有声 [z] で現れる（例：与那覇「脚」pʰagᶻɻ）。特に無声子音に挟まれた場合は母音自体が完全に無声化することがほとんどである（例：保良「光」pskaɻ）。逆に，特に頭子音がない場合や有声の頭子音があっても語末などでは，摩擦噪音が弱く、より接近音ないし母音に近い異音が実現する（例：上地「脚」pagɨ）。狭めの程度については方言ごとの違いが予測されるほか，個人間，また同一個人の同一単語でもゆれがみられる（例：大浦「脚」pʰagɻ ~ pʰagᶻɻ）。また，方言によっては，側面音にも聞こえるものがある（例：上地「椀」makˣal）。

なお，この母音がもてる頭子音はほかの母音より限られており，方言にもよるが最大で /p, b, k, g, ts, s, z, f, m/ である。池間では特に少なく，/ts/，/s/，/z/の後ろ以外では/i/に変化している。その他特筆すべきこととして，/m/などの後ろでは[iɻ]のような二重母音に変化している方言が多いこともあげられる。

また，/ɻ/ は [z] ないし [s] で現れる場合もあることから，成節的な子音として解釈されることもある。例えば，「人」[pstu] の音韻表記のバリエーションの例としては，pïtu~pɻtu~pžtu などがある[8]。このように音韻解釈はさまざまだが，これを母音と見た場合でも，摩擦噪音をもつという点についてはそれぞれの研究者の観察は一致しており，また子音として見た場合は，母音のように音節主音にもなれる機能を持たせている。どちらにしても，子音的な性質と母音的な性質の両方をもった音素を想定することになる[9]。

表 10　特殊母音

	A-016 髭・毛	A-025 血	A-100 椀	A-087 (ウニなどの)肉・身	A-081 魚	A-033 脚	B-062 蝿
上地	pᶜɨgi	aχḁtsɨ ~ akḁtsɨ	makˣal	mɨː	ⁱzzu	pagɨ	
与那覇	pᶻɻgi	akʰḁtsɻ	makʰaᶻɻ	mᶻɻː	zzu ~ ɻzu	pʰagᶻɻ	
久貝	psgi	akatsï	makʰazï	kaʥaᵗsanumiz	zzu	pʰaʥï	
伊良部	pˢɻgi	axḁtsɻ ~ ahatsɻ	maxaɻ ~ mahaɻ	miɻ	ᶻɻzu	pʰaʥɻ	paẓ
保良	pˢɻgi	akʰḁtsɻ	makaᶻɻ	mᶻɻː	zzʊ ~ ɻzʊ	pʰaᵈzɻ ~ pʰagᶻɻ	paz ~ paɨz

---

験により確認されている。これは，他言語での fricative vowel が母音的要素と子音的要素の二重調音的性格を持っているという報告とも並行するものである。

[7] 脚注 4 でも述べたように，大神方言には摩擦噪音なしの /ɯ/ が存在し（*ɻ 由来），無声子音を頭子音にとっても無声化しない。（例：大神「字」[kɯː]）(Pellard 2009)

[8] かりまた 2005 では，頭子音となる s や z の異音とする解釈の可能性も考察されている。

[9] 本稿ではこれを母音としているが，音韻記号として/ï/ でなく /ɻ/ を用いる理由として，この音素の大きな特徴である摩擦性を含意して用いられているということがあげられる。

国仲	pʰɨgi	akˣḁtsɨ	makaɭ	tsɨmu(ウニ)	(ⁱ)zzuː	pazɨ	
大浦	pˢɿgi ～ pɿgi	haːtsɿ	makaɿ	miɿ	ɿzu	pʰagɿ ～ pʰagᶻɿ	paᶻɿ
島尻	bᶻɿgi	aχatsɿ	maχaɿ ～ maχaᶻɿ	miᶻɿ	zzu	pʰagɿ ～ pʰagᶻɿ	paz ～ paɿ
来間	psgi	A: akatsï / B: aᵏxatsï	A: makaɭ / B: makaz	mïː	zzu̟	pʰaʥï	
池間	higi	akatsï	makai	miː	zzu ～ ʥu	haʥï	hai
狩俣	bzgɯ～ bzgï ～ bïgï	haːtsï	maːɯ	mïː	ïzu	pʰagɯ	pai / paɯ
砂川	psgi ～ pˢɿ̥gi	akḁtsɿ	makaʐ̩	mʐ̩ː	zzu	pagʐ̩	
野原						pagɿ	paᶻɿ

この母音に関しては調音特徴上の（音声学的）問題が長く議論されてきたが，これについては本稿では詳しく取り扱わない（脚注 6 を参照）。ここでは，この母音と深く関係した形態音韻論上の問題をとりあげ，宮古諸方言のもつ音韻解釈の問題について述べる。

母音があるのかないのか

宮古諸方言においてしばしば母音の有無が問題になる音節があるが，それは主にこの特殊母音が摩擦音・破擦音を頭子音に持った場合である。例えば，「牛」[usɨ] の s は母音を伴って usï や usɿ と解釈されたり，成節子音として uʂ̩ と解釈されたりする。音声的には，この第 2 音節目は必ず無声で現れるというわけではないが[10]，このように解釈されるのには，主に形態音韻論上の現象に理由があると考えられる。

「音素があるか，ないか，子音なのか母音なのか」という問題は，それぞれの方言ごとに音韻システム全体を考慮して決定されるべき問題である。しかし，関連する音韻現象を包括的に考慮している研究は多くはない。本稿で方言ごとの問題全体を解決する議論をすることはできないが，ここではひとまず，母音の有無についての議論でしばしばとりあげられる形態音韻現象をの一つをとりあげ，問題解決にあたり考慮すべき点について考察する。また，これは未解決の問題であることもあり，本稿がとる表記・解釈は，宮古祖形に近い形をとり，成節子音かどうかはっきりしないものには母音を補った形で書く。

[10] 音声的に母音を挿入するという場合もあるので，このこと自体がただちに音韻的に母音があることを示すわけではない。

名詞形態音韻論

問題となる音節の解釈に最も深く関わっていると考えられるのが，以下に説明する名詞形態音韻論上の現象である。宮古諸方言において，名詞の主題形，対格形は，付加される語の語末音の性質により以下のように異なった形で現れる。表 11 は，狩俣の例である。

表 11　狩俣方言における語末の音節の種類と主題形，対格形[11]

（-- 部分は未調査）

語末の音節の種類		主題形（～は）	対格形（～を）
C	海 im	imma	immu
	犬 in	inna	innu
	蛇 pav	pavva	pavvu
(C)V[＋摩擦音]	牛 usɿ	ussa	ussu
	妻 tuzɿ[12]	tuttsa	tuttsu
	道 ntsɿ	nttsa	nttsu
	豆腐 toofu	tooffa	tooffu
	-pɿ	--	--
	紙 kabɿ	kabzza	kabzzu
	月 tsɿkɿ[13]	tsɿkssa	tsɿkssu
	脚 pagɿ	pagzza	pagzzu
	米 maɿ	mazza	mazzu
CV	傘 sana	sanaa	sanau
	酒 saki	sakjaa	sakjuu
	蛸 taku	takoo	takuu
(C)VV	木 kii	kiija	kiiju
	声 kui	kuija	kuiju
	字 zɿɿ	zɿɿja	zɿɿju
	屁 pɿɿ	--	--
CC	芋 mm	mmma	mmmu

表 11 で問題とするのは、語末が C もしくは(C)V[＋摩擦音]（ɿ もしくは摩擦化した u）で終る場合に、子音重複がみられることである。ここでは、共時的解釈について検討する前に，まずこのような形が歴史的にどのように発生したかを簡単に見ておきたい。

[11] 表 11 のデータは，国語研の調査からのものに，著者個人の持つデータを補ったものである。表記は著者により変えている。
[12] 重子音となれる音の制限のために，無声であらわれていると考えられる。
[13] 国語研調査では tskssu の形でているが，この形も存在する。

かりまた (1996, 2007) などでも述べられているように，宮古諸方言においては，特殊母音 ɿ に後続する半母音 w, j や流音 ɾ が摩擦音 s, z になるという歴史変化が起っている[14]。(1) は，かりまた (2007) からの例を表記をかえて用いたものである。

(1)　「月」tsɿkssu < *tsɿkɿju （「つくよ（月夜）」に由来）
　　「魚」zzu　< *ɿwu （「いを」に由来）
　　「白」ssu　< *sɿɾu（「しろ」に由来）

主題標識，対格標識の宮古祖語における形式はそれぞれ *ja, *ju と考えられ，これらが *ɿ でおわる語に接続した場合においても，これと同様の変化が起っている。

(2)　「髪を」kabɿ + ju > kabɿ＝zu [kabzzu] （表 11 より）

表 11 にあるように，子音終わりの語においてもその子音が接続した j を同化するという変化が起っている（「海」im の対格形：im＝mu）。ここでは変化のプロセスについて詳細な議論は行わないが，同様に ɿ 終わりの語においても，この母音の持つ子音的要素が後続する j を同化したという現象だと捉えることができるだろう[15]。

ただし，表 11 で語末が (C)V[＋摩擦音] としたもののうち，sɿ，zɿ，tsɿ，fu[16] については，大きく分けて 2 種類の解釈がある。それは，これらを bɿ, (pɿ)，kɿ，gɿ, mɿ 終わりの語と同様に音節核となる ɿ（f の場合は摩擦化した u）をもつとし，母音が j を摩擦音にする規則を想定するか[17]，母音が脱落し成節子音となった s，z，ts，f が，m，n，v と同様に直接 j を同化したとみるかである。

---

[14] このように摩擦母音が後続する子音に影響を与えることは，バンツー諸語の一部にも見られるものである (Ladefoged and Maddieson 1996)。

[15] かりまた (1996, 2007)では空気力学的観点からこの変化の原因を考察しているほか，青井 (2012) では，この変化のプロセスについて，自律分節音韻論的分析 (autosegmental phonology) により，/ɿ/ の舌先性が拡張することによって半母音や流音が摩擦化したと説明している。

[16] fu は琉球祖語の *ku, *pu に由来している。これを f と捉えるかりまた (2007) によれば，「*u から変化した v が先行子音 *p，*k を調音位置（唇歯），調音方法（摩擦音）に変化を生じさせ，逆に，*p，*k は，後続の v を無声化させるという相互同化によって，f に融合したとかんがえる (p.44)」としている。しかし，u の異音として v を残し /fu/ [fv] と解釈することも可能であり，その場合は特殊母音 ɿ と同様に摩擦母音として，その唇歯での摩擦により j が同化したとできる。

また，fu（あるいは f）が後続する子音を同化して生じた重子音を持つ語例は，他にも多くある。

例）「黒」ffu < furu（「黒」に由来）
　　「枕」maffa < mafura （「枕」に由来）

[17] C*ɿ (C: 破擦音)に *ju が後続する場合はさらに同化が起り，例えば*tsɿ に *ju が接続した場合には，tsɿ + ju > tsɿsu > ttsu となる。（歴史変化の例.伊良部「月」 tsɿkɿju > tsɿtsɿju > tsɿttsu）

これはそのまま共時的な分析の問題にも繋がっている[18]。表 11 の主題形，対格形において子音が重複してあらわれる，語末 C および語末(C)V[＋摩擦音] の語については，自身とは別に音節核 (ɳ) を必要とする p, b, k, g, m のグループ (グループ A とする)と，単独の成節子音として見ることができる m, n, v (グループ B とする)[19]があり，s，z，ts，f を A, B のどちらのグループにいれるのかが解釈の上で最も大きな問題となる。その理由は，s，z，ts，f という成節子音を認めるかどうかという，音素配列や音節構造，音素のクラス分けという，一言語の音韻システムにとって極めて大きな問題に繋がっているためである。そして，この s，z，ts，f を成節子音と同じグループにいれるということが，冒頭で述べた「牛」uṣ の 2 音節目には母音がないとする態度をとることである。大まかに言えば，表 11 の音韻現象をできるだけ統一的に解釈するための方法は，以下の 2 通りである[20]。

1. s，z，ts，f は グループ A の子音と同様，音節核（ɳ など）を自身以外にもつ（成節子音として認めない）
2. s，z，ts，f は グループ B の子音と同様音節核を必要とせず成節子音となれる

音韻解釈にこの形態音韻論の問題を考慮する・しないにかかわらず，これまでの主流は 1 のように祖形における*ɳ（および u）をそのまま残す解釈である。2 に類する研究には，かりまた (2005)，Shimoji (2008, 2011)，Pellard (2009, 2011) などがある。どちらが妥当な説明となるかについては，各方言ごとの音韻システム（音素体系，音素配列論，音節構造，形態音韻論）の全体を見なければ決定できないものであるが，以下では 2 をとった場合の利点や，従来説で問題となる点を挙げる。

宮古諸方言の中でも特に特殊な大神方言[21]においては，/m, n, f, s, ʋ/ が成節子音であり，ほかの音節核（母音）を伴わず独立しているという根拠が，表 11 のような名詞形態論以外にも存在する。例えば，大神においては「下」sta と「舌」sɯta という対立があるが，大神には摩擦を伴わない ɯ のほかに他方言にあるような摩擦母音を設定しなければいけない理由はなく，「下」sta の s は母音を伴わない音節とみなせる。鼻音や接近音に加え s, f も成節子音となれるのだが，流音 ɾ は頭子音のみで，音節核としては機能しない。これは，流音は類型論的に摩擦音よりも成節的になりやすいとする理論 (Zec 2007) の例外となるものだが，このことはこの方言の音節を支える主たる性質が「聞こえ度の高さ」よりも「持続

[18] 以下特に明言はしていないが、共時的な分析においては必ずしも対格標識を祖形と同じ ju にする必要はなく u とできると考えられるが、方言によって異なる可能性もある。
[19] 国仲などでは，これにさらに /ɾ/ [l̩] が音節主音として加わる。
[20] 表 11 の現象は歴史的変化であり，共時的には単に名詞のパラダイムとして捉えればよいとする考え方もある。これは，共時的な説明項とみなさないということだが，文法に対する態度によっては十分ありうる解釈である。この場合，この形態音韻論上の現象は考慮せずに音素体系・配列や音節構造の整合性と音声事実に従って /ɳ/ 相当音の解釈を行うことになる。
[21] 有声・無声の対立および破擦音などは持たない。

性」に類するものであることを示していると考えられる[22]。これは宮古諸方言全体にいえる性質である可能性があり，その場合は 2 の解釈をより宮古諸方言の言語特徴を的確に反映したものとして捉えることができる[23]。

また，母音がないことを示すというわけではないが，s，z，ts，f が音節核を必要とするグループ A（p, b, k, g, m）と異なっていることを示すデータが，長浜方言を扱った Shimoji (2008) にも見られる。

(3) a. 長浜「巣」sïï[24] 対格形 sïï＝u （本稿での解釈・表記の sɭɭ に対応）
b. 長浜「日」pžž 主題形 pžž＝ža （本稿での解釈・表記の pɭɭ に対応）
（Shimoji 2008 より）

このように，(3ab) は従来両者とも特殊母音の長音を持つと解釈されていた語だが，主題形にすると違いが生じてしまう。これは，グループ A の子音と s, z, ts, f を均質には扱えないことを示唆するものではあるが，(3a) のような振る舞いは，長音化が可能であるグループ B の成節子音とも異なったものである。（グループ B の成節子音は長音化でき，例えばそれが主題形になると「芋は」mm＝ma のように子音重複が起こる。）この場合，ほかのさまざまな音韻現象を見て，これらを AB どちらか近い方と同じ扱いにできるとしても，どちらとも異なる別の規則が必要になる可能性があるだろう。

以上，宮古の名詞形態論を通して，「牛」uṣ の 2 音節目に母音がないとする解釈が生じる形態音韻論上の理由について簡単に述べた。これらの問題は各方言ごとに検討されるべきものであり，例えば池間方言のようにグループ A の p, b, k, g, m の全てが頭子音として特殊母音と組み合わさるこがない方言では，事情が大分異なる。

また，ここで見てきたように，宮古祖語では子音もしくは摩擦化した狭母音が後続する半母音 w, j や流音 ɾ を同化するという歴史的変化が起っており，共時的には，そのために生じた子音連続が多く見られるほか，動詞形態論における語幹末子音の重複という形などでも現れる。

(4) 「虱」ssam ＜ sɭɾam (＜日琉祖語 sirami)
「作る」語幹：tsɭf- 「作らない」tsɭf-fan (＜日琉祖語 tsukur-)

---

[22] 音節核になる音とならない音の違いは持続可能な音か瞬間的な音かの違いであると考えられ，これは Jakobson, Fant & Halle (1952) にみられる continuant/interrupted という素性に近い。
[23] 1 節で述べた「（少なくとも音声上の）音節の中核を子音的要素が占めることが多い」のも、この性質と関係したものといえる可能性がある。
[24] Shimoji (2008) においても s，z，ts，f 相当の音は基底で成節子音として扱われており，この ï は挿入母音となってる。

このような現象も含め，各方言内でその音韻全体がもっともうまく説明できるシステムの中で，母音の有無も決定されるべきであろう。

以上，特定の音節における母音の有無の問題について，宮古諸方言における名詞形態論をいかに説明するかという観点から簡単に述べた。ここで全ての要素を考察できたわけではなく，詳細はまた稿を改めて議論したい。

２．２　母音体系

以上，宮古諸方言の母音の各音素を見てきたが，母音体系ごとに，以下のようにまとめることができる。

- ４母音体系：/a, i, u, ɿ/
  池間
- ５母音体系：/a, i, u, o, ɿ/
  島尻，伊良部，砂川，保良，野原
- ６母音体系：/a, i, e, u, o, ɿ/
  来間，久貝，狩俣，大浦，与那覇

３　子音

３．１　子音の種類と特徴

ここでは，宮古諸方言の各子音音素ごとに，調査より得られた各地の語例と音価を示す。また，各地で個別に起こった音変化や例外的音対応については，別途語例を提示する。

本稿で用いる調査結果から得られる宮古諸方言の子音の種類は，/p, b, t, d, k, g, ts, s, z, f, v, χ, ʁ, h, ʕ, m, n, n̥, ɾ, j, w/ である。このうち，/v, m, n, r/ については，音節主音になることができ，長子音として単独で語を形成することもある[25]。基本的に有声と無声の対立がある[26]。

３．１．１　破裂音

音声的に，語頭では無声子音が帯気化するという特徴がある。

/p/ 無声両唇破裂音

[25]分析によっては，これらに加え，無声摩擦音の /s, f/，さらに破擦音の /ts, z/ も成節子音とする場合がある。詳細は 2.1.4 節を参照。
[26]脚注 21 にもあるように，大神方言のみ，有声無声の対立をもたない。

宮古祖語 *p に対応する音で，一部の方言では以下のような変化がみられる。

- 池間：p＞h/ [h～ç～ɸ]
- 狩俣，島尻，大浦：p＞b/#_ɭC[＋voiced]（ただし一部の語彙のみ）

表 12　無声両唇破裂音

	A-146	A-139	A-016	A-148	A-033	B-002	B-007
	南	光	髭・毛	左	脚	歯	面
上地	pʰai	pçkal	pᶜɨgi	pɨdal ～ pɨda	pagɨ	paː	
与那覇	pai	pˢ̥ɭkaᶻɭ	pᶻɭgi	pˢ̥ɭdaᶻɭ	pʰagᶻɭ		
久貝	pʰai	pskaz	psgi	pzdaz	pʰaʤï		
伊良部	pʰai	pˢkaɭ	pˢɭgi	pʰidiɭ	pʰaʤɭ	paː	mipana ～ miɸana
保良	pʰai	pskaɭ	pˢɭgi	pˢɭdaɭ ～ pˢɭdaᶻɭ	pʰaᵈzɭ ～ pʰagᶻɭ	pʰaː	mipʰana
国仲	paɪbaɾa	pɨ̥kaɽ	pʰɨgi	pˢɨdaɽ	pazɨ		
大浦	pʰai	pskaɭ	pˢɭgi ～ pɭgi	bᶻɭdaɭ	pʰagɭ ～ pʰagᶻɭ	paː	nipana
島尻	pʰai	pskaᶻɭ	bᶻɭgi	bᶻɭdaᶻɭ	pʰagɭ ～ pʰagᶻɭ	pʰaː	mipana
来間	pʰai	pskaɽ	psgi	A: pʰïdaɽ / B: psdaz	pʰaʤï		
池間	haibaɾa	çɨ̥kai	higi	çidai	haʤï	haː	mihana
狩俣	pʰai	pskaɯ	bzgɯ ～ bzgï ～ bïgï	bïdaɯ ～ bzdaɯ	pʰagɯ	pa	mipana
砂川	pʰai	pʂkaʐ̥	psgi ～ pˢ̥ɭgi	pʂdaʐ ～ pʂdaɭ	pagʐ		
野原					pagɭ	paː	mipana

/b/ 有声両唇破裂音

宮古祖語 *b に対応する音で，各地で安定して /b/ で現れる。

表 13　有声両唇破裂音

	A-007	A-051	A-055	A-091	A-156	A-029
	唇	夫	子供(未成年)	砂糖黍	夕方	お腹
上地	sɨba	Bikidum～bikiʤum	jaɾabi	buːgɨ	jusaɾabi	
与那覇	sᶻɭba	bʊtʰʊ		buːgᶻɭ		

久貝	sïba	butʰu	jaɾabi[新]	buːgᶻï	jusaɾabi	batʰa
伊良部	sɿba	butu	jaɾabi	buːʥɿ	jusaɾabi	bata
保良	sɿba	b̥ʊtʰʊ	jaɾabi	bʊːgᶻɿ ～ bʊːʥɿ	jʊsaɾabi	b̥ata
国仲	sɨbaɣa	bu̥tu	jaɾabi	bu̥ːʥɨ		bata
大浦	NR	butu	jaɾabi	buːgɿ ～ buːgᶻɿ		
島尻	ᶻɿba	butu		buːgɿ ～ buːgᶻɿ		
来間	sïba	bikidumu	jaɾabi	buːʥï	jusaɾabi	bata
池間	fu̥tsï	butu	jaɾabi	buːʥï	jusaɾabi	bata
狩俣	sïba	budu	jaɾabi	buːgï	jusaɾabi	bada
砂川	sb̥̩a～ spa	butʰu	jaɾabi	buːgz̩		
野原						

/t/ 無声歯茎破裂音

宮古祖語 *t に対応する音で，一部の方言で以下の変化が見られる。

- 島尻・国仲：t ＞ tɕ / __i
- 狩俣：t ＞ d / C[＋voiced]V__

表 14　無声歯茎破裂音

	A-077 鳥	A-154 朝	A-177 土	A-018 力	B-029 一人
上地	tou	sɨtu̥muti	m̩ta ～ m̩ta̰	taja	
与那覇	tʊᶻɿ	sɿtʰʊmʊti	mtʰa	tʰaja	tɔʊkʲaː
久貝	tʰuz	s̩tumuti	m̩ta	tʰaja	ta̰fkeː
伊良部	tʰuᶻɿ ～ tʰuɿ	stumuti	mta	tʰaja	taʊkiː
保良	tʰʊɿ	sˑtʊmʊti	mta	tʰaja	taʊkʲaː
国仲	tu̥ɭ	sɨ̥tu̥mutɕi	n̩ta	taja	taᵛkʲaː
大浦	tʰuɿ	stumuti	nta	tʰaja	tavkʲaː
島尻	tʰuᶻɿ	stumatɕi	nta	tʰaja	tʰafkjaː
来間	tʰuz	stumuti	mta	taja	
池間	tui	çɨ̥tumuti	nta ～ mta	taja	tauka:
狩俣	tuɯ	stumuti	nta	taja	taɸkʲaː
砂川	tuz̩	stumuti̥ ～ stumuti	m̩ta	taja	tavkʲaː
野原					taʊkjaː

表 15　狩俣：t ＞ d / C[＋voiced]V_の例

	A-029 お腹	A-051 夫
上地		bikidum ～ bikiʤum
与那覇		bʊtʰʊ
久貝	batʰa	butʰu / bikirʲa[古]
伊良部	bata	butu
保良	b̥ata	b̥ʊtʰʊ
国仲	bata	bu̟tu
大浦		butu
島尻		butu
来間	bata	bikidumu
池間	bata	butu
狩俣	bada	budu
砂川		butʰu
野原		

/d/ 有声歯茎破裂音

宮古祖語 *d に対応する。島尻で，d ＞ dʥ / _i という変化がみられる。

表 16　有声歯茎破裂音

	A-005 涙	A-037 体	A-059 女	A-111 枝	A-182 戸	A-017 腕
上地			midum ～ miᵈðum	juda		udi
与那覇			midʊmʊ	jʊda		kʰaina
久貝	nada / miːnada	duː	midum	juda	jadu	udi / kʰaina（肩の痛み）
伊良部	nada	upʰuduː	midum	ida	jadu	kʰaina
保良	nada	dʊː	midʊm	jʊda	jadʊ	ʊdi
国仲	nada	du̟ː	midum̩	juda		udi
大浦	nada		miduŋ	ida		udi
島尻			miduŋ	juda		udʥi
来間	nada	duː	midumu	ida	jadu	ude

池間	nada	duː	miduŋ	juda	jadu	tiː / 手首 kaina
狩俣	nada	duː	miduŋ	ida	jadu	kaina
砂川			miduṃ	juda		kaina
野原						

/k/ 無声軟口蓋破裂音

宮古祖語 *k に対応する音で，各地でさまざまに変化している。

- 狩俣: k ＞ g / C[＋voiced]V__[27]
- 伊良部・国仲・来間・池間：k ＞ ts / __ ɭ
- k の弱化：
  伊良部：k ＞ h ～ x / a__a
  島尻：k ＞ χ / a__a
  大浦：#aka ＞ #haː
  狩俣：#aka ＞ #haː, Caka ＞ Caː

表 17　無声軟口蓋破裂音

	A-126 灰	A-129 風	A-139 光	A-164 去年	A-110 木
上地	karapʰaʎ ～ karapʰaᶻ	kadʑi	pçkal	kudʒu	kiː
与那覇	kʰarapaᶻɭ	kʰadʑi	pˢɭ̥kaᶻɭ	kʰʊdʑʊ	kiː
久貝	kʰarapʰaz	kʰadʑi	pskaz	kudʑu	kiˑ
伊良部	kʰara paɭ	kʰadʑi	pˢkaɭ	kʰudu	kʰiː
保良	kʰarapaɭ ～ kʰarapaᶻɭ	kʰaᵈʑi	pskaɭ	kʰʊdʑʊ	kʰiː
国仲	karapaɺ	kadʑi	pi̥kaɺ	kṵdṵ	kiˑ
大浦	kʰarapaɭ	kʰadʑi	pskaɭ	kʰuᵈzu	kʰiː
島尻	karapaᶻɭ	kʰadʑi	pskaᶻɭ	kʰudu	kiː
来間	A: karabaɺ / B: karabaz	kʰadʑi	pskaɺ	kʰudʑu	kiː
池間	karahai	kʰadi	çi̥kai	kudʑu	kiː
狩俣	karapaɯ	kʰadʑi	pskaɯ	kudʑu	kiː
砂川	karapaẓ	kadʑi	pṣkaẓ̥	kṵᵈẓ̥u	kiː ～ ki̥ː
野原					

[27] 表 18 にある、島尻「卵」tʰunaʁa も、島尻で k ＞ χ / a__a の変化が起る以前に、この変化を受けていたと考えられる。

表 18　狩俣：k ＞ g / C[＋voiced]V__　の例

	A-072 雄山羊	A-079 卵
上地		tunaka
与那覇		tʰʊnaka
久貝	bikipʰindʑa	tunak̟ʰa
伊良部	bikipindʑa	kʰuːga
保良	b̥ikipindʑa	tʰʊnaka
国仲	bikipinda	tunuka
大浦		tʰunaka
島尻		tʰunaʁa
来間	bikipʰindʑa	tʰunuka
池間	bikihindʑa	tunuka
狩俣	bigipindʑa	tunuga
砂川		tu̥naka
野原		

表 19　伊良部・国仲・来間・池間：k ＞ ts / __ ɿ の例

	A-121 着物	A-163 昨日	A-030 心臓・肝	A-142 月（天体・暦）
上地	kɨŋ	kˢɨnu	kçɨmu ～ kɨmu	tsɨ̥kɨjuˈ
与那覇	kˢɿŋ	kˢɿ̥nʊ	kˢɿ̥mu	tsɿkˢɿ / tsɿkˢɿnʊjʊː
久貝	kˢïŋ	ksïnu	kˢᶻïmu	tskssu
伊良部	tˢɿŋ	tsɿnuː	tsɿmu	tstsu ～ tsttsu(?)
保良	kˢɿŋ	kˢɿnʊː	kˢɿmʊ	tskɿ
国仲	tsɨŋ	tsɨnu̥	tsɨmu	tsɨ̥ttu̥
大浦	kˢɿŋ	kˢɿnu	kˢɿmu	tskɿ
島尻	kˢɿŋ	kˢɿnu	kˢɿmu	tskɿ ～ tskˢɿ
来間	tsïŋ	tsïno	tsïmu	A: tsïtsï / B: tsïtsïnujuː
池間	tsïŋ	Nnu	tsïmu	tsïtsï
狩俣	kˢïŋ	ksn̥̩u	kˢïmu	tskssu
砂川	ks̩n	ks̩nuː	ksmu ～ kˢɿmu	tsks̩
野原				

表 20　k の弱化の例

伊良部：k > h ~ x / a__a

島尻：k > χ / a__a

大浦：#aka > #haː

狩俣：#aka > #haː, Caka > Caː

	A-100 椀	A-025 血	A-186 墓	A-066 蟻	A-178 庭
上地	makˣal	aχḁtsɨ ~ akḁtsɨ	pḁka	akˣɑːɭ	
与那覇	makʰaᶻɻ	akʰḁtsɻ	pʰaka	akaːᶻɻ	
久貝	makʰazï	akatsï	pʰḁka	ak̠aːz̩	minaka
伊良部	maxaɻ ~ mahaɻ	axḁtsɻ ~ ahatsɻ	pʰaː ~ pʰa̰ː	ahaː	minaha
保良	makaᶻɻ	akʰḁtsɻ	pʰḁka	aᶻɻgaɾa（保良）/ akʰaː（新城）	minaka
国仲	makaɭ	akˣḁtsɨ	pḁka	akaː	
大浦	makaɻ	haːtsɻ	pʰaka	haːɻ ~ xaːɻ	
島尻	maχaɻ ~ maχaᶻɻ	aχatsɻ	pḁχa	aχaᶻɻ	
来間	A: makaɭ / B: makaz	A: akatsï / B: aᵏxatsï	pḁka	A: akaɭ / B: akaz	minaka
池間	makai	akatsï	haka	Akai	minaka
狩俣	maːɯ	haːtsï	pḁka	haːɯ	aːɾa / minaː
砂川	makaz̩	akḁtsɻ	pḁka	az̩gaɾa	
野原					

/g/ 有声軟口蓋破裂音

宮古祖語 *g に対応する音で，各地でさまざまに変化している。

- 伊良部・国仲・来間・池間：g > dz / __ ɻ
- 島尻：g > ʁ / a__a
- 伊良部：g > ʕ / a__a

表 21　有声軟口蓋破裂音

	A-016 髭・毛	A-140 蔭	A-174 砂	A-032 膝	A-062 蚊
上地	pᶜɨgi	kagi̥	m̩nagu	tsɨgusɨ	gadʑam
与那覇	pᶻɿgi	kʰagi	nnagʊː	tsɿgʊsɿ	gadzam
久貝	psgi	kʰagi	mˑnagu	tsïgusï	gadzam
伊良部	pˢɿgi /fʊ̥tsɿpˢɿgi	kʰaːgi	mnagu	tsɿgusɿ	gadzam
保良	pˢɿgi	kʰag	nnagʊː	tsɿgʊsɿ	gaᵈzam
国仲	pʰɨgi	kaːgi	m̩nagu	tsɨgusɨ	kadam̩
大浦	pˢɿgi ～ pɿgi	kʰag	nnagu	sugasɿ	gaᵈzaŋ
島尻	bᶻɿgi	kʰagi	nnagu	tugusɿ ～ tugasɿ	gadaŋ
来間	psg	kagi	mːnagu	tsïgusï	gadʑam
池間	higi	kagi	nnagu	sïgusï	kadʑaŋ
狩俣	bzgɯ ～ bzgï ～ bïgï	kag	nnagu	tsïgasï	gaᵈzaŋ
砂川	psg ～ pˢɿ̥gi	kḁgi ～ kag	n̩nagu	tsgusɿ ～ tsɿgusɿ	gadzam̩
野原					

表 22　その他 *g の変化の例

伊良部・国仲・来間・池間：g ＞ dz / __ ɿ

島尻：g ＞ ʁ / a__a

伊良部：g ＞ ʕ / a__a

	A-033 脚	A-091 砂糖黍	A-124 鏡	A-143 東
上地	pagɨ	buːgɨ	kagam̩	aɣal
与那覇	pʰagᶻɿ	buːgᶻɿ	kʰagam	agaᶻɿ
久貝	pʰadzï	buːgᶻï	kʰagam	ag̅az
伊良部	pʰadzɿ	buːdzɿ	kʰaʕam	aʕaɿ
保良	pʰaᵈzɿ ～ pʰagᶻɿ	bʊːgᶻɿ ～ bʊːdzɿ	kʰagam	agaɿ
国仲	pazɨ	bu̥ːdzɨ	kagam̩	agaɭ
大浦	pʰagɿ ～ pʰagᶻɿ	buːgɿ ～ buːgᶻɿ	kʰagaŋ	(agaɿ ～) aːɿ
島尻	pʰagɿ ～ pʰagᶻɿ	buːgɿ ～ buːgᶻɿ	kʰaʁaŋ	aʁaɿ
来間	pʰadzï	buːdzï	kagam	A: agaɭ / B: agaz

池間	hadʑï	buːdʑï	kagaŋ	agai
狩俣	pʰagɯ	buːgï	kʰagaŋ	aːɯ
砂川	pagʐ	buːgʐ	kagaɲ	agaʐ
野原	pagɿ			

３．１．２　破擦音

/ts/ 無声歯茎破擦音

宮古祖語 *ts に対応する音で，ほとんどが/ɿ/ の前に現れる例である。他の母音の前では，方言によって /t/ で現れる語彙もある（島尻「明日」ata など）。

また，伊良部・国仲・保良・池間では，宮古祖語 *kɿ が /tsɿ/ に変化している。

表 23　無声歯茎破擦音

	A-031 乳	A-025 血	A-142 月（天体・暦）	A-160 明日	A-101 茶碗
上地	tsɨ	aχḁtsɨ ～ akḁtsɨ	tsi̥kɨjuˑ	aɕa / atɕ	
与那覇	tsɿː	akʰḁtsɿ	tsɿkˢɿ / tsɿkˢɿnʊjʊː	atsa	
久貝	tsïˑ	akatsï	tskssu	attsa	tɕʰabaŋ
伊良部	tsɿː	axḁtsɿ ～ ahatsɿ	tstsu ～ tsttsu(?)	atsa	tɕabaŋ
保良	tssɿ	akʰḁtsɿ	tskɿ	atsa	tɕabaŋ
国仲	tsɨ	akˣḁtsɨ	tsi̥ttu̥	ata	
大浦	tsɿ	haːtsɿ	tskɿ	atsa	
島尻	tssɿ	aχatsɿ	tskɿ ～ tskˢɿ	ata	
来間	A: tsï / B: tssï	A: akatsï / B: aˣxatsï	A: tsïtsï / B: tsïtsïnujuː	atɕa	tɕabaŋ
池間	tsïː	akatsï	tsïtsï	atɕa	tɕabaŋ
狩俣	tzïː	haːtsï	tskssu	atsa	tɕabaŋ
砂川	tsɿː	akḁtsɿ	tskṣ	atsḁ	
野原					

表 24　伊良部・国仲・保良・池間：tsɿ ＜ *kɿ

	A-030 心臓・肝	A-121 着物	A-009 息
上地	kçɨmu ～ kɨmu	kɨŋ	

与那覇	kˢ̥ɭmu	kˢɭŋ	
久貝	kˢᶻïmu	kˢïŋ	ikˢï
伊良部	肝 tsɭmu	tˢɭŋ	itsɭ
保良	kˢɭmʊ	kˢɭŋ	ikˢɭ
国仲	tsɨmu	tsɨŋ	itsɨ
大浦	kˢɭmu	kˢɭŋ	ikɭ
島尻	kˢɭmu	kˢɭŋ	
来間	tsïmu	tsïŋ	A: iᵗsï / B: itsï
池間	tsïmu	tsïŋ	iki
狩俣	kˢïmu	kˢïŋ	ikɯ
砂川	ksmu ～ kˢɭmu	kʂn	
野原			

３．１．３　摩擦音

/s/

[s]無声歯茎摩擦音

[ɕ]無声歯茎硬口蓋摩擦音/ __ i

宮古祖語 *s に対応する音で，i の前では調音点が口蓋寄りになる。

大浦などでは，以下のように変化している。

- 大浦・島尻：*sɭ ＞ ɭ \ __ C[＋voiced]
- 与那覇・保良・大浦：*s ＞ ts / N __

また，大浦や島尻などで，*fusV に由来する ssV がある。

表 25　無声歯茎～歯茎硬口蓋摩擦音

	A-156 夕方	A-173 珊瑚礁	A-032 膝	A-113 草	A-098 味噌	A-007 唇	A-008 舌
上地	jusɑrabi	pɕi̥ ～ pɕi	tsɨgusɨ	fu̥sa	m̩su	sɨba	sɨda
与那覇		ɕi: / pʰi̥ɕi	tsɭgʊsɭ	fsa	mtsʊ	sᶻɭba	sᶻɭda
久貝	jusɑrabi	pɕɕi	tsïgusï	fsa	msu	sïba	sïda
伊良部	jusɑrabi	pɕɕi	tsɭgusɭ	fu̥sa	msu	sɭba	sta
保良	jʊsɑrabi	pɕɕi ～ pi̥ɕi	tsɭgʊsɭ	fʊ̥sa	mtsʊ	sɭba	sɭda
国仲		pi̥ɕi	tsɨgusɨ	f̩sa	n̩su̥	sɨbaɣa	si̥ta/sta
大浦		pɕɕi	sugasɭ	ssa	ntsu	NR	ɭda～ᶻɭda

島尻		pi̥ɕi	tugusɿ ～ tugasɿ	ssa	nsu	ᶻɿba	ᶻɿda
来間	jusaɾabi	pɕi	tsïgusï	fsa	A: mːsu / B: mːso	sïba	sïda
池間	jusaɾabi	pi̥ɕi	sïgusï	fu̥sa (＝[fʷsa])	nsu	fu̥tsï	ɕta
狩俣	jusaɾabi	pɕɕi	tsïgasï	fu̥sa	nsu	sïba	sta
砂川		pi̥ɕi	tsgusɿ～ tsɿgusɿ	f̬sa	m̩su ～ m̩su̥	sb̥a ～ sp̥a	sɿda～s̬ɿda / s̬da
野原							

/z/

[z]～[dz]有声歯茎摩擦・破擦音

[ʑ]～[dʑ]有声歯茎硬口蓋摩擦・破擦音 / __ i

宮古祖語 *z に対応する音で，i の前では調音点が口蓋寄りになる。摩擦音もしくは破擦音の自由変異をもつ。

そのほか，方言ごとに以下のような特徴がある。

- 上地・来間：ɿ の前以外では [ʑ]～[dʑ] で現れる。
- 池間：dʑa[28] di dʑu dzɿ
- 島尻・国仲：i，ɿ の前以外では /d/ となる。
- 伊良部・国仲・来間・池間では，*gɿ が /dzɿ/ に変化している。

表 26　有声歯茎～歯茎硬口蓋摩擦・破擦音

	A-023	A-164	A-062	A-183	A-129
	肘	去年	蚊	門	風
上地	pidʑɨ	kudʒu	gadʑam	dʒoˑ	kadʑi
与那覇	pʰidzɿ	kʰʊdzʊ	gadzam	dzoː	kʰadʑi
久貝	pʰidzï	kudzu	gadzam	dzoː	kʰadʑi
伊良部	pʰidzɿ	kʰudu	gadzam	dzoːvtsɿ	kʰadʑi
保良	pʰiᵈzɿ	kʰʊdzʊ	gaᵈzam	dzoː（保良）/ dzaʊ（新城）	kʰaᵈʑi
国仲	pʰidzɨ	ku̥du̥	kadam̩	dau̥	kadʑi
大浦	pʰidzɿ	kʰuᵈzu	gaᵈzaŋ	dzoːfutsɿ「入口」	kʰadʑi
島尻	pidzɿ	kʰudu	gadaŋ	dau	kʰadʑi

[28] 表 26 中のデータでは 池間「門」dzau となっているが，筆者の調査では dʑau となっている。

来間	pidʑï	kʰudʑu	gadʑam	dʑoː	kʰadʑi
池間	hidʑi	kudʑu	kadʑaŋ	dʑau	kʰadi
狩俣	pidʑï	kudʑu	gaᵈzaŋ	dʑoː	kʰadʑi
砂川	pi̥dʑɫ ~ pidʑɫ	ku̥ᵈz̥u	gadʑam̩	dʑau	kadʑi
野原					

表 27　伊良部・国仲・来間・池間：g > dz / __ ɫ

	A-033 脚	A-091 砂糖黍	A-118 釘
上地	pagɨ	buːgɨ	fugɨ
与那覇	pʰagᶻɫ	buːgᶻɫ	fʊgᶻɫ
久貝	pʰadʑï	buːgᶻï	kʰanifugz / fugz
伊良部	pʰadʑɫ	buːdʑɫ	fudʑɫ
保良	pʰaᵈzɫ ~ pʰagᶻɫ	bʊːgᶻɫ ~ bʊːdʑɫ	fʊgᶻɫ
国仲	pazɨ	bu̟ːdʑɨ	kanifudʑɨ
大浦	pʰagɫ ~ pʰagᶻɫ	buːgɫ ~ buːgᶻɫ	kʰanifugɫ
島尻	pʰagɫ ~ pʰagᶻɫ	buːgɫ ~ buːgᶻɫ	fugᶻɫ
来間	pʰadʑï	buːdʑï	fudʑï / kʰanfudʑï
池間	hadʑï	buːdʑï	kanifudʑï
狩俣	pʰagɯ	buːgɨ̞	fugɨ̞ ~ fugɯ
砂川	pagz̩	buːgz̩	fg̊z̩
野原	pagɫ		

/f/ 無声歯唇歯摩擦音

宮古祖語の *f に対応しており，基本的に [f] の音価を持つが，まれに無声両唇摩擦音[ɸ]で現れることがある。また，下記データ中の「雲」における k は，標準語の影響であると考えられる。

また，大浦などでは，*fusV が ssV に変化している。

表 28　無声歯唇歯摩擦音

	A-094 食べ物	A-172 船	A-132 雲	A-004 額	A-006 口
上地	faˢmunu	funʲi	kumu		fu̥tsɨ
与那覇	foːmʊnʊ	fʊni	fʊm		fʊ̥tsɿ
久貝	foːmunu	funi	fumu	ftai	ftsï
伊良部	faɿmunu	funi	fumu	fʊ̥tai	fʊ̥tsɿ
保良	faʊmʊnʊ	fʊni	fʊmʊ	fʊ̥tai	fʊ̥tsɿ
国仲	fau̯munu	funi	fumu	fu̥taɪ	fu̥tsɨ
大浦	foːmunu	funi	kʰumu	fu̥tai ～ ftai	fu̥tsɿ
島尻	faumunu	funi	fuma		ftsɿ
来間	fo̞ːmunu	funi	fumu	fte̞ˑ	ftsï
池間	faimunu	funi	m̥mu	ftai	fu̥tsï
狩俣	faumunu	funi	fumu	ftai	fu̥tsï
砂川	faumunu	ɸu̥nʲi	ɸu̥mu		f̩ts ～ f̩tsɿ
野原					

表 29　大浦・島尻：*fusV ＞ ssV

	A-113 草	A-003 櫛
上地	fu̥sa	fu
与那覇	fsa	fˢɿʊ
久貝	fsa	fsï
伊良部	fu̥sa	fʊ̥sɿ
保良	fʊ̥sa	fʊ̥sɿ
国仲	f̩sa	fsu
大浦	ssa	sː ～ sɿː
島尻	ssa	ssɿ
来間	fsa	fu̥sï
池間	fu̥sa (＝ [fʷsa])	fu̥ɕi
狩俣	fu̥sa	fu̥sï ＝ fʷsï
砂川	f̩sa	f̩s̩ ～ f̩sɿ̥ ～ fʊ̥sɿ
野原		

/v/

[v]有声唇歯摩擦音

[ʋ]有声唇歯接近音

宮古祖語 *v に対応する音で，頭子音だけでなく音節主音となることができる（池間を除く）。どちらの環境でも，摩擦音と接近音のバリエーションがあり，せばめの度合いが高い方言と低い方言がある。u の後ろでは同化し u となる方言もある（下表「粥」を参照）。また，一部の語彙で方言間で /f/～/v/の揺れも観察される。

表 30　有声唇歯摩擦音～接近音

	A-035 脹脛	A-043 お前	A-095 油	A-096 粥
上地		vva		juv
与那覇	kʰʊːʋa	ʋʋa		jʊː
久貝	kuvva	vva	avva	juv
伊良部	kʰuvva	jaː	avva	ʥuːɕa
保良	kʊvva	vva ～ ʋva	avva ～ aʋva	jʊv ～ jʊʋ
国仲	kṷʋʋa	ʋʋa	aʋʋa	jṷˑʋ
大浦	NR	ʋʋa		juʋ
島尻	kuvva ～ kuʋva	vva		juv
来間	kuvva	vva	avva	juv
池間	kuvva	vva	avva	juː
狩俣	kuʋʋa	ʋva	aʋva	N/R
砂川	kṷv̥̩va ～ kṷʋʋa	vva		juv̩
野原				

表 31　方言間での/f/～/v/の揺れ（他方言では/v/だが上地，久貝，島尻のみ/f/となる例）

	B-029 一人	A-184/A-149 前・正面
上地		mafkjaː
与那覇	tɔʋkʲaː	maʋkʰʲaː
久貝	tḁfkeː	maf̩kʲa ～ mafï̥kʲa
伊良部	taʋkiː	maʋkjaː
保良	taʋkʲaː	maʋkʲaː
国仲	taᵛkʲaː	maʋkjaː

大浦	tavkʲa:	
島尻	tʰafkja:	mafkja:
来間		mo:tʰu[29]
池間	tauka:	maukʲa:
狩俣	taɸkʲa:	maukja: / mafkʲa
砂川	tavkʲa:	mavkja: ～ maʊkja:
野原	taʊkja:	

/h/
[h]無声声門摩擦音　/__a
[ç]無声硬口蓋摩擦音 /__i
[ɸ]無声両唇摩擦音 /__u
以下の二つの由来をもつ。

- *p：池間のみ，/p/ が /h/ に変化している
- *k（a に隣接するもののみ）：伊良部，狩俣など

例は表 12 を参照。

/χ/ 無声口蓋垂摩擦音 [χ]
島尻のみでみられる音で，＜*aka における *k から変化したもの。例は表 20 を参照。日本列島で唯一の例。

/ʁ/ 有声口蓋垂摩擦音 [ʁ]
島尻のみでみられる音で，＜*aga における *g から変化したもの。例は表 22 を参照。日本列島で唯一の例。

/ʕ/ 有声咽頭摩擦音 [ʕ]
伊良部のみで見られる音で，＜*aga における*g から変化したもの[30]。例は表 22 を参照。日本列島で唯一の例。

[29]その他の方言で示されているものとは別の由来をもつ語。
[30]これまでは声門閉鎖音として記述されていたものに相当する。

３．１．４　鼻音

/m/ 有声両唇鼻音

宮古諸方言 *m に対応。音節の頭子音の場合は両親鼻音だが，成拍的な場合（音節の中核もしくは末子音）となる場合は，調音点を失って/n/に同化する，日本語の「撥音」にあたる音になる方言もある（大浦，島尻，池間，狩俣）。

表 32　有声両唇鼻音

	A-030 心臓・肝	A-071 馬	A-127 水	A-130 竜巻	A-187 あそこ
上地	kçɨmu ～ kɨmu	nu:ma	midʑɨ	amainoŭ	kama
与那覇	kˢɽ̥mu	nʊ:ma	miᵈzɽ	amaino:	kʰama
久貝	kˢᶻïmu	nu:ma	midʑï	ama.ino:	kʰama
伊良部	tsɽmu	nu:ma	miᵈzɽ	amaino:	kʰama ～ kʰama:
保良	kˢɽmʊ	nʊ:ma	miᵈzɽ	amaino:	kʰama
国仲	tsɨmu	nu̟:ma	midʑɨ	amaɪnaʊ	kama
大浦	kˢɽmu	numa	midʑɽ	amaino:	kʰama
島尻	kˢɽmu	nu:ma	midʑɽ	amaino:	kama
来間	tsïmu	nu:ma	midʑï	ama.ino:	kama
池間	tsïmu	nu:ma	midʑï	amaunau	kama
狩俣	kˢïmu	nu:ma	mi(ᵈ)zï	ino:	kama
砂川	ksmu ～ kˢɽmu	nu:mḁ	midʑɽ	amainau	kʰḁma:
野原					

表 33　成拍的な場合（音節の中核と末尾）

	A-170 海	A-062 蚊	A-059 女	A-098 味噌	A-177 土
上地	iṃ	gadʑam	midum ～miᵈðum	ṃsu	ṃta ～ ṃtḁ
与那覇	im	gadʑam	midʊmʊ	mtsʊ	mtʰa
久貝	im	gadʑam	midum	msu	ṃta
伊良部	im	gadʑam	midum	msu	mta
保良	im	gaᵈzam	midʊm	mtsʊ	mta
国仲	iṃ	kadaṃ	miduṃ	ṇsṵ	ṇta
大浦	iŋ	gaᵈzaŋ	miduŋ	ntsu	nta

島尻	iŋ	gadaŋ	miduŋ	nsu	nta
来間	im	gadʑam	midumu	A: mːsu / B: mːso	mta
池間	iŋ	kadʑaŋ	miduŋ	nsu	nta ～ mta
狩俣	iŋ	ga^{d}zaŋ	miduŋ	nsu	nta
砂川	iṃ	gadʑaṃ	miduṃ	ṃsu ～ ṃsu̥	ṃta
野原					

/n/

[n]有声歯茎鼻音

[ŋ]有声軟口蓋鼻音 /_#

宮古諸方言 *n に対応する音。音節の頭子音の場合は有声歯茎鼻音。成拍的な場合（音節の中核もしくは末子音）となる場合は，調音点が後節する音素に同化する，日本語の「撥音」にあたる音になる。

表 34　有声歯茎鼻音

	A-172 船	B-054 花	A-131 地震	A-079 卵	A-028 骨
上地	fun^{j}i		nai	tunaka	puni
与那覇	fʊni		nai	t^{h}ʊnaka	puni
久貝	funi		nai	tunak̟^{h}a	p^{h}uni
伊良部	funi	pana	nai	k^{h}uːga	p^{h}uni
保良	fʊni	p^{h}ana	nai	t^{h}ʊnaka	p^{h}ʊni ～ pʊni
国仲	funi		naɪ	tunuka	puni
大浦	funi	pana	nai	t^{h}unaka	p^{h}uni
島尻	funi	p^{h}ana	nai	t^{h}unaʁa	p^{h}uni
来間	funi		nai	t^{h}unuka	p^{h}uni
池間	funi	hana	nai	tunuka	huni
狩俣	funi	pana	naɯ	tunuga	p^{h}uni
砂川	ɸu̥n^{j}i		nai	tu̥naka	pu̥ni ～ p^{h}uni
野原		pana			

表 35　有声軟口蓋鼻音（語末）

	A-101 茶碗	A-121 着物
上地		kɨŋ
与那覇		kˢɭŋ / kˢɭmʊnʊ
久貝	tɕʰabaŋ	kˢïŋ
伊良部	tɕabaŋ	tˢɭŋ
保良	tɕabaŋ	kˢɭŋ
国仲		tsɨŋ
大浦		kˢɭŋ
島尻		kˢɭŋ
来間	tɕabaŋ	tsïŋ
池間	tɕabaŋ	tsïŋ
狩俣	tɕabaŋ	kˢïŋ
砂川		kṣn
野原		

/n̥/

[n̥]無声歯茎鼻音

[m̥]無声両唇鼻音 /__C[＋labial]

池間のみに見られる音。それぞれ，*tsɭNV ＞ n̥NV*fum ＞ m̥mV　という出自である。日本で唯一の例。（下記池間「角」「昨日」 nnu は共に n̥nu の誤りかと思われる。）

表 36　無声歯茎～両唇鼻音

	A-132 雲	A-073 角	A-163 昨日
上地	kumu	tsɨnu	kˢɨnu
与那覇	fʊm	tsɭnʊ	kˢɭ̥nʊ
久貝	fumu	tsïnu	ksïnu
伊良部	fumu	tsɭnu ～ tsɭno	tsɭnu:
保良	fʊmʊ	tsɭnʊ	kˢɭnʊ:
国仲	fumu	tsɨnṵ	tsɨnṵ
大浦	kʰumu	tsɭnu	kˢɭnu

島尻	fuma	tsɻnu	kˢɻnu
来間	fumu	tsïnu	tsïno
池間	m̥mu	nnu	nnu
狩俣	fumu	tsn̥u	ksn̥u
砂川	ɸu̥mu	tsnu ～ tsɻ̥nu	kṣnu:
野原			

３．１．５　流音

/ɾ/ 有声歯茎弾き音

宮古祖語の *ɾ に対応する。頭子音の場合は，各地で安定して [ɾ] で現れる。このほか，成拍的音となることができ，その場合は歯茎側面接近音 [l̆] で現れる方言もある（国仲）[31]。

表 37　有声歯茎弾き音

	A-055 子供（未成年）	A-092 鎌	A-156 夕方
上地	jaɾabi	ⁱzzaɾa	jusaɾabi
与那覇		zzaɾa	
久貝	jaɾabi[新]	zzaɾa	jusaɾabi
伊良部	jaɾabi	ɻzaɾa	jusaɾabi
保良	jaɾabi	zzaɾa	jʊsaɾabi
国仲	jaɾabi	ⁱzzaɾa	
大浦	jaɾabi	ᶻɻzaɾa	
島尻		zzaɾa	
来間	jaɾabi	zzaɾa	jusaɾabi
池間	jaɾabi	zzaɾa ～ ᵈzaɾa	jusaɾabi
狩俣	jaɾabi	ïzaɾa	jusaɾabi
砂川	jaɾabi	zzaɾa	
野原			

[31] 成拍的な /ɾ/ は，*ɾɻ を由来とする。表 10 では上地や来間でも側面音が表われているが，それらは音韻論的に /ɻ/ にあたるものである。

表 38　国仲：成拍的 /ɾ/

	A-077 鳥	A-155 昼間	A-126 灰	A-139 光	A-143 東
上地	tou	pˢɨma	kaɾapʰaʎ ～ kaɾapʰaᶻ	pçkal	aɣal
与那覇	tʊᶻɭ	pˢɭma	kʰaɾapaᶻɭ	pˢɭkaᶻɭ	agaᶻɭ
久貝	tʰuz	psïma	kʰaɾapʰaz / pʰaz(ï)	pskaz	ag̅az
伊良部	tʰuᶻɭ ～ tʰuɭ	pˢɭːma	kʰaɾa paɭ	pˢkaɭ	aʕaɭ
保良	tʰʊɭ	pˢɭːma	kʰaɾapaɭ ～ kʰaɾapaᶻɭ	pskaɭ	agaɭ
国仲	tu̥ɭ	pʰɨɭːma	kaɾapaɭ	pɨ̥kaɭ	agaɭ
大浦	tʰuɭ	pˢɭma	kʰaɾapaɭ	pskaɭ	(agaɭ ～) aːɭ
島尻	tʰuᶻɭ	pˢɭnaχa / pˢɭma	kaɾapaᶻɭ	pskaᶻɭ	aʁaɭ
来間	tʰuz	pssïma	A: kaɾabaɭ / B: kaɾabaz	pskaɭ	A: agaɭ / B: agaz
池間	tui	hiːma	kaɾahai	çɨ̥kai	agai
狩俣	tuɯ	psm̥a	kaɾapaɯ	pskaɯ	aːɯ
砂川	tuz̩	pˢɭːma	kaɾapaz̩	ps̩kaz̥	agaz̩
野原					

３．１．６　接近音

/j/ 有声硬口蓋接近音

宮古祖語の *j に対応する。

表 39　有声硬口蓋接近音

	A-055 子供（未成年）	A-111 枝	A-165 昔	A-179 家	A-182 戸
上地	jaɾabi	juda	ŋ̩kjaːŋ		
与那覇		jʊda	ŋkʲaːŋ		
久貝	jaɾabi[新]	juda	ŋkjaːŋ	jaː	jadu
伊良部	jaɾabi	ida	mkiːŋ	jaː	jadu
保良	jaɾabi	jʊda	ŋkʲaːŋ	jaː	jadʊ
国仲	jaɾabi	juda	ŋkjaːŋ		
大浦	jaɾabi	ida	ŋkʲaːŋ	jaː	
島尻		juda	ŋkjaːŋ		

来間	jaɾabi	ida	ŋkjaːŋ	jaː	jadu
池間	jaɾabi	juda	ŋkʲaːŋ	jaː	jadu
狩俣	jaɾabi	ida	ikjaːŋ	jaː	jadu
砂川	jaɾabi	juda	ŋkjaːŋ		
野原					

/w/ 有声両唇軟口蓋接近音

日琉祖語から宮古祖語への変化の過程で w は b に変化しているため，例はごくわずかで，母音 /a/ のみが後続する。「豚」などの限られた語彙のみに出現し，v と相補分布しているため，v の異音である可能性がある。実際に，多くの方言では[w]ではなく[v]に近い接近音[ʋ]が現れる（与那覇，久貝，保良，島尻，砂川）。その他の方言では重子音，末子音（末子音），音節核の場合は v になり，単子音頭子音の場合は w となっていると考えられる[32]。

表 40　有声両唇軟口蓋接近音

	A-075 豚
上地	waː
与那覇	ʋaː
久貝	vaː
伊良部	waː
保良	ʋaː ～ waː
国仲	waː
大浦	waː
島尻	ʋaː
来間	waː
池間	waː
狩俣	waː
砂川	ʋaː
野原	

[32] この理由によって Pellard (2009: 336) では*v と再建している。

３．１．７　喉頭化音の有無について

平山(編)1983 などでは一部の方言に /tˀ,tsˀ,kˀ/ の喉頭化音があるとしている。確かに音声的に北琉球に広く存在する喉頭化音に近いものが観察されるが，語頭のみであり，母音を伴って 2 モーラ分の長さを持つ（島尻「人」ttu[33]）。このため弁別的な要素は長さにあり，喉頭の緊張はそれが閉鎖音であるために音声的に表われるもので，音韻的には重子音として解釈すべきと考えられる[34]。また，北琉球の喉頭化音と異なり，母音の喪失のみに由来している（例：島尻「人」ttu ＜ 宮*pɻtu）。これに対応する音は以下のように表われる。

[tˀ]～[tt]： 池間「煙管」，島尻「人」
[kˀ]～[kk]： 池間「九つ」（報告データ上で kukunutsɨ とあるが，kkunutsɨ というバリエーションも存在する）
[tsˀ]～[tts]：　池間「ソテツ」，伊良部「煙管」

表 41　音声的に喉頭化音に近い音が現れるもの

	A-060 人	B-113 煙管	B-027 九つ	B-076 ソテツ
上地	pɨ̥su			
与那覇	pˢɻ̥tʰu			
久貝	pstu			
伊良部	pstu	ttɕ(ɻ)z	kukunutsɻ	sditsɻ
保良	pstʊ	kʰiɕi:l̥ᶻ	kukunutsɨ	ɕukʰatsɨ̥
国仲	pʰɨ̥tu		kǫkǫnǫtsɨ	sǫ̥tetsɨ
大浦	pstu	kiɕiᶻɻ	kukunutsɻ	
島尻	ttu	kɨ̥ɕiɻ	kʊ̥kunutsɻ	
来間	pstu			
池間	pʰɨ̥tu ～ çtu ～ çto	t’i: tti:か	kʊ̥kunutsɻ	ttɕu:tsɻ
狩俣	pstu	kˢɨsɨɯ	kʊ̥kunutsɯ	stɻtsɯ/sɻsudʑɯ/ssudʑɯ
砂川	pstʊ̥ ～ pstʊ̥			
野原		kɨ̥ɕiᶻɻ	kʊ̥kunutsɻ	sotetsɻ

[33] 宮古諸方言では語は最小で 2 モーラである。
[34] 名嘉真 1984 にもこの見解が示されている。また，与那国などの喉頭化音と異なり，規則的ではなく語彙的な変化で数が少なく，一部の方言の一部の語彙に現れるのみである。

３．２　子音体系

以上，宮古諸方言の子音を音素ごとに見てきたが，子音体系という点からは，以下のようにまとめることができる。

- 全ての方言がもっている音素

  /p, b, t, d, k, g, ts, s, z, f, v, h, m, n, ɾ, j, w/

- 一部の方言だけが持っている音素
  - /χ/：島尻
  - /ʁ/：島尻
  - /ʔ/：伊良部
  - /N̥/：池間

４　音節

現在のところ，宮古諸方言において音節を主要な音調規則の単位としてとりあげている報告はない。ここでの音節は，主に形態音韻論や音素配列上の記述の単位として用いるものである[35]。

音節構造は 2.1.4 節で議論した成節子音をどの程度認めるか，また前節に述べた喉頭化音を認めるかどうかとも連動しており，さまざまな解釈がある。ここでは，成節子音は/v, m, n, r/ のみとし 3.1 節にあるように語頭の重子音をみとめる立場をとるので，音節構造は (5) のようになる。

(5)　i) $(C_1)(C_2)(j)V(V)(C_3)$

　　ii) $(C_4)\underset{\cdot}{C}_5(C_6)$

このうち，i) が母音が音節核となるもの，ii) が子音が音節核となるものを示している。

- C_1C_2 双方が埋まる場合は，摩擦音もしくは共鳴音 /s, z, f, v, m, n, ɾ/ の重子音[36]もしくは C_1 を /v, m/ とする部分重子音となる。また，池間や島尻，伊良部

[35] 従って，例えば CCV の 一つ目の C が 1 モーラの長さを持つなど，一般的な音節の理論には当てはまらない性質もある。

[36]「虱」 ssam や「子」 ffa などの重子音は狭母音の摩擦化->後続流音，半母音の同化によって生じたものと 2.1.4 節で述べた。同じ音変化を経た名詞形態音韻論の解釈においてはこの摩擦化する母音をそのまま残している半面，前者のような場合は母音のない重子音としている。これは，前者がすでに終った変化であり，名詞形態論と同様の共時的分析をする必要がないこと，また島尻「人」ttu のような語頭の閉鎖音の重子音のために CCV という音節が必要であり，「虱」ssam などにもそれを適応することができるためである。

などでは，t，k，ts などの破裂音・破擦音も重子音として C_1C_2 を埋めることができる。

例）「虱」ssan，「子」ffa，「土」nta，「人」ttu

- C_3 には/v, m, n, ɾ/ がはいる（ɾ は国仲のみ。また，池間のみ，v はここに入らない。）。
- VV には長母音，異なる母音の連続両方が入りうる。しかし，方言によってどのような母音連続が存在するのか（しないのか）などは，本稿では扱えていない。
- C_6 には C_5 と同じ子音が入る（＝長子音）。C_5 にたつことのできる子音は，/v, m, n, ɾ/である（池間のみ，v はここに入らない）。また，C_4 をもてるのは /ɾ/ のみ（国仲）で，C_4 には唇音 (p, b, m) のみが入る。

例）「売る」vv，「芋」mm，「韮」mɾɾna ([mɭːna～miɭːna])

参考文献

青井隼人 (2010)「南琉球方言における「舌先的母音」の調音的特徴：宮古多良間方言を対象としたパラトグラフィー調査の初期報告」『音声研究』14(2): 16–24.

青井隼人 (2012)「南琉球宮古方言の音韻構造」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』8：99-113.

Hayashi, Yuka (2011) Ikema (Ikema Ryukyuan). In Shimoji, Michinori and Pellard, Thomas (eds.) *An Introduction to Ryukyuan language,*167–188. Tokyo, ILCAA: 167–188.

平山輝男 (1964)「琉球宮古方言の研究」『国語学』56: 61‐73.

平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967)『琉球先島方言の総合的研究』東京:明治書院.

平山輝男（編）(1983)『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』東京:桜楓社.

五十嵐陽介，田窪行則，林由華，ペラール・トマ，久保智之 (2012)「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』16-1:134‐148.

Jakobson, Roman, Gunnar Fant and Morris Halle (1952) *Preliminaries to Speech Analysis*. Cambridge MA: MIT Press.

加治工真市 (1989)「宮古方言音韻論の問題点」『沖縄文化：沖縄文化協会創設40周年記念誌』 421–439.

かりまたしげひさ(1986)「宮古方言の「中舌母音」をめぐって」『沖縄文化』22(2)：54–64.

かりまたしげひさ (1987)「宮古方言の成節的な子音をめぐって」琉球方言研究クラブ 30周年記念会編『琉球方言論叢』419-429.

かりまたしげひさ (1996)「宮古方言の音韻変化についてのおぼえがき-空気力学的な観点か

らみて-」『言語学林』96-97: 709-722.

かりまたしげひさ(2005)「沖縄県宮古島平良方言のフォネーム」『日本東洋文化論集』11: 67‐113.

かりまたしげひさ (2007)「琉球語音韻変化の研究」京都大学特別講義資料.

北村＝サムエルH.(1960)「宮古方言音韻論の一考察」『国語学』41: 94–105.

Ladefoged, Peter and Ian Maddieson (1996) *The sounds of the world's languages.* Oxford: Blackwell.

仲原穣 (2001)「沖縄宮古島保良方言の音韻」『琉球の方言』26: 105-123.

名嘉真三成 (1984)「宮古のことば」『新沖縄文学』61:121-127. 沖縄タイムス社.

名嘉真三成 (1992) 『琉球方言の古層』東京: 第一書房.

大野真男・久野眞・杉村孝夫・久野マリ子 (2000)「南琉球方言の中舌母音の音声実質」『音声研究』4(1): 28–35.

Pellard, Thomas (2009) *Ōgami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū.* Ph.D. dissertation, École des hautes études en sciences sociales.

Pellard, Thomas (2011) Ōgami (Miyako Ryukyuan). In Shimoji, Michinori and Pellard, Thomas (eds.) *An Introduction to Ryukyuan languages*, 113-166. Tokyo, ILCAA.

崎山理 (1963)「琉球宮古方言の舌尖母音をめぐって」『音声学会会報』112(2):18–19.

崎山理 (1965)「平山輝男氏論批判琉球宮古方言の舌尖母音をめぐって」『国語学』60.

沢木幹栄 (2000)「宮古方言の問題点」『音声研究』4(1): 36–41.

下地賀代子 (2003)「宮古多良間方言の音韻及びその変化の現象」『琉球の方言』28: 93–113.

Shimoji, Michinori (2008) *A grammar of Irabu, a southern Ryukyuan language.* Ph.D. dissertation, The Australian National University.

Shimoji, Michinori (2011) Irabu Ryukyuan. In Yamakoshi, Yasuhiro (ed.) *Grammatical sketches from the field Tokyo*, 77–131. Tokyo: ILCAA.

Shimoji, Michinori and Pellard, Thomas (eds.) (2011) *An Introduction to Ryukyuan language.* Tokyo: ILCAA.

Thorpe, Maner L. (1983) *Ryūkyūan Language History*. Ph.D. dissertation, University of Southern California.

上村幸雄1997「音声研究と琉球方言学」『ことばの科学』8: 17–47.

Zec, Draga (2007) The Syllable. In Paul de Lacy (ed.) *The Cambridge handbook of phonology,* 161-194. Cambridge: New York, Cambridge University Press.

南琉球宮古語与那覇方言の名詞アクセント体系：初期報告

五十嵐 陽介

１　はじめに

琉球諸語は 5 つの下位言語、すなわち奄美語、沖縄語（以上、北琉球グループ）および宮古語、八重山語、与那国語（以上、南琉球グループ）から構成される（Pellard 2009, 2011; Shimoji 2010）。本論文が分析対象とする与那覇方言は、南琉球グループに属する宮古語の方言のひとつであり、沖縄県宮古島市下地字与那覇で話されている。

本論文は、母語話者 1 名を対象に行った 1 時間のアクセント調査で得られたデータを分析することによって、与那覇方言の名詞アクセント体系を、特にアクセント型の表層の実現形と所属語彙に焦点を当てて、記述することを目的とする。

２　先行研究の記述

２．１　概略

与那覇方言のアクセント体系に関する記述は平山他（1967）に見つけることができる。平山輝男らは、「アクセントも一般に平板調であって、一型アクセントのように誤って観察するおそれがあるが、事実は低平型と高平型との対立がある」（平山他 1967: 27）と述べているが、この記述は、第 1 に与那覇方言は二型アクセント体系（上野 1984 参照）を有することを、第 2 にこの方言の発話には著しいピッチ変化が観察されないことを示している。

平山輝男らによると、与那覇方言のアクセント体系は二型であるが、青少年層ではアクセント型の区別が不明瞭になる現象（いわゆる「曖昧アクセント化」）が観察されるという。特に、動詞・形容詞のアクセントの対立は部分的に合流するか、完全に合流しているという。平山輝男らが調査を行った 1960 年代の「青少年」は、仮に「青少年層」を 10 歳から 25 歳と定義するならば、筆者らが調査を行った 2011 年には、60 歳前半から 70 歳後半になっているはずである。後述するように本論文の分析は 75 歳の話者の発話に基づいている。したがって、もし平山輝男らの記述が正しければ、本論文が分析対象とした与那覇方言のアクセント型の区別は不明瞭になっている可能性がある。

２．２　所属語彙

平山他（1967）に従えば、与那覇方言では、類別語彙（金田一 1974 参照）の 2 モーラ名詞は、第 1 類から第 3 類が一方のアクセント型に所属し、第 4 類と第 5 類が他方の型に所属する（II-1·2·3/4·5）。一方 3 モーラ名詞は、第 1 類から第 4 類の大部分と 5 類の一部が一方の型に所属し、第 5 類の大部分と第 6 類から第 7 類のほとんどが他方の型に属する（III-1·2·3·4·(5)/5·6·7）。しかしながら、琉球諸語におけるアクセント型の所属語彙は、類別語彙の合流のみでは説明で

きないことが、すでに十分に論じられている（服部 1958, 1979; 松森 1998, 2000a, 2000b, 2008, 2010, 2011）。琉球諸語のアクセント型の所属語彙を論じるためには、松森晶子の提案する「系列」「系列別語彙」という概念を導入するのが有効である。

「系列」とは、現代の琉球語諸方言の比較から再建される琉球祖語のアクセント型によって区別される語類のことである（松森 2000b）。松森晶子は、琉球祖語には 1 モーラ語に少なくとも 2 種類、2 モーラ以上の語には少なくとも 3 種類のアクセント型による区別があると仮定し、それぞれのアクセント型で区別される語類を A 系列、B 系列、C 系列と呼ぶ。また、それぞれの語類に所属する語の総体を「系列別語彙」と呼ぶ。各系列名に冠せられたアルファベット A，B，C の順序は、系列別語彙と類別語彙との対応に基づいて決められている。具体的には、類別語彙 2 モーラ名詞の第 1 類と第 2 類の語彙のほとんどが所属する語類を A 系列、第 3 類の大部分および第 4 類・第 5 類の一部が所属する語彙を B 系列、第 3 類の少数および第 4 類・第 5 類の一部が所属する語彙を C 系列と定めている。

系列別語彙を導入した上で与那覇方言におけるアクセント型の所属語彙に関する平山輝男らの記述を再検討すると、松森（2011）が指摘しているように、A 系列と B 系列が合流し一方の型に所属し、C 系列が他方の型に所属している（A·B/C）と言うことができるようになる。

以降本論文では、与那覇方言において A 系列と B 系列の語彙の大部分が所属するアクセント型を AB 型、C 系列の語彙の大部分が所属するアクセント型を C 型と呼ぶことにする。また本論文は、三型アクセント体系を有する琉球語諸方言のアクセント型について言及することがあるが、その際、A 系列、B 系列、C 系列の語彙の大部分がそれぞれ所属するアクセント型を、それぞれ A 型、B 型、C 型と呼ぶことにする。

２．３　表層の実現形

平山他（1967）によれば与那覇方言のアクセント型の表層の実現形は表 1 の通りである。以後慣習にしたがって、ピッチの上がり目を [で、下がり目を] で表す。平山輝男らは一方の型を「低平型」、他方の型を「高平型」と呼んでいるが、その実現形と所属語彙から判断して、前者は本論文の AB 型に、後者は本論文の C 型に相当する。平山輝男らは、2 モーラ名詞については、単独発話だけでなく、助詞 nudu「が」（主格＋焦点標識）と述語が後続する場合の実現形も報告しているが、3 モーラ名詞については単独発話における実現形しか報告していない。

表 1：平山他（1967）による各アクセント型の実現形の記述．表記は平山他（1967）に従う．

モーラ数	アクセント型	単独発話	助詞 nudu「が」（主格＋焦点標識）の付いた発話
2 モーラ	高平型（AB 型）	jama「山」	jama nudu [ʔai. 「山がある。」
	低平型（C 型）	[usɨ「臼」	[usɨ nudu ʔai. 「臼がある。」
3 モーラ	高平型（AB 型）	fu̥kuru 「袋」	
	低平型（C 型）	[fu̥sui「薬」	

表 1 から明らかなように、AB 型は語全体が低く実現されるのに対して、C 型は語全体が高く実現される。2 モーラ名詞に助詞 nudu が後続した場合、助詞の高さは先行する名詞の高さをそのまま引き継ぐ。すなわち AB 型では低く、C 型では高く実現される。

３　分析

３．１　方法

３．１．１　調査日・場所

データ収集は 2011 年 9 月 7 日沖縄県宮古島市下地にておこなった。

３．１．２　被験者

被験者は 1936 年生まれの男性（調査当時 76 歳）1 名であった。与那覇以外の居住歴はない。また両親、配偶者ともに与那覇出身である。

３．１．３　調査語

調査語リストは、与那覇方言と同じく宮古語の方言である多良間方言（松森 2010）および池間方言（五十嵐他 2012）の同源語の語形を参考にして、2 モーラ名詞と 3 モーラ名詞がほぼ同数含まれるように作成した。語彙の選定は、系列別語彙と類別語彙との対応を検討することを念頭においておこなった。

系列別語彙の各系列がどのような語によって構成されているかに関する定説はない。そこで、調査語リストの語彙の選定の際には、系列別語彙の代用として、多良間方言のデータ（松森 2010）を用いた。この方言は、三型アクセント体系を有しかつ他の琉球諸語とアクセント型における規則的な対応を示す方言のひとつである。調査語リストには、多良間方言における 3 種類のアクセント型（A 型、B 型、C 型）にそれぞれ属する語彙がほぼ同数含まれるようにした。

類別語彙については、上野善道作成の私家版『アクセント調査語彙(B)』（収録語彙は上野（1985）参照）を使用し、各類別の語が調査語リストに少なくともひとつ含まれるように語彙を選別した。

調査語リストには 71 語が記載されていたが、実際に現地で収集され、かつ分析の結果アクセント型が特定できた語は表 3-4 に示す 66 語（2 モーラ名詞 36 語、3 モーラ名詞 25 語、4 モーラ名詞 5 語）であった。以後、与那覇方言の語の表記には簡略音声表記を用いる。[ɿ]は舌尖母音を表す。長母音は母音字を重ねることで表記する。

調査では、調査語の単独発話に加えて、表 2 に示すキャリア文に調査語を挿入した発話を録音した。キャリア文は、調査語に助詞 nudu「が」（主格＋焦点標識）を付与し、かつ述語を後続させたものと、調査語に助詞 mee「も」（並列）を付与し、かつ述語を後続させたものであった[1]。述語は表 2 に示したとおり様々であった。

[1] このほかに、指示詞 kunu「この」を調査語の前に置き、調査語に助詞 ja「は」（主題標識）を調

表２ キャリア文．X は調査語を示す．

単独発話	X.	「X。」
調査語＋助詞 nudu＋述語	X nudu nʲaaŋ/ uɾaŋ.	「X がない/ いない。」
	X nudu aa/ uu.	「X がある/ いる。
調査語＋助詞 mee＋述語	X mee nʲaaŋ/ uɾaŋ.	「X もない/ いない。」
	X mee aa.	「X もある。」
	X mee aa dussɻ.	「X もある。」
	X mee aɾii duu.	「X もある。」

３．１．４　分析手順

分析は、収集した発話の聴覚印象および発話から抽出した基本周波数（F0）曲線の視認に基づいておこなった。今回の分析は予備的な性格を持つものであること、およびデータが質・量ともに限定されていることから、定量分析はおこなわなかった。F0 曲線の分析は Praat（Boersma and Weenink 2011）を用いておこなった。

３．２　結果

３．２．１　概要

先行研究の記述の妥当性をおおむね確認した。与那覇方言のピッチの変化幅は概して小さいようで、際立った高低変化がない印象を与える。このことは、「アクセントも一般に平板調」とする平山他（1967）の記述と一致すると思われる。また、この方言におけるアクセント型には少なくとも 2 種類の区別があり、平山他（1967）の記述と一致する。3 種類以上の区別があることを示す決定的な証拠は見つけられなかった（ただし 3.2.4 参照）。所属語彙に関しては、概して A 系列と B 系列が合流し一方のアクセント型に所属し、C 系列が他方の型に所属しており（A·B/C）、先行研究の記述（松森 2011）と一致する。

一方で、先行研究の記述とは異なる事実も見つかった。平山他（1967）は、被験者の世代ではアクセント型の区別が不明瞭になる現象（曖昧アクセント化）が進んでいると述べているが、本分析の結果は、アクセント型の区別が明瞭に保たれていることを示した。また、分析の結果明らかになったアクセント型の表層の実現形は、表 1 に示した平山他（1967）の記述とは、必ずしも一致しなかった。

査語の後に置いたキャリア文も用いたが、このキャリア文で発話された調査語の数が少なかったため、分析対象から除外した。

３．２．２　所属語彙

分析の結果明らかになった調査語のアクセント型を表 3-4 に示す。類別語彙に対応語（同源語）がある場合に限り、与那覇方言の語形の左に類別を記す。

表から明らかなように、多良間方言で A 型の語彙は、1 語（munuŋ「言葉」）を除いてすべてが与那覇方言の AB 型に対応している。同様に、多良間方言で B 型の語彙も 1 語（pu̥sŋ「星」）を除いてすべてが与那覇方言の AB 型に対応しており、多良間方言で C 型の語彙のすべてが与那覇方言の C 型に対応している。この結果は、与那覇方言において A 系列と B 系列が合流した（A·B/C）とする松森（2011）の見解を支持する。

表３　与那覇方言のアクセント型と多良間方言のアクセント型の対応（前半）.

		与那覇方言におけるアクセント型					
		AB 型			C 型		
多良間方言におけるアクセント型	A 型	1 拍 1 類	puu	帆	-	munuŋ	言葉
		1 拍 2 類	naa	名			
		2 拍 1 類	ika/ ikʲa	烏賊			
		2 拍 1 類	usŋ	牛			
		2 拍 1 類	zzu	魚			
		2 拍 1 類	fu̥tsŋ	口			
		2 拍 1 類	ku̥sŋ	腰			
		2 拍 1 類	juda	枝			
		2 拍 1 類	musŋ	虫			
		2 拍 2 類	kabŋ	紙			
		2 拍 2 類	pi̥tu	人			
		2 拍 2 類	isŋ	石			
		2 拍 2 類	kaa	井戸			
		2 拍 x 類	kami	亀			
		2 拍 x 類	tuŋ	鳥			
		3 拍 1 類	butu	夫			
		3 拍 1 類	kḁtaa	形			
		3 拍 1 類	buduŋ	踊り			
		3 拍 1 類	judaŋ	涎			
		3 拍 1 類	panatsŋŋ	鼻血			
		3 拍 4 類	kagam	鏡			
		3 拍 4 類	fu̥kuɾu	袋			
		3 拍 4 類	kujum	暦			
		-	ffa	子供			
		-	tuzŋ	妻			
		-	bikidumu	男/夫			

表４　与那覇方言のアクセント型と多良間方言のアクセント型の対応（後半）.

		与那覇方言におけるアクセント型					
		AB 型			C 型		
多良間方言におけるアクセント型	B 型	1 拍 3 類	tii	手	2 拍 1 類	pu̥sɿ	星
		2 拍 3 類	mm	芋			
		2 拍 3 類	pana	花			
		2 拍 4 類	jadu	戸			
		2 拍 4 類	dʑiŋ	お金			
		2 拍 5 類	ami	雨			
		3 拍 1 類	kuɾuma	車			
		3 拍 4 類	uza	鶉			
		3 拍 5 類	maffa	枕			
		3 拍 5 類	avva	油			
		-	ŋki	鱗			
		-	kaina	腕			
		-	kamatsɿ	頬			
		-	midumu	女			
		-	sajafu	大工			
	C 型				2 拍 3 類	puni	骨
					2 拍 3 類	uja	祖父
					2 拍 3 類	maaɿ	鞠
					2 拍 4 類	usɿ	臼
					2 拍 4 類	im	海
					2 拍 4 類	funi	舟
					2 拍 5 類	madu	暇
					2 拍 5 類	nabi	鍋
					3 拍 4 類	oogɿ	扇
					3 拍 4 類	pḁsam	鋏
					3 拍 5 類	pookɿ	箒
					3 拍 6 類	ssam	虱
					3 拍 7 類	fu̥suɿ	薬
					-	sḁta	砂糖
					-	tida	太陽
					-	waa	豚
					-	aagu	歌
					-	gazam	蚊
					-	mmaga	孫
					-	jaɾabi	子
					-	miipana	顔
	-				-	nuʑʑuu	糸
					-	çiibuni	背骨

以下、系列別語彙あるいは類別語彙との対応が不規則である語について簡潔に述べる。その際多良間方言との対応だけでなく、奄美語沖永良部方言（松森 2000b）、沖縄語金武方言（松森 2008）との対応も検討する。これらの方言は多良間方言と同様に三型アクセント体系を有する。

pu̥sɿ「星」は類別語彙の 2 拍 1 類であるため、類別語彙と琉球諸語のアクセント型の対応に関するこれまでの研究の知見（服部 1958, 1979; 松森 1998 et seq.）に基づけば A 系列であることが期待されるが、宮古語多良間方言では B 型、与那覇方言では C 型であり、対応が不規則である。一方、沖縄語金武方言（松森 2008）では A 型であり、規則的な対応がある。

fu̥kuɾu「袋」は類別語彙の 3 拍 4 類であるため、B 系列あるいは C 系列であることが期待されるが、宮古語多良間方言では A 型であり、対応が不規則である。一方、与那覇方言では B 型であるため、規則的な対応があるように思われる。ただしこの語は沖縄語金武方言では C 型であり、いずれにせよ方言間の対応は不規則である。

同様に、pasam「鋏」は類別語彙の 3 拍 4 類であるため、B 系列あるいは C 系列であることが期待される。この語は宮古語多良間方言でも与那覇方言でも C 型であるが、沖縄語金武方言では B 型であり、方言間の対応が不規則である。

また、kaɡam「鏡」と kujum「暦」も 3 拍 4 類であるため、B 系列あるいは C 系列であることが期待される。これらの語は沖縄語金武方言では B 型であり、規則的な対応があるように思われるが、宮古語多良間方言では A 型であり対応が不規則である。一方、与那覇方言では AB 型であるため、対応が規則的であるかどうか判断できない。

最後に munuɳ「言葉」であるが、この語は類別語彙に同源語が存在しないが、宮古語多良間方言で B 型、奄美語沖永良部方言で B 型である。しかし与那覇方言では C 型であり対応が不規則である。

３．２．３　「名詞＋nudu＋述語」における実現形

まず、名詞に助詞 nudu が後続し、さらに述語が後続する場合の実現形を検討しよう。2 モーラ名詞の実現形の一例を図 1 に示す。図の上段は音声波形であり、中段は F0 曲線、下段はモーラと語の転記である。音声波形と F0 曲線上の縦線はモーラ境界を表す。

AB 型では、助詞 nudu の第 2 モーラで F0 が高くなり、それ以前は低い F0 が続く。一方 C 型では、名詞の第 2 モーラから F0 が高くなり、その高さは助詞 nudu の終端まで継続する。C 型名詞の第 1 モーラの高さは安定しないようである。このモーラの高さは、第 2 モーラと同水準の（すなわち高い）ように知覚されることもある一方で、第 2 モーラより低く知覚されることもある。後述の「語頭の急下降」と関係しているのかもしれない。

平山他（1967）には 2 モーラ名詞に助詞 nudu が後続した場合の実現形に関する記述（表 1）がある。本分析結果と比較してみよう。平山輝男らの記述は、AB 型では助詞 nudu も含めすべてのモーラが低く実現されるとしている点で、本分析結果と異なる。この差が世代差や個人差に起因するものか、あるいはその他の要因によるものかは不明である。一方、C 型については、平山輝男らは助詞 nudu も含めすべてのモーラが高く実現されると記述しており、本分析結果

とほぼ一致する（ただし、第 1 モーラが第 2 モーラとほぼ同水準の F0 を有する場合の実現形に限られる）。

図 1（左）から明らかなように、2 モーラ AB 型には、語頭に短時間で急激に下降する F0 が観察される。(2 モーラ C 型にも観察されるかは不明である)。当該の下降が語頭（韻律的な語の冒頭）に生じる特徴なのか、それとも階層的により上位の韻律的単位の冒頭に生じる特徴なのかは現時点では不明である。以後、この下降を「語頭急下降」と呼ぶ。

この語頭急下降は知覚可能であるが、少なくとも 2 モーラ・3 モーラ名詞においては、例えば東京方言における頭高型の名詞が与えるような聴覚印象を与えることはない。この語頭急下降は、語中で声の高さが凹曲線（concave curve）を描くような聴覚印象を与える。また、この語頭急下降は、少なくとも 2 モーラ・3 モーラ名詞に関する限り、あるトークンでは顕著に知覚されるが、別のトークンではほとんど知覚されない。語頭の急下降が言語学的に重要な特徴であるかどうかは現時点では不明である。この問題は 4 モーラ名詞を検討する際に再び論じることとする。

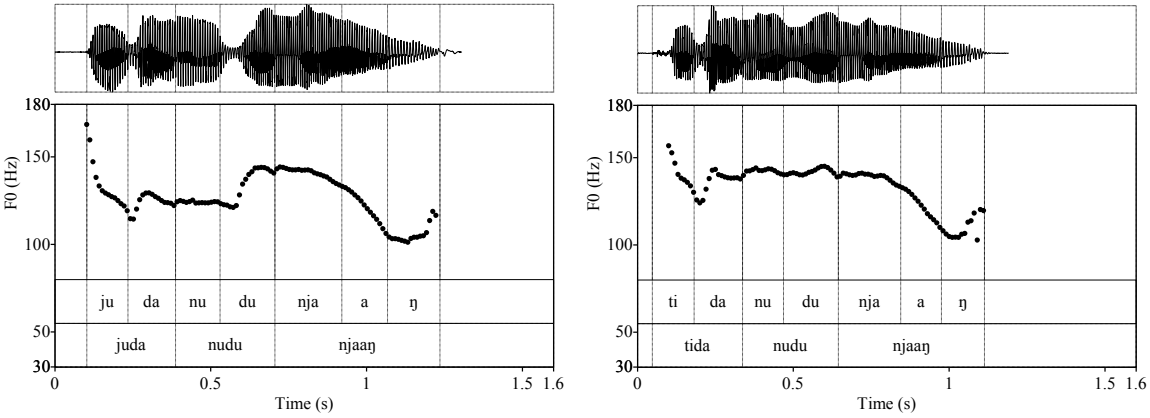


図 1　2 モーラ名詞+nudu+述語．AB 型 juda「枝」(左)、C 型 tida「太陽」(右).

3 モーラ名詞の実現形の一例を図 2 に示す。AB 型では、助詞 nudu の第 2 モーラで F0 が高くなる。これは 2 モーラ AB 型と同様である。また語頭急下降が観察される点も 2 モーラ AB 型の場合と同様である。

C 型では、名詞の第 3 モーラから F0 が高くなり、その高さは助詞 nudu の終端まで継続する。名詞の第 3 モーラ以前は低い F0 が続く。語頭には語頭急下降が観察される。

なお図 1 とは異なり図 2 では、助詞 nudu から述語にかけて F0 下降が観察されるが、これは名詞のアクセント型によるものではなく、述語（nʲaaŋ vs. uraŋ）のアクセント型によるものである。

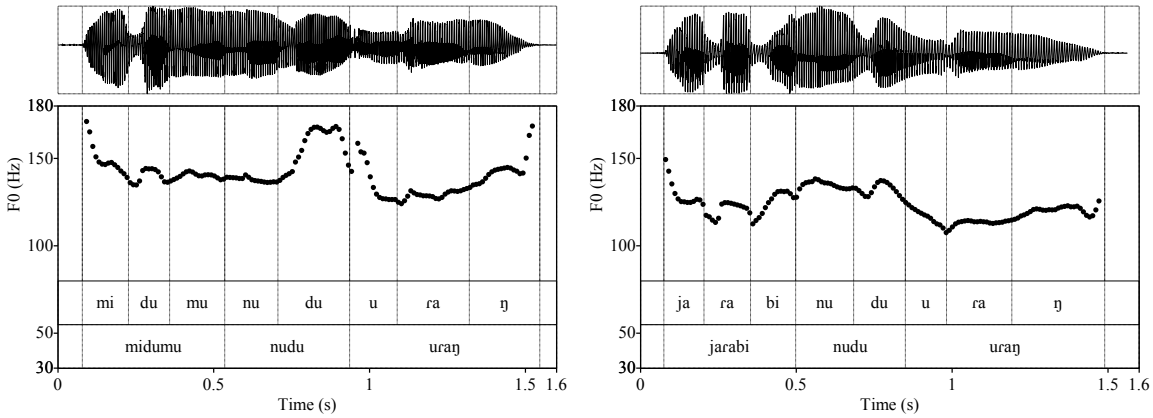


図２　3 モーラ名詞＋nudu+述語．AB 型 midumu「女」(左)、C 型 jaɾabi「子供」(右).

図 3 は 4 モーラ名詞の実現形の一例である。AB 型では、2 モーラ・3 モーラ AB 型の場合と同様に、助詞 nudu の最終モーラで F0 が高くなる。一方 C 型では、3 モーラ C 型の場合と同様に、名詞の第 3 モーラから F0 が高くなり、その高さは助詞 nudu の終端まで継続する。

AB 型と C 型の双方において､名詞の第 1 モーラから第 2 モーラにかけての F0 下降が観察される。この下降は、2 モーラ名詞および 3 モーラ名詞に観察された語頭急下降とは、音響的にも聴覚印象の上でも異なる。2 モーラ・3 モーラ名詞では、F0 下降は極めて短時間で終了するため、第 1 モーラの大半は低い F0 値を持つ。それに対して 4 モーラ名詞では、高い F0 値が第 1 モーラの大半を占め、F0 下降は第 1 モーラ終端付近から第 2 モーラにかけて生じる。その結果、4 モーラ名詞の語頭は東京方言の頭高型に似た聴覚印象を与える。すなわち第 1 モーラが高く、第 2 モーラが低いという印象である。4 モーラ名詞に観察されるこの現象を「語頭卓立」と呼ぶことにする。これが語頭の特徴か階層的に上位の韻律単位の特徴かは不明である。

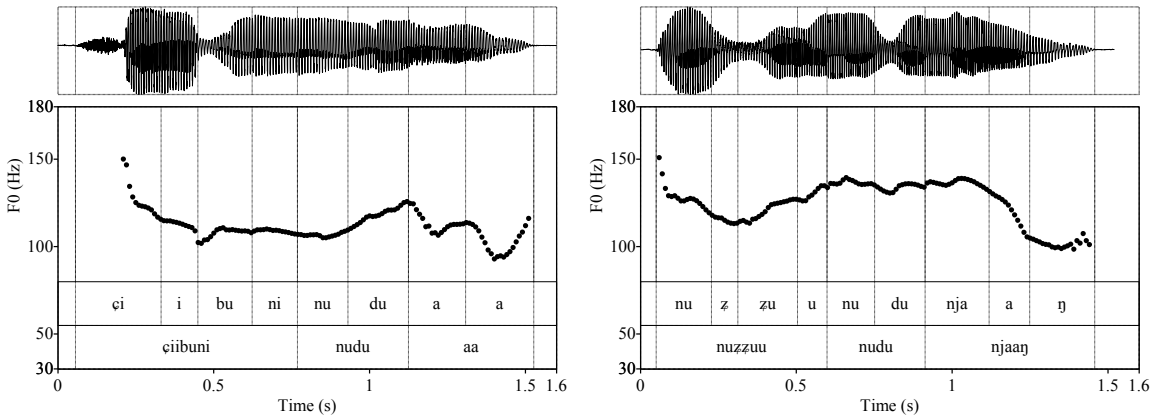


図３　4 モーラ名詞+nudu+述語．AB 型ɕiibuni「背骨」(左)、C 型 nuʑʑuu「糸」(右).

この語頭卓立に加えて、AB 型では助詞 nudu の第 2 モーラに、C 型では名詞の第 3 モーラに F0 の高まりが生じることで、「4 モーラ名詞＋助詞 nudu＋述語」という環境には、高く知覚さ

れるモーラが、低く知覚されるモーラを挟んで、2 か所存在することになる。すなわち伝統的に「重起伏調」と呼ばれてきた実現形が観察されこととなる[2]。

この 4 モーラ語の語頭卓立と、2 モーラ名詞・3 モーラ名詞の語頭急下降とが関連する現象であるのかあるいは独立した現象であるのかは、将来検討すべき課題である[3]。

３．２．４　「名詞＋mee＋述語」における実現形

次に、名詞に助詞 mee が後続し、さらに述語が後続する場合の実現形を検討しよう。後に明らかになるように、この条件における実現形は、助詞 nudu が後続する条件における実現形とは異なっている。2 条件の間に著しい差異が観察されることがあるため、この方言には隣接する要素にしたがってアクセント型が交替する現象が存在するとみなすこともできそうである[4]。

図 4 は 2 モーラ名詞の実現形の一例である。この条件下では AB 型と C 型の違いが中和するようである。双方のアクセント型において、第 1 モーラの F0 は低く、第 2 モーラで F0 が高くなり、高い F0 が助詞の終端まで継続する。また、語頭には語頭急下降が観察される。

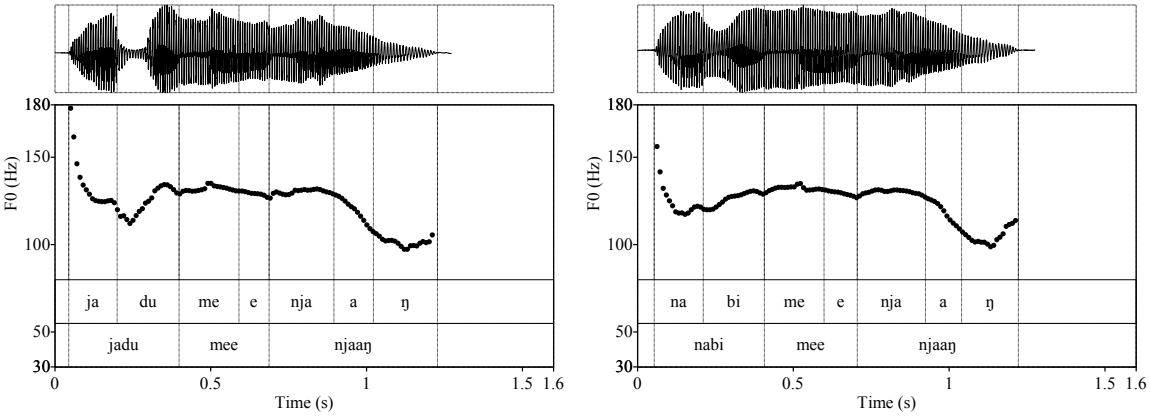


図４　2 モーラ名詞+mee+述語．AB 型 jadu「戸」(左)、C 型 nabi「鍋」(右).

図 5 は 3 モーラ名詞の実現形の一例である。AB 型では、名詞の第 3 モーラで F0 が高くなり、高い F0 は助詞の終端まで継続する。語頭には語頭急下降が観察される。一方 C 型では、名詞全体が高い F0 を伴って実現される。その後、名詞の終端から助詞の始端にかけて F0 は下降し、助詞の第 2 モーラで高くなる。この条件でも語頭急下降が観察される。

---

[2] モーラ数の多い名詞に重起伏調が観察されることは、調査前に松森晶子氏から教示を受けていた。
[3] 筆者の主観的な観察では、与那覇方言と同様に、語頭が低く始まり、語中に上昇を伴うアクセント型を有する日本語方言の一部、例えば鹿児島方言や青森県五所川原方言にも、語頭急下降が生じることがある。これらの方言が話されている地域の近隣に、いわゆる重起伏調を有する方言が見つかることは興味深い（例えば岩手県山田町方言（大西 1989）や鹿児島県甑島方言（上村 1941））。
[4] このようなアクセント型の交替が観察されることは、調査前に松森晶子氏から教示を受けていた。

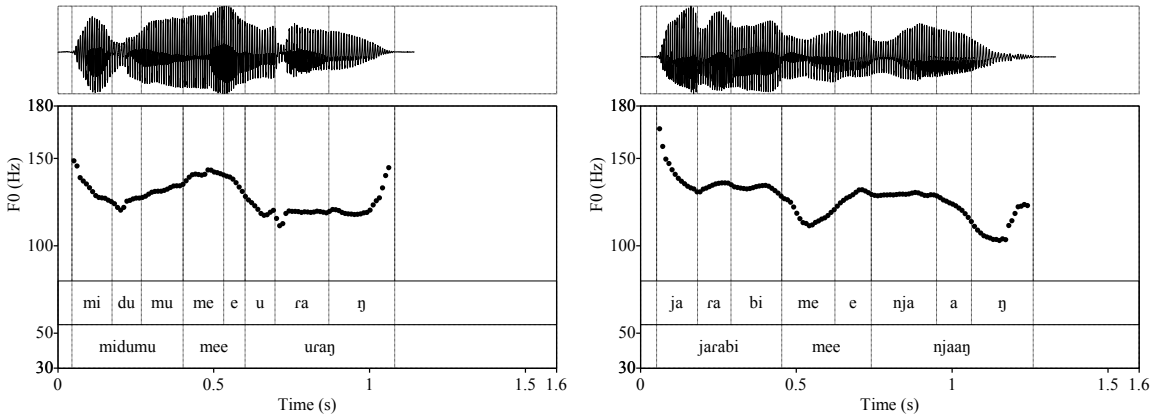


図５　3 モーラ名詞+mee+述語．AB 型 midumu「女」(左)、C 型 jaɾabi「子供」(右).

図 6 は 4 モーラ名詞の実現形の一例である。AB 型では語頭卓立が観察される。すなわち第 1 モーラが高く、第 2 モーラが低い。その後第 3 モーラで F0 が高くなり、高い F0 は助詞の終端まで継続する。一方 C 型では、およそ名詞全体が高い F0 を伴って実現される。その後、名詞終端から助詞始端にかけての F0 下降が観察され、助詞の第 2 モーラで F0 が高くなる。

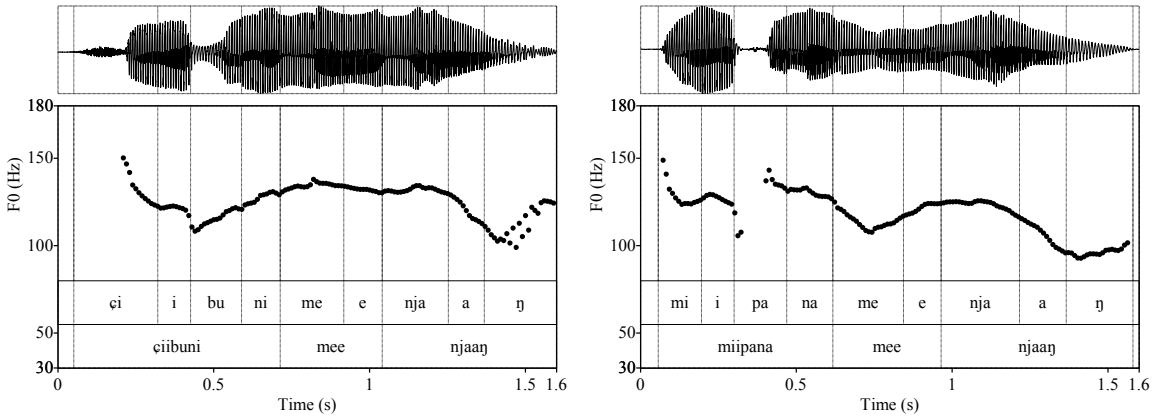


図６　4 モーラ名詞+mee+述語．AB 型ɕiibuni「背骨」(左)、C 型 miipana「顔」(右).

３．２．５　単独発話における実現形

最後に、名詞の単独発話における実現形を検討しよう。2 モーラ名詞が単独で発話された場合の実現形は、AB 型も C 型も「下降パタン」と「上昇パタン」の間でゆれる。ここで下降パタンとは第 1 モーラが高く、第 2 モーラが低い実現形のことであり、上昇パタンとは第 1 モーラが低く、第 2 モーラが高い実現形のことである。したがってこの条件下では AB 型と C 型を常に区別することはできない。しかしながら以下に述べるとおり、2 種類のパタンの生起確率には偏りが観察される。

C 型の語は上昇パタンで実現されることが多い。C 型の 2 モーラ名詞は 11 語であったが、このうち少なくとも一回下降パタンで発音された語は uja「親」、waa「豚」、pusɿ「星」の 3

語のみであった。単独発話において、ある語が下降パタンで実現されたトークン数をその語の全トークン数で割った値に 100 を掛けた値を「下降パタン率」（%）と呼ぶとすると、C 型の語の平均下降パタン率は 21.2%（N = 11, SD = 40.2）であった。したがって C 型の単独発話の典型的な実現形は上昇パタンであるとみなしてよいであろう。

一方 AB 型の語は、下降パタンでの実現回数と上昇パタンでの実現回数の間に顕著な差は認められない。AB 型の 2 モーラ名詞は 25 語であったが、このうち 16 語が少なくとも 1 回下降パタンで実現された。平均下降パタン率は 50.3%（N = 25, SD = 44.9）であった。したがって AB 型の典型的な実現形が下降パタンなのか上昇パタンなのかを判断することは難しい。

図 7 はアクセント型で対立するミニマルペア（AB 型 usɭ「牛」、C 型 usɭ「臼」）の単独発話の一例である。少なくとも今回のデータでは、AB 型 usɭ「牛」は必ず下降パタンで、C 型 usɭ「臼」は必ず上昇パタンで実現された。AB 型の同じ語が下降パタンでも上昇パタンでも実現される事実は図 8 に示されている。ここでは、AB 型 ika「イカ」が双方のパタンで実現されている。

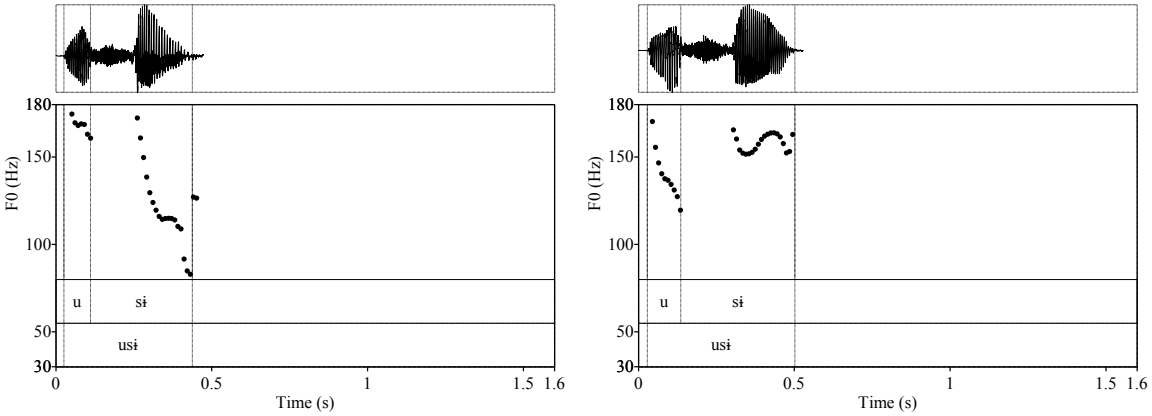


図 7　2 モーラ名詞単独発話の一例．AB 型 usɭ「牛」(左)、C 型 usɭ「臼」(右).

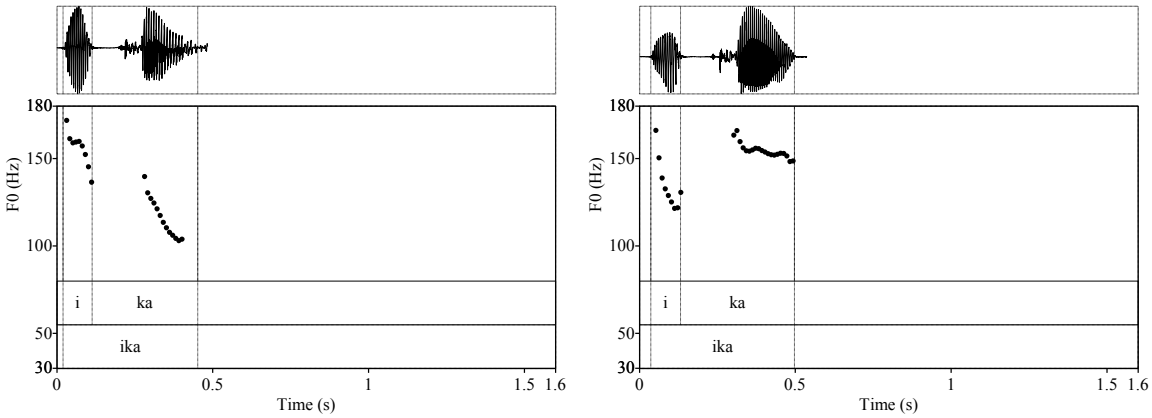


図 8　2 モーラ名詞 AB 型の単独発話におけるゆれ．AB 型 ika「イカ」が下降パタンで実現された場合(左)と上昇パタンで実現された場合(右).

平山他（1967）には 2 モーラ名詞の単独発話における実現形に関する記述（表 1）があるので、本分析結果と比較してみよう。平山輝男らの記述は、AB 型ではすべてのモーラが低く実現されるとしており、本分析結果とは一致しない。C 型ではすべてのモーラが高く実現されるとしているが、これも本分析結果とは一致しない。この差が世代差や個人差に起因するものか、あるいはその他の要因によるものかは不明である。

今回のデータは質・量ともに限定されているため、偶然の可能性が極めて高いことを十分に認識したうえで、2 モーラ名詞の単独発話における AB 型の実現形のゆれに認められた以下の興味深い傾向を指摘しよう。

上昇パタンで実現された 2 モーラ AB 型の名詞に、系列の偏りが認められた。2 モーラ AB 型の名詞のうち B 系列と思われる 7 語が、1 語を除いて必ず上昇パタンで実現された（ami「雨」、mm「芋」、pana「花」、tii「手」、jadu「戸」dʑiŋ「お金」、uza「鶉」のうち、最後の 1 語を除いたすべての語）。B 系列の語の平均下降パタン率は 14.2%（N = 7, SD = 37.8）であった。B 系列の語の典型的な実現形が上昇パタンであることを示唆する結果である。一方、A 系列と思われる 18 語のうち必ず上昇パタンで実現された語は 3 語にすぎなかった（butu「夫」、ffa「子供」、fu̥cɿ「口」、ika「イカ」、isɿ「石」、kaa「川」、kami「亀」、musɿ「虫」、naa「名前」、pɿ̊tu「人」、puu「帆」、tuɿ「鳥」、tuzɿ「妻」、usɿ「牛」、zzu「魚」、kabɿ「紙」、ku̥sɿ「腰」、juda「枝」のうち最後の 3 語のみ）。A 系列の語の平均下降パタン率は 64.4%（N = 18, SD = 40.0）であった。A 系列の語の典型的な実現形が下降パタンであることを示唆する結果である。

もしこの結果が偶然でないのであれば、与那覇方言の 2 モーラ名詞は、単独発話において A 系列と B·C 系列がアクセント型によって区別されていることになる(A/B·C）。3.2.2 から 3.2.4 で示したとおり、その他の環境において 2 モーラ名詞は、A·B 系列と C 系列がアクセント型によって区別されている（A·B/C）。このことはすなわち（今回の結果が偶然でないのであれば）与那覇方言のアクセント体系は二型ではなく三型であることを意味する。今後のさらなる調査が必要である。

次に、3 モーラ名詞の単独発話を検討しよう。図 9 は 3 モーラ名詞の単独発話の実現形の一例である。AB 型では、第 1・第 2 モーラの F0 が低く、第 3 モーラで F0 が高くなる。語頭には語頭急下降が観察される。一方 C 型では第 1・第 2 モーラの F0 が高く、第 3 モーラで F0 が低くなる。語頭には語頭急下降が観察される。

3 モーラ名詞の単独発話の実現形に関する記述を平山他（1967）に見つけることができるので（表 1）、本分析結果と比較してみよう。平山輝男らの記述は、AB 型ではすべてのモーラが低く実現されるとしており、本分析結果とは一致しない。一方、C 型ではすべてのモーラが高く実現されるとしているが、これも本分析結果とは一致しない。この差が世代差や個人差に起因するものか、あるいはその他の要因によるものかは不明である。

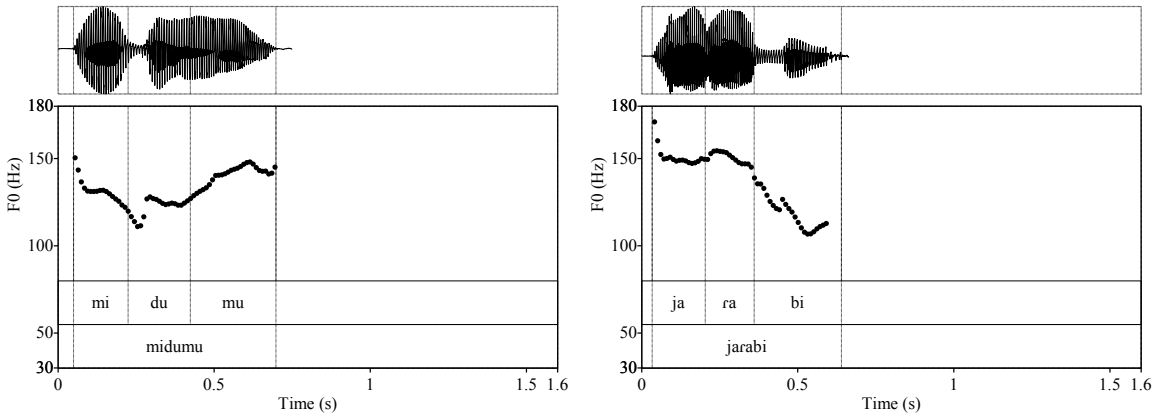


図９　3 モーラ名詞単独発話．AB 型 midumu「女」(左)、C 型 jarabi「子供」(右).

4 モーラ名詞の単独発話の検討に移ろう。図 10 は 4 モーラ名詞の単独発話の実現形の一例である。AB 型では、第 1～第 3 モーラの F0 が低く、第 4 モーラで F0 が高くなる。語頭卓立は観察されないようであるが、語頭急下降は観察される。一方 C 型では、第 1～第 3 モーラの F0 が高く、第 3 モーラで F0 が低くなる。

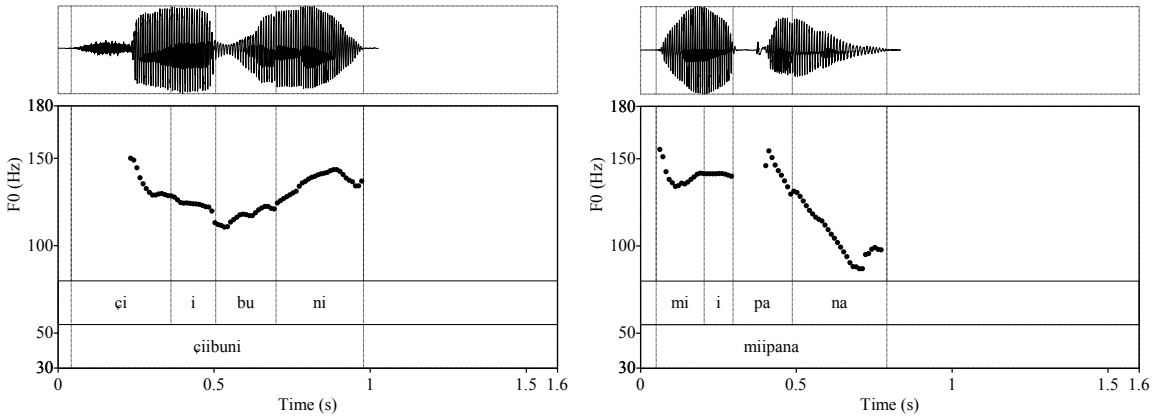


図１０　4 モーラ名詞単独発話．AB 型 midumu「女」(左)、C 型 jarabi「子供」(右).

３．２．６　アクセント型の実現形の要約

以上､3 種類の条件下におけるアクセント型の実現形を名詞のモーラ数ごとに検討してきた。これまでの議論から明らかなように、与那覇方言はアクセント型の実現について複雑な様相を呈する。特に興味深いことは、アクセント型の実現形が隣接する要素の有無、種類によって著しい変化をみせる事実である。3.2.4 でふれたように、この現象はアクセント型の交替とみなすことができるかもしれない。

与那覇方言におけるアクセント型の実現の様相は表 5 のように要約することができる。ここでは語頭卓立は表記しているが、語頭急下降の表記は省略している。

表５　与那覇方言のアクセント型の実現形．X は調査語、ピリオドはモーラ境界を表す．

モーラ数	X nudu		X mee		X （単独発話）	
2	AB 型	ju.da nu.[du「枝」	AB 型	ju.[da me.e 「枝」	AB 型	[i.]ka 「イカ」～ i.[ka
	C 型	ti.[da nu.du「太陽」～ [ti.da nu.du	C 型	na.[bi me.e 「鍋」	C 型	u.[ʂ「臼」
3	AB 型	mi.du.mu nu.[du「女」	AB 型	mi.du.[mu me.e「女」	AB 型	mu.du.[mu「女」
	C 型	ja.ɾa.[bi nu.du「子供」	C 型	[ja.ɾa.bi] me.[e「子供」	C 型	[ja.ɾa.]bi「子供」
4	AB 型	[ɕi].i.bu.ni nu.[du「背骨」	AB 型	[ɕi].i.[bu.ni me.e「背骨」	AB 型	ɕi.i.bu.[ni「背骨」
	C 型	nu.]ʑ.[ʑu.u nu.du「糸」	C 型	[mi.i.pa.na] me.[e「顔」	C 型	[mi.i.pa.]na「顔」

４　結語

宮古語与那覇方言の名詞アクセント体系を母語話者 1 名の発話に基づいて分析した。その結果、この方言は二型アクセント体系を持つとする平山他（1967）の記述の妥当性を確認した。また、アクセント型の所属語彙に関して、この方言は系列別語彙の A 系列と B 系列を合流させている（A·B/C）とする松森（2011）の記述の妥当性を確認した。一方、アクセント型の表層の実現形は平山他（1967）の記述とは必ずしも一致しないことを明らかにした。さらにこの方言には、隣接する要素の有無および種類によって、名詞のアクセント型の実現形が大きく変化するアクセント型交替とも言うべき現象が観察されることを明らかにした。この事実も先行研究には報告されていない（ただし注 4 参照）。

アクセント型の交替も含め、与那覇方言のアクセント型の実現規則を明らかにするためには、さらなる調査が必要である。今回の分析結果は、この方言のアクセント型の実現規則が複雑であることを示唆する。しかしながら今後の調査の結果によって、この方言のアクセント型の実現について単純な規則が提案できるようになる可能性もある。一方、与那覇方言と同じく宮古語の方言のひとつである池間方言のアクセント型の実現規則も極めて複雑であることが筆者らの最近の研究から示唆されている（五十嵐他 2012）。複雑な実現規則が宮古語のアクセント体系の特徴である可能性も今後探求する価値があるだろう。

本論文の分析結果は、母語話者 1 名を対象とした 1 時間の調査から得られた質・量ともに限定されたデータに基づいている。今度はより多くの母語話者の発話データに立脚して、より多様な文脈におけるアクセント型の実現を分析する必要がある。

参考文献

五十嵐陽介、田窪行則、林由華、ペラール・トマ、久保智之(2012)「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』（近日公刊）.

上野善道(1984) 「N 型アクセントの一般特性について」 『現代方言学の課題 第 2 巻 記述的研究篇』東京，明治書院：167-209.

上野善道(1985)「村上方言の名詞のアクセント資料－1～3 モーラ語」『東京大学言語学論集』: 25-60.

大西拓一郎(1989)「岩手県山田町方言のアクセント」『国語学研究』(29): 84-75.

上村孝二（1941)「甑島方言のアクセント」『音声学協会会報』65-66, 12-15.

金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的研究：原理と方法』塙書房.

服部四郎(1958)「奄美群島の諸方言について—沖縄、先島方言との比較」『人類科学』XI.

服部四郎(1979)「日本祖語について 21-22」『言語』8:11, 97-107; 8:12, 504-516.

平山輝男、大島一郎、中本正智（1967）『琉球先島方言の総合的研究』桜楓社.

松森晶子(1998)「琉球アクセントの歴史的形成過程—類別語彙 2 拍語の特異な合流の仕方を手がかりに—」『言語研究』114：85-114.

松森晶子(2000a)「琉球の多型アクセント体系についての一考察—琉球祖語における類別語彙 3 拍語の合流の仕方—」『国語学』51:1：93-108.

松森晶子(2000b)「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発—沖永良部島の調査から」『音声研究』4:1, 61-71.

松森晶子(2008)「沖縄本島金武方言の体言のアクセント型とその系列—「琉球調査用系列別語彙」の開発にむけて」『日本女子大学紀要・文学部』58：97-122.

松森晶子(2010)「多良間島の 3 型アクセントと「系列別語彙」」上野善道（監）『日本語研究の 12 章』東京，明治書院：490-503.

松森晶子(2011)「喜界島祖語における３型アクセント体系の所属語彙—赤連と小野津の比較から—」『日本女子大学紀要：文学部』60：87-106.

Boersma, P., Weenink, D. (2011) Praat: Doing phonetics by computer [Computer program]. Version 5.2.16, from http://www.praat.org/.

Pellard, Thomas (2009) Ōgami — Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū. PhD dissertation. École des hautes études en sciences sociales.

Pellard, Thomas (2011) "The historical position of the Ryukyuan Languages", ICHL20 Symposium Historical Linguistics in the Asia-Pacific Region and the Position of Japanese. (pp. 55-64). Osaka: National Museum of Ethnology.

Shimoji, Michinori (2010) "Ryukyuan languages: An introduction." In M. Shimoji and T. Pellard (eds.) An Introduction to Ryukyuan Languages. (pp. 1-13). Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

宮古語の動詞活用

－代表形、否定形、過去形、中止形－

かりまた　しげひさ

1　調査の概要

2011 年 9 月 4 日から 9 日までの 5 日間、国立国語研究所の合同調査で宮古島の 9 地点の文法調査を実施した。調査地点は保良、砂川、宮国、与那覇、来間、久貝、狩俣、池間、国仲である。調査項目は、沖縄言語研究センターが 1982 年に作成した『琉球列島の言語の研究　全集落調査票』（以下、「全集落」）に収録された 37 の動詞語彙である。そこに収録された動詞語彙目は、琉球諸語の下位方言の動詞の活用のタイプのおおよそを知ることができるよう選定されたもので、強変化動詞（以下、強変化）と弱変化動詞（以下、弱変化）の語幹末子音に*b、*m、*k、*g、*s、*t、*n、*r、*w 等をふくむ規則変化動詞と、「有る」「居る」「来る」「する」「ない」の不規則変化動詞がふくまれる。それぞれの動詞の活用のタイプを特定できるように代表形（スル）、否定形（シナイ）、過去形（シタ）、中止形（シテ）のよっつの文法的な形を下位項目としてあげている。

代表形は、当該方言の完成相の動詞を知るために設定された項目である。否定形は、基本語幹を確認するための項目である。基本語幹は、命令形や勧誘形からもえられるが、無意志動詞からは命令形をえられないので、否定形を選定している。過去形は、音便語幹を確認するためのものである。北琉球諸語のばあい、中止形でも過去形と同じく音便語幹を確認することができる。「全集落」に中止形が設定されたのは、南琉球諸語の音便現象の有無を確認するうえで、過去形のほかに音便語幹の有無を確認するための項目を追加したからである。

今回の宮古島合同調査では「全集落」を例文つきの調査票に改訂したものを使用した。改訂した調査票は、西岡敏（沖縄国際大学）を研究代表者とする「琉球宮古方言の言語地理学的研究」基盤研究（B）で「全集落」の動詞活用形の語形を得やすくするために、例文を付したものである。そこに示された例文を当該方言に翻訳してもらうという調査方法をとった。

なお、調査項目の量がすくなくないことと調査日数を考慮して、調査項目を三分割し、3 班で分担して調査する計画であった。話者の都合、調査員の人数の都合などで 3 班つくれず、全部の項目を調査できなかった地点がある。また、調査はできたが目的とする当該語形が得られていないばあいもあった。本報告では宮古島合同調査でえられた資料のほかに、かりまたが調査した島尻[1]（2011 年 12 月 10 日）、久貝[2]（2012 年 3 月 3 日）、狩俣[3]（2011 年 8 月 15 日、16 日）の資料も使用する。島尻の文法調査はまったく新たに追加されたものである。

---

[1] 話者は島尻生抜きの I.S 氏。男性。昭和 12 年 5 月 6 日生。
[2] 話者は久貝生抜きの Y.K 氏。男性。大正 15 年 12 月 23 日生。
[3] 話者は狩俣生抜きの N.Y 氏。女性。大正 15 年 12 月 15 日生。

本報告で検討する地点は 10 地点である。

日本語シテ中止形に対応する宮古語諸方言(以下宮古語)の中止形はふたつの形式がある。ひとつは、numi:（ノンデ)、kaki:（カイテ）のように基本語幹に語尾 i、i を後接させたものである。もうひとつは、numitti（ノンデ)、kakitti（カイテ）のように語尾に ti をふくむものである。改定調査票では前者を「アリ中止形」、後者を「シテ中止形」としているので、本報告ではアリ中止形、シテ中止形の名称を使用する。

アリ中止形は、ならべあわせ文やふたまた述語文の非終止の述語にあらわれ、つづいておこる二つの従属的な、あるいは、非従属的な動作をあらわす。シテ中止形は、並べあわせ文、ふたまた述語文の非終止の述語のあらわれ、非従属的な動作をあらわすことがおおい。アリ中止形は、あわせ述語の前要素にもなる。調査票作成にさいしては、ふたつの中止形が収集できるようにふたつずつ例文を作成している。

２　語幹と語尾

動詞の活用形は、その形つくりにおいて、語幹、語尾、助辞などの要素からなる[注4)]。語尾と助辞は、文法的な意味に応じて変化する部分で、のこりの変化しない部分が語幹である。北琉球諸語の動詞は、語幹は、基本語幹、音便語幹、連用語幹のみっつの語幹が存在する。基本語幹、音便語幹、連用語幹のみっつの語幹のうち、基本語幹と音便語幹とよばれるものは、日本語にもあるのだが、連用語幹は、北琉球諸語に特徴的にみられるものであろう。語幹と語尾の境界には kak-e:のように「-」を、語幹と助辞の境界には nudi=kara のように「=」を挿入する。

基本語幹	音便語幹	連用語幹
kak-aN（書かない） tur- aN（取らない） jum- aN（読まない）	katɕ-aN（書いた） tut-aN　（取った） jud-aN（読んだ）	katɕ-uN（書く） tu-iN　　（取る） jun-uN　（読む）

表 1　沖縄島那覇市首里方言

基本語幹	音便語幹	連用語幹
hak'-aN（書かない） tur- aN（取らない） jum- aN（読まない）	hattʒ-aN（書いた） tutt-aN　（取った） jud-aN（読んだ）	hatʒ-uN（書く） tu-N　　（取る） jum-iN　（読む）

表 2　今帰仁村謝名方言

表 3 にみるように、あるいは本永守靖 1977 などがのべるように、宮古語の動詞の語幹には現代日本語（以下、日本語）の音便語幹、北琉球諸語の連用語幹などを設定する必要はなく、

4 語幹、語尾の定義は、鈴木重幸（1972）にしたがう。

基本語幹だけをみとめればよい[5]。音便語幹を設定しなくてもいいことは宮古語の動詞活用のおおきな特徴である。宮古語の動詞には基本語幹の語幹末子音をかさねる変種をもつものがある。今回の調査項目の kav（被る）、niv（眠る）、az（言う）が変種をもつ。代表形は kav、niv、az のように子音語幹でおわり、語尾をもたないが、命令形、勧誘形、否定形は kavv-i（被れ）、kavv-a（被ろう）、kavv-an（被らない）、nivv-i（眠れ）、nivv-a（眠ろう）、nivv-an（眠らない）、azz-i（言え）、azz-a（言おう）、azz-an（言わない）のように語幹末子音がかさなってあらわれる。v:（売る）も代表形は長子音単独で語尾をもたないが、命令形、勧誘形、否定形は vv-i（売れ）、vv-a（売ろう）、vv-an（売らない）のように短い子音をかさねた子音だけの語幹をもつ。これらとはことなる語幹の変種をもつタイプもあるが、それらにふくめ宮古諸語の活用形と活用のタイプの全体については稿をあらためて述べたい。

基本語幹		
kak-an（書かない）	kak-ɿtaɿ（書いた）	kak-ɿ（書く）
jum-an（読まない）	jum-taɿ（読んだ）	jum　（読む）
tur-an（取らない）	tu-ɿtaɿ（取った）	tu-ɿ　（取る）
kavv-an（被らない	kav-taz（被った）	kav　（被る）

表 3　平良下里方言

強変化としては「飛ぶ、遊ぶ、漕ぐ、行く、落とす、出す、持つ、切る、縛る、掘る、降る、被る、閉じる、寝る、買う、売る、飲む、食べる、酔う、洗う、言う」があがっている。弱変化としては「捨てる、降りる、落ちる、呉れる、貰う、起きる、着る、坐る、見る、蹴る」があがっている。不規則変化としては「来る、する、有る、居る、死ぬ、無い」があがっている。

「ない」は日本語では形容詞に分類されるが、琉球諸語では不規則変化として分類される。宮古語の形容詞が ku 連用形にものの存在をあらわす動詞 az がくみあわさって文法化した活用形をもったり、語幹をかさねる重複型の語形をもったりするのに対して、宮古語の「ない」はそのような活用形をもたないことから動詞に分類される。もちろん、動詞に分類されるとはいっても、アスペクト、ヴォイスなどの形態論的なカテゴリーをもたず、命令形、勧誘形などのムード形式をもたないなど、形容詞とおなじ文法的な特徴をもっている。

「縛る」に対応して「括(くび)る」のあらわれるのが期待され、「寝る」には「眠る」、「食べる」には「食らう」、「閉じる」には「くる」、「貰う」には「得る」、「坐る」には「坐(ゐ)る」、「居る」には「居(ゑ)る」のあらわれることが期待されている。

日本語の弱変化のうち、語幹が 1 音節で語幹末が母音 i になる mi-ru（見る）、ki-ru（着る）、ni-ru（煮る）などの動詞は、古代中央日本語（以下、古代語）でも弱変化だが、語幹

5 基本語幹、音便語幹、連用語幹のみっつの語幹の変種の名称は、上村幸雄（1963）「首里方言の文法」（『沖縄語辞典』）による。なお、上村（1963）は上記みっつの語幹のほかに「融合語幹」「短縮形語幹」も設定している。

が 2 音節で語幹末が母音 i、あるいは e になるタイプの動詞（“上二段”“下二段”とよばれる）は、否定形 oki-zu（起きない）や命令形 oki-jo（起きろ）などの弱変化型の活用形と、代表形 ok-u（起きる）、連体形非過去形 ok-uru（起きる）などの強変化型の活用形とが並存している。このタイプの動詞は、強変化と弱変化の混合変化活用動詞（以下、混合変化）とよぶことができる。日本語強変化の「死ぬ」は、古代語では sin-azu（死なず）、sin-itari（死にたり）のような強変化型の語幹と語尾をもつ活用形と sin-uru（死ぬ・第二終止形）と sin-ure（死ぬ・第三終止形）のような混合変化と同じ語幹と語尾をもつ活用形[6]とが混在した混合変化の変種とみることができる。

			否定形	命令形	過去形	非過去	連体
現代日本語	強変化	行く	ik-anai	ik-e	iQ-ta	ik-u	ik-u
		死ぬ	ɕin-anai	ɕin-e	ɕiN-da	ɕin-u	ɕin-u
	弱変化	起きる	oki-nai	oki-ro	oki-ta	ok-iru	ok-iru
		見る	mi-nai	mi-ro	mi-ta	mi-ru	mi-ru
古代日本語	強変化	書く	ik-adzu	ik-e	ik-itari	ik-u	ik-u
	混合 a	死ぬ	ɕin-adzu	ɕin-e	ɕini-tari	ɕin-u	ɕin-uru
	混合 b	起きる	oki-dzu	oki-jo	oki-tari	ok-u	ok-uru
	弱変化	見る	mi-dzu	mi-jo	mi-tari	mi-ru	mi-ru

表 4　日本語の動詞活用タイプ

島尻方言、狩俣方言、久貝方言では古代語の弱変化の否定形だけでなく、古代語の混合変化の否定形も、語幹末が母音 i になる基本語幹に否定語尾-n を後接させる。すなわち、古代語混合変化が弱変化化している。島尻方言、狩俣方言は「死ぬ」も弱変化化しているが、久貝方言では強変化化している。

1）kiːju　juɾugaɕɕaːmai　nːtaː　utiɴ.（木を揺らしても実は落ちない。）狩俣
2）bajaː　umanna　uɾiɲ.（私はここでは降りない。）久貝

いっぽう、保良方言、宮国方言、来間方言などでは、古代語の弱変化、混合変化に対応する動詞の代表形や命令形は、語幹末が母音 i、あるいは iːでおわる基本語幹に語尾 ru を後接させる弱変化型の活用形だが、否定形は、語幹末が子音で語尾が母音-u、-uːではじまる強変化型の活用形である。これらの方言では、弱変化が混合変化化している。

6 第二終止形は、強調文の述語になる活用形で焦点化助詞「ぞ」「なん」「や」「か」と呼応し、連体形とホモニムである。第三終止形も強調文の述語になる活用形で「こそ」と呼応し、条件形とホモニムである。

3) vvaɡa tuzzuba smaɾi fiːɾu.（おまえが鶏を縛ってくれ。）保良
4) utut̪ʰa sudaŋkaija kaːssuba fuːŋ.（弟は兄には菓子はくれない。）保良
5) kunu fsuzza azumakaɾʲa numi miːɾu.（この薬は甘いから飲んでみろ。）保良
6) ujaː jaːkjuːjubaː mjuːŋ.（いつも私は弟に菓子をくれる。）保良

7) ɡumiu umaŋkai sïtiɾu.（ゴミをそこに捨てろ。）宮国
8) mmaː fzːfznu kïnnumai sïtuŋ.（祖母は古い着物も捨てない。）宮国
9) unu maːzzu kumaŋkai kiɾi fiːɾu.（その毬をここに蹴ってくれ。）宮国
10) ot̪ʰut̪oo aʥaŋ koosuba ɸuːŋ.（弟は兄に菓子をくれない。）宮国

11) vvaŋa tuzzubaː smaɾi/sɹmaɾi fiːɾo.（おまえが鶏を縛ってくれ。）来間
12) utut̪oa azanna/suzanna koːsubaː fuːŋ.（弟は兄には菓子を呉れない。）来間

古代語の混合変化に対応する動詞が混合変化であらわれる宮古語下位方言がある。なお、同じ混合変化とはいっても、後述するように古代語混合変化は、終止形非過去と連体形非過去に強変化型の活用形があらわれるが、宮古語混合変化は、否定形と勧誘形に強変化型の活用形があらわれる。否定形の語尾に uŋ、uːŋ を有する動詞は混合変化で、iŋ、iːŋ を有する動詞が弱変化で、aŋ、aːŋ を有する動詞は強変化である。

			否定形	命令形	過去形	非過去	連体形
保良方言	強変化	書く	ik-aŋ	ik-i	ik-staː	ik-s	ik-s
		死ぬ	sn-aŋ	sn-i	sn-ta	sn	sn
	混合	起きる	uk-uŋ	uki-ɾu	uki-taː	uki	uki-z
		見る	mj-uːŋ	miː-ɾu	miː-taː	miː	miː-z
島尻方言	強変化	書く	ik-aŋ	ik-i	ik-staz	ik-s	ik-s
	弱変化	死ぬ	sni-ŋ	sni-ɾu	sn-ta	sni-z	sni-z
		起きる	uki-ŋ	uki-ɾu	uki-taz	uki-z	uki-z
		見る	miː-ŋ	miː-ɾu	miː-taz	miː-z	miː-z

表 5　保良方言、島尻方言の動詞活用タイプ

本報告では、古代語、ときには現代日本語と対比させながら宮古語の活用形、および活用のタイプをみる。

3　否定形

宮古語の動詞は、否定形をみることで当該の動詞が強変化であるか弱変化であるか混合変化であるかをみわけることができる。

否定形の語末には、an、in、un があらわれる。否定形の語末の n を dʑaːn、dʲaːn にとりかえた形式もあらわれる。語末に an、in、un をもつ形式は、さまざまなあらわれ方をし、多義的であるのに。-adʑaːn、i-dʑaːn 、-udʑaːn をもつ形式は、話し手の意志や判断をあらわす。-adʑaːn、i-dʑaːn 、-udʑaːn も基本語幹からつくられる形式なので、本報告では-an とともに提示する。

13) ujaː tɕiŋkzɡa bazkaiba imkaija ikaʑaŋ.
（父は天気が悪いから、海へは行かない。）宮国

14) ameno tʰo̥kʲaːnna pukaŋkai nimottʦɯ idasaɖaːŋ.
（雨のときには外には荷物を出さない。）宮国

15) kaɾʲaː unaɡa duːnu waːjubaː vvaN/vvadjaːN.（彼は自分の豚は売らない。）与那覇

an は、古代語の強変化に対応する動詞にあらわれる。語幹末が子音の基本語幹に後接する。in は、古代語の弱変化に対応する動詞にあらわれる。他の活用形とならべると、否定形は、uki-n のように分析され、弱変化の母音語幹に語尾 n が後接しているとみることのできる。un は、混合変化に対応する動詞にあらわれる。命令形が母音語幹に語尾 ru を後接させる形式であり、否定形は、強変化型の子音語幹に語尾-un の後接した uk-un と分析できる。活用形全体をみると、否定形の語尾に-un のあらわれる動詞は混合変化である。

参考として調査でえられた命令形もあげる。強変化型の命令形は、子音でおわる基本語幹に語尾 i を後接させ、弱変化型の命令形は、母音 i、あるいは iːでおわる基本語幹に語尾 ru を後接させている。

保良方言

古代語混合変化の否定形は、保良方言では語尾に-uŋ、-uːŋ をもつ混合変化型であらわれる。いっぽう、古代語弱変化の「蹴らない」「着ない」「坐ない」、混合変化「死なない」は強変化型であらわれ、古代語弱変化の「見ない」は混合変化型であらわれる。不規則変化の「する」は混合変化型の活用形で、「居ない」は強変化型の活用形であらわれる。

強変化／tubaŋ（飛ばない）、asɿpaŋ（遊ばない）、numaŋ（飲まない）、kugaŋ（漕がない）、ikaŋ（行かない）、utusaŋ（落とさない）、idasaŋ（出さない）、mutaŋ（持たない）、puraŋ（掘らない）、ffaŋ（降らない）、kssaŋ（切らない）、uraŋ（いない）、vvaŋ（売らない）、kavvaŋ（被らない）、nivvaŋ（眠らない）、azzaŋ（言わない）、kaːŋ（買わない）、faːŋ（食わない）、araːŋ（洗わない）、muraːŋ（貰わない）、bjaːŋ（酔わない）、／kiraŋ（蹴らない）、kssaŋ（着ない）、bzzaŋ（坐ない）、snaŋ（死なない）、

混合変化／uruŋ（降りない）、utuŋ（落ちない）、ukuŋ（起きない）、stuŋ（捨てない）、

fuːŋ（呉れない）、／mʲuːŋ（見ない）、juːŋ（得ない）、
不規則変化／kuːŋ̩（来ない）、suːŋ̩（しない）、uraŋ̩（いない）、njaːŋ（ない）、
命令形／piɾijo（行けよ）、kai（買え）、fai（食らえ）、jukui（休め）、nʲivvi（眠れ）、／miːɾu（見ろ）、fiːɾu（呉れろ）、ʑʑiɾu/iʑiɾu（入れろ）、／kuː（来い）、ʃiːru／aʃiru（しろ）、

砂川方言

古代語混合変化は、砂川方言では ukiŋ（起きない）だけが弱変化型であらわれる以外、語尾に-uŋ をもつ混合変化型の語形がみられる。古代語弱変化の「見ない」は弱変化型の miːŋ であるが、それ以外の古代語弱変化に対応する語形がえあられていないので、砂川方言の詳細は不明である。

強変化／tubaŋ（飛ばない）、asɿpaŋ（遊ばない）、numaŋ（飲まない）、kugaŋ（漕がない）、ffaŋ（降らない）、utusaŋ（落とさない）、idasaŋ（出さない）、puraŋ（掘らない）、ʋʋaŋ（売らない）、kɿsaŋ（切らない）、kaːŋ（買わない）、faːŋ（食わない）、araːŋ（洗わない）、muraːŋ（貰わない）、bjoːŋ（酔わない）
混合変化／urudʲaŋ（降りない）、utuŋ（落ちない）、stuŋ（捨てない）、ffudʑaŋ（呉れない）
弱変化／ukiŋ（起きない）、／miːŋ（見ない）、
不規則変化／kuːŋ̩（来ない）、
命令形／iki joː（行けよ）、piɾi（行け）、kai（買え）、fai（喰らえ）jukui（休め）、nivvi （眠れ）、／miːɾu（見ろ）、kḁkiɾu（かけろ）、ffiɾu/fiːɾu（呉れろ）、iʑiɾujoː / iʥiɾujoː（入れろよ）、／kuː（来い）、

宮国方言

古代語混合変化は、宮国方言では ukiŋ（起きない）だけが弱変化型であらわれる以外、語尾に-uŋ をもつ混合変化型の語形がみられる。「蹴らない」は強変化型の kiraŋ である。古代語弱変化に対応する語形がえられていないので、来間方言の詳細は不明である。

強変化／asɿpaŋ（遊ばない）、nomaŋ（飲まない）、kugaŋ（漕がない）、ikaʑaŋ（行かない）、ffaŋ（降らない）、utusaŋ（落とさない）、idasadʑaːŋ（出さない）、motadʑaːŋ（持たない）、poraŋ（掘らない）、kɿsaŋ（切らない）、ᵘvaŋ（売らない）、ɸaːŋ（食わない）、kaːŋ（買わない）、bʲoːŋ（酔わない）、aɾaːŋ（洗わない）、moraːŋ（貰わない）、／kiraŋ（蹴らない）、
混合変化／uruʑaːŋ（降りない）、utuŋ（落ちない）、sutuŋ（捨てない）、fuʑʑaŋ（縛らない）、ɸuːŋ（呉れない）、ituŋ（出ない）

弱変化／ukiŋ（起きない）、
不規則変化／kuːŋ̩（来ない）、
命令形／pʰiɾi（行け）、kai（買え）、ɸai（喰らえ）、jukui（休め）、nivvi（眠れ）、／miɾu（見ろ）、fiːɾu（呉れろ）、sï̥tiɾu（捨てろ）、kuː（来い）、

与那覇方言

古代語混合変化は、与那覇方言では語尾に-uŋ をもつ混合変化と語尾に-iŋ をもつ弱変化があらわれる。古代語弱変化に対応する語形がえられていないので、与那覇方言の詳細は不明である。

強変化／tubaɴ（飛ばない）、kugaɴ（漕がない）、ikaɴ（行かない）、ffaɴ（降らない）、utusaɴ（落とさない）、kiraɴ（蹴らない）、kiraɴ（切らない）、idasaɴ（出さない）、mutaɴ（持たない）、vvaɴ～vvadʲaːɴ（売らない）、kaːɴ（買わない）、
混合変化／urudʲaɴ（降りない）、utuɴ（落ちない）、stuɴ（捨てない）、fudʲaːɴ（呉れない）
弱変化／ukiɴ（起きない）、
不規則変化／kuːɴ
命令形／iki（行け）、kai（買え）、feː（喰らえ）、jukui（休め）、nivvi（眠れ）、／miːɾu（見ろ）、kakiɾu（かけろ）、ffiɾu/ fiɾu（呉れろ）、／kuː（来い）、

来間方言

古代語混合変化は、来間方言では語尾に-uŋ をもつ混合変化がみられる。「蹴らない」は強変化型の kiɾaŋ である。それ以外の古代語弱変化に対応する語形がえあられていないので、来間方言の詳細は不明である。

強変化／tubaŋ（飛ばない）、aspaŋ（遊ばない）、numaŋ（飲まない）、kugaŋ（漕がない）、ikaŋ（行かない）、utusaŋ（落とさない）、idasaŋ（出さない）、mutɕaŋ（持たない）、pɾaŋ（掘らない）、sɪmaɾaŋ（縛らない）、ffaŋ（降らない）、tssaŋ（切らない）、muɾaŋ（貰わない）、vvaŋ（売らない）、faːŋ（食わない）、kaːŋ（買わない）、aɾaːŋ（洗わない）、bʲoːŋ（酔わない）、／kiɾaŋ（蹴らない）、
混合変化／uruŋ（降りない）、utuŋ（落ちない）、ukuŋ（起きない）、stuŋ（捨てない）、fuːŋ（呉れない）、
不規則変化／kuːŋ̩（来ない）、
命令形／iki（行け）、piɾe（行け）、smaɾe（縛れ）、idaɕeː（出せ）、jaɾaɕe（遣らせ）、tɕï̥ɕe（切れ）、keː（買え）、feː（喰らえ）、jukui/ jukẹː（休め）、nivvi（眠れ）、／miːɾɞ（見ろ）、fiːɾu（呉れろ）、stiɾo （捨てろ）、zʑiɾo（入れろ）、／kuː（来い）、

久貝方言

古代語の弱変化と混合変化は、久貝方言では語尾に-iŋ、-iːŋ をもつ弱変化である。古代語不規則「しない」も弱変化型の ʃiːŋ である。「蹴らない」「死なない」は強変化である。他の方言で強変化であらわれる「着ない」「坐らない」も弱変化型の kiʃiŋ、biʒiŋ である。

強変化／tubaŋ（飛ばない）、aspaŋ（遊ばない）、numaŋ（飲まない）、kugaŋ（漕がない）、ikaŋ（行かない）、utasaŋ（落とさない）、idasaŋ（出さない）、mutaŋ（持たない）、puraŋ（掘らない）、fuɾaŋ（降らない）、kˢɹsaŋ（切らない）、sɹmaɾaŋ（縛らない）、vvaŋ（売らない）、kavvaŋ（被らない）、ffaŋ（閉じない）、nivvaŋ（眠らない）、kaːŋ（買わない）、faːŋ（食わない）、bjaːŋ（酔わない）、aɾaːŋ（洗わない）、andzaŋ（言わない）、／kiɾaŋ（蹴らない）、snaŋ（死なない）、

弱変化／uɾiŋ（降りない）、utiŋ（落ちない）、ukiŋ（起きない）、sɹtiŋ（捨てない）、fiːŋ（呉れない）、／zʒiŋ（得ない）、kiʃiŋ（着ない）、biʒiŋ（坐ない）、miːŋ（見ない、いない）、

不規則変化／kuːŋ（来ない）、ʃiːŋ（しない）、njaːŋ（ない）、

命令形／iki（行け）、jukui（休め）、kai（買え）、idaʃi（出せ）、uri（居れ）、kavvi（被れ）、ffijoː（閉じろ）、／miːɾu（見ろ）、fiːɾu（呉れろ）、kạkiɾu（かけろ）、kiʃiru（着ろ）、／kuː（来い）、ʃiːru（しろ）、

島尻方言

古代語の弱変化と混合変化は、島尻方言では語尾に-iŋ、-iːŋ をもつ弱変化であらわれる。弱変化の「蹴らない」「坐ない」は強変化型であらわれる。不規則変化の「する」は弱変化型であらわれる。ʃiro＞sru＞ssu。

強変化／tubaŋ（飛ばない）、appaŋ（遊ばない）、numaŋ（飲まない）、kugaŋ（漕がない）、ikaŋ（行かない）、utusaŋ（落とさない）、idasaŋ（出さない）、mutaŋ（持たない）、puraŋ（掘らない）、ffaŋ（降らない）、kssaŋ（切らない）、fgzzaŋ（縛らない）、kavvaŋ（被らない）、vvaːŋ（売らない）、ffaŋ（閉じない）、nivvaŋ（眠らない）、azzaŋ（言わない）、kaːŋ（買わない）、faːŋ（食わない）、aɾaːŋ（洗わない）、bjaːŋ（酔わない）、／kiraŋ（蹴らない）、bzːzaŋ（坐ない）、

弱変化／uriŋ（降りない）、utʃiŋ（落ちない）、stʃiŋ（捨てない）、fiːŋ（呉れない）、ukiŋ（起きない）、sniŋ（死なない）、／miːŋ（見ない、いない）、zʒiŋ（得ない）、ʃʃiŋ（着ない）、

不規則変化／kuːŋ（来ない）、ʃiŋ（しない）、njaːŋ（ない）、

命令形／iki（行け）、uki（置け）、piri（行け）、kai（買え）、fai（喰らえ）、jukai（休め）、nivvi（眠れ）、／miːu（見ろ）、fiːɾu（呉れろ）、ʃʃiru（着ろ）、kuː（来い）、ssu（しろ）、

狩俣方言

古代語の弱変化と混合変化は、狩俣方言では語尾に-iŋ、-iːŋ をもつ弱変化であらわれる。「着ない」「坐ない」「死なない」も弱変化型であらわれる。不規則変化の「する」は弱変化型で、「居ない」は強変化型の活用形であらわれる。

強変化／tubaŋ（飛ばない）、asbaŋ（遊ばない）、numaŋ（飲まない）、kugaŋ（漕がない）、ikaŋ（行かない）、utasaŋ（落とさない）、idasaŋ（出さない）、mutaŋ（持たない）、puraŋ（掘らない）、smaraŋ（縛らない）、ffaŋ（降らない）、kssaŋ（切らない）、kaʊʊaŋ（被らない）、ffaŋ（閉じない）、ʊʊʊaŋ（売らない）、niʊʊaŋ（眠らない）、azzaŋ（言わない）、kaːŋ（買わない）、aɾaːŋ（洗わない）、faːŋ（食わない）、／kiraŋ（蹴らない）、

弱変化／uriŋ（降りない）、utiŋ（落ちない）、ukiŋ（起きない）、ʃitiŋ（捨てない）、fiːŋ（呉れない）、ʃimiŋ（閉めない）、kadʒiŋ（かじらない、掘らない）、sniŋ（死なない）、bʲuːiŋ（酔わない[7]）、／iʒiŋ（得ない）、kiʃiŋ（着ない）、biʒiŋ（坐ない）、miːŋ（見ない、いない）、

不規則変化／kuːŋ（来ない）、aʃiŋ（しない）、uraŋ（居ない）、njaːŋ（ない）、

命令形／iki（行け）、uki（置け）、idaʃi（出せ）、kai（買え）、ɸai/fai（喰らえ）、jukui（休め）、niʊi（眠れ）、／miːɾu（見ろ）、fiːɾu/ffiru（呉れろ）、uriru（降りろ）、kaḳiɾu（かけろ）、ɕimiɾu（閉めろ）、ŋ̥giɾu（帰れ）、iʒiru（入れろ）、／kuː（来い）、aʃiru（しろ）、

池間方言

古代語の弱変化と混合変化は、池間方言では語尾に-iŋ、-iːŋ をもつ弱変化であらわれる。「蹴らない」「着ない」「坐ない」「死なない」は強変化型であらわれる。不規則変化の「する」は混合変化型であらわれる。

強変化／tubaɴ（飛ばない）、aɕibaɴ（遊ばない）、numaɴ（飲まない）、kugaɴ（漕がない）、ikaɴ（行かない）、utuhaɴ（落とさない）、idanaɴ（出さない）、mutɕaɴ（持たない）、furadʑaːɴ（掘らない）、kiɾaɴ（切らない）、ɕimaɾaɴ（縛らない）、ffaɴ（降らない）、vvaɴ（売らない）、kaʊʊaɴ（被らない）、ttadʑaːɴ（閉じない）、nʲivvaɴ（眠らない）、azzaN（言わない）、kaːɴ（買わない）、aɾaːɴ（洗わない）、faːɴ（食べない）、／kiɾaɴ（蹴らない）、ttɕaɴ（着ない）、bidʑaɴ（坐ない）、ɕinaN（死なない）、

弱変化／ukiN（起きない）、uɾiɕaːɴ（降りない）、utiN（落ちない）、sïtiɴ（捨てない）、fiːN（呉れない）、／ʑʑiN/dɕiN（得ない）、bʲuːiN[8]（酔わない）、miːN（見ない、いない）、

---

7 bʲuːiŋ は、可能動詞の否定形「酔えない」か。

8 bʲuːiŋ は、可能動詞の否定形「酔えない」か。確認が必要。

不規則変化／kuːɴ（来ない）、ɸuN（しない）、nʲaːN（ない）、
命令形／iki（行け）、jukui（休め）、kai（買え）、nʲivvi/nʲiʊʊi（眠れ）、／miːɾu（見ろ）、fiːɾu（呉れろ）、sï̥tiɾu（捨てろ）、／kuː（来い）、assu（しろ）、

国仲方言
古代語の弱変化の「見る」は弱変化型の miːN だが、「着ない」はʔtaN、「坐ない」bɿzaɴであらわれ、強変化型である。古代語混合変化「起きる」は、弱変化であらわれる。得られた語形がすくなく、きわめて概括的な記述にとどめざるをえない。

強変化／kavvaɴ（被らない）、nivvaɴ（眠らない）、azzaN/aḷzaN（言わない）、／sɿnaɴ（死なない）、ʔtaN（着ない）、bɿzaɴ（坐ない）、
弱変化／okiNniː[9]（起きない）、／miːN（見ない、いない）、
不規則変化／ahoN/asoN（しない）、njaːN（ない）、
命令形／miːɾu（見ろ）、ɸiːɾu（呉れろ）、ɕimiɾu（閉めろ）、koː̥（来い）、asso（しろ）、

３．２　否定形のまとめ

動詞活用を調査したすべての地点で調査項目の調査が終了しているわけでなく、えられた語形に制限はあるが、北琉球諸語（とくに沖縄島諸方言）、古代語、宮古語の活用のタイプと比較して、次のことが指摘できよう。

１）宮古語の動詞の活用のタイプには強変化と弱変化と混合変化と不規則変化とがみられる。
２）古代語強変化は、宮古語で安定して強変化であらわれる。
３）古代語弱変化「蹴る」は宮古語では強変化であらわれる。
４）古代語の弱変化「見る」は、弱変化であらわれる下位方言と混合変化であらわれる下位方言がある。
５）古代語の混合変化は、久貝、狩俣、池間、国仲では弱変化であらわれ、保良、砂川、宮国、与那覇、来間では混合変化であらわれる。
６）古代語混合変化「死ぬ」が狩俣、島尻では弱変化であらわれ、保良、久貝、池間では強変化であらわれる[10)]。

---

[9] okiNniːの niːは、終助詞か。

[10] 本永守靖（1973）によると、宮古語西里方言の snan（死なない）などは強変化型の活用形だが、sniru（死ね）や sniriba（死ねば）など弱変化型の活用形である。また、狩俣が 2011 年 11 月に行なった旧上野村野原方言の調査（話者：N.Y 氏。男性。昭和 18 年生）で動作・変化が限界達成直前であることをあらわす形式に snattiː uː（死のうとしている）と、snittiː uː（死のうとしている）の強変化型と弱変化型のふたつの活用形が得られた。前者は、主体の意志的な動作の開始限界達成直前であることをあらわし、後者は、無意志的な変化の終了限界達成直前である

7）古代語弱変化の強変化動詞化が沖縄島諸方言にみられるが、古代語弱変化の「蹴らない」が宮古語全体で強変化化し、同じく古代語「着ない」が保良、島尻、池間で、「座ない」が保良、島尻、池間で強変化化している。その他の地点の方言は語形がえられておらず不明である。

8）古代語混合変化の強変化化（r 語幹動詞化）が沖縄島諸方言にみられるが、宮古語では強変化化はみられない。

9）久貝、島尻、狩俣では「着ない」「座ない」「得ない」も弱変化であらわれる。

10）古代語不規則変化「しない」が久貝、狩俣、島尻で弱変化であらわれ、保良、池間で混合変化であらわれる。

否定動詞の語彙的な意味で興味ぶかいのが、uz（居る）の否定動詞の現在形には uraŋ（居ない）のほかに、語形上は miz（見る）の否定動詞があらわれる地点が複数あったことである。

16) tunaznna　imma　miːŋ（隣には　犬は　いない)。島尻方言
17) tunaznu　jaːnna　inna　miːŋ（隣の　家には　犬は　いない)。久貝方言

4　過去形

動詞過去形の語尾には強変化、弱変化、混合変化、不規則変化の如何をとわず、taː、ta、tai、taᶻˀ があらわれる。日本語や北琉球諸語にみられる強変化の語尾にふくまれる t の有声音化がみられないのである。宮古語には tuᶻˀ（鳥)、paᶻˀ（針）などの単語にみられる ri＞i の音韻変化と、piru＞piᶻˀ（大蒜)、saru＞saᶻˀ（申）にみられる ru＞z の音韻変化があるので、taᶻˀ、tai、taː、ta は、tari あるいは taru に由来する。

保良方言

強変化、弱変化、混合変化、不規則変化を問わず、語尾は末尾の z の弱化した-taːあるいは-ta である。ataˀ（有った）だけ-taˀ がみられる。

強変化／tubztaː（飛んだ)、asˀpˀta（遊んだ)、kugztaː（漕いだ)、iksta:（行った)、utustaː（落とした)、idasutaː（出した)、mutsˀta（持った)、numta（飲んだ)、fʊmtaː（履いた)、puzˀtaː（掘った)、fʊztaː（降った)、piztaː（行った)、smaztaː（縛った)、ksstaː（切った)、kaʊtaː（買った)、arɔʊta（洗った)、fɔʊta（食べた)、bjuːtaː（酔った)、kavtaː（被った)、niʊtaː（眠った)、fʊːtaː（閉じた)、aztaː（言った)、vvitaː（売った)、

ことをあらわす。sn（死ぬ）がどの活用のタイプに属すのか、どの活用形が弱変化型なのかはいろいろな活用形を調査しなければならない。下位方言によって混合変化のタイプに変種があることは興味ぶかい。何故このようなことがおきたのかのかの解明とあわせて、今後の課題である。

kssta:（着た）、kizta:（蹴った）、fttsta:（縛った）、bz:ta:（坐た）、snta:（死んだ）、
混合変化／urita:（降りた）、utɕita:（落ちた）、stɕita:（捨てた）、ffita:（呉れた）、bakita:（分けた）、piŋgita（逃げた）、ukita:（起きた）、／mi:ta:（見た）、i:ta:（得た）、
不規則変化／ksta:（来た）、sɿ:ta:（した）、ataɿ（有った）、uta:（居た）、

砂川方言
強変化、弱変化、混合変化、不規則変化を問わず、語尾は-taᶻɿ である。一部の語形に-ta:が並存している。

強変化／tuvᶻɿtaᶻɿ～tubᶻɿtaᶻɿ（飛んだ）、asɿ̥pˢɿtaᶻɿ（遊んだ）、iksɿtaᶻɿ～iksta:（行った）、kugᶻɿtaᶻɿ（漕いだ）、utusˌtaᶻɿ～utusˌta·（落とした）、idasɿtaᶻɿ（出した）、mutsɿtaᶻɿ（持った）、numtaᶻɿ（飲んだ）、funtaᶻɿ（履いた）、puᶻɿtaᶻɿ（掘った）、muduɾi piᶻɿtaᶻɿ（戻って行った）、fᶻɿtaᶻɿ～fᶻɿta:（降った）、kaʊtaᶻɿ（被った）、kautaᶻɿ（買った）、fo:taᶻɿ～fautaᶻɿ～foutaᶻɿ（食べた）、murautaᶻɿ（貰った）、bʲu:taᶻɿ（酔った）、aɾautaᶻɿ（洗った）、ʊ:taᶻɿ（売った）、kstaᶻɿ～ksɿ:taᶻɿ（切った）、sɿmaᶻɿtaᶻɿ（縛った）、kˢɿtaᶻɿ（蹴った）、
混合変化／urita:～uɾitaᶻɿ（降りた）、utitaᶻɿ～utita:（落ちた）、piŋˌgita:（逃げた）、stitaᶻɿ～stita:（捨てた）、ffitaᶻɿ（呉れた）bakitaᶻɿ（分けた）、piŋgitaᶻɿ（逃げた）、
不規則変化／sɿ̥taᶻɿ（した）、ksɿtaᶻɿ～ksɿta:～kˢɿ:taᶻɿ（来た）、kugiᵏstaɿ～kugᶻiᵏstaɿ（漕いで来た）、

宮国方言
強変化、弱変化、混合変化、不規則変化を問わず、語尾は-ta:である。

強変化／asɿ̥pʰɿta:（遊んだ）、u:gʒ:ta:（泳いだ）、iksta:/ikɿ̥ta:（行った）、utu̥sta:（落とした）、idaɕita/idasɿta（出した）、piɾasï̥ta:（行かせた）、moˌtɕi̥ta:（持った）、numˌta:（飲んだ）、fuzta:（降った）、poˌzta（掘った）、muduɿta:（戻った）、kï:ta:（切った）、nakaᶻɿta:（分けた）、fuzta: / fɿzta:（縛った）、kizta:（蹴った）、kauta:（買った）、ɸoota:（食べた）、moɾauta: /moɾoota:（貰った）、bʲo:ta:（酔った）、aɾauta:（洗った）、u:ta: /uvta:/uʊta:（売った）、
混合変化／uɾita:（降りた）、uci̥ta:（落ちた）、sɿ̥tita:（捨てた）ɸiita:（呉れた）、pʰiŋgita:/ɸiŋgita:（逃げた）、
不規則変化／kï:ta:/kï̥ta:（来た）、kugiksta:（漕いできた）、kugiuta（漕いでいた）、

与那覇方言
強変化、弱変化、混合変化、不規則変化を問わず、語尾は-ta:である。

強変化／tubɹtaː/tubɹtaɴ（飛んだ）、appɹtaː（遊んだ）、ikˢɹ̥taː（行った）、kugɹtaː（漕いだ）、utusɹ̥taː（落とした）、idasɹtaː（出した）、、mutsɹtaː（持った）、numtaː（飲んだ）、ffuṭtaː（降った）、puztaː（掘った）、piːtaː（行った、）kɹ̥sɹ̥taː（切った）、koːtaː（買った）、aɾoːtaː（洗った）、foːtaː（食べた）、bjuːtaː（酔った）、ʊːtaː/uːtaː（売った）、kizɹtaː（蹴った）、sɹmaᶻɹtaː（縛った）、

混合変化／uɾitaː（降りた）、utitaː（落ちた）、suṭitaː（捨てた）、fiːtaː（呉れた）、bakitaː（分けた）、

弱変化／zzitaː（得た）、

不規則変化／kstaː/kɹ̥sɹ̥taː（来た）、kugɹdu sɹ̥taː（漕ぎゾした）、ʊːdusɹtaː（売りゾした）、bjuːi utaː（酔っていた）、tubɹdu sɹ̥taː（飛びゾした）、

来間方言

強変化、混合変化、不規則変化を問わず、語尾は-taɹ である。古代語弱変化に対応する動詞の語形が得られていない。強変化の語尾は-ztaɻ、-ɹtaɻ、-taɻ であり、混合変化の語尾は-taɻ である。

強変化／tubẓtaẓ/tubẓtaɻ（飛んだ）、aspɻtaɻ（遊んだ）、numutaɻ[11]（飲んだ）、kudztaɻ（漕いだ）、itstaɻ（行った）、piɻtaɻ/piᶻɻtaɻ（行った）、utus̥taẓ/utus̥taɻ（落とした）、idastaɻ（出した）、puztaɻ（掘った）、sɻmaɻtaɻ/smaztaɻ（縛った）、ffṭtaɻ（降った）、tssṭaɻ/tssṭaẓ（切った）、muroːtaɻ（貫った）、uːtaɻ（売った）、foːtaɻ（食った）、koːtaɻ（買った）、aɾoːtaɻ（洗った）、bʲuːtaɻ（酔った）、／kizṭaẓ/kizṭaɻ（蹴った）、

混合変化／uɾitaẓ/uɾitaɹ（降りた）、utiṭaẓ（落ちた）、stiṭaẓ/stiṭaɹ（捨てた）、fiːtaɹ（呉れた）、bakiṭaɹ（分けた）、piŋgitaɹ（逃げた）、

不規則変化／tsstaɹ/tstaɹ（来た）、kugitstaɹ（漕いできた）、uɾitstaɹ/tssṭaɹ（降りてきた）、muɾaitsɹ̥taɹ（貫ってきた）、ikʲuːtaz/ikʲuːtaɹ（行っていた）、mmʲaɹtaɹ（いらっしゃった）、uːgi tstaɻ（泳いできた）

久貝方言

強変化、弱変化、不規則変化を問わず、語末は-taːである。強変化の語尾は-staː、-ɹtaː、-taː、弱変化の語尾は-taːである。

強変化／aspstaː（遊んだ）、kugᶻɹtaː（漕いだ）、ikˢɹ̥taː（行った）、utastaː（落とした）、idastaː（出した）、mutstaː（持った）、numtaː（飲んだ）、fʊmtaː（履いた）、fuᶻɹtaː（降

[11] 他の下位方言の強変化 m 語幹動詞のばあい、語尾に母音があらわれないが、ここでは u があらわれている。確認が必要か。

った）、puztaː（掘った）、pi̥ˑtaː（行った）、kˢɿ̥taː（切った）、kiᶻɿ̥taː/kiᶻɿtaː（蹴った）、sɿmaɿtaː（縛った）、nakaːztaː（分けた）、koːtaː（買った）、aɾoːtaː（洗った）、foːtaː（食べた）、moroːtaː（貰った）、bʲuːtaː（酔った）、vːtaː（売った）、nivtaː（眠った）、kaʊtaː（被った）、fftaː（閉じた）、antaː（言った）、sntaː（死んだ）、

弱変化／uɾitaː（降りた）、utitaː（落ちた）、ukitaː（起きた）、sɿ̥titaː（捨てた）、kiɕitaː（着た）、fiːtaː（呉れた）、smitaː（洗った）、piŋ̥gipi̥taː（逃げた）、／miːtaː（見た）、zʑitaː（得た）、biʑitaː（坐った）、

不規則変化／kˢɿ̥taː（来た）、kugikˢɿ̥taː（漕いで来た）、staː（した）、utaː（居た）、ataː（有った）、ariutaː～arʲuːtaː（有った）、bʲuːiutaː酔っていた）、tatɕiːutaː（立っていた）、niviutaː（眠っていた）、

島尻方言

島尻方言の過去形の語末は、taːがおおく、ta、taz もあらわれている。強変化の語尾は-staː、-ztaː、-utaː、-taː、弱変化の語尾は-taz である。

強変化／tubztaː（飛んだ）、appstaː（遊んだ）、kugztaː（漕いだ）、iksta:（行った）、utustaː/utusta（落とした）、idastaː（出した）、mutsta（持った）、nuntaː（飲んだ）、fʊntaː/ fntaː（履いた）、puztaː（掘った）、fftaː/ffʊtaɿ（降った）、piztaː（行った）、ksstaː（切った）、kautaː（買った）、arautaː（洗った）、faʊtaː（食べた）、bjuːtaz（酔った）、kavtaː（被った）、nʲiʊtaː（眠った）、fftaː/ ffʊtaː（閉じた）、aztaː（言った）、vːtaː/ʊːtaː（売った）、fgztaː（縛った）、kiztaː（蹴った）、bzːtaː（坐た）、sntaː（死んだ）、

弱変化／uritaː（降りた）、utɕitaː（落ちた）、stɕitaː（捨てた）、fiːtaː（呉れた）、bakitaz（分けた）、ukitaz/ukitaː（起きた）、／miːtaː（見た）、zʑitaz（得た）、ʃʃitaz（着た）、、

不規則変化／sstaː（来た）、sstaː（した）、ataː（有った）、uːtaː/ utaː（居た）、

狩俣方言

狩俣方言の過去形の語尾には、-taz のほかに-daz があらわれている。nundaz（飲んだ）の daz は音便化したようにもみえるが、-daz が強変化 asʊdaz（遊んだ）と弱変化 uridaz（降った）、utidaz（落ちた）の別なくあらわれていること、sntaz/sndaz（死んだ）、ɕimitaz/ɕimidaz（閉めた）のように同じ動詞で-taz と-daz の変種がみられることから、この有声音化の減少は音便ではなく、音声的な変種であるとかんがえる。したがって、狩俣方言の強変化の語尾は-itaz と-taz、弱変化の語尾は-taz である。

強変化／tubitaz/tuʊtaz（飛んだ）、asʊdaz（遊んだ）、kugitaz/kuʊtaz（漕いだ）、iftaz/ikitaz（行った）、utastaz（落とした）、idastaz（出した）、mutstaz（持った）、nundaz（飲んだ）、puztaz（掘った）、ffʊtaz（降った）、ksstaz（切った）、kaztaz/koːtaː/ koːtaz（買

った）、aroːdaz（洗った）、foːtaz（食べた）、bjuːztaz（酔った）、kaʊtaz（被った）、nʲiʊtaz（眠った）、ffitaz（閉じた）、aztaz（言った）、ʊːtaz（売った）、ksːdaz（蹴った）、smaztaz（縛った）、sntaz/sndaz[12]（死んだ）、

弱変化／uridaz（降りた）、utidaz（落ちた）、ɕitidaz（捨てた）、fiːtaz（呉れた）、ŋgidaz（帰った）、taskaritaz（助かった）、ukitaz（起きた）、ɕimitaz/ɕimidaz（閉めた）、／miːdaz（見た）、ʑʑitaz（得た）、kiitaz（着た）、biʑitaz（坐た）、

不規則変化／ksstaz（来た）、kugiftaz（漕いできた）、astaz（した）、ataz（有った）、utaz（居た）、

池間方言

池間方言の過去形の語尾は、強変化、弱変化、不規則変化のいずれも-tai である。

強変化／aɕibitai～aɕuːtai（遊んだ）、kugitai（漕いだ）、ifutai～ikitai（行った）、utaɕitai（落とした）、idaɕitai（出した）、muttai（持った）、nuntai（飲んだ）、mmitai（履いた）、fuːtai（降った）、fuitai（掘った）、muduitai（戻った）、hatai（行った）、kiritai（切った）、ɕɿmaɾitai（縛った）、kautai～kaʊtai～kaitai（買った）、vvitai（売った）、faitai～fautai～faʊtai（食べた）、bʲuːitai（酔った）、araitai（洗った）、aitai（言った）、kavvitai（被った）、ffitai（閉じた）、nʲuːtai（眠った）、taskaitai（助かった）、kiːtai（蹴った）、ttɕaddaN（切れなかった[13]）、

弱変化／ukitai（起きた）、uritai（降りた）、utɕitaː（落ちた）、bakitai（分けた）、uʥɿmitai（埋めた）、piŋgita（逃げた）、fiːtai（呉れた）、／miːtai（見た）、tsɿitai～ttitai（着た）、biːtai（坐た）、ddʑitai（得た）、

不規則変化／kuːɴ（来ない）、ɸuN（しない）、nʲaːN（ない）、

不規則変化／ttai（来た）、asɿtai/aɕitai（した）、aruːtai（有った）、uruːtai（居た）、

国仲方言

得られた語形はすくないが、強変化、混合変化、弱変化、不規則変化のいずれも語末に-tal̩ が主としてみられ、一部に taːがある。

強変化／Ngital̩（行った）、pʲal̩tal̩（行った）、kaʊtal̩（被った）、ɸum̩tal̩（履いた）、nivtal̩（眠った）、sɿNtal̩（死んだ）、

混合変化／ɕime̩tal̩（閉じた）、okital̩（起きた）、

---

[12] 過去形の sntaz/sndaz（死んだ）は、強変化型の活用形だが、否定形 sniŋ（死なない）は弱変化の活用形である。混合変化であるが、古代語とはことなる混合のしかたをしている。

[13] 日本語訳は「切れなかった」となっているが、活用は強変化型のようである。「切らなかった」か。

弱変化／miːtal̩（見た）、tsɿːtaː（着た）、bɿːtaː/bɿztaː（坐た）、
不規則変化／astaːl̩（した）、atal̩（有った）、ot̪al̩（居た）、tatɕii ot̪al̩（立っていた）、

４．１　過去形の考察（1）－音便の有無

日本語において平安時代の動詞語幹に発生した音便とよばれる音韻変化が『おもろさうし』および北琉球諸語にもみられる。音便とは、強変化の語幹末子音と語尾が音韻変化して再編されて替わり語幹をもつことをいう。替わり語幹をもつ活用形は、過去形、シテ中止形であり、シテ中止形を要素にもつ派生形式にもみられる。

宮古語の強変化の k 語幹動詞、g 語幹動詞のイ音便も、b 語幹動詞の撥音便も、t 語幹動詞、r 語幹動詞の促音便もみられない。北琉球諸語にみられる s 語幹動詞のイ音便もみられない。m 語幹動詞のばあい、語尾頭母音 i の音消失はみられるが、撥音便はみられない。そして、北琉球諸語の強変化の脱落音便もみられない。宮古語のばあい、音便語幹を設定する必要はないことがわかる。

おもろさうしの b 語幹動詞、m 語幹動詞のばあい、語幹末子音とシテ中止形の語尾 ite の頭母音 i が脱落し、語尾 t が有声音化したデ de に変化している。tsu-de つで＜tsuNde つんで＜tsum-ite つみて（積んで）。era-de えらで＜eraNde えらんで＜erab-ite えらびて（選んで）。語幹と語尾の境界の音節 mi、bi が融合して撥音 N に変化し語尾の t を有声音化させたのち脱落したものと推定される。mi＞N、bi＞N の変化は口蓋音化が発生するまえにおきている。

r 語幹動詞のばあい、語幹末子音と語尾頭母音が脱落している。語幹末子音 r とシテ中止形の語尾 ite の頭母音 i が脱落しているが、語尾 t の有声音化はみられない。ino-te いのて＜inoQte いのって＜inor-ite いのりて（祈って）。口蓋音化が発生するまえに語尾頭母音 i の脱落して促音が発生した、のちに促音も脱落したとみられる。

語幹末子音が w のばあい語幹末子音と語尾頭母音が融合して u 音便化して、さらに脱落している。古代語ハ行子音の p の語中での摩擦音化、有声音化、唇音退化（ハ行転呼音）とウ音便化がおきたものとかんがえる。wara-te わらて＜waraute わらうて＜waraw-ite わらひて（笑って）。ri＞Q の変化も wi＞u の変化も口蓋音化が発生するまえにおきている。

k 語幹動詞、s 語幹動詞、g 語幹動詞のばあい、語幹末子音の消失と語尾頭母音 i 脱落し語尾頭子音 t が口蓋化した tɕ に変化している。da-tɕe だちぇ＜da-itɕe だいちぇ＜dak-ite だきて（抱いて）。wata-tɕe わたちぇ＜wata-itɕe わたいちぇ＜watatɕ-ite わたして（渡して）。ko-dʑe こじぇ＜ko-idʑe こいじぇ＜kog-ite こぎて（漕いで）。語幹末子音の脱落した脱落音便がみられる。なお、g のばあい語尾頭子音が有声音化してジェ dʑe に変化しているのは、イ音便化のまえに有声音化していたためである。

t 語幹動詞のばあい、語尾の t が口蓋音化している。motɕ-itɕe もちちぇ＜motɕ-ite もちて（持って）。語尾頭子音 i の影響による口蓋音化と破擦音化はみられるが、いかなる音便もみられない。

語幹末が母音になる弱変化は、いかなる音便もおきていない。ore-te おれて（降りて）。ake-te あけて（開けて）。なお、語幹末母音が i になる動詞は、i の影響をうけて語尾にふくまれる t の口蓋化がおきている。mi-tɕe みちぇ＜mi-te みて（見て）。mitɕi-tɕe みちちぇ＜mitɕite みちて（満ちて）。

『おもろさうし』においてみられる音便現象は、北琉球諸語にひきつがれている。

tudi（飛んで）、iradi（選んで）、nudi（飲んで）、
huti（降って）、huti（掘って）、ʔarati（洗って）、warati（笑って）
datʃi（抱いて）、katʃi（書いて）、kudʒi（漕いで）、tudʒi（砥いで）
ukutʃi（起こして）、watatʃi（渡して）、
nitʃi（煮て）、nːtʃi（見て）

なぜ宮古語が音便語幹を有しないのか、それは宮古語のふるさを意味するのか、まだ断定はできない。しかし少なくとも、南琉球諸語では音便現象がみられないので、琉球祖語から南琉球諸語が分岐したときにはまだ音便はおきておらず、「おもろさうし」が編纂された 1500 年代にすでに音便が発生していたことを考慮すると、『おもろさうし』の書かれる以前には北琉球諸語と南琉球諸語が分岐し、分岐後に北琉球諸語で音便がおきたとみることができる。

４．２　過去形の考察（2）－語幹にあらわれるシ中止形

過去形の注目すべきもうひとつの点は、過去形が外形的にはシ中止形に ta、taː、tai、taᶻɹ が接続していることである。これは、音便現象が発生する以前の古代語のシタリ（した）、ノミタリ（飲んだ）、ウケタリ（受けた）とおなじである。もちろん、宮古語においてはさまざまな音韻変化がおきており、古代語のシ中止形がそのまま保存されているわけではない。

シ中止形が本来の連用形の用法ではほとんどあらわれず、形つくりや単語つくりの要素としてしかみられないので、宮古語の過去形の語幹部分をみることで、宮古語のシ中止形の形式がどのような音声形式であらわれるかを知ることができる。

かりまたしげひさ（1999）でものべたが、宮古語の平良方言や保良方言など宮古島の中央部から南部地域の下位方言の強変化の b 語幹動詞、k 語幹動詞、g 語幹動詞の代表形は、シ中止形に由来する形式が表われる。このことから宮古語の代表形は、シ中止形に由来する形式の可能性があると論じた。しかし、後述するように狩俣方言や池間方言にはスル終止形あるいはスル連体形に由来する形式もあらわれる。シ中止形の形式を確認することのできる過去形は、宮古語の動詞代表形の起源を検討するうえでも重要である。

古代日本語の強変化の終止形叙述法断定非過去形（以下、ス終止形）と連体形非過去（以下、スル連体形）はホモニムなので、保良方言の kau（買う）、arau（洗う）、島尻方言の koː（買う）、aroː、（洗う）、などの*w 語幹動詞がス終止形とスル連体形のいずれに由来するかを特定出来ない。宮古語強変化の m 語幹動詞、s 語幹動詞、t 語幹動詞、r 語幹動詞は、古代

語のシ中止形、ス終止形、スル連体形のいずれに由来するか特定することができない。

古代語の弱変化も宮古語の弱変化も、シ中止形とス終止形は形式がことなるが、ス終止形とスル連体形は古代語でも宮古語でもホモニムであり、ス終止形とスル連体形のいずれに由来するかを特定できない。いっぽう、古代語の混合変化は、シ中止形とス終止形とスル連体形の形式がことなり、宮古語でもそのあらわれ方がことなるので、古代語混合変化に対応する宮古語の動詞について検討することは重要である。

以下、強変化と弱変化と混合変化にわけて過去形を検討するが、強変化は、b 語幹動詞、k 語幹動詞、g 語幹動詞、*w 語幹動詞のあらわれかたをみる。

４．２．１　b 語幹動詞

b 語幹動詞の過去形、「飛んだ」が調査票にあがっているが、宮国、久貝、池間では「遊んだ」の過去形しかえられていない。どの地点にもシ中止形*tobi、*asubi に由来する形式がみられるが、狩俣、池間は、シ中止形由来形式のほかに、ス終止形あるいはスル連体形*tobu、*asubu に由来する tuʊ と aɕuːがあらわれている。

tubztaː（保良）、tuvᶻɹtaᶻɹ～tubᶻɹtaᶻɹ（砂川）、tubɹtaː/tubɹtaɴ（与那覇）、tubz̩taz/tubz̩taɹ（来間）、tubztaː（島尻）、tubitaz/tuʊtaz（狩俣）、asɹ̥pʰɹtaː（宮国）、aspstaː（久貝）、aɕibitai～aɕuːtai（池間）

４．２．２　g 語幹動詞

b 語幹動詞の過去形は、「漕いだ」が調査票にあがっているが、宮国では「泳いだ」の過去形しかえられていない。どの地点にもシ中止形*kogi、*ojogi に由来する形式がみられるが、狩俣では、シ中止形由来形式のほかに、ス終止形あるいはスル連体形*kogu に由来する kuʊ もあらわれている。

kugztaː（保良）、kugᶻɹtaᶻɹ（砂川）、kugɹtaː（与那覇）、kudztaɹ（来間）、kugᶻɹtaː（久貝）、kugztaː（島尻）、kugitaz/kuʊtaz（狩俣）、kugitai（池間）、uːgʒːtaː（宮国）、

４．２．３　k 語幹動詞

k 語幹動詞の過去形は、「行った」が調査票にあがっている。どの地点にもシ中止形*iki がみられるが、狩俣、池間は、シ中止形由来形式のほかに、ス終止形あるいはスル連体形*iku に由来する if があらわれている。

iksta:（保良）、iksɹtaᶻɹ～iksta:（砂川）、iksta:/ikɹ̥ta:（宮国）、ikˢɹ̥ta:（与那覇）、itsta ɹ（来間）、ikˢɹ̥ta:（久貝）、iksta:（島尻）、iftaz/ikitaz（狩俣）、ifutai～ikitai（池間）、

４．２．４　*w 語幹動詞

*w 語幹動詞の過去形は、「買った」「食らった」「洗った」「酔った」「言った」が調査票にあがっている。「買った」の語形をみる。どの地点にもス終止形あるいはスル連体形の*kawu に由来する kau、あるいは koːがみられる。狩俣、池間は、ス終止形あるいはスル連体形由来形式のほかに、シ中止形*kawi に由来する kai があらわれている。

kaʊtaː（保良）、kautaᶻ˥（砂川）、kautaː（宮国）、koːtaː（与那覇）、koːta˥（来間）、koːtaː（久貝）、kautaː（島尻）、kaztaz/koːtaː/ koːtaz（狩俣）、kautai～kaʊtai～kaitai（池間）、

４．２．５　弱変化

弱変化の過去形は、「見た」「着た」「蹴った」「得た」「坐た」が調査票にあがっている。すべての地点で「蹴る」は強変化であらわれ、「着た」も強変化であらわれる地点がすくなくない。ここでは「見た」をあげるが、与那覇は「得た」をあげる。砂川、宮国、来間は弱変化がえられていない。「見た」「得た」にかぎらず得られた弱変化の過去形ではシ中止形に由来する形式があらわれている。

miːtaː（保良）、miːtaː（久貝）、miːtaː（島尻）、miːdaz（狩俣）、miːtai（池間）、miːtal̩（国仲）、zzitaː（与那覇）、

４．２．６　混合変化

混合変化の過去形は、「降りた」「落ちた」「捨てた」「呉れた」「起きた」「が調査票にあがっている。ここでは「起きた」を検討するが、砂川、宮国、与那覇、来間では「起きた」がえられていないので、「落ちた」をあげる。どの地点もシ中止形*oke、*ote に由来する形式がみられる。「起きた」「落ちた」にかぎらず、混合変化はシ中止形に由来する形式があらわれている。

古代語の混合変化は、シ中止形の語幹末の母音が i があらわれるタイプ（「上二段」）と e があらわれるタイプ（「下二段」）があるが、琉球諸語の混合変化は、母音 e のあらわれるタイプしかみられない。

ukitaː（保良）、utitaᶻ˥～utitaː（砂川）、ucit̥aː（宮国）、utitaː（与那覇）、utit̥az̩（来間）、ukitaː（久貝）、ukitaz/ukitaː（島尻）、ukitaz（狩俣）、ukitai（池間）、okital̩（国仲）、

狩俣方言、池間方言以外の下位方言では b 語幹動詞、g 語幹動詞、k 語幹動詞にシ中止形があらわれるのに対して、狩俣方言、池間方言では、シ中止形とス終止形（あるいはスル連体形）に由来する 2 形式が並存している。*w 語幹動詞ではス終止形（あるいはスル連体形）に由来する形式があらわれている。また、混合変化と弱変化は、いずれの地点もシ中止形に

由来する形式があらわれている。

なぜ狩俣方言、池間方言の g 語幹動詞、k 語幹動詞にはシ中止形に由来する形式の期待されるところにス終止形（あるいはスル連体形）に由来する形式があらわれるのか、なぜ*w 語幹動詞は、シ中止形に由来する形式の期待されるところにス終止形（あるいはスル連体形）に由来する形式があらわれるのか、代表形の形式とあわせて検討が必要であろう。

５　代表形

古代語の強変化と弱変化は、シ中止形とス終止形の形式はことなるが、ス終止形とスル連体形はホモニムになる。古代語の「有る」「居る」はス終止形とスル連体形はことなるが、シ中止形とス終止形はホモニムになる。シ中止形、ス終止形、スル連体形の 3 者がことなるのは、混合変化と「死ぬ」「来る」「する」である。

宮古語のばあい、語幹末が k、g、b、*w になる強変化の代表形は、シ中止形由来形式なのか、ス終止形あるいはスル連体形に由来する形式なのかを判別できるが、ス終止形あるいはスル連体形のいずれに由来するのか判別できない。mi＞m、mu＞m、si＞s、su＞s、tsi＞ts、tsu＞ts、ri＞z、ru＞z などの音韻変化がおきているので、語幹末が m、s、ts、r になる強変化、および、不規則変化の「する」「居る」「有る」は、代表形の形式がシ中止形、ス終止形、スル連体形のどれに由来するかを判別できない。強変化化した sn（死ぬ）も ni＞n、nu＞n の音韻変化があるので、その由来形式の判別がむつかしい。弱変化と不規則変化の「来る」は、シ中止形由来なのか、ス終止形由来なのか判別できるが、ス終止形由来なのかスル連体形由来なのかを判別できない。混合変化だけが、シ中止形由来なのか、ス終止形由来なのか、スル連体形由来なのかを判別できる。

沖縄島方言の焦点化助辞をふくむ強調文は、文末に連体形とホモニムの強調形があらわれて、du 無しの文の代表形とことなる形式があらわれるが、宮古語のばあい、焦点化助辞=du の有無にかかわらず、文末の述語形式はおなじ形があらわれる[14]。したがって、本報告では =du の有無を無視して代表形の語形をあげる。

18) pa̧tume:　ta̧kame:　tubz（鳩も鷹も飛ぶ）。（来間）
19) ta̧kanudu　tubz（鷹が飛ぶ）。（来間）
20) sarumai　ki:kara　utɕi.（猿も木から落ちる。）（保良）
21) m:na　umandu　uri.（みんなそこに降りる。）（保良）
22) maznudu　ama:tta　ari　uz[15].（米がたくさん有っている。）（島尻）
23) ssuznu　arittɕi　taskari:　uz.（薬があって助かっている。）（島尻）

---

[14] かりまたしげひさ（2011）でも焦点化助辞の有無が終止形の活用形を支配していないことをのべている。

[15] az（有る）のアリ中止形に存在動詞 uz を組み合わせた形式の ari　uz（有っている）は、物の一時的なアクチュアルな存在をあらわす。今後の詳細な確認と検討が必要である。

保良方言

保良方言の代表形は、強変化（tubz（飛ぶ）など）も混合変化（uki（起きる）など）も弱変化（kˢɹ:（着る）など）も不規則変化 kˢɹ:（来る）もシ中止形由来形式があらわれている。強変化の*w 語幹動詞（kʰaʊ（買う）など）はス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。sɹŋ̩～sn̩（死ぬ）は強変化のシ中止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。

強変化／tubz（飛ぶ）、asɹ̥pˢɹ̥～asɹ̥bɹ̥（遊ぶ）、kugz（漕ぐ）、iks（行く）、piz（行く）、utus～utusɹ（落とす）、idasɹ（出す）、mutsɹ（持つ）、num（飲む）、puzɹ̥（掘る）、fʊz̩（降る）、kˢɹ:（切る）、ftts（縛って）、smaz（縛る）、kʰaʊ（買う）、fɔʊ（食べる）、aɾɔʊ（洗う）、bʲu:（酔う）、kaʊ̩～kaf̩（被る）、fʊ̩:（閉じる）、niv̩（眠る）、az̩（言う）、vvɹ̥（売る）、sɹŋ̩～sn̩（死ぬ）、／kiz̩（蹴る）、kˢɹ:（着る）、bᶻɹ:（坐る）、

混合変化／stɕi（捨てる）、uri（降りる）、utɕi（落ちる）、ffi:（呉れる）、uki（起きる）、／mi:（見る）、i:（得る）、

不規則／kˢɹ:（来る）、sɹ:（する）、uz̩～u:（居る）、aɹ（有る）、nʲa:ŋ̩（無い）、

砂川方言

砂川方言の強変化（asɨ̥pˢɨ（遊ぶ）など）と不規則変化 ksɹ:/ksᶻɹ:（来る）は、シ中止形由来形式である。混合変化は語例はすくないが、sti（捨てる）はシ中止形由来形式のようである。弱変化は語例がえられていない。強変化の*w 語幹動詞（kau（買う）など）はス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。

強変化／asɨ̥pˢɨ（遊ぶ）、kugu̥ˢɹ/kugu̥ᶻɹ[16]（漕ぐ）、ikˢɹ/ikɹs（行く）、fuᶻɹ（降る）、utusɹ（落とす）、idasɨ（出す）、mutsɨ（持つ）、ksᶻɹ（切る）、sɹmaɾi[17]（縛る）、puᶻɨ（掘る）、num（飲む）、kau（買う）、fou/fau（食べる）、aɾau（洗う）、muɾau（貰う）、bju:（酔う）、kaʊ（被る）、ʊ:/ʊʊu（売る）、kiᶻɹ（蹴る）、

混合変化／sti（捨てる）、uɾittɕa:（降りるって・伝聞か）、utidu sɹ:/sɹᶻɹ（落ちゾする）、

弱変化／語例なし

不規則／ksɹ:/ksᶻɹ:（来る）、sɹ:/sɹᶻɹ（する）、uᶻɹ（居る）、

宮国方言

宮国方言の強変化（ikˢi（行く）など）と不規則変化 kï:（来る）は、シ中止形由来形式である。混合変化は語例はすくないが、uci（落ちる）はシ中止形由来形式のようである。弱変

16 得られた語形からは*kogoru、あるいは*kogori が推定される。

17 sɹmaɾi は「縛れ」か。

化は語例がえられていない。強変化の*w 語幹動詞（kau（買う）など）はス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。

強変化／butukiˌ（飛ぶ）、kugi（漕ぐ）、ikˢi（行く）、fuɹ（降る）、utuˌsu（落とす）、idaɕi（出す）、kïˌsi（切る）、moˌtsɹˌ（持つ）、kau（買う）、aɾau（洗う）、ɸau/ɸoo（食べる）、bʲuː dusɹː（酔いゾする）、uː/uv（売る）、kiz（蹴る）、
混合変化／sïˌciu[18]（捨てる）、uɾiɾu[19]（降りる）、uci（落ちる）、ɸiː（呉れる）
弱変化／語例なし
不規則／kïː（来る）、uː（居る）、

与那覇方言

与那覇方言の強変化（kugɹ（漕ぐ）など）と不規則変化 kɹˌsɹˌ（来る）は、シ中止形由来形式である。混合変化は語例はすくないが、utiː（落ちる）はシ中止形由来形式で、sutiᶻɹ（捨てる）は、スル連体形由来形式のようである。弱変化は語例がえられていない。強変化の*w 語幹動詞（koː（買う）など）はス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。

強変化／tubɹdu sɹ（飛びゾする）、kugɹ（漕ぐ）、ikˢɹ（行く）、utusɹˌ（落とす）、idasɹ（出す）、mutsɹ（持つ）、num（飲む）、puzɹ（掘る）、ffɹˌ（降る）、kɹˌsɹˌ（切る）、sɹmaɹ（縛る）、koː（買う）、foː（食べる）、aɾoː（洗う）、bjuː（酔う）、kɹːdusu/kizɹ（蹴る）、
混合変化／sutiᶻɹ（捨てる）、uɾiɾu（降りろ）、utiː（落ちる）
弱変化／語例なし
不規則／kɹˌsɹˌ（来る）、sɹ（する）、uɹ（居る）、

来間方言

来間方言の強変化（tubzˌ（飛ぶ）など）と不規則変化 tssɹ（来る）は、シ中止形由来形式である。混合変化（uɾiᶻɹ（降りる）など）はスル連体形由来形式である。強変化の*w 語幹動詞（koː（買う）など）はス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。

強変化／tubzˌ（飛ぶ）、aspi[20]（遊ぶ）、kudzɹ（漕ぐ）、its/itsɹ（行く）、utuˌsɹ（落とす）、idaɕeː[21]（出す）、mutsu/mutsɹ（持つ）、num（飲む）、puɹ（掘る）、ffʊˌ（降る）、samaɹ[22]（縛る）、tsˌ/tssɹˌ（切る）、vː（売る）、koː（買う）、foː（食べる）、muɾoa（貰う）、aɾoa

[18] sïˌciu は「捨てている」か。
[19] uɾiɾu は「降りろ」か。
[20] aspi は「遊べ」か。
[21] idaɕeːは「出せ（命令形）」か。
[22] smaɹ か。

（洗う）、bʲuː（酔う）、／kizʲ/kiɿ（蹴る）、／
混合変化／stiɿ/stizʲ（捨てる）、uɾiᶻɿ（降りる）、utidus/utidusɿ̥（落ちゾする）、utiʲmdoː（落ちるぞ）、fiːɿ（呉れる）、
不規則／ʦsɿ（来る）、nʲaːŋ（無い）、

久貝方言

久貝方言の強変化（tubᶻɿ（飛ぶ）など）と不規則変化 kˢɿ̥sɿ/ksː（来る）は、シ中止形由来形式である。混合変化（ukiz（起きる）など）と弱変化（miːz（見る）など）は、スル連体形由来である。強変化の*w 語幹動詞（koː（買う）など）は、ス終止形由来、あるいはスル連体形由来形式である。sʲnʲ（死ぬ）は、強変化のス終止形由来、あるいはスル連体形由来形式である。

強変化／tubᶻɿ（飛ぶ）、asps（遊ぶ）、kugᶻɿ（漕ぐ）、ikˢɿ（行く）、utasɿ̥（落とす）、idas（出す）、muts（持つ）、num（飲む）、sɿmaᶻɿ（縛る）、puz（掘る）、fuᶻɿ（降る）、kiʲɕi（切る）、kiᶻɿ（蹴る）、koː（買う）、moroː（貰う）、foː（食べる）、bʲuː（酔う）、aɾoː（洗う）、kav（被る）、ffʊʲ（閉じる）、nivʲ（眠る）、vː（売る）、andzʲ（言う）、sʲnʲ（死ぬ）、
弱変化／ukiz（起きる）、stiᶻɿ（捨てる）、uɾiᶻɿ（降りる）、utiᶻɿ（落ちる）、
fiːz（呉れる）、ukiz（起きる）、／miːz（見る）、bizʲiz（坐る）、kiɕiz（着る）、
不規則／kˢɿ̥sɿ/ksː（来る）、ss（する）、uː（居る）、az（有る）、nʲaːŋʲ（無い）、

島尻方言

島尻方言の強変化（tubz（飛ぶ）、kugz（漕ぐ）など）と不規則変化 ss（来る）は、シ中止形由来形式である。混合変化はスル連体形由来である。ただし uriz/uri（降りる）はスル連体形由来とシ中止形由来が並存しているようである。弱変化は、miːz がスル連体形由来で、bzːがシ中止形由来である。語例がすくなく確定できない。強変化の*w 語幹動詞はス終止形由来、あるいはスル連体形由来形式である。sniz（死ぬ）は混合変化のスル連体形由来である。

強変化／tubz（飛ぶ）、kugz（漕ぐ）、iks（行く）、ffʊ/ff（降る）、utus（落とす）、kizdus（蹴りゾする）、kss（切る）、fgz（縛る）、puz（掘る）、muts（持つ）、kau（買う）、vː（売る）、nun（飲む）、fau/fao/foː（食べる）、apps（遊ぶ）、bʲuː（酔う）、aɾau（洗う）、kav（被る）、ff/ffʊʲ（閉じる）、nivʲ（眠る）、azʲ（言う）、bzː（坐る）、
弱変化／stɕiz（捨てる）、uriz/uri（降りる）、utɕiz（落ちる）、ffiːz（呉れる）、zʲziz（得る）、ukiz（起きる）、sniz（死ぬ）、／miːz（見る）、ss（着る）、
不規則／ss（来る）、ss（する）、az（有る）、uzʲ（居る）、nʲaːŋʲ（無い）、

狩俣方言

狩俣方言の強変化（tubi（飛ぶ）など）は、シ中止形由来形式であり、（tuʊ（飛ぶ）など）はス終止形、あるいはスル連体形由来形式であって、ふたつの形式が並存している。混合変化（utɕi/utɿz（落ちる）など）もシ中止形由来とスル連体形由来が並存している。弱変化は、miːがシ中止形由来で、bzːz がスル連体形由来である。kssː（着る）はどちらなのか確定できない。強変化の*w 語幹動詞（koː（買う）など）はス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。snɿz（死ぬ）は混合変化のスル連体形由来である。不規則変化 ffu/ff（来る）はス終止形なのかスル連体形なのか両方の可能性があって確定できない。

強変化／tubi/tuʊ（飛ぶ）、asuʊi/asʊ（遊ぶ）、kuɡi/kuʊ（漕ぐ）、ifu/if（行く）、utasɿ̥ː/utas̩（落とす）、idas（出す）、mutsɿ/muts（持つ）、num～nuŋ（飲む）、ffu／fʊː（降る）、ᵖΦɿ/ᵖΦː/puz（掘る）、kiɾi/kss（切る）、sïmaɾi/smaz（縛る）、koː（買う）、aɾoː（洗う）、foː/Φoː（食う）、bʲuː/bʲuːz（酔う）、kavvi/kaʊ（被る）、ffi（閉じる）、niʊ（眠る）、az（言う）、ʊ̩ː（売る）、kiː/ksːdus（蹴る）、

弱変化／uriz（降りる）、utɕi/utɿz（落ちる）、ukɿ～ukɿz（起きる）、fɿ/fɿ̥//fɿ̥ː（呉れる）、sïti/sïtidu/sɿtɿ（捨てる）、kadzːz（掘る・かじる）、snɿz（死ぬ）、／miː（見る）、kssː（着る）、bzzːz（坐る）、iʑitaᶻɿ/ʑʑidaz（得る）、

不規則／ffu/ff（来る）、as（する）、uz（居る）、az（有る）、nʲaːŋ̩（無い）、

池間方言

池間方言の強変化（tubi（飛ぶ）など）は、シ中止形由来形式である。強変化の*w 語幹動詞（kau（買う）など）はス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。語例がすくなく確定できないが、混合変化（ukiː（起きる）など）はシ中止形由来であろうか。しかし、スル連体形由来形式の可能性を現段階では否定できない。

弱変化 biʑi（坐る）などもシ中止形由来であろう。これも現段階ではス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式の可能性を否定できない。混合変化、弱変化の用例をふやしながら、池間方言でおきた音韻変化を検討しなければならない。ɕinʲi（死ぬ）は混合変化のシ中止形由来であろう。

強変化／tubi（飛ぶ）、kugi（漕ぐ）、ifu（行く）、idaɕi（出す）、kiɾi（切る）、numi/nuN（飲む）、sïmai（縛る）、fuː（降る）、kau（買う）、fau/faʊ（食べる）、aɾau（洗う）、bʲuːi（酔う）、kavvi/kaʊʊi（被る）、ffi（閉じる）、nʲivvi（眠る）、adɕi（言う）、

弱変化／fiː（呉れる）、ukiː（起きる）、ɕinʲi（死ぬ）、uɾiɾu[23]（降りる）、／biʑi（坐る）、ʦɿːʲ/ʦɿi（着る）、

[23] uɾiɾu は「降りろ」か。

不規則／fuː（来る）、assɿ̥/aɕɕi（する）、uɾijui/uɾiːui[24]（居る）、aɾiːjui（有る）、nʲaːN（無い）、

国仲方言

国仲方言の強変化は、えられた語形がすくないうえに、シ中止形由来形式なのかス終止形由来形式なのか確定しにくい動詞の例しかえられていない。混合変化の得られた 1 例の okil̩/（起きる）はスル連体形であろう。

強変化／kaʊ̩（被る）、al̩（言う）、sɿN（死ぬ）、ʦɿː/ʦɿːi（着る）、bɿː/biʑi/bɿzɿ（坐る）、
弱変化／okil̩/okil̩li（起きる）、ɕimiʥi（閉める）、／miːʥi（見る）、
不規則／asɿ（する）、ol̩（居る）、al̩（有る）、nʲaːN（無い）、

５．１　代表形のまとめ

宮古語の代表形の起源をめぐっては、旧平良市市街地（西里、下里、東仲宗根、西仲宗根）の方言（以下、平良方言）の当該の形式が日本語のシ中止形と同音であることから、シ中止形由来形式が代表形も連体形も担っていたとする考えがあった。かりまた 1990 もそのように論じた。しかし、これまでの議論は、強変化に対象を限定してなされたものであり、しかも、平良方言を中心にした宮古島方言の旧城辺町、旧上野村、旧下地町など南西部の方言を対象にした議論であった。今回は、狩俣方言、池間方言をくわえ、数に限定があるとはいえ、弱変化、混合変化の資料もあわせて検討し、宮古語の動詞断定形がどのような形式に由来するかをみた。

１）狩俣方言、池間方言以外の下位方言の k 語幹動詞、g 語幹動詞、b 語幹動詞は、代表形がシ中止形に由来する形式である。
２）狩俣方言、池間方言の強変化にはシ中止形由来形式とス終止形由来形式あるいはスル連体形由来形式が並存している。
３）*w 語幹動詞は、ス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式があらわれている。
４）池間方言の ɕinʲi（死ぬ）は混合変化のシ中止形由来形式、狩俣方言の snɿz（死ぬ）は混合変化のスル連体形由来形式である。
５）保良、来間、池間の弱変化はシ中止形由来形式、久貝の弱変化は、ス終止形由来形式あるいはスル連体形由来形式である。
６）保良、宮国、池間の混合変化はシ中止形由来形式、来間、島尻の混合変化はスル連体形由来形式である。狩俣の混合変化はシ中止形由来形式とスル連体形由来形式が並存している。
７）保良、砂川、宮国、与那覇、来間、久貝、島尻の不規則変化「来る」は、シ中止形由

[24] tubiui（飛んでいる）のような継続相形式の補助動詞として/ui/がみられる。

来形式である。狩俣、池間の不規則変化「来る」はス終止形由来形式あるいはスル連体形由来形式であろう。

8）語幹末が m、s、ts、r になる強変化は、シ中止形、ス終止形、スル連体形のいずれに由来するか判別できない。

今回報告した地点については動詞の語例をふやしつつ､それぞれの方言でどのような音韻変化がおきたのかを確認しなければならないし、さらに調査地点をふやしたうえで、検討しなければならない。そのような制約のなかでのまとめとなるが、全体をとおして、シ中止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式であることを特定できるが、ス終止形由来形式であることを特定できる方言、あるいは動詞はみあたらない[25]。

６　アリ中止形

宮古語の中止形のうち、日本語のシテ中止形に類似のはたらきをするのは、アリ中止形である。アリ中止形は、単独で文の部分になり、ならべあわせ文やふたまた述語文の非終止の述語にあらわれ、つづいておこる二つの動作の従属的な、あるいは、非従属的な動作をあらわす。アリ中止形は、複合的な述語をつくることもできる。その点は日本語のシテ中止形に相当する。

24) kiːnu　ʋaːgun　nuːri　nːtoː　utaɕi　fiːru.（木の上に登って実を落としてくれ。）狩俣
25) tuzzu　smari　kagoŋkai　iʑiru.（鶏を縛って籠に入れろ。）狩俣
26) taʋkʲaːɕidu　fn̩ʲuː　kuɡi　ksta:（一人で舟を漕いできた。）保良
27) kiːn　nuːriː　nazzu　utuɕi　fiːru.（木に登って実を落としてくれ。）保良
28) karʲaː　bʲuːitti cununu kuto:　bassii uɳ.（彼は酔って昨日のことは忘れている。）来間

宮古語のアリ中止形は、形式的には、シテ中止形には対応していない。一見すると、古代語のシ中止形に対応するようにみえる。もし、宮古語のアリ中止形が日本語のシ中止形に対応するのであれば、おおくの宮古語の下位方言で ki＞ks、gi＞gz、bi＞bz、mi＞m、si＞s、tɕi＞ts、ri＞z などの音韻変化がおきているので、強変化のアリ中止形は、前述の過去形にふくまれるシ中止形とおなじ、kaks（書いて）、kugz（漕いで）、tubz（飛んで）、num（飲んで）、utus（落として）、muts（持って）、puz（掘って）などのような形になるはずである。しかし、アリ中止形は、形のうえで日本語や北琉球諸語のシ中止形に対応しない。単語つくり、形つくりの要素としてあらわれる宮古語のシ中止形の形式とアリ中止形は異なっているのである。アリ中止形がどのような形式であらわれるかをみてみよう。

---

25 八重山語石垣方言の混合変化 ukiN（起きる）、弱変化 miːN（見る）はシ中止形由来形式に N を後接させたものであり、ukiruN（起きる）、miːruN（見る）はスル連体形由来形式に N を後接させたものであろう。

保良方言

強変化／tubi（飛んで）、asɹpiː～asɹbiː（遊んで）、kugi/ kugʲi（漕いで）、iki（行って）、ffiː（降って）、idaɕi（出して）、utuɕi（落として）、puri（掘って）、kiri（蹴って）、kiɕi（切って）、mutɕi（持って）、numi（飲んで）、kai（買って）、fai（食べて）、arai（洗って）、bʲuːi（酔って）、vviː（売って）、kavviː（被って）、ffi（閉じて）、nivvi（眠って）、fttɕi（縛って）、aʑʑiː（言って）、／sɹnʲi（死んで）、kiɕi（着て）、biʑiː（坐て）、

混合変化／fiː（呉れて）、utɕi（落ちて）、sumiː（洗って）、ukiː（起きて）、stɕi（捨てて）、uri（降りて）、／miː（見て）、iː（得て）、

不規則変化／kiɕi（来て）、ɕiː（して）、ariː（有って）、uri（居て）、

砂川方言

強変化／tuvi（飛んで）、asi̥pi（遊んで）、kugi（漕いで）、iki（行って）、utuɕi（落として）、idaʃi（出して）、muʧi（持って）、numi（飲んで）、puɾi（掘って）、sɿmaɾi（縛って）、ki̥ɕi/kiɕi（切って）、kai（買って）、aɾai（洗って）、fai（食べて）、muɾai（貰って）、bʲuːi（酔って）、ffi（降って）、ʋʋi（売って）、kaʋʋi（被って）、／kiɾi（蹴って）、

混合変化／uri（降りて）、uti（落ちて）、sɿti（捨てて）、ffi （呉れて）、

不規則変化／ki̥ɕi/kiɕi（来て）、

宮国方言

強変化／tu̥bi（飛んで）、kugi（漕いで）、iki̥（行って）、ffi（降って）、utu̥si（落として）、ki̥sï（切って）、sïmaɾi（縛って）、po̥ɾi（掘って）、idaɕitɕi[26]（出して）、motɕi（持って）、kʰai（買って）、uvi（売って）、morai（貰って）、no̥mi（飲んで）、ɸai（食べて）、asɹpi（遊んで）、aɾai（洗って）、／kiɾi（蹴って）、

混合変化／ɸii（呉れて）、sï̥tˢi（捨てて）、uci̥（落ちて）、uɾi（降りて）、

不規則変化／ki̥si（来て）、

与那覇方言

強変化／tubi（飛んで）、appi（遊んで）、iki（行って）、numiː（飲んで）、utuɕi（落として）、mutɕi（持って）、sɿmaɾi（縛って）、puɾi（掘って）、kɿɕi（切って）、vvi（売って）、ffi（降って）、keː（買って）、bjuːi（酔って）、aɾeː（洗って）、／kiɾi（蹴って）、

混合変化／uɾi（降りて）、uti（落ちて）、su̥ti（捨てて）、ɿzi（入れて）、piŋgi（逃げて）、fiː（呉れて）、／zzi（得て）、

不規則変化／kɿɕi（来て）、

---

26 他の語形との比較検討すると、シテ中止形か。

来間方言

強変化／tubi（飛んで）、kuɡi（漕いで）、iki̥（行って）、idasi̥（出して）、utu̥ɕi̥（落として）、mutɕi̥（持って）、tɕi̥ɕi̥（切って）、smaɾi（縛って）、puɾi（掘って）、ffi̥（降って）、nuːɾiː（登って）、kai（買って）、vvi（売って）、muɾai（貫って）、numi（飲んで）、fai（食べて）、／kiɾi（蹴って）、

混合変化／uɾi（降りて）、uti（落ちて）、sti（捨てて）、fiː（呉れて）、piŋɡi（逃げて）、

不規則変化／tɕi̥ɕi̥（来て）、

久貝方言

強変化／tubi（飛んで）、aspi/aspiː（遊んで）、numi（飲んで）、kugi（漕いで）、uːgi（泳いで）、iki（行って）、kaːraki（乾いて）、utaɕi（落として）、idaɕi（出して）、mutɕi（持って）、sɹmari（縛って）、puri（掘って）、javviː（破れて）、furiː（降って）、nuːri（上って）、vviː（売って）、kiɕi（切って）、kai（買って）、fai（食べて）、bʲuːi（酔って）、tskai（使って）、arai（洗って）、kavvi（被って）、ffi（閉じて）、nivvi（眠って）、tatɕiː（立って）、andʑi（言って）、／kiri（蹴って）、／snʲi（死んで）、

弱変化／uri（降りて）、uti（落ちて）、faːsari（轢かれて）、ukiː（起きて）、ᶻɹʑi（入れて）、piŋgi（逃げて）、fiː（呉れて）、sɹti（捨てて）、／miː（見て）、biʑi（坐て）、zʑi（得て）、kiɕi（着て）、

不規則変化／kiɕi（来て）、ɕiː（して）、ariː（有って）、uriː（居て）、

島尻方言

強変化／tubi（飛んで）、appi（遊んで）、kugi（漕いで）、ujagi（泳いで）、iki（行って）、utuɕi（落として）、idaɕi（出して）、mutɕi（持って）、numi（飲んで）、piri（行って）、ffi（降って）、kiɕi（切って）、vvi（売って）、fgzʑi（縛って）、puri（掘って）、kavvi（被って）、ffi（閉じて）、kai（買って）、fai（食べて）、bʲuːi（酔って）、arai（洗って）、nivvi（眠って）、azʑi（言って）、／kiri（蹴って）、

弱変化 uki（起きて）、uri（降りて）、stɕi（捨てて）、utɕi（落ちて）、iʑiː（入れて）、sskai（轢かれて）、baɕɕi（忘れて）、fiː（呉れて）、piŋgi（逃げて）、／snʲi（死んで）、／miː（見て）、biʑi（坐て）、ɕɕi（着て）、zʑi（得て）、／

不規則変化／ɕɕi（来て）、ɕiː（して）、uri（居て）、

狩俣方言

強変化／asbi（遊んで）、tubi（飛んで）、numi（飲んで）、kugi（漕いで）、uigi（泳いで）、iki（行って）、idaɕi（出して）、utaɕi（落として）、mutɕi（持って）、ffi（降って）、kiɕi（切って）、smari（縛って）、puri（掘って）、kadʑi（掘って）、ʊʊʊi（売って）、kavvi（被って）、niʊvi（眠って）、ffi（閉じて）、kai（買って）、fai（食べて）、bʲuːi（酔って）、

arai（洗って）、azzi（言って）、／kiri（蹴って）、
弱変化／uri（降りて）、uti（落ちて）、uki（起きて）、ɕiti（捨てて）、fiː（呉れて）、piŋgi（逃げて）、baɕɕi（忘れて）、ɕikari（轢かれて）、／miː（見て）、izi（得て）、bizi（坐て）、kiɕi（着て）、／snʲi（死んで）、
不規則変化／kiɕi（来て）、aɕi（して）、ari（有って）、uri（居て）

池間方言
強変化／tubi（飛んで）、aɕibiː（遊んで）、numiː（飲んで）、kugi（漕いで）、uːgi（泳いで）、ikiː/ikiˌː（行って）、kaːki（乾いて）、utaçi/ utaçiː（落として）、idaçiː（出して）、mutiː（持って）、nuːɾiː（登って）、ffiː（降って）、kiɾiː（切って）、sïmaɾiː（縛って）、fuɾiː（掘って）、vviː（売って）、kavvi/ kavviː（被って）、ffiː（閉じて）、sadaɾiː（先だって）、nivvi/ nivviː（眠って）、haɾiː（行って）、kai（買って）、aɾai（洗って）、fai（食べて）、bʲuːi（酔って）、addziː（言って）、kiɾiː（蹴って）、
弱変化／ukiː（起きて）、uɾi/ uɾiː（降りて）、utiː（落ちて）、sïˌtiː（捨てて）、baɕɕi（忘れて）、hikaiː（轢かれて）、çiŋgi（逃げて）、sɻmiː/sɯˌmiː（洗って）、fiː（呉れて）、ddzi（得て）、／miː（見て）、ttiː（着て）、bizi（坐て）、ɕinʲi（死んで）、
不規則変化／tti（来て）、çiː（して）、aɾiː（有って）、uɾi（居て）、

国仲
強変化／kavviː（被って）、nivˌviː（眠って）、aᶻziː（言って）、／sɻniː（死んで）、／tɕiː（着て）、bizi（坐て）、
弱変化／okii（起きて）、pˢɻkaii（轢かれて）、ɕimii/ɕimi（閉じて）、taskaɾi（助かって）、／miː（見て）、
不規則変化／ɕiː（して）、aɾii（有って）、oɾeˌː（居て）、

宮古語の、強変化のアリ中止形は、子音でおわる語幹に i をつけてつくられ、弱変化のアリ中止形は、母音でおわる基本語幹と同形である。強変化のばあい、語尾は e にさかのぼり、弱変化の末尾の母音も e にさかのぼる。

後述するように、アリ中止形は、シ中止形に後接した存在動詞 az（有る）のシ中止形が文法化して融合したものだとかんがえるが、確定できているとはまだいえない[27]。宮古語、および八重山語諸方言の当該形式の調査、研究を継続して行なう必要があろう。

７．１　アリ中止形の性格

形式と由来はことなるが、宮古語のアリ中止形の文法的なふるまいは、北琉球諸語のシテ

[27] 名嘉真三成（1982）は、宮古諸語の当該形式をシテ中止形とみている。

中止形とおなじである。あわせ文やふたまた述語文の中止的な述語になるだけでなく、継続相や numi miːɾu（飲んでみろ）、tubi miːɾʊ（飛んでみろ）などのもくろみ動詞や、sti fiːɾo（捨ててくれ）、ʨiᵢ̥ɕiᵢ̥ fiːɾu（切ってくれ）などのやりもらい動詞をつくる要素となるなどの用法もおなじである。

継続相の形式は、存在動詞 uz、uːがアリ中止形にくみあわさった aɕibi　ui（遊んでいる）、ffi uɹ（降っている）の分析的な形のほかに、aɕibʲuːi（遊んでいる）、fʲuːᶻɹ（降っている）などの融合した総合的な形式が並存している。29）～32）の用例の主体動作動詞の継続相は、主体動作が継続していることをあらわし、33）～40）の用例の主体変化動詞の継続相は、変化した主体の結果的な状態が継続していることをあらわす。継続相のあらわすアスペクト的な意味の実現のしかたも北琉球諸語のシテ中止形に似ている[28]。

主体の動作継続

29) ffaf　naikʲataːçiː　aɾaN　aɕibi　ui / aɕibʲuːi（暗くなるまで外で遊んでいる）。池間

30) mainiʨi　teɾebʲuː　miː　jui（毎日テレビを見ている）。池間

31) namaː　aminudu　ffi uɹ / fʲuːᶻɹ.（今、雨が降っている。）砂川

32) nnamaː aminudu fjuː / ffjuː.（今は雨が降っている）。狩俣

主体の変化結果の継続

33) upuaminu　ffiʨidu　pʲaːɾinu　ʦɹʥɹkʲuː.
（大雨が降って、日照りが続いている。）保良

34) kaɾʲaː　bʲuːittidu　kˢɹnuːnu　kutuːba　baɕɕidu　uɹ.
（彼は酔って昨日のことは忘れている。）砂川

35) ɡabaːaminu　ffiː　ntanu　kaːki　jui.
（彼は昨日のことは忘れている。）狩俣

36) kaɾʲaː　ksnunu　kutuːbaː　baɕɕi　uɹ.
（大雨が降って土が乾いている）池間

37) boːɕuː　utuɕiʨidu　tuzɡa　ikʲuːtaː.
（帽子を落として取りに行っていた。）保良

38) bututuzza　jamakasa　numiːdu　bʲuːi　utaː.
（おとといはたくさん飲んで酔っていた。）久貝

39) ɕinɕiːja　bizɕitidu,　ffanukjaːja　tatɕiː　utaː.

---

[28] 存在動詞 az（有る）のアリ中止形に uz を組み合わせた継続相の形式があり、話の瞬間に存在した一時的な状態を表わす。

maznu　amaːtta　ari　uz.（米がたくさん有る。）島尻

kumanna　kaːnu　arjuːtaː .（ここには井戸が有った。）久貝

（先生は坐て、子どもたちは立っていた）、久貝

40) kuːmujamai　sniːdu　jumunumai　sni　uː.
（ゴキブリも死んで、ネズミも死んでいる。）久貝

宮古語の動詞のアスペクト・テンス対立のしかたは、音声形式こそちがえど 2 項対立型の東日本諸語（現代日本語）のそれに似る。

	非過去	過去
完成相	asps（遊ぶ） sn（死ぬ）	aspstaː（遊んだ） sntaː（死んだ）
継続相	aspjuː（遊んでいる） snjuː（死んでいる）	aspjuːtaː（遊んでいた） snjuːtaː（死んでいた）

表 6　保良方言のアスペクト・テンス

宮古語のアリ中止形がそのまま文末の述語の位置にあらわれて、過去のできごとをあらわすことができるが、それも北琉球諸語のシテ中止形に似ている。沖縄島方言のばあい、完成相の肯否質問の過去形にシテ中止形があらわれ、奄美大島方言ではシテ中止形が直説法の過去形としてあらわれる。詳細は稿をあらためて論じたい。

41) kjuːja　tubansuga　ksnoː　tubi（今日は飛ばないが、昨日は飛んだ）。狩俣
42) ksnumaidu　iŋgaija　iki（昨日も海へは行った）。狩俣
43) ksno　aminudu　ffi／fftaz（昨日は雨が降った）。狩俣

７．２　アリ中止形の由来

ところで、沖縄島の諸方言にもアリ中止形がみられる。沖縄島中南部諸方言のアリ中止形は、あわせ文の中止的な述語として機能し、宮古語のようなさまざまな文法形式を構成しない。首里方言のアリ中止形は、numaːni、あるいは numaːi であらわれ、『沖縄語辞典』（国立国語研究所 1963）によると、numaːi の方がより古い形式である。

宮古語のアリ中止形にもっとも似ているのは、伊平屋島方言、伊是名島方言のアリ中止形であろう。伊平屋方言、伊是名島方言のアリ中止形はあわせ文の述語になるだけでなく、宮古語のアリ中止形と同様に継続相、結果相などの単語つくり、形つくりの要素になることができ、生産性がある。

	書いて	遊んで	起きて	降りて	洗って	似て
首里方言	katʃaːi	ʔaʃibaːi	ʔukijaːi	ʔurijaːi	ʔarajaːi	nijaːi
伊平屋方言	katʃeː	ʔaʃineː	ʔukijeː	ʔurijeː	ʔarajeː	nijeː

平良方言	kakiː	aspiː	ukiː	uriː	araiː	niː
石垣方言	kakiː	asɹbiː	ukeː	ureː	arajaː	nijaː

表 7　沖縄諸方言、宮古語、八重山語のアリ中止形

44) ʔamaNdʒi　ʔaʃineː　hwaː.（向こうで遊んで来い。）伊平屋村我喜屋
45) ʔutuheː　huː.（落として来い。）伊是名村勢理客
46) ʔwidʒeː　watataN.（泳いで渡った。）伊是名村諸見
47) boːʃi　haujeː　ʔattʃuN.（帽子をかぶって歩く。）　我喜屋

48) ʔnaNma　ʔaminu　hujoːN.（今雨が降っている。）諸見
49) ʔnama　ʔami　hujoN.（今雨が降っている。）島尻
50) hunu　ʔiʃi　kijeː　Nri.（この石を蹴ってみろ。）我喜屋

伊平屋村我喜屋、野甫、島尻の方言には、過去形にʔaʃinaN（遊んだ）、sukunaN（死んだ・我喜屋・島尻、参考：ʃikudaN 諸見）、nunaN（飲んだ）、junaN（呼んだ）などの語形があるが、アリ中止形にʔaN（有る）が接続してできた過去形だと考えられる。ただし、この系列の過去形はシテ中止形に由来する過去形ʔaʃidaN（遊んだ）などに使用の場をうばわれ、使われなくなっている。

沖縄島諸語のアリ中止形は、シ中止形（numi 飲み）にʔai（有り）が組み合わさってできたもので、主として先行後続の関係をあらわす。1531 年に第一巻が編纂された古歌謡集『おもろさうし』には「～やり」の形でみられる。『おもろさうし』に出てくる「～やり」の形を高橋俊三（1982）は「「連用形+やり」の形で完了の意味を表わす。用例は中止法のみである。」と指摘している。

51)（通巻 176 巻）「とよむ　大きみや　もゝしま　そろへやり　みおやせ。」（訳：名高い大君は百島を揃えて差し上げよ。）
52)（通巻 632 巻）「いと　ぬきやり、　なわ　ぬきやり、」（訳：糸を貫いて、縄を貫いて）

宮古語の強変化のアリ中止形は、基本語幹に i あるいは iːを後接させた形式である。いっぽう、弱変化、混合変化のアリ中止形は、シ中止形（基本語幹と同音）と同音である。強変化のシ中止形とアリ中止形は形式がにているが、過去形の語幹部分にあらわれるシ中止形をみると、強変化のシ中止形の語尾は*i にさかのぼり、アリ中止形の語尾は*e にさかのぼる。宮古語のアリ中止形は、伊平屋方言のアリ中止形のような形式から変化したものではないかとかんがえる。

補注）沖縄島諸方言のアスペクト・テンス体系は、３項対立型の西日本諸語の変化した形式

のようにもみえる。継続相の形式もシテ中止形に人の存在を表わす動詞が組み合わさって融合した形であり、形の上からは西日本諸語のパーフェクト相の ɕitoru に対応する。しかし、アスペクト的な意味は、西日本諸語の ɕitoru とちがって、主体動作動詞が主体の動作継続をあらわし、主体変化動詞が主体の変化結果の継続をあらわしていて、東日本諸語の継続相および宮古語の継続相と同じである。

八重山方言もアリ中止形に uN(居る)が組み合わさっていて、たとえば石垣方言では numiː uN＞numiN（飲んでいる）、ukeː uN＞ukeːN（起きている）、kaNgajaː uN＞kaNgajaːN（考えている）のような音声的に融合した形が表われる。

53) utudoː　guɕi　numiN（弟は酒を飲んでいる）。動作継続
54) aQpaːja　meː　ukeːN（母はもう起きている）。変化結果の継続

アスペクト・テンス体系のあり方をみると、沖縄島南部語は suru、ɕijoru、ɕitoru の 3 項対立である点が西日本諸語のそれに似るが、継続相のあり方が東日本諸語のそれに似ていて、独自の体系をなしている。宮古語は、2 項対立という点と継続相のあり方が東日本諸語のそれに似ているが、継続相の形のつくり方が東日本諸語のそれとはことなっていて、独自に体系をもっている。沖縄島南部語、宮古語は、西日本諸語、東日本諸語のそれぞれ類似点と相違点をもちながらも、それぞれに独自の体系をなしているといってよいだろう。

	非過去	過去
完成相	ʔaʃibuN（遊ぶ）／ʃinuN（死ぬ）	ʔaʃidaN（遊んだ）／ʃidʒaN（死んだ） ʔaʃibutaN（遊んだ）ʃinutaN（死んだ）
継続相	ʔaʃidoːN（遊ぶ）ʃidʒoːN（死ぬ）	ʔaʃidoːtaN（遊んでいた）／ʃidʒoːtaN（死んでいたぬ）

表 7　沖縄島うるま市安慶名方言のアスペクト・テンス

8　シテ中止形

宮古語のシテ中止形は、ならべあわせ文のつづける文の述語になり、日本語のシテ中止形と類似のはたらきをし、形式上もシテ中止形に似る。しかし、非従属的な用法をもたず、継続相、もくろみ動詞、やりもらい動詞などの形式をつくる要素にならない。その点で日本語や北琉球諸語のシテ中止形とことなる。

55) otoːja　sakjuː　<u>mutɕittɕi</u>,　mmaː　faumunuː　muts.
（父は酒を<u>持って</u>、母は食物を持つ。）狩俣

56) mmaduɿnu　tubittɕi,　faːduɿmai　tubinʲaːn.
（親鳥が飛んで、子鳥も飛んでしまった。）狩俣

57) fnjuː　kugitti　unu　atu　jukui.
（船を漕いで、そのあと休め。）来間

58) funʲuː kuɡittikaɾa jukui（船を漕いでから休め）。砂川

59) fu̥sɨzzu　numitti　pjaːpjaːti　nivvi（薬を飲んで早く寝ろ）。砂川

保良方言

保良方言のシテ中止形は、アリ中止形に ttɕi のついた形である。保良方言では tɕiː（手）、tɕida（太陽）などのように他の下位方言で ti となるところが破擦音化して tɕi になるので、ttɕi も tti の変化したものであろう。

強変化／tubittɕi（飛んで）、kugittɕi（漕いで）、ikittɕi（行って）、ffittɕi（降って）、utuɕittɕi（落として）、kiɕittɕi（切って）、fttɕittɕi（縛って）、purittɕi（掘って）、idaɕitɕi（出して）、mutɕittɕi（持って）、kaittɕi（買って）、vvittɕi（売って）、numittɕi（飲んで）、faittɕi（食って）、asɿpittɕi～asɿbittɕi（遊んで）、numittɕi（飲んで）、araittɕi（洗って）、kavvittɕi（被って）、ffittɕi（閉じて）、nivvttɕi（眠って）、aʑʑittɕi（言って）、kirittɕi（蹴って）、kiɕittɕi（着て）、biʑʑittɕi（坐て）、sɿnʲittɕi（死んで）、
混合変化／ukittɕi（起きて）、urittɕi（降りて）、utɕittɕi（落ちて）、stɕittɕi（捨てて）、fiːttɕi（呉れて）、miːttɕi（見て）、iːttɕi（得て）、
不規則変化／kiɕittɕi（来て）、ɕiːttɕi（して）、arittɕi（有って）、urittɕi（居て）、

砂川方言

砂川方言のシテ中止形は、アリ中止形に tti のついた形である。

強変化／tuvitti（飛んで）、asɨ̥pitti（遊んで）、numitti（飲んで）、kuɡittikaɾa（漕いでから）、ikitti（行って）、idaʃi̥tti（出して）、muʧitti（持って）、utuɕitti（落として）、ffitti（降って）、puɾitti（掘って）、ki̥ɕɕiti/kiɕɕiti（切って）、ɕimaɾitti（縛って）、kaʋʋitti（被って）、aɾaitti（洗って）、kaitti（買って）、ʋitti（売って）、muɾaitti（貰って）、faitti（食って）、bjuːitti（酔って）、／kiɾitti（蹴って）、
混合変化／uɾitte̥（降りて）、utittii（落ちて）、ffitti（呉れて）、stitti　（捨てて）、
不規則変化／kiɕi̥tti（来て）、

宮国方言

宮国方言のシテ中止形は、アリ中止形に cci のついた形である。保良方言のような破擦音化がおきたのであろう。

強変化／kuɡicci（漕いで）、ikiɕ̥ccie̞（行って）、ficci（降って）、utuɕ̥si̥tt･i（落として）、kï̥sïtte̞（切って）、po̞ɾittɕi（掘って）、idaɕitɕi（出して）、uvittɕi（売って）、no̞mittɕi（飲んで）、ɸaittɕi（食って）、asɿpittɕi（遊んで）、aɾaittɕi（洗って）、nu:ɾicci（登って）、moɾaittɕi（貰って）、b･o:ittɕi（酔って）、

混合変化／ucïcci（落ちて）、sï̥cïccï（捨てて）、ɸiittɕi（呉れて）、

不規則変化／ki̥sicci（来て）、

与那覇方言

与那覇方言のシテ中止形は、アリ中止形に tti のついた形である。

強変化／tubitti（飛んで）、kuɡitti：（漕いで）、ʋ：ɡitti（泳いで）、ikitti（行って）、ffitti（降って）、utuɕitti（落として）、kɿɕ̥itti（切って）、sɿmaitti：（縛って）、idasitti（出して）、mutɕitti（持って）、kaitti（買って）、vvitti（売って）、numitti（飲んで）、fe：ti（食って）、appitti（遊んで）、bju：itti（酔って）、aɾe：tti（洗って）、kiɾitti（蹴って）、

混合変化／uɾitti（降りて）、utɕitti（落ちて）、sutitti：（捨てて）、fitti（呉れて）、zzitti（得て）、

不規則変化／kɿɕ̥i̥tti（来て）、

来間方言

来間方言のシテ中止形は、アリ中止形に tti のついた形である。

強変化／tubitti（飛んで）、kuɡitti（漕いで）、iki̥tti（行って）、utuɕ̥i̥ti（落として）、f̩faɕi̥tti（切って）、tɕi̥ɕitti（切って）、smaɾitti（縛って）、ffi̥tti（降って）、idasi̥ti（出して）、vvitti（売って）、numitti（飲んで）、faitti（食って）、aspɿtti[29]（遊んで）、b･u：itti（酔って）aɾaitti（洗って）、kiɾitti（蹴って）、

混合変化／uɾitti（降りて）、uti̥tti（落ちて）、sti̥tti（捨てて）、fi：tti（呉れて）、

不規則変化／tɕi̥ɕitti（来て）、

久貝方言

久貝方言のシテ中止形は、aspsɕi̥ti（遊んで）、ukiɕi̥ti（起きて）のようにアリ中止形に ɕi̥ti がついた形と、kugitti（漕いで）、uɾitti（降りて）のように tti のついた形が混在している[30]。

---

[29] 他のシテ中止形と異なりシ中止形に tti がついた形になっている。確認が必要か。

[30] puriɕiti（掘って）、ɕi:ɕiti（して）などの ɕiti を語末に持つ語形の話者は、狩俣が 2011 年 12 月の調査で得たものである。

話者の違いによるのか、周辺方言の影響なのか、確認が必要である。

強変化／aspsɕi̥ti（遊んで）、kugitti（漕いで）、numiɕi̥ti（飲んで）、idaɕi̥ti（出して）、utaɕi̥ti（落として）、mutɕiɕi̥ti（持って）、puriɕi̥ti（掘って）、ki̥ɕitti（切って）、sɹmaɾitti（縛って）、vviɕi̥ti（売って）、kavviɕi̥ti（被って）、ffiɕi̥ti（閉じて）、nivviɕi̥ti（眠って）、kaiɕi̥ti（買って）、faiɕi̥ti（食って）、bjuːiɕi̥ti（酔って）、aɾaiɕi̥ti（洗って）、andʑiɕi̥ti 言って）、kiɾiti（蹴って）、snʲiɕi̥ti 死んで）、
弱変化／ukiɕi̥ti（起きて）、uɾitti（降りて）、uti̥tti（落ちて）、sɹ̥titti（捨てて）、fiːɕi̥ti（呉れて）、／miːɕi̥ti（見て）、zʑiɕi̥ti（得て）、biʑiɕi̥ti（坐て）、kiɕiɕi̥ti（着て）、
不規則変化／kˢɹ̥ɕittikaɾa/ki̥ɕittikaɾa（来てから）、ɕiːɕi̥ti（して）、ariɕi̥ti（有って）、uriɕi̥ti（居て）、

島尻方言
島尻方言のシテ中止形も、アリ中止形に cci のついた形である。保良方言のような破擦音化がおきたのであろう。

強変化／tubittɕi（飛んで）、appittɕi（遊んで）、numittɕi（飲んで）、kugittɕi（漕いで）、idaɕittɕi（出して）、utuɕittɕi（落として）、mutɕittɕi（持って）、kiɕittɕi（切って）、puritttɕi（掘って）、ffittɕi（降って）、vvittɕi（売って）、kavvittɕi（被って）、ffittɕi（閉じて）、nivvttɕi（眠って）、kaittɕi（買って）、araittɕi（洗って）、faittɕi（食って）、bjuːittɕi（酔って）、azʑittɕi（言って）、／kirittɕi（蹴って）、／biʑittɕi（坐て）、
弱変化／ukittɕi（起きて）、uritttɕi（降りて）、utɕittɕi（落ちて）、stɕittɕi（捨てて）、fiːttɕi（呉れて）、snʲittɕi（死んで）、／miːttɕi（見て）、ɕɕittɕi（着て）、zʑittɕi（得て）、
不規則変化／ɕɕittɕi（来て）、aɕittɕi（して）、arittɕi（有って）、urittɕi（居て）、

狩俣方言
狩俣方言のシテ中止形も久貝方言のようにアリ中止形に ɕi̥ti がついた形である。

強変化／tubiɕi̥ti 飛んで）、asbiɕi̥ti（遊んで）、kugiɕi̥ti（漕いで）、numiɕi̥ti（飲んで）、ikiɕi̥ti（行って）、utaɕi̥ti 落として）、idaɕiɕi̥ti（出して）、mutɕiɕi̥ti（持って）、ffiɕɕi（降って）、puriɕi̥ti（掘って）、kiɕiɕi̥ti（切って）、ʊʊviɕi̥ti（売って）、kavviɕi̥ti（被って）、ffiɕi̥ti（閉じて）、niʊviɕi̥ti（眠って）、kaiɕi̥ti（買って）、araiɕi̥ti（洗って）、faiɕi̥ti（食って）、azʑiɕi̥ti（言って）、snʲiɕi̥ti（死んで）、
弱変化／ukiɕɕi（起きて）、uriɕi̥ti（降りて）、utiɕi̥ti（落ちて）、ɕitiɕi̥ti（捨てて）、fiːɕi̥ti（呉れて）、ɕimiɕi̥ti（閉めて）、／miːɕi̥ti（見て）、iʑiɕi̥ti（得て）、kiɕiɕi̥ti（着て）、biʑiɕi̥ti（坐て）、

不規則変化／kiɕiɕi̥ti（来て）、aɕiɕi̥ti（して）、ariɕi̥ti（有って）、uriɕi̥ti（居て）、

池間方言

以下の 3 単語にシテ中止形がみられるが、シテ中止形が期待されるところにはほとんどアリ中止形があらわれている。不規則変化の tti（来て）もアリ中止形とホモニムである。池間方言がシテ中止形を使用しないのか、調査の仕方を変えればシテ中止形がえられるのか、いずれにせよ、確認はひつようであろう。

強変化／kuɡitti（漕いで）、
弱変化／sanʥaɾiːti（落ちて）、
不規則変化／tti（来て）、

国仲方言

国仲方言は、調査でえられた語例がすくなく、シテ中止形について言えることもすくないが、確実にシテ中止形といえる語例がみられない。シテ中止形を調査する例文のところに al̩ʑii（言って）、niv̩vii（眠って）、sɿnii（死んで）の語形があり、アリ中止形を調査する例文のところに、aᶻʑiː（言って）、niv̩viː（眠って）、sɿniː（死んで）の語例があって、両者がことなる語形であるが、これが有意味な違いであるのか不明であり、再調査が必要である。

強変化／kavviː（被って）、niv̩vii（眠って）、al̩ʑii（言って）、／sɿnii（死んで）、／ʨiː（着て）、biʑiː（坐て）、
弱変化／okii（起きて）、pˢɿkaii（轢かれて）、ɕimii（閉じて）、taskaɾi（助かって）、／miː（見て）、
不規則変化／ɕiː（して）、aɾii（有って）、oɾe̩ː（居て）、

宮古語諸方言のシテ中止形は、砂川方言の uɾitti（降りて）、utittii（落ちて）なども、保良方言の tubittɕi（飛んで）、kugittɕi（漕いで）などの破擦音化したものも促音便がおきたようにもみえる。しかし、動詞のタイプをとわず強変化にも弱変化にも混合変化にも不規則変化にも同じ形式があらわれていて、音便とは関係のないものであろう。

強変化のシテ中止形は、子音語幹に語尾 itti や ittɕi が後接し、弱変化のシテ中止形は母音語幹に tti や ttɕi が後接している。いずれもアリ中止形に tti や ttɕi がついた形である。

狩俣方言の tubiɕi̥ti 飛んで）、kugiɕi̥ti（漕いで）や久貝方言の kaiɕi̥ti（買って）、fiːɕi̥ti（呉れて）などから、アリ中止形に ɕi̥ti（シテ、あるいは捨て）のような形式が後接したもののようにみえる。今後の調査と検討が必要である。

八重山語石垣方言にも kakiQte（書いて）、ukeːQte（起きて）、mijaːQte（見て）、ɕiːQte

（して）のように、アリ中止形に Qte がつづくシテ中止形がある。

９　おわりに

かぎられた調査期間だったので、得られた資料にも制限があるし、調査項目が動詞の活用形のうち代表形（スル）、否定形（シナイ）、過去形（シタ）、アリ中止形、シテ中止形の五つであったという制限もある。しかし、保良、砂川、宮国、与那覇、来間島、久貝、島尻、狩俣、池間島、伊良部島国仲の宮古島の東西南北の地点がバランスよく調査されている。そのおかげで、宮古語の活用のタイプについての概観、宮古語の五つの活用形についての概観ができたのではないかと考える。

今後は、個々の地点の動詞の数をふやすと同時に、活用形の数もふやして調査をすすめることが必要だろう。また、今回は調査できなかった大神島方言、伊良部島佐和田・長浜方言、おなじく伊良部島伊良部・仲地方言、多良間島方言などの宮古語のなかでも個性的な特徴をもつことでしられる下位方言を検討していくことも必要である。

参考文献

伊是名島方言辞典編集委員会（2004）『伊是名島方言辞典』伊是名村教育委員会

かりまたしげひさ（2011）「琉球方言の焦点化助辞と文の通達的なタイプ」『日本語の研究』第 7 巻 4 号、日本語学会，pp69～81

かりまたしげひさ（2009a）「宮古島市城辺字保良方言の動詞の終止形」『琉球語諸方言の動詞、形容詞の形態論に関する調査・研究』平成 16～19 年度度基盤研究（B）成果報告書、pp 1～28

かりまたしげひさ（2009b）「宮古島市城辺字保良方言の動詞の連用形、連体形、条件形」『琉球語諸方言の動詞、形容詞の形態論に関する調査・研究』平成 16～19 年度度基盤研究（B）成果報告書、pp29～60

かりまたしげひさ（2009c）「宮古島市城辺字保良方言の動詞の形つくり」『琉球語諸方言の動詞、形容詞の形態論に関する調査・研究』平成 16～19 年度度基盤研究（B）成果報告書、pp61～84

かりまたしげひさ（1999）「宮古諸方言の動詞「終止形」の成立について」『日本東洋文化論集』第５号、pp27～51

かりまたしげひさ（1989）「琉球方言における「第三中止形」について」『沖縄言語研究センター資料№81』

高橋俊三（1991b）『おもろさうしの動詞の研究』武蔵野書院

名嘉真三成（1982）「琉球宮古方言の動詞の接続形」『沖縄文化』58 号

本永守靖（1973）「平良方言の動詞の活用」『琉球大学教育学部紀要』第 17 集第 1 部、pp 27～41

４　宮古方言の特徴

宮古諸方言の音声実現に関する予備的検討

松浦　年男

1　はじめに

1.1　研究の背景と目的

宮古諸方言では，(1a)に示すような語中での重子音の他に，(1b)のような語頭での重子音や(1c)のような異なる子音の連続が見られる（(1)に関しては方言を【】で示す）。

(1)　a.　[avva]（油）【伊良部・久貝】，[mizza]（韮）【久貝】
　　b.　[ffa]（子供）【久貝】，[ssï]（巣）【久貝】
　　c.　[sta]（舌）【伊良部】，[mta]（土）【伊良部・久貝】

ペラール(2007)や Shimoji (2008)では，(1b)のような重子音について，宮古方言が持つ 2 モーラの最小性制約（Minimality Constraint）に違反しないよう(2a)のように 2 つのモーラに分節化されると考えている。(1c)についても最小性制約を守るには(2b)のように分節化されると考えるのが妥当だろう。

(2)　最小語制約に反しない分節化
　　a.　[f.fa]，[s.sï]
　　b.　[s.ta]，[m.ta]

それではこれらの音響的な実現についてはどうだろう。

まず，(1b)のような語頭重子音について，たしかに音韻論的な分節としては(2)が妥当であろう。それでは，語頭重子音は語頭単子音と比べたとき，音声的な違いはないのだろうか。[ffa]における[ff]の持続時間は，単独で音節初頭に出てくる[f]（例 : [fau]）より長いことが期待できる。もちろん音声表記にも現れているとおり，重子音は単子音に比べ長く発音されるし，聴覚印象でもそのとおりである。また，標準日本語（東京方言）でも単子音と重子音の比率はおおよそ 1:2～3 程度だと報告されている（Han 1962 など）ことから，系統的に近い関係を持つ宮古方言でも同様であることは想像に難くない[1]。だが，たとえそうだとしても，確認することに意義はあるだろう。

[1] ただし, 秋田方言や鹿児島方言といったシラビーム方言では単子音と重子音の比率は標準語ほど長くないという指摘がある。

次に，[m.ta]の[m]のような語頭の子音連続については，無声化母音を含む場合を除いて日本語にはなく，またその音響音声学的な実現についての報告もない。Shimoji (2008)などはこういった子音も単独で 1 モーラを持っていると考えている。そうすると，単独で音節初頭に出てくる[m]と音響的な違いがあるということは十分に考えられる。Sato (1993)によれば，音節末尾（＝撥音）の[n]や[m]と音節初頭の[n]や[m]を比べたとき，日本語では音節末尾の[n]や[m]の方が持続時間が長くなるが，英語や朝鮮語では違いがほとんど見られないという。Sato (1993)はこの違いを言語間のリズム構造の違い（日本語＝モーラリズム，英語＝強勢リズム，朝鮮語＝音節リズム）に帰しているが，これを宮古方言に当てはめたとき，宮古方言がモーラリズム言語であるならば日本語と同様の結果が期待される。

最後に，(1a)のような有声阻害音が重子音になっているパターンについて，標準日本語ではベッドやキッズのような外来語においてのみ見られる[2]。また，2.2 節で紹介するが，音響音声学的な実現を見ると，標準日本語においてこのタイプの重子音は単子音の単なる延長ではない。宮古方言の有声阻害重子音は日本語のそれと同じような音声実現をするのだろうか。

本稿ではこのような時間制御や声帯振動といった問題に関して，合同調査での録音資料に基づき検討を行う。使用するデータは伊良部方言[3]と久貝方言であるが，必要に応じて他方言にも言及する。

１.２　分析の方法

国立国語研究所の合同調査において収集した録音資料を用いる。録音資料は praat（Boersma and Weenink 2009）によってスペクトログラムを表示させ，視認によってラベル付けを行い，筆者の作成したスクリプトで各分節音の持続時間を測定した。分節音の同定は基本的にフォルマント，ボイスバー，雑音成分などに基づいて行った。ただし，発話末の母音など同定が難しいものもあった。その場合はスペクトログラムのダイナミックレンジを 30dB に設定し，2000 から 3000Hz に明確なエネルギー成分が見られる部分を母音とした。

両方言の話者情報を(3)と(4)に示す。

(3)　話者情報

a.　伊良部方言：1924 年生，男性

b.　久貝方言：1926 年生，男性

子音の持続時間を計測するとき，特に重子音と単子音の比較を行うならば，後続母音の持続

---

[2] 日本語の方言まで広げると，八丈方言（馬瀬 1961），安島方言（新田 2011）や，九州地方の広い範囲（鹿児島方言（上村 1957），佐賀方言（藤田 2003），長崎県口之津方言（南 1959））などでは，漢語や固有語にも見られる。

[3] 厳密には，伊良部島の字伊良部の方言であるが，本稿では伊良部方言と称する。

時間やそれらとの比率（正規化時間）を計測することが望ましいが，今回のデータでは後続母音が発話末になっていて，正確な長さを規定するのが難しい場合があった。そのため，本稿では子音の絶対的な持続時間についてのみ考察する。また，本来ならばこのような分析を行うには，複数の話者による多くの発話によるデータを平均化するのが望ましい。だが，本稿では各方言 1 名の話者で，多くは 1 回の録音資料に基づいている。この点において本稿はまだ予備的な検討であり，再現性を含め今後検討し直す必要がある。

２　重子音

本節では宮古方言の重子音について，語中と語頭に，さらに語中については無声と有声に分け，それぞれの持続時間を中心に考察を行う。以下ではまず，[t]と[tt]，[ts]と[tts]の持続時間を分析する。続いて，有声阻害重子音として[vv]や[zz]について，持続時間と雑音成分，ボイスバーに注目して分析を行う。なお，[vv]については伊良部，久貝以外の方言についても考察の対象に含める。

２.１　無声の語中重子音

２.１.１　[t]と[tt]

伊良部方言では，[t]と[tt]の最小対として，[bata]（お腹）と[batta]（脇の下）がある。図 1 にこれらの音声波形とスペクトログラムを示す。

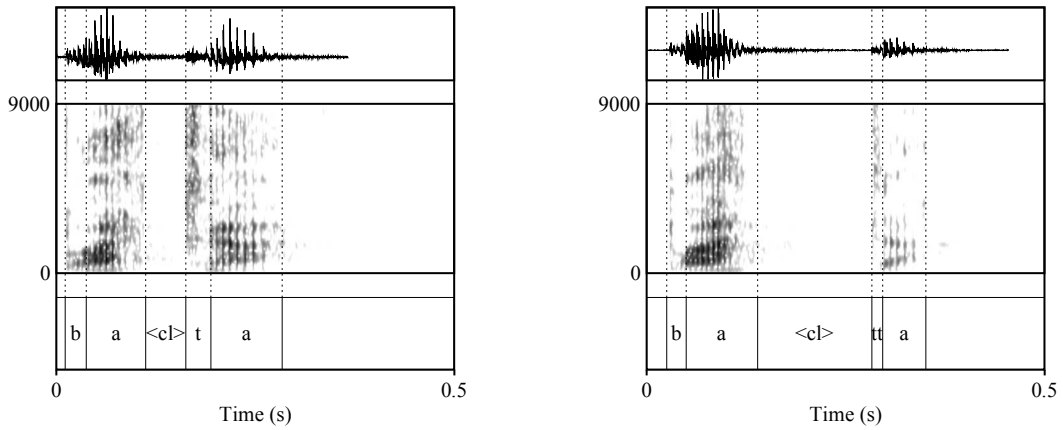


図 1：[bata]と[batta]の音声波形とスペクトログラム（伊良部）

この図からも明らかなとおり，[t]と[tt]の大きな違いは子音部分の持続時間である。閉鎖部分（図 1 で<cl>としている部分）の持続時間は，[t]が 50 ミリ秒，[tt]が 143 ミリ秒（比率 1:2.86）だった。図 1 では後続母音についても長さの違いが出ている（[bata]では 89 ミリ秒，[batta]では 54 ミリ秒）が，他の単語では見られない。最小対ではないが，[budzati]（叔父さんたち）と[asatti]

（明後日）という対で検討してみよう。これらの単語の音声波形とスペクトログラムを図 2 に示す。

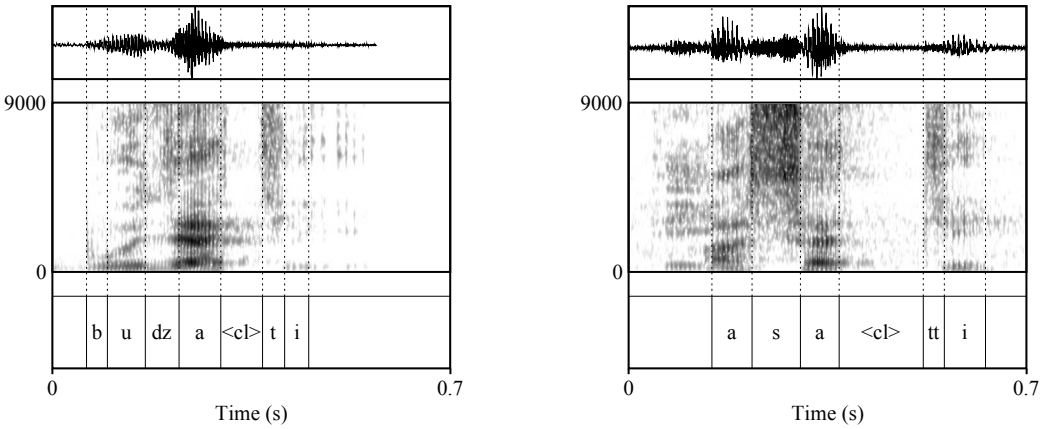


図 2：[budzati]と[asatti]の音声波形とスペクトログラム（伊良部）

この図を見ると，[t]と[tt]の違いとして際立っているのは，やはり子音部分の持続時間（[t]が 73 ミリ秒，[tt]が 148 ミリ秒，比率 1:2.02）である。後続母音の持続時間は，[budzati]では 42 ミリ秒，[asatti]では 72 ミリ秒となっており，[bata]と[batta]の場合と逆になっている。したがって，ここでは重子音における後続母音の短縮は例外的，偶発的なものと考えておいた方がよいだろう。

２.１.２　[ts]と[tts]

久貝方言には[itsa]（板）と[attsa]（明日）という対がある。図 3 にこれらの音声波形とスペクトログラムを示す。

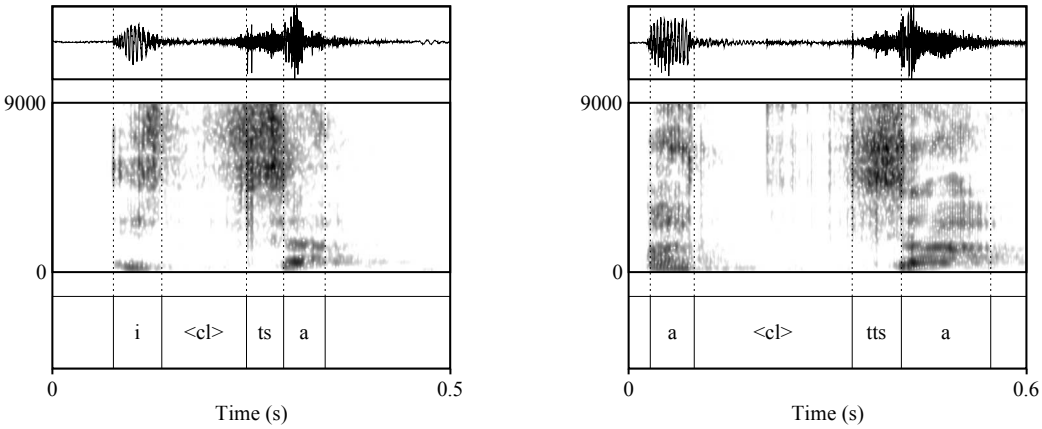


図 3：[itsa]と[attsa]の音声波形とスペクトログラム（久貝）

この図からも明らかなとおり，[ts]と[tts]の違いとして際立っているのは閉鎖の持続時間である。閉鎖部分の持続時間は，[ts]では 96 ミリ秒（*SD*=9，*n*=2）だったのに対し，[tts]では 238 ミリ秒（比率 1:2.47）であった。

２.２　有声の語中重子音

宮古方言では，固有語と思われる語彙でも[zz]や[vv]といった有声阻害重子音が見られる。日本語でも外来語で有声阻害重子音は見られる。しかし，日本語における有声阻害重子音は必ずしも単子音がそのまま長くなったものとは限らず，(4)の 2 つの特徴を持っている。

(4)　a.　有声摩擦音の重子音はない。単子音において摩擦音で現れるものであっても，重子音においては破擦音（[dz]）または破裂音（[b, g]）になる。
　　b.　声帯振動は閉鎖の前半部分にのみ見られる。

まず，(4a)について，例えば日本語東京方言においてズの/z/は「傷」のように単子音ならば摩擦音で実現することが多いのに対し[4]，「キッズ」のように重子音になると長い閉鎖を含む破擦音になる。これらの音声波形とスペクトログラムを図 4 に示す（録音は 30 代男性，東京方言話者によるもの）。

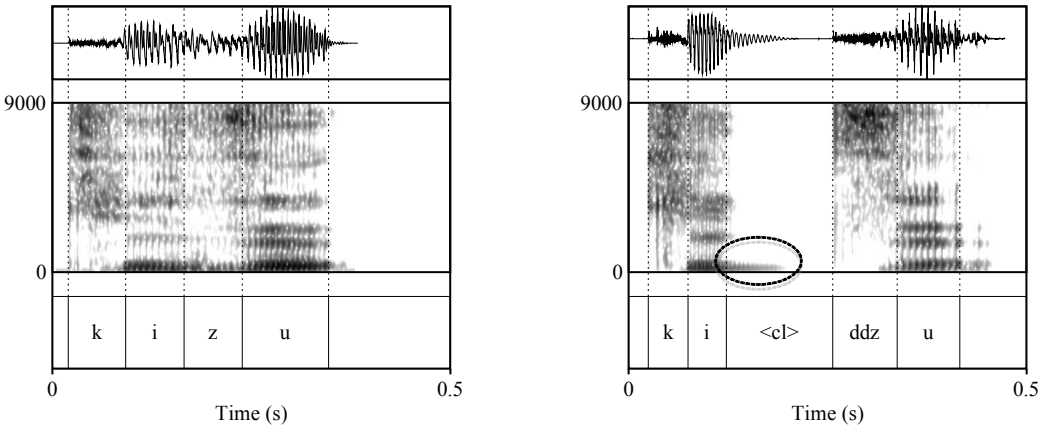


図 4：「傷」（左）と「キッズ」（右）の音声波形とスペクトログラム

次に，(4b)に関して，東京方言では有声阻害重子音の声帯振動は子音部分全体ではなく，前半部分のみに見られることが多い（Kawahara 2006 など）。図 4 右においても，閉鎖部分でのボ

[4] この記述は厳密には正しいとは言えないが，分かりやすさを優先してこのように記した。日本語の有声阻害音の音声実現の詳細に関しては Maekawa (2010)や前川(2010)を参照のこと。

イスバー（低周波域のエネルギー，丸で囲んで示している）は前半でしか見られない。

以下では[zz]と[vv]について，持続時間の他に，(4)に挙げた特徴が見られるかを検討する。

２.２.１　[z]と[zz]

語中において [z]と[zz]の対立する例として，久貝方言の[aːza]（父）と[mizza]（韮）がある。図 5 に音声波形とスペクトログラムを示す。

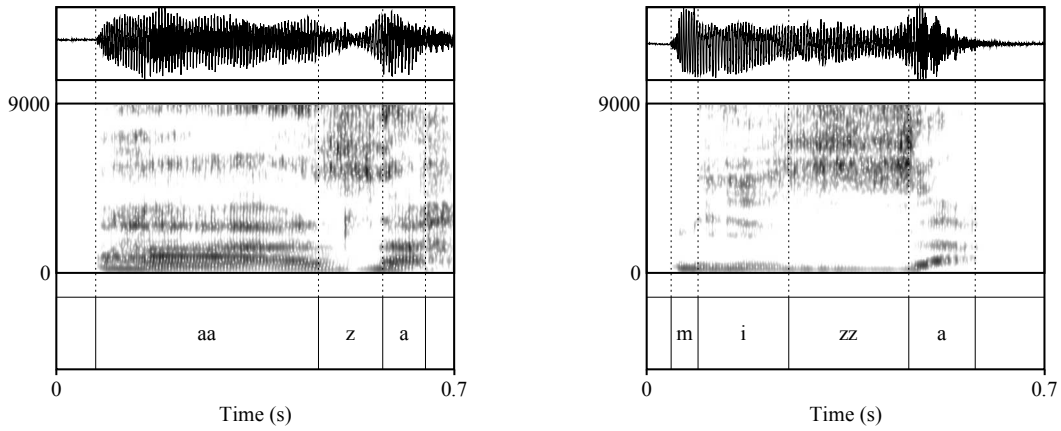


図 5：[aːza]と[mizza]の音声波形とスペクトログラム（久貝）

図 5 から明らかなとおり，[z]と[zz]の違いとして際立っているのは，子音部分の持続時間である。持続時間を計測したところ，[z]は 74 ミリ秒だったのに対し，[zz]は 173 ミリ秒（*SD*=29, *n*=3），比率にすると 1:2.33 であった。

次に，雑音成分とボイスバーを見てみると，[zz]であっても高い周波数の雑音成分が見られる。ここから，重子音であっても摩擦が持続していることが分かる。また，重子音中のボイスバーも観察される。ここから，日本語のように重子音の前半のみ声帯が振動するのではなく，重子音の発音中も声帯は振動していることが分かる。

２.２.２　[vv]

宮古方言には標準日本語にはない[vv]という音がある。その例として，[avva]（油）と[kuvva]（ふくらはぎ）がある。以下では伊良部方言，久貝方言だけでなく，池間方言，保良方言も対象にして検討していく。なお，[vv]に対応する[v]が調査データにないため，ここでは持続時間に関する検討は行わない。

まず，伊良部方言における[avva]と[kuvva]の音声波形とスペクトログラムを図 6 に示す。

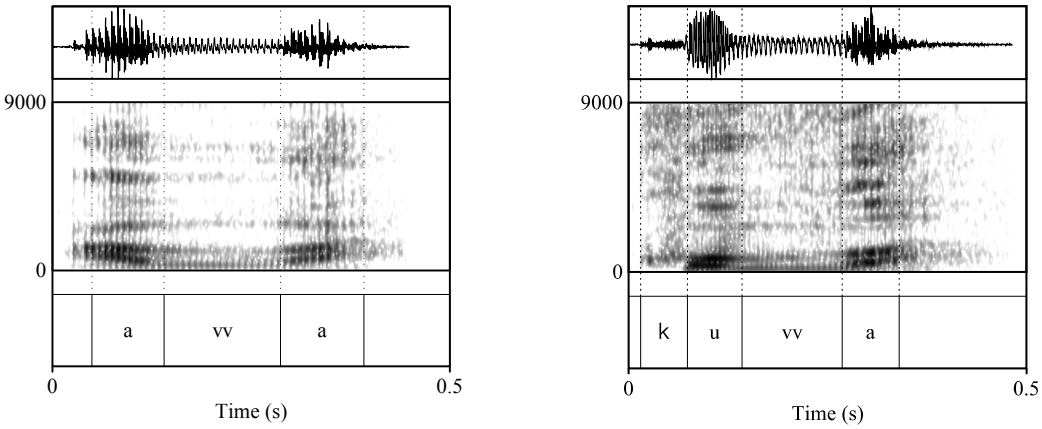


図 6：伊良部方言における[avva]（左）と[kuvva]（右）の音声波形とスペクトログラム

図 6 における摩擦の雑音成分を観察すると，[avva]では弱くなっているが，[kuvva]ではそれよりは強く出ており，摩擦が持続していることが分かる。また，どちらの語もボイスバーが全体にわたって見られることから，重子音の発音中も声帯は振動していることが分かる。

久貝方言における[avva]と[kuvva]の音声波形とスペクトログラムを図 7 に示す。

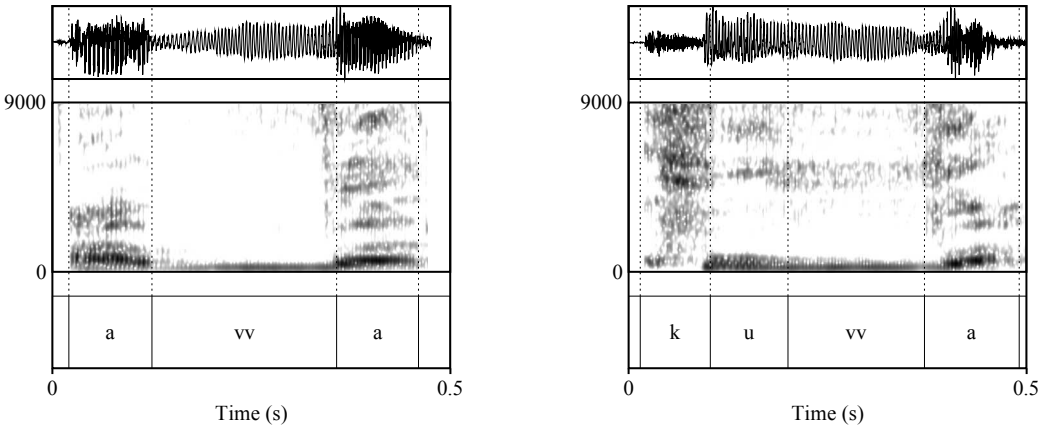


図 7：久貝方言における[avva]と[kuvva]の音声波形とスペクトログラム

図 7 における摩擦の雑音成分を観察すると，[avva]では弱くなっているが，[kuvva]ではそれよりは強く出ており，摩擦が持続していることが分かる。また，どちらの語もボイスバーが全体にわたって見られることから，重子音の発音中も声帯は振動していることが分かる。

池間方言における[avva]と[kuvva]の音声波形とスペクトログラムを図 8 に示す。

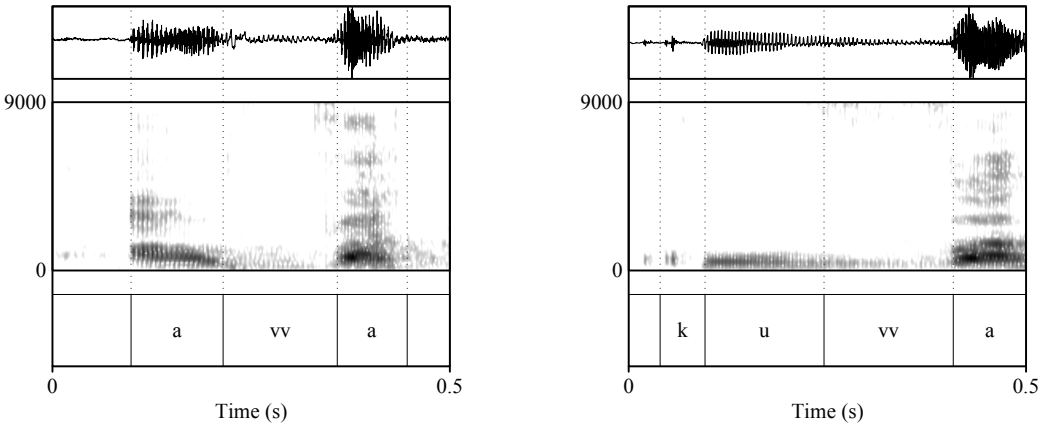


図 8：池間方言における[avva]と[kuvva]の音声波形とスペクトログラム

図 8 における摩擦の雑音成分を観察すると，[avva]，[kuvva]ともにかなり弱い。一方，どちらの語もボイスバーが全体にわたって見られる。

保良方言における[avva]と[kuvva]の音声波形とスペクトログラムを図 9 に示す。

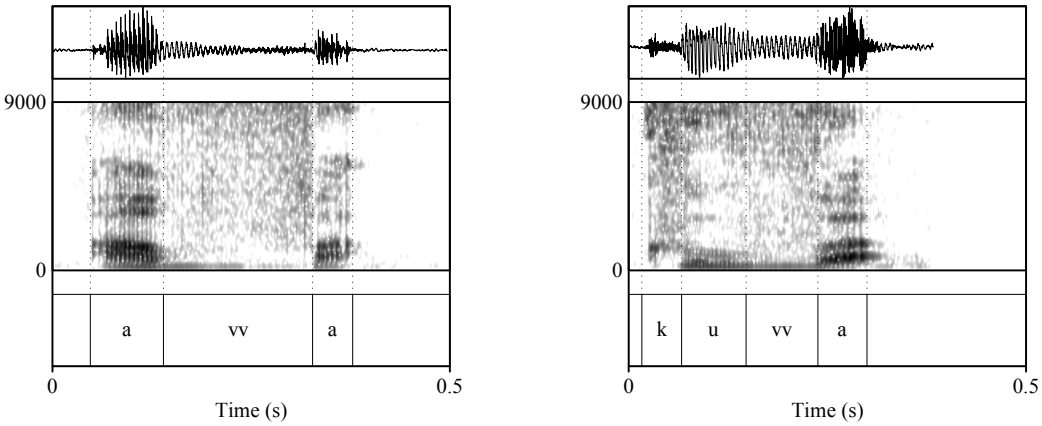


図 9 保良方言における[avva]と[kuvva]の音声波形とスペクトログラム

図 9 における摩擦の雑音成分を観察すると，どちらの語でも強く出ている。一方，ボイスバーに関して，[kuvva]では全体にわたって出ているが，[avva]では後半部分が弱くなっている。これは[avvamtsu]（油味噌）の発話においてより顕著に見られた。図 10 に[avvamtsu]の音声波形とスペクトログラムを示す。なお，この単語は 3 回の発話があったので全てについて示す。

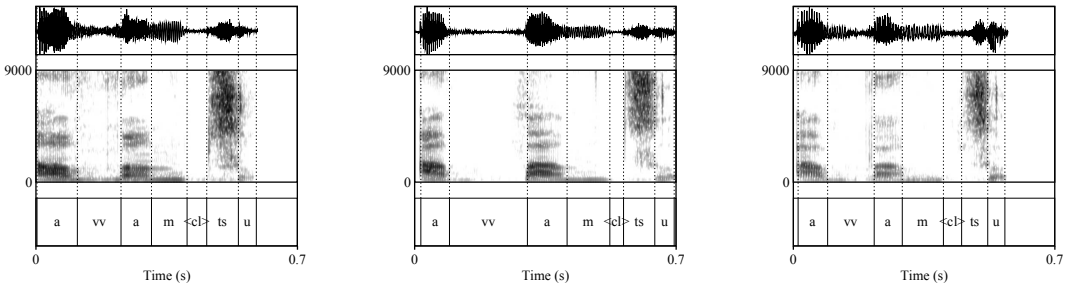


図 10：保良方言における[avvamtsu]の音声波形とスペクトログラム
（左：1 回目，中：2 回目，右：3 回目）

まず摩擦の雑音成分について観察すると，どの発話でも摩擦はかなり弱く出ている。次にボイスバーについて観察すると，1 回目では子音部分全体に見られるが，2 回目，3 回目では後半部分がなくなっている。聴覚印象でも 2 回目は[vf]のように聞こえる。持続時間を見ると，1 回目は 116 ミリ秒，2 回目は 208 ミリ秒，3 回目は 124 ミリ秒と 2 回目が長くなっているので，ボイスバーもこのことが関係しているのかもしれない。しかし，これが話者固有の傾向なのか，それとも地域の特徴として持っているものなのか，今後の検討を要する。

以上の観察結果を(5)にまとめる。

(5)　a.　どの方言でも摩擦は持続しており，破擦音や破裂音には変化しない。
　　b.　伊良部，久貝，池間方言では全体にわたって声帯振動がある。
　　c.　保良方言では後半部分の声帯振動がなくなることがある。

このように，雑音成分はほぼ一貫して見られる一方，声帯振動（ボイスバー）は保良方言において後半部分で無くなることがある。

２.３　語頭の重子音

宮古方言には[ffa]や[vva]といった重子音を語頭に持つ単語がある。このとき，重子音と単子音は長さがどの程度異なっているのだろうか。この問題は，音節ないしはモーラの等時性，つまりリズムの問題を考える上でも重要であろう。以下では[nn]，[ff]，[ss]，[vv]について考察する。

２.３.１　[n]と[nn]

[n]と[nn]が語頭で対立する例として伊良部方言の[nada]（涙）と[nnami]（今）を挙げる。図 11 に音声波形とスペクトログラムを示す。

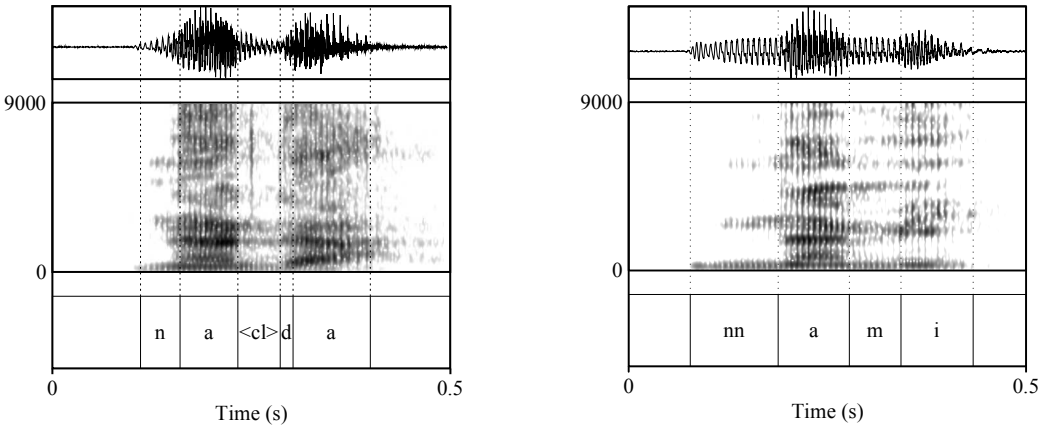


図 11：[nada]と[nnami]の音声波形とスペクトログラム（伊良部）

この図からも明らかなとおり，[nn]が[n]より長く実現している。持続時間は，[n]が 49 ミリ秒，[nn]が 110 ミリ秒（比率 1:2.24）だった。

２.３.２　[f]と[ff]

語頭において[f]と[ff]の対立する例として，[funi]（船）と[ffa]（子供）を挙げる。図 12 に音声波形とスペクトログラムを示す。

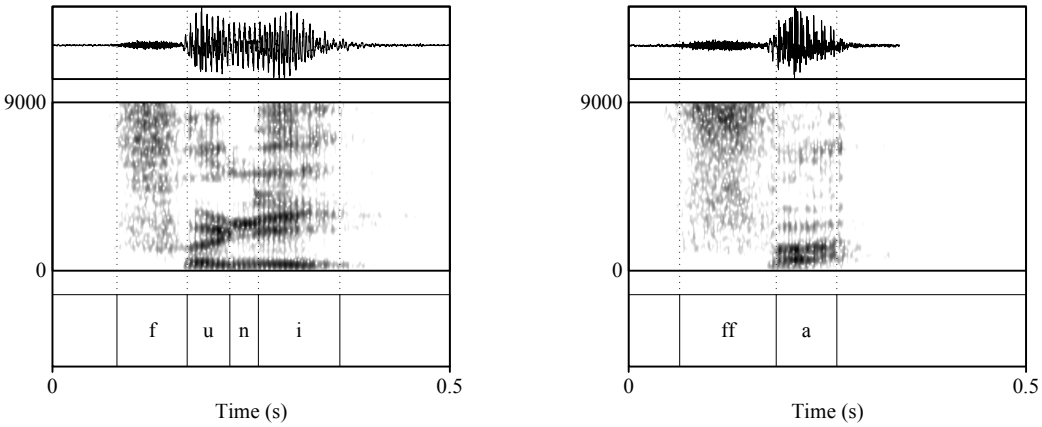


図 12：[funi]と[ffa]の音声波形とスペクトログラム（伊良部）

この図からも明らかなとおり，　[ff]の方が[f]より長く実現している。持続時間は，[f]が 92 ミリ秒（*SD*=4.5, *n*=2，伊良部），108 ミリ秒（久貝），[ff]が 135 ミリ秒（伊良部），143 ミリ秒（久貝）で，単子音と重子音の比率は 1:1.45（伊良部），1:1.32（久貝）となった。[n]と[nn]や語中と比べると単子音と重子音の比率が小さい点は注意を要する。

２.３.３　[s]と[ss]

語頭において [s]と[ss]の対立する例として，久貝方言の[sïba]（唇）と[ssï]（巣）を挙げる。図 13 に音声波形とスペクトログラムを示す。

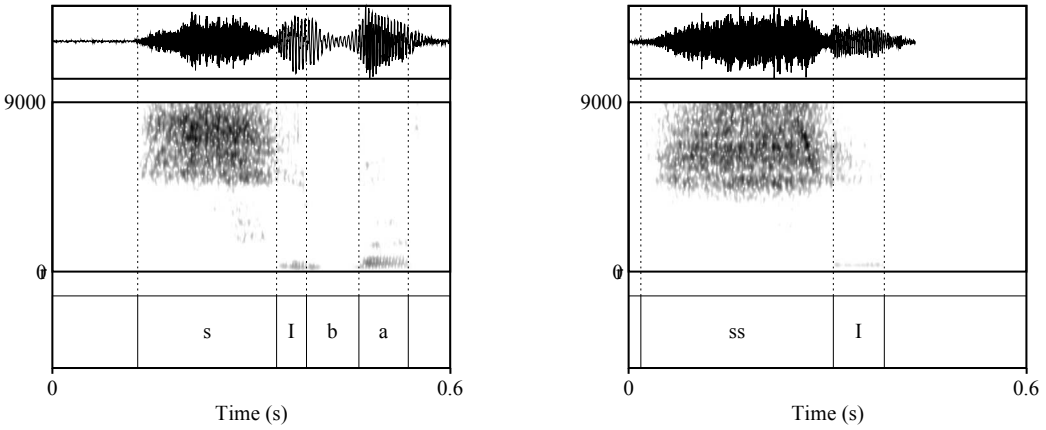


図 13：[sïba]と[ssï]の音声波形とスペクトログラム（久貝）

この図から分かるとおり，[ss]の方が[s]より長く実現している。持続時間は，[s]が 190.3 ミリ秒（*SD*=16.93，*n*=3）だったのに対し，[ss]は 289 ミリ秒（比率 1:1.51）であった。

２.３.４　[v]と[vv]

語頭において [v]と[vv]の対立する例として，久貝方言の[vaa]（豚）と[vva]（お前）を挙げる。図 14 に音声波形とスペクトログラムを示す。

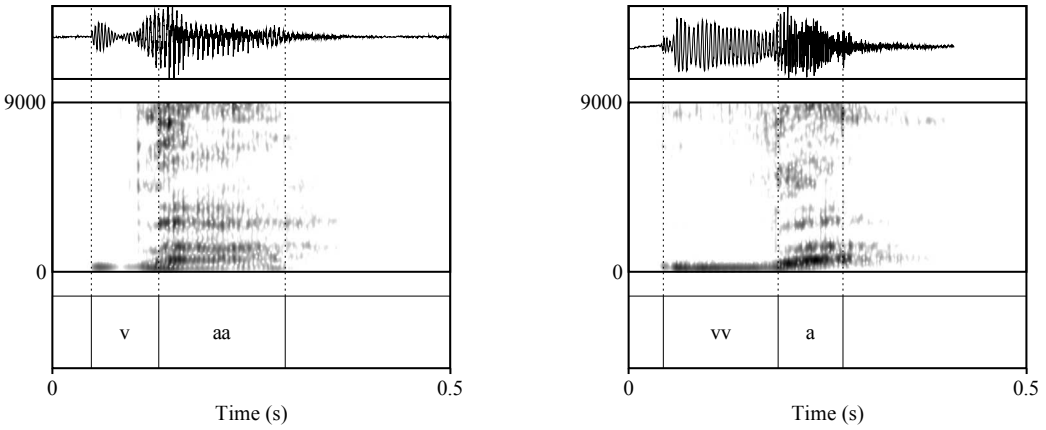


図 14：[vaa]と[vva]の音声波形とスペクトログラム（久貝）

この図から分かるとおり，[vv]の方が[v]より長く実現している。持続時間は，[v]が 84 ミリ秒

（*SD*=0.00，*n*=2）だったのに対し，[vv]は 143 ミリ秒（比率 1:1.70）であった。

以上の結果を見ると，いずれにおいても重子音は単子音より長い持続時間でもって実現していたが，比率は[n]と[nn]において 1:2.24 だったのに対して，[ff]，[ss]，[vv]では 1:1.3-1.7 と小さくなっていた。単子音と重子音の比率が小さい場合，知覚において混同を避けるためには他の要素，例えば後続母音の長さを変えるなどの調整が必要になってくる。そういったことが起こっているのか，検討が必要だろう。

3　子音連続

宮古方言では[mta]のように語頭で子音連続を含む単語がある。このとき、[m]は音節内でどのような位置を占めるのだろうか。[t]と同じように初頭子音（onset）なのか，それとも末尾子音（coda）ないしは音節主音（nucleus）なのだろうか。これを決定するためには（形態）音韻論的な交替を見る必要である。しかし，一方で音響音声学的な手がかりもあることは十分に考えられる。そこで，このときの[m]を単独で音節初頭や音節末尾に出てきた場合と比較することからこの問題について考える。

今回の調査データより，[m]が語頭にあり，かつ子音が後続する単語を(6)に挙げる。

(6)　語頭における[m]＋子音の連続（伊良部）

a.　無声阻害音が後続する語[5]

mkiiN，mta，msu

b.　[n]が後続する語

mmna，mmni，mnii，mni，mnapskaï

[m]の部分の持続時間を計測するのに同じ鼻音である[n]が後続する単語だと，同時調音的になっていることもあり，[m]そのものの時間を同定することが難しい。そのため，この節では[m]に無声阻害音が後続する場合のみに限定して分析と考察を行う。

伊良部方言における [maʊkʲaː]（正面）と[mta]（土）の音声波形とスペクトログラムを図 15 に示す。

[5] [m]が重子音になってさらに[ts]に後続した[mmtsI]という語もあるが，ここでは分析の対象から外す。

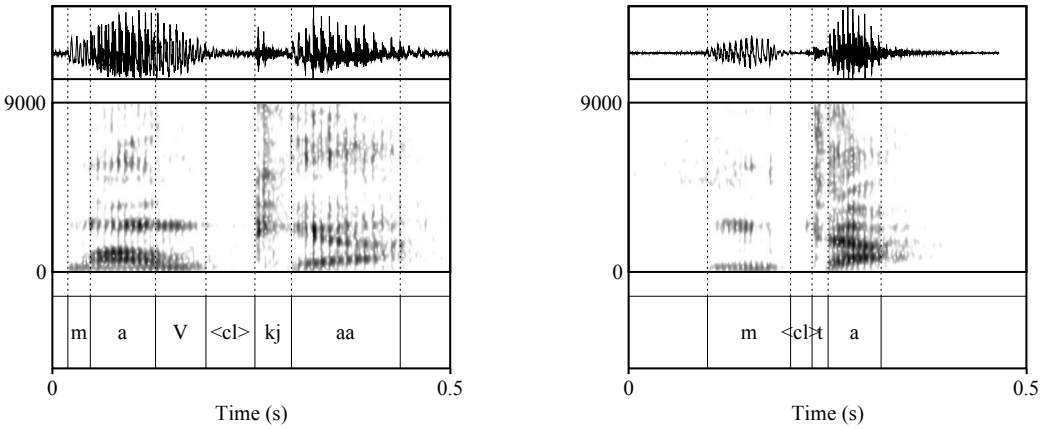


図 15：[maʊkʲaː]と[mta]の音声波形とスペクトログラム（伊良部）

この図から明らかなように，子音連続の[m]は単子音の[m]に比べ長く実現している。この差が一般的なものかを確かめるべく，今回ラベル付けを行ったデータから，[m]を含むものを抜き出し，それらを音節内の位置によって分類して比較する。対象とした単語を(7)に挙げる。

(7)　調査語群

a.　子音連続：[msu]，[mta]，[mkiiN]

b.　音節初頭：[amambuni]，[maxaï]，[umatsï]，[nnami]，[nufumunu]，[ɕɕanamunu]，[mizza]，[midzï]，[maʊkʲaː]

c.　音節末尾：[amambuni]，[avvamtsu]，[umku]

これらの単語に現れる[m]について持続時間を計測した結果を(8)に示す[6]。

(8)　[m]の持続時間

位置	平均（*SD*）	最大値	最小値	サンプル数
子音連続	77.8（4.3）	100.3	73.5	3
音節初頭	51.4（15.9）	81.6	28.2	12
音節末尾	86.7（18.7）	114.4	57.7	6

この表から持続時間は音節初頭＜子音連続＜音節末尾の順で長くなっている。差を比べると，子音連続と音節末尾は 8.9 ミリ秒，子音連続と音節初頭は 26.4 ミリ秒と音節末尾の方が小さく出ている。サンプルも少なく，標準偏差も大きいため，決定的なことは言えないが，この結果

[6] [mizza]の発話のうち 1 回は 177 ミリ秒だったが，平均+2SD を超えたためデータから除外した。

から考えると，今の段階では子音連続に現れる[m]は後続子音と異なる音節に属すると解釈するのが妥当だろう。

４　おわりに

本稿では，宮古方言の時間制御について検討した。その結果，重子音は単子音に比べ持続時間が長いことが明らかになった。重子音と単子音の持続時間の比率を(9)にまとめる。

(9)　単子音と重子音の持続時間の比率

a.　語中

子音	比率
[t]と[tt]	1:2.02-2.86（伊良部）
[ts]と[tts]	1.2.47（久貝）
[z]と[zz]	1.2.33（久貝）

b.　語頭

子音	比率
[n]と[nn]	1.2.24（伊良部）
[f]と[ff]	1.1.45（伊良部） 1.1.32（久貝）
[s]と[ss]	1.1.51（久貝）
[v]と[vv]	1:1.70（久貝）

この結果から，語中に比べて語頭では単子音と重子音の持続時間の比率が小さくなる傾向が見て取れる。この違いがどの程度安定したものか検討する必要があるだろう。

また，[zz]や[vv]といった有声阻害重子音が語中にある場合，摩擦のまま持続し，声帯振動も全体にわたって保たれるという点で標準日本語と異なることも明らかになった。

さらに，子音連続における子音が単子音と比べて持続時間が長く実現した。持続時間の比率を(10)にまとめる。

(10)　子音連続と単子音の持続時間

子音	比率
[m]	1:1.42（伊良部）

今後はより多くのデータに基づいて今回得られた知見を検証する必要がある。特に，1 節でも述べたとおり，本稿で扱ったデータの録音はほとんどが 1 回の発話で，また，単語単独の発話で文に埋め込んだものではない。したがって，持続時間だけでなく調音動態についてより詳

細を明らかにするには，これらの点を改めた上での分析が必要である。さらに，本稿では単音単位での持続時間に関する分析を主としたが，単語全体の持続時間を検討するなどして，宮古方言のリズム単位がモーラなのか否かについて検討する必要がある。

謝辞

本稿を作成する過程で下地理則氏より貴重な助言をいただきました。記して感謝申し上げますとともに必ずしも全ての助言を反映できていない点があることをお断りしておきます。もちろんのことながら，本稿における一切の誤りや誤解は全て筆者の責任によるものです。なお，本研究は科学研究費補助金・若手研究(B)「九州地方の二型音調方言における共通語音声の受容に関する実証的研究」（課題番号 22720164）による成果の一部です。

参考文献

青井 隼人 (2012)「南琉球宮古方言の音韻構造」峰岸 真琴，稗田 乃，早津 恵美子，川口 裕司（編）『コーパスに基づく言語学教育研究報告』8：99-112.

Boersma, Paul and David Weenink (2009) Praat: doing phonetics by computer (Version 5.1.11) [Computer program].

藤田 勝良 (2003)『佐賀県のことば』明治書院.

上村 孝二 (1957)「南九州方言音の分布を中心に：内破音・鼻音化その他」『文研報告』6

Han, Mieko S. (1962) The feature of duration in Japanese. *The study of sounds* 10: 65-79.

Kawahara, Shigeto (2012/forthcoming) The phonetics of obstruent geminates, *sokuon*. Draft to appear in *The Mouton handbook of Japanese language and linguistics*.

Kubozono, Haruo and Francis Michinao Matsui (2003) Phonetic vs. phonological control of speech: Closed syllable vowel shortening in Japanese dialects. *Proceedings of International Conference on Phonetic Sciences*, Barcelona.

前川 喜久雄 (1984)「秋田方言促音の持続時間：「寸づまり」の実態と成因」広島方言研究所『方言研究年報』27: 231-247.

Maekawa, Kikuo (2010) Coarticulatory reinterpretation of allophonic variation: Corpus-based analysis of /z/ in spontaneous Japanese. *Journal of Phonetics* 38(3): 360-374.

前川 喜久雄 (2010)「日本語有声破裂音における閉鎖調音の弱化」『音声研究』14(2): 1-15.

馬瀬 良雄 (1961)「八丈島方言の音韻分析」『国語学』43

南 不二男 (1959)「長崎県口之津方言の音韻体系」『国語学』36

新田 哲夫 (2011)「福井県三国町安島方言におけるmaffa≪枕≫等の重子音について」『音声研究』15(1): 6-15.

ペラール，トマ (2007) 「宮古諸方言の音韻の問題点」第2回琉球語ワークショップ配付資料（2007年9月9日）

Sato, Yumiko (1993) The durations of syllable-final nasals and the mora hypothesis in Japanese. *Phonetica* 50: 44-67.

Shimoji, Michinori (2008) *A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language*. Doctoral dissertation, ANU.

宮古群島若年層による方言音声認識の実態
—老人（ウイプストゥ）と若者（バカムヌ）の間—

中島　由美・徳永　晶子・諸岡　大悟

1. はじめに

宮古群島域に多く聞かれる特徴的な音声については、これまでにさまざまな報告、分析が行われてきた。なかでも注目されてきたのは、本土方言の *i に対応するものとして、舌端部が歯茎に接近することにより著しい摩擦噪音を伴う母音が聞かれることであろう。これを音声学的にどう定義すべきか、あるいは音韻論的にどう記述すべきかなどの問題提起や、さらに実験音声学的分析を活用した取り組みなども行われている。そうした中で、本プロジェクトによる今回の調査（以下「本調査」とする）によって、統一的調査票によりある程度まとまった音声データが新たに得られ、宮古方言の全容を視野に入れた分析が容易になったことから、これまで我々が実施してきた若年層の言語行動調査に本データを活用することを計画した。いまだ実験的な試みに過ぎず、方法等検討すべきことは多いが、消滅危機方言の保存・継承に向けて若年層の方言音声認識の実態が少しでも捉えられればと考えている。

一橋大学社会学部中島ゼミナールでは、2008 年より宮古島・伊良部島を対象として継続的に言語生活実態調査を行ってきた。比較対象のため一部老年層も含めているが、主として高校生を中心とする若年層を対象としている。アンケート調査や聞き取り調査を組み合わせて工夫を重ねてきたが、若年層が、本土は勿論のこと沖縄本島とも異なる音声特徴をどのように認識しているのかについては、常に関心を持ちながらもなかなか取り組む方法が定まらなかった。

そこで、本調査のデータを活用した実験的試みとして、まず手始めに 2011 年 11 月に、小規模ながら聞き取り用の項目をアンケート調査の中に含め、方向性を探ることにした。さらにその結果を受けて、音声聞き取りに特化して規模を少し拡大した調査を 2012 年 3 月に実施した。ここでは現時点までに得られた結果について報告し、今後の方向を検討するための材料としたい。

2. 調査の概要

A. 若年層による宮古島方言音声聞き取りの実態調査 1
B. 若年層による宮古島方言音声聞き取りの実態調査 2

2.1　調査 1 は 2011 年 11 月に、宮古島市における県立高校 2 校の協力を得て行った、高校生の言語生活実態調査の一部である。調査はアンケート調査と面接調査を組み合わせたものであるが、このうちのアンケート調査の中に本調査で得られた音声データから特徴的音声を含むものを 5 個選んで高校生に音声を聞いてもらい、1) どのような音として聞こえるか（カナ

で筆記するよう指定、片仮名 / 平仮名は自由)、2) 意味を知っているか、について筆記してもらった。また比較のため、2012 年 3 月に沖縄本島中部の高校の協力を得て、同じ調査項目についてアンケート調査を実施した。各高校をここでは A 高校、B 高校（以上宮古島市)、C 高校（浦添市）とする[1]。3 校併せて 130 名（男子 79 名、女子 51 名）の回答が得られた。

調査 2 は、調査 1 の結果を踏まえ、規模を少し拡大して音声聞き取りに特化したもので、同じく本調査のデータより 50 項目を選び、2012 年 3 月に同じく宮古島市の高校で実施した。50 個の書き取りは通常のアンケート調査と違って生徒にもかなりの負担を強いるものであるため、協力者は希望者を募る形で学校側に依頼したところ、17 名（男子 2、女子 15）の協力を得ることができた。以上 2 つの調査の概要について次項で示す。

2.2　調査項目について

調査 1 では表 1 に示すような 4 個の語と 1 個の文データを用意した。選択のポイントは標準語音声との相違の目立つ特徴的音声、即ち、1) 摩擦噪音を伴う中舌母音、2) 子音（[m̩][l̩] など、以下簡略に成節的 m、同 l とする)、3) その他特徴的な子音（[f], [v] など)、とした。音声データは本調査における音韻調査から、録音状態の良いもの、発音の明確なものなどを選んだ。1 個の文データも音韻項目調査の中で例文として得られたものである。なお、この段階では音声の地域差については特に考慮していない。

表 1　調査 1 の聞き取り項目

	項目	音源の地点名
1	頭	伊良部
2	肝	久貝
3	ミミズ	保良
4	握り飯	伊良部
5	子供が生まれる	与那覇

調査 2 では項目数を 50 に増やした。選択のポイントは調査 1 と基本的に同じであるが、本調査の結果から地域差が明らかであったものについては、音源の条件がよければなるべく特徴ごとのサンプルを選択するようにした。例えば *-ri に対応するものについて見ると、本調査の実施地点からだけでもほぼ 3 種類の変種が得られている。即ち、摩擦噪音の著しい久貝など宮古島南西部、母音的な狩俣や池間、成節的 l が聞かれる伊良部島・国仲などである。そこで、こうした地域差が高校生の聞き取りにどのように反映されるのかを見るため、*-ri の含まれる項目「頭」については、久貝、国仲、伊良部 3 地点から音源を選んだ。地点によっては該当項目の回答が得られなかったものや、録音状態のため適当でないものもあり、まんべんなく音源を選ぶことはできなかった。このほか特徴的と思われる音声や、意味理解を確認するための語など、42 個の語項目を選択し、同じ意味の語、同じ地域等が続かないよう配列を工夫した。またこれらのほかに、本調査の文法項目調査で得られたデータから短文を 8 個追加した。これは語と文の間で方言の認識がどう変わるのかを知るためであるが、選択に際しては上記語項目選択のポイントと同じ音声特徴にも注目した。

1　調査にご協力いただいたのは、沖縄県立宮古高等学校、同伊良部高等学校の 2 校（以上宮古島市）と、同浦添工業高等学校（浦添市）の 3 校である。ご協力に対し心より感謝申し上げる。なお、調査 1 は一橋大学社会学部中島ゼミナールに所属する学部生 14 名、及び大学院生 1 名、鹿児島志學館大学学部生 3 名が分担して行った。調査 2 は、中島と本稿筆者 2 名の大学院生が分担して行った。

調査では音源を一斉に 3 回ずつ聞いてもらい、書き取ってもらうようにした。表記は仮名（調査 1 と同じく平仮名、片仮名どちらも可）とした。右の表 2 はことなり語ごとの語項目と選択した地点、表 3 は文項目と音源の地点を示したものである。なお、地域的異なりについて確認するために作成した分布図（図 1 ～ 8）を参考に示す。

表 2　調査 2 の語項目

	宮古島				伊良部島		地点数
	久貝	保良	宮国	来間	伊良部	国仲	
頭	○	ー	ー	ー	○	○	3
肝	○	ー	ー	ー	○	○	3
サトウキビ	○	○	ー	ー	○	ー	3
息	○	ー	ー	○	ー	ー	2
稲光	○	○	ー	ー	ー	ー	2
お前	○	ー	ー	ー	ー	○	2
鎌	○	ー	ー	ー	○	ー	2
霧	○	○	ー	ー	ー	ー	2
こぶし	ー	○	ー	ー	○	ー	2
魚	○	ー	ー	ー	○	ー	2
人	○	ー	ー	ー	○	ー	2
みんな	○	ー	ー	ー	○	ー	2
姪	ー	○	ー	ー	ー	○	2
油味噌	ー	○	ー	ー	ー		1
蟻	ー	ー	ー	ー	ー	○	1
海	ー	○	ー	ー	ー	ー	1
鏡	ー	ー	ー	ー	○	ー	1
口	ー	ー	ー	ー	ー	○	1
クワズイモ	ー	○	ー	ー	ー	ー	1
子	○	ー	ー	ー	ー	ー	1
誰も	ー	ー	○	ー	ー	ー	1
月	○	ー	ー	ー	ー	ー	1
東	○	ー	ー	ー	ー	ー	1
昼間	○	ー	ー	ー	ー	ー	1
みんなで	ー	ー	○	ー	ー	ー	1
老人	○	ー	ー	ー	ー	ー	1
語項目数	16	8	2	1	9	6	42

2.3　各音声特徴の扱いについて

このように調査 2 で地域による変種に注目したのは、それらの違いが高校生にとって聴覚印象上決して小さくないのではないかと考えたからである。似たような単語に出現する異なった音声に対して、彼らはどのように反応するのか、変種ごとの処理を比較すれば、若年層の音声認識がより具体的に把握できるのではないかと期待したのである。変種の分類はあくまでもこのような目的に即したもので、宮古島地域の地理的分布全体に関する把握に基づいたものではない。元より本調査は分布調査を目的としたものではなく、調査者の記録も一定の方式で統一されてはいない。そこで分類に際しては調査者の記録を参考にしながら録音音声によって判断することにした。録音状態などによっては判定が難しい場合もあったが、最終的には我々の判断基準で統一したことをお断りしておく。[2]

表 3　調査 2 の文項目

	文	音源
1	子供が生まれる	伊良部
2	海に行った	来間
3	ゴキブリはなかなか死なない	保良
4	高校生は制服を着る	保良
5	昨日は校長先生が座った	保良
6	茶はさっき飲んだ	砂川
7	昨日はいとこと遊んだ	砂川
8	昨日も海に行った	保良

2.4　調査対象者について

調査 1

次ページの表 4 は、3 校それぞれで調査した生徒の男女別内訳である。学年は 1 年と 2 年であるが、調査結果に目立った違いはなかったため、とくに分けていない。3 校のうち A 高

2 インフォーマントが最初は摩擦音を強く発音しながら、調査者が聞き直した際に改めてゆっくり言おうとして母音になっているような場合もあった。インフォーマントの音認識とどうつながるか興味深い問題ではあるが、このような場合には併用とした。母音についても、前より、奥より等さまざまであるが、ここではひとくくりにしている。

校は男女にあまり差がないが、B 高校、C 高校では女子比率が低くなっている。表 5、表 6 は宮古島市 2 校の生徒の出身地と現居住地の内訳である。県外出身者が宮古 4、伊良部 5、計 9 名に上っているが、集計からは除外していない。C 高校については別途表 7、表 8 に示した。

調査 2

調査に協力してくれた高校生は上述の通り計 17 名（1 年生 3 名、2 年生 14 名）、男女内訳は女子 15 名、男子 2 名である。出身地は宮古島島内 14 名（伊良部島出身者はなし）、沖縄県外が 3 名（鹿児島、愛知、東京）である。現在の居住地は全員が宮古島島内で、うち平良地区（下里、西里、東仲宗根などを含む）が 12 名を占め、残りは久貝 2 名、砂川 1 名、城辺 1 名、不明 1 名である。島外居住経験者のうち 12 名が宮古島居住年数 16 年以上だが、残りの 5 名の中には 5 年以下という者も 2 名いた。通常のクラスを対象とした調査でも、このように生え抜きと見なせる生徒のみでない状況は同じであることから、敢えて調査対象を区別しないことにした。両親についてはともに宮古島島内出身であるものが 11 名、どちらか一方が宮古島出身が 4 名、両親ともに宮古島以外の出身であるのは 2 名であった。

表 4　調査対象の高校生・男女別内訳

男女	A 高校	B 高校	C 高校	計
男子	20	21	38	79
女子	27	9	15	51
計	47	30	53	130

表 5　出身地（A 高校・B 高校）

	A 高校	B 高校	計
宮古群島内	41	23	64
沖縄県内	2	2	4
県　外	4	5	9
計	47	30	77

表 6　現在の居住地（A 高校・B 高校）

	A 高校	B 高校	計
平良	36	1	37
城辺	4	0	4
上野	3	0	3
下地	2	0	2
佐良浜	0	13	13
伊良部	0	10	10
不明	2	6	8
計	47	30	77

表 7　出身地（C 高校）

地域区分	
浦添・宜野湾	35
他の本島中北部	6
本島南部	7
本島外県内	1
沖縄県外	3
不明	1
計	53

表 8　現在の居住地（C 高校）

地域区分	
浦添・宜野湾	38
他の本島中北部	5
本島南部	9
計	53

3. 調査結果

3.1　調査 1 の音声聞き取りと意味理解

3.1.1「頭」

「頭」の音源は伊良部島・伊良部のもの（本調査記録では k^hanamaɳ）である。同じ伊良部島のもう一カ所の調査地点国仲では語末の成節的 l が明確であるが、それに比べて母音的であり、しかし宮古島・狩俣などと比べると側音に近いようでもあり、中間的発音に聞こえる。

回答のあった 121 名のうち、語頭に「カ」[3] 以外を選んだのは 12 名のみで（表 9）、残りは全員「カ」で始めており、さらにその半数以上が「カナマ」まで音源に一致する。そこでまずこの「カナマ」まで一致する回答について、その次にどのような表記が選ばれているかを見てみた（表 10）。最も多いのは母音で、成節的 l を反映したかと思われる「ル」は全体でも 5 名に過ぎない。母音の中では「イ」が最も多く、次いで「ウ」となっている [4]。興味深いことに、老年層では国仲のように明確な成節的 l も聞かれる伊良部島に居住する B 高校の生徒が、ひとりも「ル」を選んでいない。可能性としては方言音声として耳慣れているためにかえってわざわざ表記しなかったのかもしれないが、勿論推測の域を出ない。

表 9　語頭がカ以外のもの

	タ	ハ	
A 高校	1	1	
B 高校	1	4	
C 高校	5	—	
計	7	5	12

表 10 「カナマ」の後に何を書いたか

カナマ＋	イ	ウ	エ	ズ	ル	ア / ー	ヌ	ン	なし	
A 高校	6	5	1	3	3	—	2	3	2	
B 高校	22	3	—	—	—	2	—	—	—	
C 高校	—	—	1	—	2	1	—	2	1	
計	29	8	2	3	5	3	2	5	3	59

次に「カナ」までが元の音形に一致する回答を見ると、ここでは「ン」が最も多くなっている（表 11）。全体的に「カナマ」まで聞き取れている生徒に比べると、語末の認識が不安定である。また A 高校で「かなむん」（5 名）、C 高校で「かなわん」（6 名）がそれぞれ複数回答されているところを見ると、「カナ」の後の判断に困った生徒はわかりやすい形に理由づける心理が働いたのかもしれない。

表 11 「カナ X」の後に何を書いたか
（X は任意の 1、もしくは 2 文字）

カナ X＋	ン	イ	エ	リ	ア	
A 高校	6	3	2	2	1	
B 高校	—	1	—	—	—	
C 高校	15	—	1	—	1	
計	21	4	3	2	2	32

表 12 「カナ」まで音源に一致した回答例

カナムアイ	カナウマン
カナムイ	かなむぁん
かなもぃ	カナムァン
かなんまい	カナムゥン
カナゴエ	カナムン
カナゴェ	かなむん
カナモエ	カナモェン
かなんまり	カナワン
かなうぁん	かなわん

以上方言形に近い回答から見てみたが、これら以外にも多くの形が得られ、「カラマル」や「ツナマヨ」といったものまである。ちなみに全体的に意味理解が低い中で、「頭」は 5 項目中最も高い意味理解度を示しているが（次ページの表 13）、実際の形と意味が連動しているとは言えないようである（同表 14）。

3　上に述べたように回答は平仮名、片仮名どちらも使われているが、ひとつの項目について両者を混ぜて表記したものはなかったので、ここでは片仮名に統一して示す。

4　老年層でも一度成節的 l もしくは摩擦噪音を伴う発音をした後に、ゆっくり言い直す際にイが選ばれるのを体験することがあるが、それとの関係は不明である。

表 13「頭」の意味

	「頭」との回答
A 高校	5
B 高校	9
C 高校	—
計	14

表 14　意味理解と形の関係（正解者の表記）

「頭」	カナマイ	カナムアイ	カナマウ / ゥ	カナマル	カナム
A 高校	2	—	1	1	1
B 高校	5	1	3	—	—

3.1.2「肝」

「肝」には摩擦噪音の強い宮古島・久貝の音源を用いた（調査記録では $k^{s\sim}$imu）。このようなはっきりした摩擦噪音はどのように聞き取られたのだろうか。無回答であったものを除くと、語頭にはすべて「ク」が選択されている。そこでこの「ク」の後に「ス、ツ」などが書かれていれば、摩擦噪音を反映した可能性が高いと判定した。そのように見た場合、沖縄本島の生徒のほうがよりその部分に反応していることになる。宮古島地域の生徒は先の「頭」の場合と同様、意味のわかる単語としての地位は危ういが方言音声としての認識は持っていて、「地域的な音」、もしくは「自然な音」と受け取っているのかもしれない。なお、摩擦噪音を反映すると思われる表記は、表 16 のように「ス」が圧倒的に多かった。

表 15「肝」：語頭のクの後にス、ツなどがあるか

	あり	なし	計
A 高校	9	38	47
B 高校	—	29	29
C 高校	20	25	45
計	29	92	121

表 16　「肝」：クの後の摩擦噪音の反映と見られる表記

	ス	セ	ツ	計
A 高校	9	—	—	9
B 高校	—	—	—	0
C 高校	18	1	1	20
計	29	1	1	31

次に、摩擦噪音の反映と思われる要素のあるもの / ないものそれぞれについて、全体がどのような構造になっているかを見てみる。最も多いのが「ク」の後に「ヌ、ン、ム」を書いた 2 文字型の回答（75 名）であるが、そのうち語末の鼻音が「ム」など M[5] のものはわずか 6 名で、3 校ともに「ヌ」や「ン」が多く選ばれている。即ち、語末の -m についての認識が

表 18　摩擦噪音の反映とみられる要素のあるもの

		3 文字型	その他				計
	末鼻音	計	KSNC	KSNv *	KSNN	NKSN	
A 高校	N	6	—	—	—	1	7
	M	—	—	—	—	—	0
B 高校	N	—	1	—	—	—	1
	M	0	—	—	—	—	0
C 高校	N	10	—	—	—	—	10
	M	8	1	1	1	—	11
計		24	1	1	1	0	27
	例	クスム くすん クセム クスミ	くすむっ	クスモア	クスムン	ンクスヌ	

表 17　摩擦噪音の反映とみられる要素のないもの

		2 文字型	その他			計
	末鼻音	計	KNC	KNN	KvN	
A 高校	N	28	5	3	2	38
	M	2	—	—	—	2
B 高校	N	24	3	—	0	27
	M	0	—	—	—	0
C 高校	N	17	3	—	—	20
	M	4	1	—	—	5
計		75	12	3	2	92
	例	くぬ くん クム クム	くぬっ くんっ クモッ	クヌン	くぅぬ	

（* v は母音として、大まかにまとめたものである。子音と区別するため小文字で示す）

5　語末の鼻音について細かい違いをまとめ、ヌ、ンなどを N、ムや小さく書かれたムなどを M のように大文字で大まかに示す。

低いか、もしくは方言音声として知ってはいても表記にはN系を選んでいるのかもしれない。一方摩擦噪音の反映とみられる要素のあるもの 27 回答のうち最も多いのは 3 文字型の 24 名であるが、こちらは語末の鼻音が N のもの 16、M のもの 8 と、M を表記したものの割合が 2 文字型よりわずかだが高くなる。サンプルとしては非常に少ないが、摩擦噪音を特異な音として聞き取った者のほうが、語末の -m により反応した可能性もある。「頭」の場合と同じく C 高校でより多く得られているので、共通の傾向があると言えるかもしれない。

ちなみに、「肝」はさまざまなフレーズにも登場し、比較的若年層にも馴染みのある語ではないかと予測していたが、意味についての言及は 2 回答のみで、「このふたり」「きのう」という結果であった。

3.1.3「ミミズ」

使用した音源は保良で得られたものである（記録では mimdʐ）。宮古方言には m:（イモ）のように成節的 m が活発に表れるので、これがどのように知覚されているのかを見たいと考えた。方言音声としては比較的単純な構造で聞きやすいのではないかとの予測に反して、回答はなかなかヴァラエティに富んでいる。無回答のもの（A 高校 1、C 高校 5）を除く総回答のうち 96 名が語頭に「ミ」を選んでいるが、「ニ」も 27 名あった。ただしこれら以外のものも、「びんず」1 例を除いて「みゅんず」「ネンムズ」のように鼻音を用いている。また語末には「ツ」の 2 例を除きすべてで「ズ」が使われている。このように「ミ / ニ__ズ」という構造が大勢を占めるので、この中で元の成節的 m の位置にどのような文字が挿入されているかを見てみる。「ミ」で始まるもの、「ニ」で始まるものそれぞれ別にまとめたものが表 19、表 20 である。いずれも「ン」が圧倒的に多く、成節的 m を反映したとみられる「ム」はわずかである。しかもここでも敢えて選んだのは沖縄本島の高校生のほうが多い。摩擦噪音を伴う中舌母音に比べて成節的子音 m, l などは、それ自体は外国語の音にも慣れている現

表 19　語頭が「ニ」で始まるもの

語中はどんな形をしているか					
	ン	ンッ	ンム	ム	計
A 高校	8	1	1	1	11
B 高校	—	—	—	—	0
C 高校	9	—	5	2	16
計	17	1	6	3	27
例	ニンズ	にんっず	ニンムズ	ニムズ	

表 20　語頭が「ミ」で始まるもの

	語中はどんな形をしているか									
	ン	ンッ	ンム	ウン	ム	ミ	ニ	ンムン	なし	計
A 高校	32	—	2	1	—	1	—	—	—	36
B 高校	28	1	—	—	—	—	—	—	—	29
C 高校	18	—	1	—	3	4	1	1	2	30
計	78	1	3	1	3	5	1	1	2	95
例	ミンズ	ミンッズ	ミンムズ	みうんず	ミムズ	ミミズ	ミニズ	ミェンムンズ		

代の若年層にさほど違和感がないのではないかと思われるのだが、方言音声と連動して認識されているわけではないようだ。地域方言の特徴的な音声と言っても、既に標準語の音体系が基準になっている若年層にとっては、変わっているかもしれないが特別意識するようなものではないのかもしれない。

3.1.4「握り飯」

「握り飯」は本調査語彙項目の米 / 飯のところで関連語彙としていくつかの地点で得られている。ここでは与那覇の音源を使用した（記録では maᶻŋnuᶻŋ）。このような特異な音声に対して、高校生はどのように反応するのだろうか。結果は音声実態と大きくかけ離れた形や、無理に意味のあるものに関連付けようとしたらしいものなどが殆どで、表 21 ～ 23 が示すように「マジムン」（宮古地方で「化けもの」などの意）は 25 名あり、ほかにも「マイブーム」、「マヨネーズ」というようなものまであり、判断に困って理由づけをしたもののようである。いずれにしても、理解度が低かったというほかに細かい分析は難しい。

表 21 「握り飯」 対応に困った結果の対処？

	マジムン	マヨネーズ	マイブーム	マングフ	ワームン	ワンヌ
A 高校	3	—	1	1	—	—
B 高校	21	—	—	—	—	—
C 高校	1	1	—	—	1	1
計	25	1	1	1	1	1

表 22 「握り飯」の意味は？

	おばけ	ゆうれい	ごはん	美味しい	私の趣味
A 高校	—	1	—	—	—
B 高校	11	3	1	1	1
C 高校	—	—	—	—	—

表 23 「握り飯」表記例

マイグン	まいむ
マイブゥ	まうぐー
まいぶ	マイヌ
マイブーム	マイヴ゛
マイフン	マジムン
マング	まぐ
まんぐ	まんず
まうぐー	まいみ
マイム	マィヌー
マングフ	らいぐ
マグン	まじむん
マグーゥ	マイムン
マイム	まる

3.1.5「子供が生まれる」

使用した音源は上と同じく音韻調査項目の中の例文として得られた与那覇のものである（[ffanudu mmari:] の助詞 nu の部分が -r- に近く聞こえる）。文を項目として加えてみたのは、文と単語とで音声聞き取りに差はあるのか、また意味理解度は異なるのか等について見るためである。

回答は語頭を「ファ」としたもの 44 名と「パ」としたもの 47 名に大きく分かれる。対応はともかく、宮古島地域の生徒にとっては「ファ」も「パ」も方言音声として馴染みのある音と思われ、近い音が聞こえたときに自然にどちらかが選ばれたものと推測される。これら「ファ」「パ」で始めたグループのそれぞれについて、元の音源で「子供が」に対応すると思われる前半部分を見ると、半分以上を FARD, PARD が占めている（表 24, 25）。最後の D に当たる部分は「ド」「ドン」「ドゥ」などで、一定はしていないが元の音源の助詞部分を聞き取った結果と見られる。だとすれば両方のグループ併せて 52 名、全体の 4 割ほどの生徒は前半部分をおおよそ把握していることになる。この結果から、少なくとも音形上の問題として、

文が語より聞き取りにくいとは限らないと言えそうである。ただし、沖縄本島の生徒の場合は、「はなづまり」「たなのまわり」「バリどまり」、さらには「ファイトマネー」などといった回答が多くなり、彼らには「文が語より聞き取りにくいとは言えない」という傾向はどうやら当たらないようである。先の音声の聞き取りと逆の結果となっており、語の認識と文の認識の違いを示唆するものかもしれない。

表 24 「子供が生まれる」：前半部分が「ファ」で始まるもの

	FARD	FARN	FARNT	FAID	FAIB	FAIT	FAIND	FANG	FARG/K	FANZ	計
A 高校	11	1	1	—	1	—	—	—	4	1	19
B 高校	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9
C 高校	4	—	—	2	—	7	2	1	—	—	16
計	24	1	1	2	1	7	2	1	4	1	44

表 25 「子供が生まれる」：前半部分が「パ」で始まるもの

	PARD	PANG	PAND	PARG	PARK	PART	PAFUN	BARD	HAND	HARB	HANZ	
A 高校	18	—	—	2	2	—	1	—	—	—	—	23
B 高校	1	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	3
C 高校	9	3	5	—	—	1	—	1	1	—	1	21
計	28	3	5	2	2	1	1	1	1	2	1	47

（それぞれの表記を大まかに分類してアルファベット大文字でタイプとして示す）

3.1.6　調査 1 のまとめ

以上の結果についてまとめてみる。

1) わずか 5 個の調査であり簡単に結論づけることはできないが、琉球諸島の中で方言が比較的保持されているとされる宮古群島においても、若年層の方言音声理解力は決して高いとは言えない。使用頻度が高いと思われる語彙でも、形と意味とが関連付けられていないようである。

2) 宮古島市の高校生より沖縄本島の高校生のほうが、摩擦噪音などを表記しようと工夫した割合が高い。ひとつの可能性として、意味が全くわからないためかえって客観的に「音」として捉えようとしたのではないかとも考えられる。違和感の強い音であるほど、積極的に書き分ける必要を感じるのではないだろうか。宮古島市の高校生の場合、中～老年層の方言活用がまだ比較的活発であるため、方言音声に耳慣れてはおり、意味はよくわからず自分では音形を再現できないが、「変わった発音」という認識は持っていいて、そのためかえって特別な発音とは認識せず、彼らなりに標準語的に再解釈してしまっているのかもしれない。

3) 宮古群島では特異な音声を表記するのに「宮古仮名」と言われる独特の表記が知られており、地元で編纂される辞典類や民謡の歌詞、方言によるキャンペーンなどで広く一般に活用されている。しかし宮古仮名方式の応用かと思われるものはわずかに「ゴ」が 2 例だけで、若年層に流布しているとは言い難いことがわかった。その一方で、彼らは自分なりにさまざまな工夫を凝らしている。母音や促音だけでなく、「ス」や「ン」などを小さく書くなどは、音の印象を再現しようと工夫したものであろう。

4) 単語よりも文のほうが聞き取りが難しいのではないかという予測に反して、単語を切り取って示すよりも、まとまったメッセージを文で示す方が反応が得やすいようだ。文のほうが、「何を言っているか」がわかりやすい、判断材料が多い、と捉えられている可能性がある。ただしこのことは宮古島市の高校生にのみ言えることで、単語で「変わった音声」に反応した沖縄本島の高校生が、文では対処に困ったのと対照的である。宮古島市の高校生が老年層の方言発話に耳慣れていることが背景にあると思われるが、語と文の認識の違いを示唆する可能性もある。

3.2 調査 2 の音声聞き取りと意味理解

調査 2 はサンプル数が 17 と少なく、計量的に分析することはできないが、生徒ひとりひとりがどのような対処を行っているかについてより細かく見ることができる。以下ではそうした視点から、いくつかの事例を取り上げる。

3.2.1 「頭」「東」「稲光」など：*ri に対応する部分への反応

表 27 「頭」：3 地点・17 名の全表記

地点	久貝	国仲	伊良部
音形	kʰanamazï	kanamaɭ	kʰanamaɲ
1	カナマズ	カナアマル	無回答
2	カナマヅ	カナマル	タナモエ
3	カナマズ	カナマル	カナマル
4	カナマズ	カナマル	カナマル
5	カナマズ	カナーマル	タナマス
6	カナマス゜	カナマル	カナムル
7	カナマズル	カナァマル	カナンマ
8	カナマズ	カナマル	カナモエ
9	カナマツ	カナーマル	カナモァ
10	カナマズ	カナーマル	カナム
11	カナマズ	カナマズ	タナグェ
12	カナンマズイリ	カナァマル	カナンムゥ
13	カナマズ	カナマル	カナム
14	カナマズ	カナマズ	カナマズ
15	カナマツ	カナマズ	無回答
16	カナマズ	カナマル	カナムゥ
17	カナマァズ	カナーマル	タマム

まず、*-ri に対応する部分を含む語について見てみる。表 27 は「頭」（対応からは *kanamari が推定される）について得られた全データである。久貝、国仲については全員元の音形にかなり近く表記しており、「カナマ」までほぼ一致している。それに対して伊良部については全体的にかなり回答がばらばらであり、無回答も 2 名ある。語末に注目してみると、3 つの変種によってはっきりとわかれている様子がわかる。久貝ではズとスの摩擦音に「ツ、ヅ」の破擦音も加えれば、摩擦性がなんらかの形で認識されていると見ることができよう。国仲については「ル」と、これを小さく書いたもの併せて 14 名に達している一方で、「ズ」は 3 名で、子音を意識した結果が明らかである。「久貝：カナマズル / 国仲：カナマル」のような書き分けも、そのひとつと見られる。これを 3 地点の相関関係で見てみると、久貝と国仲の対比を明確に捉えている生徒が多数を占めていることがわかる（次ページの表 28）。同じ語が連続することのないように配列しているので、両者を比較しながら聞いたわけではない。調査 1 でも用いた伊良部の音源と比べて、久貝、国仲のタイプは高校生にとっても比較的把握しやすいと言えるようで、両者の区別もほぼなされている。その一方で、やはり伊良部については表記に迷っている様子が見える。上述のように無回答が 2 例あるほか、「カナマ」のように 3 音節で終わっているものもあり、語末をどう書くべきか判断

表 28 「頭」：語末に何が書かれているか

地点	久貝	国仲	伊良部
音形	kʰanamazï	kanamaɭ	kʰanamaɻ
ズ	10	3	1
ス°	1	—	—
ヅ	1	—	—
ツ	2	—	—
ス	—	—	1
ズル、ズイリ	2	—	—
ル	—	13	2
ル	—	1	1
エ、ェ	—	—	3
ゥ	—	—	2
ァ	—	—	1
なし	—	—	4
計	17	17	17

表 29 「頭」：３地点間の相関関係

久貝	国仲	伊良部		
-Z	-L	-I	4	12
-Z	-L	-L	3	
-Z	-L	-Z	1	
-Z	-L	- なし	3	
-Z	-L	無回答	1	
-ZL	-L	-I	2	2
-ZL	-L	- なし	1	
-Z	-Z	-Z	1	3
-Z	-Z	無回答	1	
-Z	-Z	-I	1	

（それぞれの表記を大まかに分類してアルファベット大文字でタイプとして示す。Z は摩擦噪音、L は成節的 l、I は母音）

がつかないまま終わった可能性が高い。

これを再び 3 地点の相関関係から観察してみる。久貝―国仲を Z/L で区別した 12 名のうち、4 名は伊良部に対して母音を、3 名は「ル」を選んでいるが、残りの 5 名は 1 名がズのほかは回答が書かれていない。上述のように狩俣などに較べれば（記録によれば [kanamaɯ ~ kʰanamaï] とされる。別に aha も併用される）、伊良部の発音は舌が歯茎にかなり近づいているようにも聞こえる。高校生の場合意味がわからないだけに、書き取るにも苦労したものと推測される。なお、意味についての回答はわずか 2 名からしか得られず、うち 1 名は国仲の回答のみ正解で、あとの 2 地点については意味を正しく答えることができなかった。

表 30 は、「稲光」の全表記である。語末部分に注目すると、久貝では 1 例の「ヅ」を除いて、すべて「ズ」となっている。それに対して保良ではズを選んだのは 1 名だけで、ルが 11、「ズ・ヅ」が 2、「ウ」が 2 などのように、選択が分かれている。音声データによれば、久貝も保良もともに摩擦噪音の著しいタイプであるが、調査者の記録の違いにも表れているように、保良は摩擦の部分が弱く、久貝に較べて歯茎への接近が距離的にも時間的にも短いと推測される。高校生たちも久貝の明瞭な摩擦音には一様に「ズ」を選択しながら保良で判断が分かれるのは、こうした微妙な違いに反応した結果と見てよいのではないだろうか。そこでこのことに注目して語末部分をまとめてみる（表 31）。大まかな分類を施して見ると、摩擦噪音の弱い保良に対しては母音を選んだのはわずかに 2 名で、子音と同じ選択をしているものが大勢を占めている。

表 30 「稲光」：17 名の全表記

	久貝	保良
音形	m:napskaz	nnapskaʔɻ
1	ンナプカズ	ンナピカル
2	ンーナツカズ	ンナツカル
3	ンナプスカズ	ンナピカル
4	ンーナプスカズ	ンナップスカドゥ
5	ンーナプゥカズ	ンア　ピィカル
6	ンーナプスカズ	ナプスカル
7	ンナプスカズ	ンナプカル
8	ンナピカズ	ンナピカ
9	ンナプツカズ	ンナピカウ
10	ンーナスプカァズ	ンナクスカル
11	ンーナプツカァズ	ンナプカーズ
12	ンーナプゥカズ	ンナァピカル
13	ンーナプスカズ	ンナプス カウ
14	ウンナツカズ	ウナプカル
15	ンナピカヅ	ンナピカヅ
16	ンナプクスカズ	ナプスカル
17	ンナッピカズ	ンナムピィカァル

表 31 「稲光」：語末部分 2 地点相関

久貝		保良	
Z	17	L	11
		Z	2
		D	1
		U	2
		なし	1

表 32 「稲光」「東」「頭」：久貝の *ɨ への反応

稲光	東	頭	
Z	Z	Z	10
Z	ZN	Z	2
Z	Z	ZL	2
Z	Z	C	2
Z	SN	Z	1

（それぞれの表記を大まかに分類してアルファベット大文字でタイプとして示す）

久貝の音源はこのほかに「東」も含まれているので、各生徒が同じ久貝の音声に対してどのように反応しているかまとめてみた（表 32）。「ズ・ヅ」などをまとめれば、3 地点に対して摩擦音を選んだ回答が 10 にのぼっており、どれにも摩擦音を選ばなかった回答は 1 例もない。久貝の摩擦噪音はかなり安定して聞き取られ、しかも調査者の記録と合致して独立した子音 [z] を含むものとして把握されているていると推測できるのではないだろうか。

なおここでは宮古仮名の「ス゚」が 2 例、宮古仮名を模したと思しき「ク゚」が 1 例で使われている。後者は通常「クス」と書かれるので、調査 1 のまとめでも述べたように、宮古仮名は若年層に認知されている訳ではないことを示していると見なすべきであろう。

3.2.2 「肝」「霧」「月」「息」：*ki に対応する部分への反応

表 33 「肝」：3 地点・17 名の全表記

地点	久貝	国仲	伊良部
回答者	kˢᶻïmu	tsɨmu	tsɿmu
1	クスム	ツム	セム
2	ツヌ	ツム	スム
3	プスム	ツム	スム
4	プスム	ツン	セム
5	ク゚ズ	ツム	セム
6	ックニ	ツン	セム
7	クゥシニ	ツゥム	スィム
8	ティニ	ツムゥ	シィム
9	クスリ	ツェム	セム
10	クスヌッ	ツム	セム
11	クスヌ	ツム	シム
12	ｸﾝミ	ッム	スィム
13	クｽムッ	ツム	ツィム
14	ツニ	ツム	セム
15	クム	ツム	シム
16	クスミ	ツム	セヌ
17	クム	ツム	セム

無声子音の後に中舌母音が続く場合として、*ki が含まれるもの 4 語について見てみる。そのうち、3 地点から音源を選択した「肝」では、一見して久貝には「ク」の後に「ス、ｽ」などを書いた回答が多く、語頭にプを選んだものも含めれば、10 名は語頭の子音の後に何らかの摩擦噪音が続くことを意識したものと見られる（表 33）。本調査の記録では、久貝については中舌母音の前に無声と有声の摩擦噪音を重ねており、摩擦音の強さ、長さを表記しようとの意図かと思われるが、高校生も同様に強い摩擦音に反応したものだろう。伊良部も国仲もともに、調査者の記録では破擦音の後に中舌母音が表記されている。両者は記録者が別で表記も異なっているが、音声データによると国仲のはっきりした破擦音に比べ、伊良部は破裂部分が少し弱い。加えて、[国仲では [tsɨ]mu と頭高になっているのに対し、伊良部では tsɿ[mu] のように尾高型となっている。高校生の回答では伊良部に対して、「サ、セ、シ」などのサ行子音が圧倒的で、破擦音は 1 例しか得られておらず、閉鎖部分の弱さだけでなく、アクセントの影響で第一音節が捉えにくかった可能性が高い。表 34 はこれらの相関関係をまとめたものである。

表 34　「肝」：3 地点相関

地点	久貝	国仲	伊良部	計
a	KS	C	S	7
b	KS	C	C	1
c	K	C	S	3
d	C	C	S	2
e	PS	C	S	2
f	CK	C	S	1
g	T	C	S	1
				17

（グ゜ズ、クゥシもクスと同じく
KS タイプとして分類した）

表 35　「霧」：17 名の全表記全表記

地点	久貝	保良
音形	ksï	kˢɲ:
1	クス	クス
2	クス	クス
3	プス	クス
4	プス	クフ
5	プス	クス゜ゥ
6	プス	クス
7	クス	クゥス
8	クゥス	クズッ
9	クス	クス
10	クス	クスゥ
11	クス	グ゜ス
12	クスゥ	ᵏスゥ
13	クス	クス
14	クス	クスゥ
15	クス	クゥ
16	プス	クス
17	プス	クス

表 36　「霧」　2 地点相関

地点	久貝	保良	計
a	KS	KS	7
b	KS	Ki	1
c	KS	KiS	1
d	PS	KS	4
e	PS	KZ	2
f	PS	KF	1
g	KiS	KZ	1
			17

（小文字の i は任意の母音）

「肝」と同じく語頭に *ki を含む「霧」は[6]、久貝と保良の 2 地点の音源を使用した。両地点ともに摩擦噪音が耳立つ発音であるが、本調査の記録者は久貝について子音 [s] を独立的に認める表記、一方の保良は摩擦噪音を伴う母音という形である。興味深いことに高校生も、久貝についてはほぼ全員が「クス」もしくはそれに準ずる選択をしており、語頭が「プ」のものも含めれば全員が同じタイプとなる。カナ表記に統一したので、彼らが s の後の母音をどう認識したのかは不明であるが、保良の場合と比較すると摩擦音の強さに専ら注意が向いた可能性が高い。久貝では語末にわざわざ「ウ」を小さく表記したのが 1 例のみであるのに対し、保良では小さな「ゥ」や「ッ」が増え、「ズ゜ゥ」のような表記もある[7]。摩擦噪音を聞きながらも簡単に子音だけで終わっていないという印象を持ったのかもしれない。調査記録との関係から行っても、興味深い。

次に *ki が第二音節となる「月」「息」を見てみる。「息」については久貝と来間の 2 地点から音源を選択したが、「月」については久貝のみである。

「息」は、来間では 2 名のインフォーマントの音形が記録されているが、より閉鎖音の弱いほうを採用した（次ページ表 37）。この発音は高校生には閉鎖部分は聞き取られず、全ての回答で「ス」が選ばれている。

今回の調査で久貝の音源が多く含まれているのは、とくに摩擦噪音の聞き取られ方が関心の中心であったためである。そこで、これら 4 語の表記をまとめてみた（表 39）。久貝の強い摩擦噪音は「ス」や「ツ」などに反映されていると思われるが、「霧」「月」ではとくにそ

6　本調査でも伊良部で kʰiri、上地で kçɨ·ɥri という音形が報告されているが、久貝、保良を含めたその他の地点では *kiri の後半部分を欠いたような対応であると見なした。

7　小さいウによる表記は、宮古では中舌母音に対して円唇母音とわかるように表記するためによく使われているのを見ることができる（例：がんずぅ、など）。中舌母音を伴う場合にはス、ズのようにウは表記されないようだ。

表 37 「息」：17 名の全表記

地点	久貝	来間
音形	ikˢï	iˡsï
1	イクズ	イス
2	イツ	イス
3	イップゥ	イス
4	イフ	イス
5	イク	イス
6	イプク	イス
7	イク	イス
8	イクゥ	イス
9	イク	イス
10	イクゥ	イス
11	イク	イス
12	ィユク	インス
13	イクズ	イス
14	イク	イス
15	ユツゥ	リス
16	イプゥ	イス
17	イクゥン	イス

表 38 「月」：全表記

地点	久貝
音形	tskssu
1	ツンクス
2	ツクス
3	ツクス
4	ツクスゥ
5	ッチャスゥ
6	ツクス
7	ツゥクス
8	ツゥクスゥ
9	ツクス
10	ツクツクスゥ
11	—
12	ックスゥ
13	ツクスォ
14	ツクス
15	ツゥクスゥ
16	ツツス
17	ツクス

表 39 久貝の *ki をどう表記したか（17 名の全表記）

	語頭		語末	
	肝	霧	月	息
1	クス	クス	クス	クズ
2	ツ	クス	クス	ツ
3	プス	プス	クス	ップゥ
4	プス	プス	クスゥ	フ
5	グ	プス	スゥ	ク
6	ック	プス	クス	プク
7	クゥ	クス	クス	ク
8	ティ	クゥス	クスゥ	クゥ
9	クス	クス	クス	ク
10	クス	クス	クスゥ	クゥ
11	クス	クス	—	ク
12	ク	クスゥ	クスゥ	ユク
13	クス	クス	クスォ	クズ
14	ツ	クス	クス	ク
15	ク	クス	クスゥ	ツゥ
16	クス	プス	ツス	プゥ
17	ク	プス	クス	クゥン

表 40 久貝の *ki 摩擦噪音の有無

	肝	霧	月	息
あり	13	17	16	6
なし	4	0	1	11

（ここでは破擦音も摩擦性を含むものと見なした）

れがはっきりしている。聞こえ方は語の中の位置やアクセントの位置などにも左右されているようで、これだけのサンプルから結論付けることはできないが、高校生の耳には独立した子音として聞こえている可能性が高い。調査者の記録との関係からも、もう少しこの点を追求できればと思う。

3.2.3 「人」「昼間」「稲光」：*hi に対応する部分への反応

次に、*hi に対応する部分について見てみる。「人」「昼間」については久貝、伊良部の 2 地点の音源を用いた（表 41）。本調査の記録では伊良部も久貝と同じ表記になっているが、音声データを比べると、久貝の摩擦噪音ははるかに鋭く聞こえる。聞き取りの結果は、久貝については「ピ、プ」併せれば p- の後に摩擦噪音が続く発音がよく反映されており、それ以外のものは「ツ」が 1 例だけである。また後半部分は「トゥ」「ト」が大勢を占めている。それに対し伊良部については語頭を「ツ」としたものが 7 名、「ピ、プ」等を選んだものが 8 名、「ト」が 1 名と選択が分かれ、しかも後半部分についても「ト、トゥ」併せて 10 名のほかに、「テ、タ」などもあって一定していない。ちなみに、この後半部分の表記を見ると、久貝については 17 人中 12 名、表記がばらけた伊良部でも 8 名が小さい「ウ」を最後に付しており、円唇母音

表 41 「人」：17 名の全表記

	久貝	伊良部
音形	pstu	pstu
1	プストゥ	プスト
2	ピツ	ピツ
3	ピストゥ	プスタ
4	プストゥ	プストゥ
5	ピストゥ	ピトゥ
6	プスト	ツトゥ
7	プストゥ	トゥク
8	ピストゥ	ツトゥ
9	プストゥ	ツテ
10	ピストゥ	ピストゥ
11	ピトゥ	—
12	プストゥ	ピュストゥ
13	プスト	プスト
14	プストゥ	ツトゥ
15	ピトゥ	—
16	ピゥス	ツタ
17	ツゥトッ	ツトゥ

表 42 「人」：語頭の対比

人	ピス	プス	ピツ	ツ	無回答
久貝	5	8	1	1	0
伊良部	2	4	1	6	2

表 43　久貝の *hi をどう表記したか（17 名の全表記）

	語頭		語中	
	人	昼間	老人	稲光
音形	pstu	psïma	uipstu	m:napskaz
1	プストゥ	プスマ	ウミプトゥス	ンナプカズ
2	ピツ	プスマ	ウイピトゥ	ンーナツカズ
3	ピストゥ	プスマ	ウリピスト	ンナプスカズ
4	プストゥ	プスマ	ウィッピストゥ	ンーナプスカズ
5	ピ゚ストゥ	プスマ	ウイプストゥ	ンーナプゥカズ
6	プ゚スト	プ゚スマ	ウィプスト	ンーナプスカズ
7	プストゥ	プスマ	ウミプストゥ	ンナプスカズ
8	ピストゥ	ピスィマ	ウィピストゥ	ンナピカズ
9	プストゥ	プ゚スマ	ウィプスト	ンナプツカズ
10	ピストゥ	プスマ	ウィピストゥ	ンーナスプカァズ
11	ピトゥ	プスマ	ウミピトュ	ンーナプツカァズ
12	プ゚ストゥ	プスマ	ゥィピストゥ	ンーナプゥカズ
13	プスト	プ゚スマ	ウミプ゚スト	ンーナプ゚スカズ
14	プストゥ	プスマ	ウイプゥト	ウンナツカズ
15	ピトゥ	プスゥマ	ウイピトゥ	ンナピカヅ
16	ピゥス	プスマ	ウグィクス	ンナプクスカズ
17	ツゥトッ	ピスマ	ウウィップスト	ンナッピカズ

表 44　久貝の *hi：摩擦噪音に対応した部分の有無

	人	昼間	老人	稲光	回答数
a	○	○	○	○	7
b	○	○	○	×	5
c	×	○	×	○	2
d	○	○	×	×	1
e	×	○	○	×	1
f	×	○	×	×	1

表 45 「みんな」（17 名の全表記）

地点	久貝	伊良部	宮国
	みんな	みんな	みんなで
音形	m:na	m:na	m̥ˀnaçi
1	ウムンナ	ンナ	プンーナシ
2	ンーナ	ンナ	ピーンナシ
3	ンッナ	ンナ	ピッナシ
4	ンーナ	ンナ	インナシィ
5	ンーナ	ンーナ	ンーナシ
6	ンーナ	ンナ	ンーナシ
7	ンーナ	ンナ	ピンナシ
8	ンーナ	ンナ	ンナシ
9	ンーナ	ンナ	ンナシ
10	ンーナッ	ンナァ	ンーナシ
11	ンーナ	ンナ	ンーナシイ
12	ンーナッ	ンナァ	ンーナシュ
13	ンーナ	ンナ	ンーナシ
14	ンーナ	ンナ	ンーナシ
15	ンーナ	ンナ	ンーナシ
16	ンナァ	ンナ	インナシ
17	ンーナシ	ンナ	ンーナシ

の u を強く意識した結果と推測される。

ほかに *hi に対応する部分を含むものとしては、「昼間」「老人」「稲光」がある。摩擦噪音がはっきりしている久貝の音源に対する表記をまとめると表 43 のようになる。4 地点のすべてについて摩擦噪音に対応したと思われる部分のある表記（表 44 の a、7 名）が半数近くを占めている。c 以下のケースは個人差によるものと推測されるが、b の「稲光」だけに摩擦噪音対応分を欠くタイプが 5 例になっているのは、何らかの音声環境の違いによるものかもしれない。

3.2.4　子音の聞き取り

前項の「稲光」では、調査記録にある語頭の成節的 m がすべて「ン」で表記されている。表 45 は、「みんな」（一部「みんなで」）について選択した 3 地点についてまとめたものである。あえて「ム」を選んだのは久貝の「みんな」についての 1 回答だけのようで、伊良部・久貝の 2 地点についてはすべて「ン」となっている。宮国は間に声門閉鎖による区切りの聞こえるケースである。それ自体に反応したと見ることは難しいが、伊良部・久貝に較べると前半部分にいろいろな工夫が見られる。語頭が p- のものが 4 回答あるのも、声門閉鎖による区切りが次に来るために唇音 m の調音の際に力が加わり、それが無声の閉鎖音のように聞こえたのかもしれない。「ピッナシ」などはその予測を裏付ける回答のように見えなくもない。宮古島地域の若年層は仮にこれらの m を聞き分けていたとしても、表記の方法としては標準語と同じに「ン」しか書きようがないと考えているかもしれず、音の実態をどう捉えているかはわ

表 46「海」：全表記

	保良
音形	im
1	イン
2	イン
3	イン
4	イヌ
5	イム
6	イン
7	イン
8	イン
9	イン
10	イッ
11	イン
12	ンユ
13	イム
14	イン
15	ビュ
16	イン
17	イン

表 47「サトウキビ」 3 地点 17 名の全表記

	久貝	保良	伊良部
音形	buːgʷï	bʊːgʷɿ ～ bʊːʥɿ	buːʥɿ
1	ウーズ	プーグ	ブーズ
2	ウージ	ブーク	ブーズ
3	ウォーイズン	ドゥーク	プーッグ
4	ウージン	ドゥーグ	ブーブゥ
5	ウーズ	ウークヌ	ヴーズゥ
6	ウィズン	ドプーク	プーグズ
7	ウーイズ	ドゥーグ	ブゥーグ
8	ヴーズ	ドゥーグゥッ	プゥーズ
9	ウーィズ	ドゥーク	ブーグズ
10	ボーイズ	ブウーク	ブゥグズ
11	ウーイズ	ドゥーグ	ブーク°
12	ウゥズ	プーンクゥ	プーングズゥ
13	ウーズ	ブーグズ	ブーグズ
14	ウーズ	ドゥーグ	ブーズ
15	—	ドゥムク	ドゥーワ
16	ウグイズゥ	ドゥーグ	ウーズ
17	ウゥーズ	ブーグ	ブーグズ

からない。この問題については「海」（保良の音源のみ使用）でもほぼ同じ結果となった。

本報告では以上、*ri, *ki, *hi に対応すると思われる音声を含むもの、及び成節的 m についての結果を紹介した。語の聞き取りはこのほか有声音 g- に中舌母音が続く場合や、*i に対応すると思われるものなどいくつかのデータが得られているが、ここで報告した *ki, *hi の場合に比べると回答がかなりばらばらで、高校生にとって聞き取りがより難しいと思われる結果となった。そもそも語頭の子音がばらばらで語の全体像がかなり離れてしまったり、また久貝のように摩擦噪音がはっきりしている発音でも子音の前に「イ」が挿入されるなど、無声子音の場合には見られなかった傾向が顕著となっている。

なお、語項目の意味理解度は総体的に非常に低く、意味についての言及があったのは「頭」（正解 2 名）「サトウキビ」（同 2 名）「お前」（同 4 名）「人（老人も含め）」（同 5 名）「みんな、みんなで」（同 4 名）のみで、このうち複数地点からの音源がある場合にすべてで正解だったのは「頭」についての 1 名だけであった。

3.2.5 文項目の聞き取り結果

調査 1 の報告で、聞き取って書くのが困難と思われる文項目の回答が、少なくとも宮古島市の高校生については予想外に健闘していることについて述べたが、調査 2 でも文項目の聞き取りは予想より原音に近く書かれていた。とくに、正解であったかどうかは別にして、意味に関する言及が語項目より多いことが目をひく。文項目を選ぶ際には「高校生」「制服」「校長先生」「茶」など、若年層でもすぐに理解できそうな単語の入っているものを意図的に取り上げ、馴染みのある単語が出てくることで意味記述が増えれば、逆に述語部分の理解度がどの程度であるかを見ることができるのではないかと考えた。ここでは意味について言及の多かった項目のうちから 2 項目について紹介する。

表 48 「高校生は制服を着る」（保良）17 名の全表記

音形	koːkoːçeija çeiɸkuːdu kʷɻː	意味は？	「着る」部分
1	コーコセイーヤ　セイフクヲド　プスー	高校生は　制服を　着けている	プスー
2	コウコウセイヤ　セイフクヲトオ　ツー	高校生は　制服を　着ている	ツー
3	コウコウセイヤ　セイフクトゥ　プスー	—	プスー
4	コウコウセイヤ　セイフクオトゥ　クスゥー	—	クスゥー
5	コウコウセイヤ　セイフクヲドゥ　キヌゥ	高校生は　制服を　着ている	キヌゥー
6	コーコーセイヤ　シェイフクゥナ　ツー	高校生は　制服を　着れ	ツー
7	コーコーセイ　ヤ　セーフクヲトゥー　ツヅ	高校生は　制服を　着ける	ツヅ
8	コーコーセイヤー　セイフクヲトゥー　ツユー	高校生は　制服を　着る	ツユー
9	コーコーセーヤ　セイフクードゥプスー	—	プスー
10	—	—	—
11	コウコウセイヤー セイフクヲドゥー、クス—	高校生は　制服を　着る—	クスー
12	ホゥホゥセィヤァー　シェイフクゥトゥ　クスゥー	高校生は　制服を　きる	クスゥー
13	コウコウセイヤ　セイフクヲドゥ　クスー	—	クスｓー
14	コウコウセイヤ　セイフクヲトゥ　ピスゥー	高校生が　制服を　着る	ピスゥー
15	コウコウセイヤセイフクヲトクスー	高校生は　制服を　着る	クスー
16	コーコーセイヤー　セイフク　トゥオ　スー	—	スー
17	コーコーセイヤセイフクトゥプスウ	—	プスウ

表 49 「茶はさっき飲んだ」（砂川）（保良）17 名の全表記

音形	ʧaːja nnamadu numtaᶻɨ	意味は？	「飲んだ」部分
1	チャーヤ　ンナマズヌンタン	—	ヌンタン
2	チャーヤ、ンナマド　ノンター	あの人は今まで飲んでた	ノンター
3	チャーヤ　ナマズヌンタル	—	ヌンタル
4	チャーヤンナマドゥ　ヌンタ	—	ヌンタ
5	チャーヤ　イツフトゥ　アスピタァ＊	—	アスピタァ＊
6	キャーヤ　ナマデ　ヌンタル	茶がなまでぬるいよ	ヌンタル
7	チャーヤ　ンナマドゥ　ヌンタウ	—	ヌンタウ
8	チャー　ヤンナンマドゥ　ヌンタウ	お茶を今まで飲んでいた	ヌンタウ
9	チャーヤ　ンナマドゥ　ヌントゥン	—	ヌントゥン
10	—	あんたなんか今まで酒飲んでたな？	—
11	チャーヤ、ンナマドゥ ヌンタゥ	今	ヌンタゥ
12	チャーァアヤ　ナマド　ヌゥンタゥン	—	ヌゥンタゥン
13	チャーヤ　ンナマドゥ　ヌンタヴ	お茶を　今まで　のんでいた	ヌンタヴ
14	チャーヤ　ンナマドゥー　ヌーター	茶を今まで飲んでた	ヌーター
15	チャーヤンナマドゥヌンタ	お茶は今まで飲んでいた	ヌンタ
16	チャーヤ　ナマズ　ヌンタン	—	ヌンタン
17	チャーヤナマドゥヌンタウ	—	ヌンタウ

＊他の項目と混同した可能性があるがこのまま示す

上のように、述語部分の音形の再現となるとかなりばらばらではあるものの、「制服—着る」「茶—飲む」というような連想によって、音形はともかく意味内容を理解しようという意欲が強く働くのではないかと想像される。そして同様の行動は、少なくとも宮古島地域の若年層の場合、まだ方言を活発に活用している老年層との接触の中で自然に行われていることなのではないだろうか。仮に「着る」「飲んだ」の部分を語として提示された場合には、他の語項目同様、意味の理解度が低くなったかもしれない。述語部分だけでなく、助詞や「今」のような副詞も含めて文意の大凡が把握されているが、こうした要素も老年層との接触で出現頻度の高いものであると推測される。

4. おわりに

宮古島地域は南西諸島の中でも方言がよく保存されているとされる。沖縄県の中で特異な方言というイメージも定着しているようだ。宮古島の若年層自身も、地域の方言が独特であるという認識を持っていることは、これまでのわれわれの調査からも明らかになっている。しかし今回の結果から見る限り、方言音声の継承には多くの課題がありそうである。その一方で、個々の音声に対する認識が不十分でも、文として発信されれば何らかのヒントがその中にあり、状況などと併せてなんとなく意味がわかるという感覚は、恐らく高校生たちが日常祖父母などとの接触の際の体験によるものであろう。

このように、方言の継承を考える上で若年層と老年層の密接な接触は重要なポイントと思われる。表 50 は 2011 年の高校調査から、祖父母との同居についてきいた結果である。宮古島と伊良部島の間の地域的な差は大きいが、平均すれば 3 割の同居率となり、まだまだ接触の機会は少なくないと思われる。高校生によれば、祖父母の世代はまだ方言をかなり活用しているが、父母の世代になると標準語もしくは中間方言的な形の活用が増える。それでも父母らは祖父母らの方言を理解し、使うこともできるが、子供たちと話すときには殆ど方言を使用しないという。宮古群島でも核家族化が進行し、とくに平良のような市街地ではマンション等の共同住宅も増えて家族形態が急激に変化している。「なんとなくわかる」感覚のあるうちに方言音声に対する関心が育てば、方言の継承に期待が持てるのではないだろうか。そのためにも、一般的な使用に耐える表記方法の確立が待たれる。

今回の調査では本調査の成果により老年層の生の音声データの活用を試みたた。従って録音状態がベストではないが、逆に言えば若年層が日常接する環境に近い。そうした中で、音声によっては地域的な変種もおおよそは聞き分けられており、また彼らなりの工夫も見えたことから、方言への関心そのものは衰えておらず、方策によっては継承の可能性もまだまだ小さくないと考える。

表 50　祖父母との同居について（2011 年 11 月調査より、計 130 名、父方 / 母方は区別せず）

高校	同居していない	近くに住んでいる	同居している	過去に同居していた	無回答など
A（宮古）高校	71.43%	1.79%	16.07%	3.57%	7.14%
B（伊良部）高校	46.67%	3.33%	46.67%	3.33%	0.00%
平均	59.05%	2.56%	31.37%	3.45%	4.65%

参考文献

青井隼人 (2012)「南琉球宮古方言の音韻構造」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』No.8, 99-113

小川晋史 (2011)「これからの琉球語に必要な表記法はどのようなものか」『日本語の研究』第 7 巻 4 号 , 99-111

参考：分布図（本調査「音韻Ａ」の結果より）細かい音声的特徴をまとめ、アルファベットの大文字で代表して示す

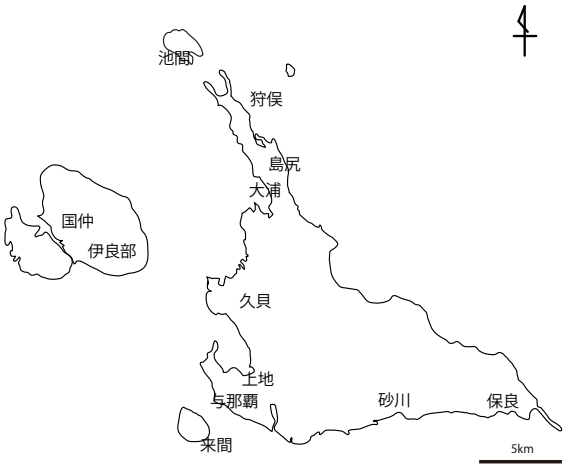


図 1　音韻調査地点

池間	上地	国仲
狩俣	与那覇	伊良部
島尻	来間	
大浦	砂川	
久貝	保良	

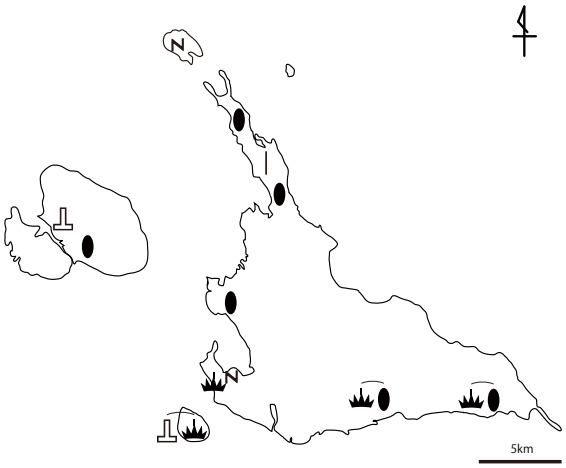


図 2 「頭」

	摩擦噪音あり	KANAMAZ
	摩擦噪音なし	KANAMAI
	成節的子音	KANAMAL
	別語形	
N	データなし	

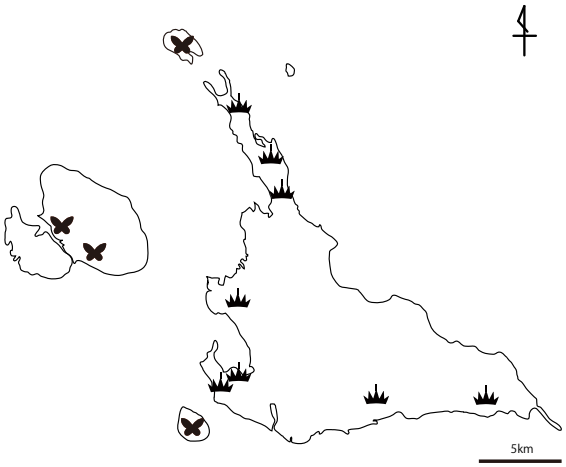


図 3 「心臓」

	摩擦噪音	KSIMU
	破擦音	CIMU

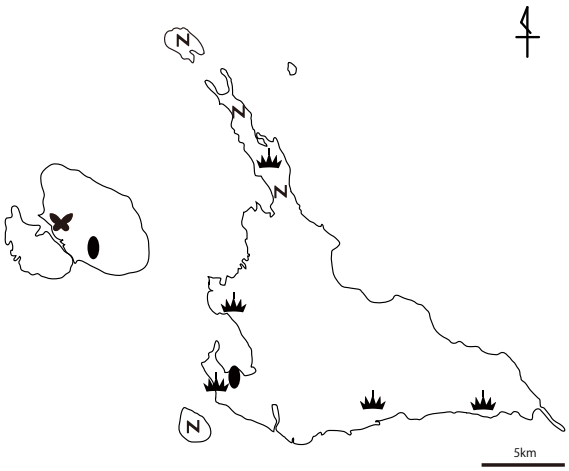


図 4 「霧」

	摩擦噪音あり	KSI:
	摩擦噪音なし	KIRI
	破擦音	CI:
N	データなし	

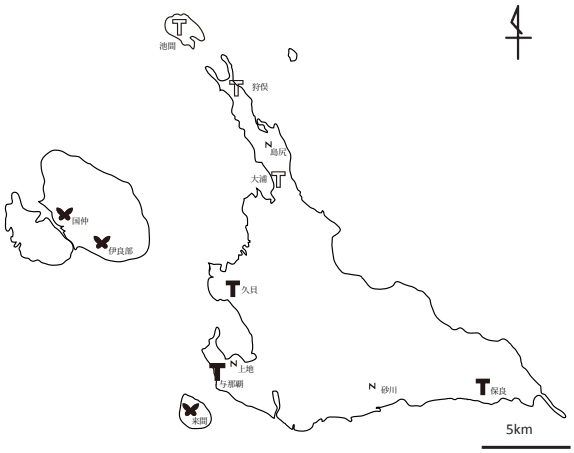


図５「息」

T	摩擦噪音あり	IKSI
T	摩擦噪音なし	IKI
✖	破擦音	ICI
N	データなし	

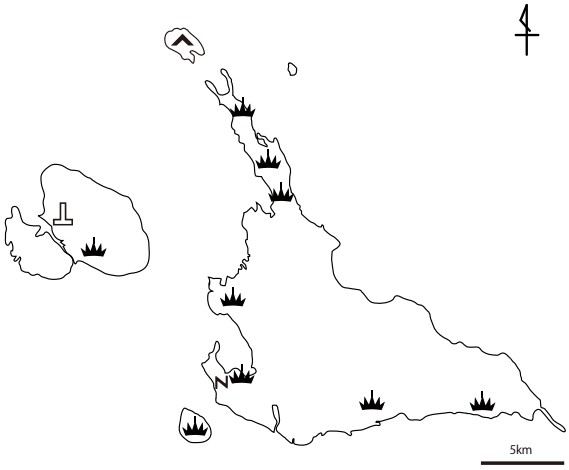


図６「昼間」

♛	摩擦噪音あり	PSIMA
●	摩擦噪音なし	PI:MA
⊥	成節的子音	PILMA
^	HI:MA	
N	データなし	

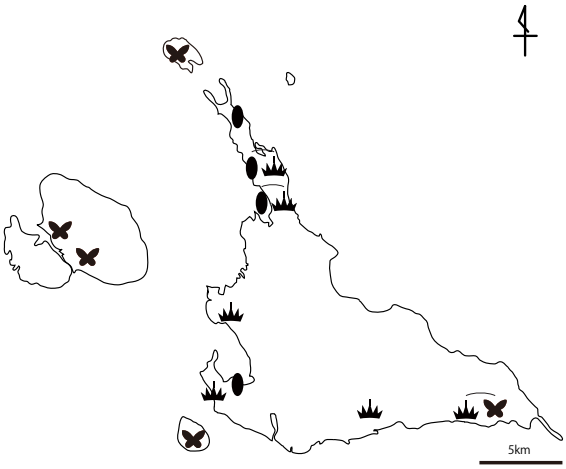


図７「サトウキビ」

♛	摩擦噪音あり	BU:GZI
●	摩擦噪音なし	BU:GI
✖	破擦音	BU:DZI

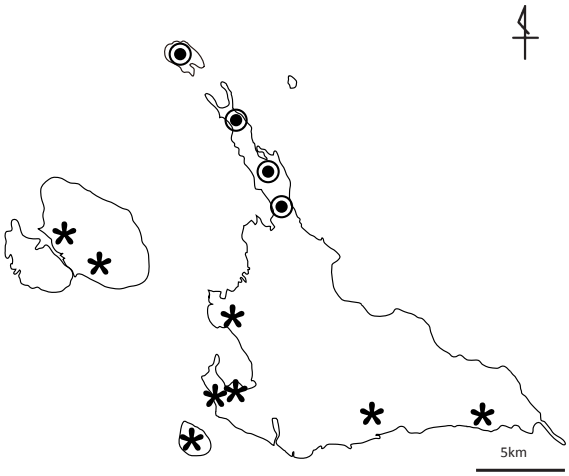


図８「海」

*	IM
◉	IN

5　宮古方言データ集

凡例および表記について

木部　暢子

1　表記の基本方針

2011 年の宮古方言調査のうち，基礎語彙ａ，基礎語彙ｂ，文法の調査データを以下に掲載する。それぞれの調査項目の内容と調査方法については，「２　調査の概要」を参照していただきたい。ここでは，調査データの表記法について述べておく。表記は以下のような方針で行っている。

(1) 語形は国際音声記号で表記する。ただし，宮古方言の音の解釈をめぐっては，研究者の間で，さまざまな意見がある。それと並行して，表記法もさまざまである。本報告書では，それらを統一することはせず，各地点の調査担当者（グループ）が報告したそのままの表記を掲載している。

(2) アクセントは表記しない。ただし，「基礎語彙ｂ」の狩俣地区のデータのみ，調査者の報告に従って，アクセント符号を付けている。アクセント符号は，次のものを使用する。　[： 音調の上がり目を表す。]： 音調の下がり目を表す。

(3) 同一話者が複数の語形を回答した場合は，２つ（またはそれ以上）の語形を「 / 」で区切って併記する。同一話者の発音が揺れている場合は，２つ（またはそれ以上）の発音を「～」でつないで表記する。話者により語形が異なる場合は，２つ（またはそれ以上）の語形を「//」で区切り，それぞれの語形の発話者の氏名を[ ]に入れて示す。例えば，来間の[A]，[B]は川満さん，玉城さんの発話であることを表す。また，地域により違いがあると回答された場合には，地域名を[ ]に入れて示す。例えば，保良の[保良]，[新城]がそれに当たる。

(4) 文法項目では,発音の揺れや複数語形の回答の範囲を｛　｝でくくって表す。例えば，「N-155B-2：池間：kjuːja {teŋkinu / suɾanu} baikaiba tubimunumai tubaɴ（今日は天気が悪いから飛行機は飛ばない）」は，「天気が」に対して teŋkinu と suɾanu の２つの語形が回答されたことを表す。文単位で複数回答を示す場合は，２つ（またはそれ以上の）文を ‖ で区切って表す。例えば，「N-155B-2：来間：kʲuːja tintsɿ̥nu baʑkaɾiba çi̥koːkʲaː tubaŋ ‖ kʲuːja ʋaːtstsɿ̥nu janakaɾiba çi̥koːkʲaː tubaŋ」は「今日は天気が悪いから飛行機は飛ばない」に対して２つの文が回答されたことを表す。

(5) 語形に関するその他の情報は，( )の中に入れて示す。また，関連する情報は〈cf.〉として示す。

(6) [新]，[古]は語形の新旧を，[誘導]は語形を誘導して得られた回答であることを表す。

２　調査者による表記の違い

上記(1)に述べたように，宮古方言の音の解釈と表記法については，さまざまな意見がある。本報告書では，それらを統一することはせず，各地点の調査担当者（グループ）が報告したそのままの表記を掲載している。いわゆる「中舌性母音」の表記についても，担当者（グループ）が報告した形をそのまま載せている。従って，調査地域により「中舌性母音」の表記が違っている場合，その違いは，必ずしも地域による発音の違いを表しているとは限らない。発音は同じでも，調査者（グループ）の音韻論的解釈が違っている可能性があるからである。文法項目の場合，「２　調査の概要」で述べたように，調査項目の前半，中半，後半で話者と調査者（グループ）が異なっている。それに伴い，「中舌性母音」の表記も前半，中半，後半で異なる場合がある。この場合も，表記の違いが必ずしも話者による発音の違いを表しているとは限らず，調査者（グループ）の音韻論的解釈の違いを表している可能性がある。本書を利用する際には，この点に十分，注意していただきたい。表１に調査担当者（グループ）ごとの「中舌性母音」の表記の特徴をあげておく。

表１　いわゆる「中舌性母音」の表記の違い

〈項目〉	〈地域〉	〈調査者〉	〈表記〉
基礎語彙ａ	池　間	ローレンス，荻野，平子，青井	ï
	狩　俣	ローレンス，中澤	ï
	島　尻	白田，ペラール	ɿ
	大　浦	林，竹村	ɿ
	久　貝	ローレンス，仲原，川瀬，久保薗	ï
	与那覇	白田，小川	ɿ
	上　地	新田，井上，川瀬	ɨ
	来　間	ローレンス，平子	ï
	砂　川	狩俣，木部，平山，竹村	ɿ
	保　良	白田，徳永，ペラール	ɿ
	伊良部	ペラール，竹村	ɿ
	国　仲	新田，中澤	ɨ
基礎語彙ｂ	池　間	新田，平山，松浦，川瀬	ɿ
	狩　俣	中島，竹田	ɨ
	島　尻	下地，林	ɿ
	大　浦	平子，久保薗	ɿ
	野　原	野原，徳永，又吉，平山	ɿ
	保　良	新田，平子，中澤	ɿ
	伊良部	木部，仲間(博)，當山	ɿ

	国　仲：諸岡，徳永	：ɨ
文法（前）	：池　間（野原，仲原，デイビス，内海）	：ï
文法（後）	：池　間：又吉，山田，白田，當山	：ɿ
文法（前）	：狩　俣：仲原，松本	：ï
（中）	：狩　俣：仲間(恵)，デイビス，内海	：ɿ
文法（前）	：久　貝：野原，林，仲間(博)，松本	：ɿ
文法（前）	：与那覇：下地	：ɿ
（中）	：与那覇：林	：ɿ
文法（前）	：来　間：狩俣，内海，デイビス	：ɿ
（中）	：来　間：金田，井上，竹田	：ɿ
文法（前）	：宮　国：金田，竹田	：ï・ɿ・ɨ
（中）	：宮　国：田窪，中島	：ɨ
文法（前）	：砂　川：仲間(恵)，井上，荻野	：ɿ
（中）	：砂　川：西岡，内海，デイビス	：ɨ
文法（前）	：保　良：狩俣，當山	：ɿ
（中）	：保　良：下地，諸岡	：ɿ
（後）	：保　良：狩俣，金田，山田，諸岡	：ɿ
文法（後）	：国　仲：中島	：ɿ

上の具体例を，基礎語彙 a，基礎語彙 b の中から抜き出して，表 2 にあげておく。文法項目については，「文法項目 データ」の右端の欄に調査者の頭文字を掲載しておいた。調査者の具体的な氏名については，表 1 を参照されたい。

表２　いわゆる「中舌性母音」を含む語

基礎語彙 a

子音	p	p,b	p,b	m	m
番号	a155	a169	a016	a087	a104
地域	昼間	冷たい	髭・毛	ウニなどの肉・身	韭（にら）
池間	hiːma	higuɾumunu	higi	miː	miːna
狩俣	psm̥a	bzguɯ	bzgɯ ~ bzgï ~ bïgï	mïː	mïzza
島尻	pˢɭnaχa / pˢɭma	bᶻɭguɾu	bᶻɭgi	miᶻɭ	miᶻɭna
大浦	pˢɭma	bᶻɭguɾukaŋ	pˢɭgi ~ pɭgi	miɭ	miɭna
久貝	psïma	psïguɾumunu	psgi	kadʑaᵗsanumiz	mizza
与那覇	pˢɭ̥ma	pˢɭ̥gʊɾʊːnʊ	pᶻɭgi	mᶻɭː	mᶻɭːna
上地	pˢɨma	pˢɨsa ~ pᶜɨsa	pᶜɨgi	mɨː	miɮla ~ milna
来間	pssïma	pzguɾoː	psgi	mïː	mïːna
砂川	pˢɭːma	pˢ̩guɾuːpˢ̩guɾu	psgi ~ pˢɭ̥gi	mz̩ː	nʲiɾa / miz̩na ~ miɭna
保良	pˢɭːma	pˢɭgʊɾʊːnʊ	pˢɭgi	mᶻɭː	sɭʊna ~ sɭʊna
伊良部	pˢɭːma	pˢɭguɾumunu	pˢɭgi / fʊ̥tsɭpˢɭgi	miɭ	nubiɭ
国仲	pʰɨɭːma	pʰɨguɾumunu	pʰɨgi	mɨː	mɨɭna

子音	s	s	s	s	ts,s
番号	a003	a007	a008	a014	a032
地域	櫛	唇	舌	歯茎	膝
池間	fʊ̥çi	fʊ̥tsï	çta	hadʑïsï	sïgusï
狩俣	fʊ̥sï = fʷsï	sïba	ʂta	pʰabasï	tsïgasï / pʰïdʑa
島尻	ssɭ	ᶻɭba	ᶻɭda	pʰabas(ɭ)	tugusɭ ~ tugasɭ
大浦	sː ~ sɭː	NR	ɭda ~ ᶻɭda	pʰaːnuniː	sugasɭ
久貝	fsï	sïba	sïda	pʰasï ~ pʰa̰sï	tsïgusï
与那覇	fˢɭʊ	sᶻɭba	sᶻɭda	pazɭsɭ	tsɭgʊsɭ
上地	fu (ff か？)	sɨba	sɨda	pa̰sɨːsɨ	tsɨgusɨ
来間	fʊ̥sï	sïba	sïda	pʰasïːsï	tsïgusï
砂川	f̩s̩~f̩sɭ̥~fʊ̥sɭ	sʊ̥ba ~ spa	sɭda ~ sɭ̥da	pabasɭ ~ pabas	tsgusɭ ~ tsɭgusɭ
保良	fʊ̥sɭ	sɭba	sɭda	pʰapasɭ~pʰaʊ̥basɭ	tsɭgʊsɭ
伊良部	fʊ̥sɭ	sɭba	sta	pʰa̰sɭːsɭ	tsɭgusɭ
国仲	fsu	sɨbaɣa	sɨ̥ta (sta か)	−	tsɨgusɨ

子音	s	s	s	s	ʤ,z
番号	a078	a076	a122	a185	a002
地域	鳥の巣	豚などの肉	帯	村	髪の毛
池間	tuinusïː	sïːsï	su̥kuː ～ sï̥kuː	mmaɾiʤïma	kiː
狩俣	sïː	sïːsï	sïpʰugɯ	sïma	kaɾaʤï
島尻	ssɿ	ɕiːsɿ	safugᶻɿ ～ sapugᶻɿ	sɿma	kʰaɾaʤɿ
大浦	sɿː	sɿːsɿ	subagɿ	sɿma	kʰaɾaʤɿ
久貝	ssï	ɕiːsï	sïpugz	sïma	kʰaɾaᵈzï
与那覇	tʊːnʊssɿ	sɿːsɿ	sˢɿ̥pʊgᶻɿ	NR	kʰaɾaᵈz
上地	tuɭ no sɨ	sɨːsɨ	supɯgɯ(supɨgɨ か)	NR	kaɾaʤɨ
来間	tʰuɭnussï	sïːsï	sï̥puʤï	bantaʤïma	kʰaɾaʤï
砂川	sɿ̥ː ～ sɿː	ɕiːs ～ ɕiːsɿ	s̩pugz̩	s̩ma ～ s̩m̥a	kaɾaʤɿ ～ kʰḁɾaʤɿ
保良	sɿː	sɿːsɿ	spʊᵈzɿ	sɿma	kʰaɾaʤɿ
伊良部	sɿː	sɿːsɿ	sɿkubᶻɿ	sɿma	kʰaɾaʤɿ
国仲	sɨː	sɨːsɨ	su̥ku̥bᶻɨ ～ su̥ku̥bɨ	muɾa	kaɾaʤɨ

子音	ʤ	ʤ	ʤ	ʤ	ʤ,g,b
番号	a023	a024	a049	a067	a123
地域	肘	傷	妻	ミミズ	襟
池間	hiʤi	ndaɾi	tuʤï	ʤïmiːʤï	ʦïnnufuʤï
狩俣	piʤï	NR	tuʤï	mïːmiʤï	fugɯ
島尻	piʤɿ	kʰiʤɿ	tʰuʤɿ	miːmiʤɿ	fugᶻɿ
大浦	pʰiʤɿ	kʰiʤɿ	tʰuᵈzɿ	miːmaᵈzɿ	fugɿ
久貝	pʰiʤï	kʰiʤï	tʰuʤï	miːmiᵈzï	kˢïnnufugz
与那覇	pʰiʤɿ	kʰiʤɿ	tʰʊʤᶻɿ	miːmiᵈᶻɿ	fʊgᶻɿ
上地	piʤɨ	kiʤɨ	midum ～ miðum	mimiʤɨ	fugɯ (fugɨ か)
来間	piʤï	NR	midumu	miːmiʤï	fuʤï
砂川	pi̥ʤɿ ～ piʤɿ	ki̥ʤɿ ～ kiʤɿ	tuʤɿ	minʤɿ	eɾi
保良	pʰiᵈzɿ	kʰiᵈzɿ	tʰʊʤɿ	mimʤɿ	fʊgɿ～fʊʤɿ
伊良部	pʰiʤɿ	kʰiʤɿ	tʰuʤɿ	mimiʤɿ	kʰubᶻɿ
国仲	pʰiʤɨ	kʰiʤɨ	tu̥ʤɨ	ʤɨmiʤɨ	fuʤɨ

子音	ʥ	ʥ,g	ʥ,g	ʥ,g	ʥ,g
番号	a127	a091	a118	a116	a033
地域	水	砂糖黍	釘	鋸	あし(脚)
池間	miʥï	buːʥï	kanifuʥï	nukuʥï	haʥï
狩俣	mi(ᵈ)zï	buːgï̠	fugï̠ ～ fugɯ	nukagï̠	pʰagɯ
島尻	miʥɿ	buːgɿ ～ buːgᶻɿ	fugᶻɿ	nukagᶻɿ	pʰagɿ ～ pʰagᶻɿ
大浦	miʥɿ	buːgɿ ～ buːgᶻɿ	kʰanifugɿ	nukagᶻɿ	pʰagɿ ～ pʰagᶻɿ
久貝	miʥï	buːgᶻï	kʰanifugz / fugz	nukugz	pʰaʥï
与那覇	miᵈzɿ	buːgᶻɿ	fʊgᶻɿ	nʊkʊgᶻɿ	pʰagᶻɿ
上地	miʥɨ	buːgɨ	fugɨ	nukugɨ ～ nufugɨ	pagɨ
来間	miʥï	buːʥï	fuʥï / kʰanfuʥï	nukuʥï	pʰaʥï
砂川	miʥɿ	buːgʐ̩	fg̥ʐ̩	nukugʐ̩	pagʐ̩
保良	miᵈzɿ	bʊːgᶻɿ ～ bʊːʥɿ	fʊgᶻɿ	nʊkʊgᶻɿ	pʰaᵈzɿ ～ pʰagᶻɿ
伊良部	miᵈzɿ	buːʥɿ	fuʥɿ	nukʰaʥɿː	pʰaʥɿ
国仲	miʥɨ	bu̟ːʥɨ	kanifuʥɨ / fuʥɨ	nu̟ku̟ʥɨ	pazɨ (paz か)

子音	ʥ,g,b,ts	ʥ,g,b	ts	ts	ts
番号	a010	a122	a006	a025	a031
地域	欠伸	帯	口	血	乳
池間	afuʥï	su̥kuː ～ sï̥kuː	fu̥tsï	akatsï	tsïː
狩俣	afu	sïpʰugɯ	fu̥tsï	haːtsï	tzïː
島尻	afkᶻɿ ～ afkˢɿ	safugᶻɿ ～ sapugᶻɿ	ftsɿ	aχatsɿ	tssɿ
大浦	NR	subagɿ	fu̥tsɿ	haːtsɿ	tsɿ
久貝	afugᶻï	sïpugz	ftsï	akatsï	tsï˙
与那覇	afʊkᶻɿ	sˢɿ̥pʊgᶻɿ	fʊ̥tsɿ	akʰḁtsɿ	tsɿː
上地	akubi	supɯgɯ (supɨgɨ か)	fu̥tsɨ	aχḁtsɨ ～ akḁtsɨ	tsɨ
来間	afuʥï	sï̥puʥï	ftsï	akatsï// aᵏxatsï	tsï // tssï
砂川	akubi ～ aku̥bi	s̩pugʐ̩	f̩ts ～ f̩tsɿ	akḁtsɿ ～ akḁtsɿ	tsɿː
保良	afʊtsɿ	spʊᵈzɿ	fʊ̥tsɿ	akʰḁtsɿ	tssɿ
伊良部	akuʊ	sɿkubᶻɿ	fʊ̥tsɿ	axḁtsɿ ～ ahatsɿ	tsɿː
国仲	afu̥tsɨ (aftsɨ か)	su̟ku̟bᶻɨ ～ su̟ku̟bɨ	fu̥tsɨ (ftsɨ か)	akˣḁtsɨ	tsɨ

子音	ts,s	ts	ts	ts	ts
番号	a032	a073	a125	a142	a150
地域	膝	角	火	月	道
池間	sïgusï	nnu	umatsï	tsïtsï	ntsï
狩俣	tsïgasï / pʰïʤa	tsn̥u	u̥matsï	tskssu	ntsï
島尻	tugusɿ ~ tugasɿ	tsɿnu	mmatsɿ	tskɿ ~ tskˢɿ	ntsɿ
大浦	sugasɿ	tsɿnu	mmoːtsɿ	tskɿ	ntsɿ
久貝	tsïgusï	tsïnu	umutsï	tskssu	mtsï
与那覇	tsɿgʊsɿ	tsɿnʊ	ʊmatsɿ	tsɿkˢɿ / tsɿkˢɿnʊjʊː	mtsɿ
上地	tsɨgusɨ	tsɨnu	u̥matsɨ	tsɨ̥kɨjuˑ	m̩tsɨ
来間	tsïgusï	tsïnu	umatsï	tsïtsï// tsïtsïnujuː	mtsï
砂川	tsgusɿ ~ tsɿgusɿ	tsnu ~ tsɿ̥nu	umats ~ umatsɿ	tskʂ	m̩ts ~ m̩tsɿ
保良	tsɿgʊsɿ	tsɿnʊ	mmatsɿ	tskɿ	mtsɿ
伊良部	tsɿgusɿ	tsɿnu ~ tsɿno	umatsɿ	tstsu ~ tsttsu(?)	mtsɿ
国仲	tsɨgusɨ	tsɨnu̥	u̥matsɨ	tsɨ̥ttu̥	n̩tsɨ

子音	ts	ts	k,ts	k,ts	k,ts
番号	a153	a115	a009	a030	a121
地域	露	福木	息	肝・心臓	着物
池間	tsïː	kutsïgi	iki	tsïmu (肝臓)	tsïŋ
狩俣	tsïju	pʰu̥kagagiː	ikɯ	kˢïmu	kˢïŋ
島尻	tɕiʊ	kʰu̥pagᶻɿgiː	–	kˢɿmu	kˢɿŋ
大浦	tsɿv	pʰukagi	ikɿ	kˢɿmu	kˢɿŋ / fuku (服)
久貝	tsïv	pʰukaʤgiː	ikˢï	kˢᶻïmu	kˢïŋ
与那覇	tsˢɿʊ	pʰu̥kʊgiː	–	kˢɿ̥mu/basanaɿ	kˢɿŋ / kˢɿmʊnʊ
上地	NR	pu̥kukugi	–	kᶜɨmu ~ kɨmu	kɨŋ
来間	tɕuf	pukutsïgiː	iᵗsï // itsï	tsïmu	tsïŋ
砂川	tsʊ̩ ~ tsɿ̥ʊ	pu̥ku̥kukiː~ pu̥kukugi	–	ksmu ~ kˢɿmu	kʂn
保良	tsʊv ~ tsɿʊ	fu̥kʊkɿgiː [新]	ikˢɿ	kˢɿmʊ	kˢɿŋ
伊良部	tsɿv	kuputsɿgi	itsɿ	tsɿmuʊtsɿ (心臓) /tsɿmu (肝)	tˢɿŋ
国仲	tu̥ʊ	pu̥kutsɨgiˑ	itsɨ	tsɨmu	tsɨŋ

子音	k,ts	ゼロ	ゼロ	ゼロ	ゼロ
番号	a163	a081	a092	a001	a012
地域	昨日	魚	鎌	頭	顎先
池間	nnu	zzu ～ ʤu	zzaɾa ～ ᵈzaɾa	kanamai	utugai
狩俣	ksn̥u	ïzu	ïzaɾa	kanamaɯ ～ kʰanamaï/aha	utugaɯ ～ tugaï
島尻	kˢɳnu	zzu	zzaɾa	aχa	agu
大浦	kˢɳnu	ɳzu	ᶻɳzaɾa	kʰanamaɳ	utuguɳ
久貝	ksïnu	zzu	zzaɾa	kʰanamazⁱ	staguz
与那覇	kˢɳ̊nʊ	zzu ～ ɳzu	zzaɾa	kʰanamaᶻɳ	stʰʊgaᶻɳ
上地	kˢɨnu	ⁱzzu	ⁱzzaɾa	kanamaʒe	agu
来間	tsïno	zzu̟	zzaɾa	kʰanamaɭ // xʰanamaz	sʷtugaɭ
砂川	kṣnuː	zzu	zzaɾa	kʰḁnamaẓ ～ kʰanamaɳ	agu
保良	kˢɳnʊː	zzʊ ～ ɳzʊ	zzaɾa	kʰanamaᶻɳ ～ kʰanamaɳ	agʊ / ʊtʊgaɳ ～ ʊtʊgaʤɳ
伊良部	tsɳnuː	ᶻɳzu	ɳzaɾa	kʰanamaɳ（ɳ が l に聞こえることもある）	agu / utugaɳ
国仲	tsɨnu̟	(ⁱ)zzuː	ⁱzzaɾa	kanamaɭ	u̟tu̟gaɪ

子音	ゼロ	ゼロ	ゼロ	ゼロ	ゼロ
番号	a057	a066	a077	a082	a099
地域	姪	蟻	鳥	鱗	米
池間	mʲuːi	akai	tui	tsïːʤï / iːki	mai
狩俣	mʲuːï̱	haːɯ	tuɯ	ïːki	maɯ
島尻	mjuːᶻɳ	aχaᶻɳ	tʰuᶻɳ	–	maɳ ～ maᶻɳ
大浦	mʲuːɳ	haːɳ ～ xaːɳ	tʰuɳ	–	maɳ
久貝	mʲuːz	aḵaːẓ	tʰuz	izki	namamaz / maz
与那覇	mʲuːᶻɳ (甥・姪)	akaːᶻɳ	tʊᶻɳ	–	maᶻɳ
上地	mjuəᶻ / mjuəffa	akˣɑːɭ	tou	–	mal
来間	mʲuːï ～ mʲuːz	akaɭ // akaz	tʰuz	izki	maz//maɭ
砂川	mʲuːz	aẓgaɾa	tuẓ	–	maẓ ～ maɳ
保良	mʲʊːɳ ～ mʲʊːᶻɳ	aᶻɳgaɾa // akʰaːᶻɳ	tʰʊɳ	ɳᶻːki	maᶻɳ
伊良部	mʲuːᶻɳ	ahaːɳ	tʰuᶻɳ ～ tʰuɳ	iᶻɳkja	maɳ
国仲	mjuːɭ ～ mjuːɭᶻ	akaːɭ	tu̟ɭ	iɭki	maɭ

子音	ゼロ	ゼロ	ゼロ	ゼロ	ゼロ
番号	a100	a103	a112	a120	a126
地域	椀	にんにく	実	針	灰
池間	makai	hiː	miː	hai	kɑrahai
狩俣	maːɯ	pˢïː	nːta	pʰaɯ	kɑrapaɯ
島尻	maχaɭ ~ maχaᶻɭ	pʰiᶻɭ	miᶻɭ / naᶻɭ	piᶻɭ	kɑrapaᶻɭ
大浦	makaɭ	pʰiɭ	naɭ	piɭ	kʰɑrapaɭ
久貝	makʰazⁱ	pʰiz	naz	piz	kʰɑrapʰaz / pʰaz(ï)
与那覇	makʰaᶻɭ	pʰiᶻɭ	kiːnunaᶻɭ	pʰiᶻɭ	kʰɑrapaᶻɭ
上地	makˣal	pʰil / pʰiltɕi̥kina	naᶻ ~ naɮ ~ naɯ	pʰiᶻ ~ pʰiʎ ~ pʰiɯ̆	kɑrapʰaʎ ~ kɑrapʰaᶻ
来間	makaɭ// makaz	piz	(kiːnu) naẓ	pʰiz	kɑrabaɭ // kɑrabaz
砂川	makaẓ ~ [sic.]	piẓ ~ pi̥ẓ	naẓ	pʰi̥ẓ	kɑrapaẓ
保良	makaᶻɭ	pʰiᶻɭ	naᶻɭ	pʰjaᶻɭ	kʰɑrapaɭ ~ kʰɑrapaᶻɭ
伊良部	maxaɭ ~ mahaɭ	pʰiɭ	naɭ	pʰaɭ	kʰɑra paɭ
国仲	makaɭ	pʰiɭ	naɭ	paɭ	kɑrapaɭ

子音	ゼロ	ゼロ	ゼロ	ゼロ	ゼロ
番号	a139	a143	a145	a148	a137
地域	光	東	西	左	稲光
池間	çi̥kai	agai	iː	çidai	kannai
狩俣	pskaɯ	aːɯ	nisï	bïdaɯ ~ bzdaɯ	nnapskaɯ
島尻	pskaᶻɭ	aʁaɭ	iᶻɭ	bᶻɭdaᶻɭ	nnapskaᶻɭ
大浦	pskaɭ	(agaɭ ~) aːɭ	iɭ / nisɭ	bᶻɭdaɭ	nnapsɭkaɭ / kʰannaɭ (雷)
久貝	pskaz	ag̅az	iᶻ	pzdaz	mːnapskaz
与那覇	pˢɭ̥kaᶻɭ	agaᶻɭ	iᶻɭ	pˢɭ̥daᶻɭ	nnapˢɭkaᶻɭ
上地	pᶜkal	aɣal	lː (ʎːか)	pɨdal ~ pɨda	m̩napˢɣal (l は舌背)
来間	pskaɭ	agaɭ // agaz	iɭ // iz	pʰïdaɭ // psdaz	nnabïkaɭ // nnapskaɭ
砂川	pṣkaẓ̥	agaẓ	ẓː	pṣdaẓ ~ pṣdaɭ	nnapṣkaẓ
保良	pskaɭ	agaɭ	iᶻɭ	pˢɭdaɭ ~ pˢɭdaᶻɭ	nnapskaᶻɭ
伊良部	pˢkaɭ	aˤaɭ	iᶻɭ	pʰidiɭ	mnapskaɭ
国仲	pɨ̥kaɭ	agaɭ	iɭ	pˢɨdaɭ	m̩nabɨkaɭ

基礎語彙 b

子音	p	p	b	g,z,dʑ
番号	b013	b047	b111	b010
地域	筋（すじ）	昼	紙	脛・足（あし）
池間	haits	hiːma (正午)	kabiː	hazɿ (膝から下)
狩俣	pˢɨkɨbaü	pˢima	kabɨ	pagɨ
島尻	pʰaɕidʑɿ	pssuma ～ pɿsuma	kabᶻɿ	karasɿɲi
大浦	pskipaɿ	pˢɿːma	kabᶻɿ	pagɿ
野原	psɿ̥kɿpaɿ (丁寧)～ psɿ̥kupaɿ(普通)	pɿɾu	kabᶻɿ	pagɿ (足)
保良	pˢkl̥pal̥ ～ pˢkᶻpal̥ ～ pˢkl̥pal̥ᶻ	pᵗsɨːma	kabl̥ᶻ	pagɯ
伊良部	paʐtsɿː	pˢɿːma	kabz	paz
国仲	paltsɨː	pɨlma	kabɨː	padʑɨ

子音	g,z	s	s	s	s
番号	b081	b012	b049	b052	b061
地域	麦（むぎ）	肩（かた）	星（ほし）	島（しま）	牛（うし）
池間	muzɿ	katamuɕiː	hoɕi	ɕima	uɕɿ
狩俣	mugɨ	katamusɨ	psɨ	ɕima / sɨma	usɨ / ɯsɨ
島尻	mugz ～ mugɿ	ibiɾa / kʰḁta	psɿ ～ pu̥sɿ	sɿma	usɿ
大浦	mugᶻɿ	katamusu	psɿ	sɿma	usɿ
野原	mugᶻɿ (摩擦弱い)	kḁtamusɿ̥～ kḁtamusɿ̥ / kḁta	pu̥sɿ	sɿma	usɿ
保良	mgl̥ᶻ	kʰata	psɨ ～ psɨ̥	sɨma	ussɨ
伊良部	nuʐ	kḁtamuɾasɿ	puʂ ～ pu̥ʂ	ʂma	usɿ
国仲	mugi	katamusu̥	pu̥sɨ	sɨma	usɨ

子音	s	ts	ts	ts	ts
番号	b136	b076	b021	b022	b024
地域	下（した）	ソテツ	三つ	四つ	六つ
池間	ɕi̥ta/ɕi̥taːɾa	ttɕuːtsɿ	miːtsɿ	juːtsɿ	mːtsɿ
狩俣	sɨtaːɾa	sɨsudʑɯ / stɨtsɯ / ssudʑɯ	miːtsɨ / miːtsɯ	juːtsɨ / juːtsu̥ɯ	nːtsɨ / nːtsu
島尻	sta	NR	miːtsɿ	juːtsɿ	nːtsɿ
大浦	staːɾa	−	miːtsɿ	juːtsɿ	nntsɿ
野原	sɿ̥ta / sɿtaːɾa	sutitsɿ	miːtsɿ̥	juːtsɿ	mːtsɿ
保良	sɨ̥ta	ʃukʰatsɨ̥	miːtsɨ	juːtsɨ	mmtsɨ
伊良部	ʂtaːɾa	sditsɿ	miːtsɿ	juːtsɿ	m̩ːtsɿ
国仲	sɨtaːɾa	so̥tetsɨ	miːtsɨ	juːtsɨ	mːtsɨ

子音	ts	ゼロ
番号	b033	b101
地域	五人	薬（くすり）
池間	itsunuçi̥tu	fu̥sui
狩俣	itsi̥nuɸtu / ʔitsɨnupɯ̥tu	ɸsɯɨ / ɸusujɯ
島尻	itsɻ nu ttu	ssuɻ
大浦	itsɻnupstu	fsui / ssui
野原	itsɻnupstu	fu̥suːᶻɻ
保良	guniŋ	fsɨːz ～ fsɨl̥ᶻ
伊良部	itsɻnu pstu	f̬s̬z̬
国仲	itsunupˢɨtu	ɸusul

そのほか，「a162 やに（来年）」「a172 ふに（船）」「b070 に（根）」「b74 たに（種）」「b083 ふにん（ミカン）」「b116 に（荷）」などの語の「に」も調査担当者により表記が異なる。これには，ni，ɲi，nʲi の３通りの表記が使われているが，この違いは発音の違いではなく，担当者の音韻論的解釈の違いであると思われる。調査者（グループ）による表記の特徴を表３にあげておく。

表３　「やに（来年）」などの「に」の表記の違い

基礎語彙 a

地域	調査者	表記の特徴	a162	a172
			来年	船
池間	ローレンス，荻野，平子，青井	ni	jaːni	funi
狩俣	ローレンス，中澤	ni	jaːni	funi
島尻	白田，ペラール	ni	jaːni	funi
大浦	林，竹村	ni	jaːni	funi
久貝	ローレンス，仲原，川瀬，久保薗	ni	jaːni	funi
与那覇	白田，小川	ni	jaːni	fʊni
上地	新田，井上，川瀬	nʲi	jaːnʲi	funʲi
来間	ローレンス，平子	ni	jaːni	funi
砂川	狩俣，木部，平山，竹村	nʲi	jaːnʲi	ɸu̥nʲi
保良	白田，徳永，ペラール	ni	jaːni	fʊni
伊良部	ペラール，竹村	ni	jaini	funi
国仲	新田，中澤	ni	jaːni	funi

基礎語彙 b

地域	調査者	表記の特徴	b070	b074	b083	b116
			根	種	ミカン	荷
池間	新田，平山，松浦，川瀬	ni	ni:	tani	funʲu:	ni:
狩俣	中島，竹田	ni	nibaḷ	tani	ɸniṇ/ɸniɯ/ɸnʲɯ	ni:
島尻	下地，林	ɲi	ɲi:	taɲi	fɯnɳ	ɲimutsɽ̥
大浦	平子，久保薗	ni	ni:	tani	funiᶻɽ	ni:
野原	野原，徳永，又吉，平山	ni	ni:	sani	funiɲ	ni:
保良	新田，平子，中澤	ni	ni:	tʰani	funiḷᶻ	ni:
伊良部	木部，仲間(博)，當山	nʲi	nʲi:	tanʲi	f(u)nʲiz	nʲi:
国仲	諸岡，徳永	nʲi・ni	ni:	tani	ɸunʲiu	ni:

文法

〈項目〉	〈地域〉	〈調査者〉	〈表記〉
文法（前）	：池　間	：野原，仲原，デイビス，内海	：ɲi
文法（後）	：池　間	：又吉，山田，白田，當山	：nʲi
文法（前）	：狩　俣	：仲原，松本	：ɲi
（中）	：狩　俣	：仲間(恵)，デイビス，内海	：ni
文法（前）	：久　貝	：野原，林，仲間(博)，松本	：ni
文法（前）	：与那覇	：下地	：ni
（中）	：与那覇	：林	：nʲi
文法（前）	：来　間	：狩俣，内海，デイビス	：nʲi
（中）	：来　間	：金田，井上，竹田	：ni
文法（前）	：宮　国	：金田，竹田	：ni
（中）	：宮　国	：田窪，中島	：ni
文法（前）	：砂　川	：仲間(恵)，井上，荻野	：ni
（中）	：砂　川	：西岡，内海，デイビス	：ni
文法（前）	：保　良	：狩俣，當山	：nʲi
（中）	：保　良	：下地，諸岡	：nʲi
（後）	：保　良	：狩俣，金田，山田，諸岡	：nʲi
文法（後）	：国　仲	：中島	：ni

宮古方言基礎語彙 a データ

番号	単語	池間	狩俣	島尻
a001	頭	kanamai	kanamaɯ ～ kʰanamaï /aha (ɯ は非常に後ろ寄り。ï は摩擦がない)	aχa
a002	髪の毛	aka (体毛) / kiː	kaɾadʑï	kʰaɾadʑɹ
a003	櫛	fu̥ɕi (fɕiにあらず)	fu̥sï ＝ fʷsï	ssɹ
a004	額	ftai (tは無気)	ftai	－
a005	涙	nada	nada	－
a006	口	fu̥ʦï	fu̥ʦï	fʦɹ
a007	唇	fu̥ʦï	sïba (「上唇」は waːsïba, 「下唇」は sṭasïba	ᶻɹba
a008	舌	ɕta	sṭa (「下」は staːɾa)	ᶻɹda
a009	息	iki	ikɯ	－
a010	欠伸	afudʑï	afu	afkᶻɹ ～ afkˢɹ
a011	声	kui	kʰui	－
a012	顎先	utugai	utugaɯ ～ utugaï	agu
a013	顎（の骨）	utugaibuni (「頬」は kamatsï)	kamagida	agubuni (「頬」は kʰamaʦ(ɹ))
a014	歯茎	hadʑïsï	pʰabasï (「歯」は pʰaː)	pʰabas(ɹ) (「歯」は pʰaː)
a015	首	fudʑï / nudu	nubai	nubai
a016	髭・毛	higi	bzgɯ ～ bzgï ～ bïgï	bᶻɹgi
a017	腕	tiː（「手首」は kaina）	kaina	udʑi (「肩」は ibiɾa)
a018	力	taja	taja	ʦkaɾa ～ ʦɹkaɾa / tʰaja
a019	脇の下	jakata	bagïda	baksta
a020	指	ujubi	u̟ibi	uibi
a021	手	tiː	tiː	－
a022	拳	NR	NR	ʦifuŋ
a023	肘	hidʑi	pidʑï	pidʑɹ
a024	傷	ndaɾi	NR	kʰidʑɹ

番号	単語	大浦	久貝	与那覇
a001	頭	kʰanamaɲ	kʰanamazʲ	kʰanamaᶻɲ
a002	髪の毛	kʰaɾadʑɲ	kʰaɾaᵈzï	kʰaɾaᵈz
a003	櫛	sː ～ sɲː	fsï (f は平唇)	fˢɲʊ
a004	額	fu̥tai ～ ftai	ftai	－
a005	涙	nada	nada / miːnada	－
a006	口	fu̥tsɲ	ftsï	fʊ̥tsɲ
a007	唇	NR	sïba	sᶻɲba
a008	舌	ɲda ～ ᶻɲda	sïda	sᶻɲda
a009	息	ikɲ / ikssu (息を)	ikˢï	－
a010	欠伸	NR	afugᶻï	afʊkᶻɲ
a011	声	－	kui	－
a012	顎先	utuguɲ (「えら」 kʰujuɲ)	staguz (t は無気)	stʰʊgaᶻɲ
a013	顎（の骨）	NR (「頬」は kʰamatsɲ)	agubuni (「頬」は kʰamats)	kʰamatsɲ
a014	歯茎	pʰaːnuniː	pʰasï ～ pʰa̠sï	pazɲsɲ
a015	首	nubaɲ (「のど」は nudu)	nubui / nudu (「首の後ろの方」を nudufugz)	nʊbʊi / fʊgᶻɲ（後ろの方）
a016	髭・毛	pˢɲgi ～ pɲgi	psgi（体毛も）	pᶻɲgi
a017	腕	udi	tʰiː / udi (「肩の痛み」を kʰaina)	kʰaina
a018	力	tʰaja	tskaɾa / tʰaja	tsɲ̥kaɾa / tʰaja
a019	脇の下	baksta	bakˢïdana	bakˢɲda
a020	指	wiːbi	ujabi	uibi
a021	手	－	tʰiː	－
a022	拳	NR	tsïftsïm	tʰiʊtsɲm
a023	肘	pʰidʑɲ	pʰidʑï	pʰidʑɲ
a024	傷	kʰidʑɲ	kʰidʑï	jummai / kʰidʑɲ (「できもの，はれもの」はnibuta)

番号	単語	上地	来間	砂川
a001	頭	kanamaɮe	kʰanamaɭ [A]// xʰanamaz [B]	kʰa̰namazˌ ~ kʰanamaɾ
a002	髪の毛	kaɾadʑɨ	kʰaɾadʑï	kaɾadʑɾ ~ kʰa̰ɾadʑɾ
a003	櫛	fu (ffか？)	fṵsï	fˌs ~ fˌsɾ̥ ~ fʊˌsɾ (ʊ は唇歯の接近音で母音の役割。̥ は前半が無声で遅れて有声の意)
a004	額	−	fte̞	−
a005	涙	−	nada	−
a006	口	fṵtsɨ	ftsï	fˌts ~ fˌtsɾ
a007	唇	sɨba (「大きな口」は oftsɨba)	sïba	sb̥a ~ spa
a008	舌	sɨda	sïda	sɾda ~ sɾ̰da (or sˌda)
a009	息	−	iˡsï [A]// itsï [B]	−
a010	欠伸	akubi	afudʑï	akubi ~ akṵbi
a011	声	−	kui	−
a012	顎先	agu	sʷtugaɭ (sʷtugaz と発音しない) (「頬」は kʰamats)	agu
a013	顎（の骨）	kamatsɨ (あご全体) / agubuni (あごの骨)	kʰamagida(buni)	kʰamagita ~ ka̰magita
a014	歯茎	pa̰sɨːsɨ (「歯」は paː)	pʰasïːsï	pabasɾ ~ pabas
a015	首	nubuɕi	nubui / nudu	nub̥ui
a016	髭・毛	pᶜɨgi	psgi（体毛も）	psgi ~ pˢ̰gi
a017	腕	udi / kaina (ひじより先) / tiː (手)	ude / kʰaina (肘から手首まで)	kaina
a018	力	tsɨkaɾa / taja (「力が強い」は tajamunu)	taja	taja
a019	脇の下	bakɨɮa (bakɨðaか)	bakˢïda [古] / bitta [新]	baksˌda
a020	指	uibi	u.ibi	ujubi ~ ujub̥i
a021	手	−	tʰiː	−
a022	拳	tiːsɨm	tivtsïm	tsɾdʑɾfʊˌm ~ tsɾ̥dʑɾfʊˌm
a023	肘	pidʑɨ	pidʑï	pḭdʑɾ ~ pidʑɾ
a024	傷	kidʑɨ	NR	kḭdʑɾ ~ kidʑɾ

番号	単語	保良	伊良部	国仲
a001	頭	kʰanamaᶻɹ ~ kʰanamaɹ	kʰanamaɹ（ɹ が l に聞こえることもある。以下同じ）	kanamaɭ
a002	髪の毛	kʰaɾadʑɹ	kʰaɾadʑɹ	kaɾadʑɨ
a003	櫛	fʊ̥sɹ	fʊ̥sɹ（ʊ̥ は u ほど円唇性が強くなく ɹ とも異なる）	fsu
a004	額	fʊ̥tai	fʊ̥tai	fu̥taɪ
a005	涙	nada	nada	nada
a006	口	fʊ̥tsɹ	fʊ̥tsɹ	fu̥tsɨ (ftsɨか)
a007	唇	sɹba	sɹba	sɨbaɣa
a008	舌	sɹda	sta	si̥ta (staか)
a009	息	ikˢɹ	itsɹ	itsɨ
a010	欠伸	afʊtsɹ	akuʊ	afu̥tsɨ (aftsɨか)
a011	声	kʰʊi	kʰui	kue̞
a012	顎先	agʊ / ʊtʊgaɹ ~ ʊtʊgadʑɹ	agu / utugaɹ	u̞tu̞gaɪ
a013	顎（の骨）	agʊ / 頬kʰamatsɹ	pʰagita (「頬」は tʰaaˢkamadʑɹ)	kamagita(buni) / kamagi(buni)
a014	歯茎	pʰapasɹ ~ pʰab̥asɹ	pʰḁsɹːsɹ	–
a015	首	nʊbʊi	nudu / nubui	nu̞du
a016	髭・毛	pˢɹgi	pˢɹgi / fʊ̥tsɹpˢɹgi	pʰɨgi
a017	腕	ʊdi / kʰaina（腕の付け根の背中側，肩の近く）	kʰaina	udi / kaɪna (誘導)
a018	力	tʰaja	tʰaja (「強い」は tʰuːmunu)	taja
a019	脇の下	bakˢɹda [保良] // bitta [新城]	batta	batta
a020	指	ʊibi	uibi ~ oibi	ʷu̞ɪbi
a021	手	tiː / ʊdifʊdʑɹ（手首）	tʰiː	tᶜiː / tᶜibiɾa
a022	拳	tʰiʊtsɹm ~ tʰiʊtsɹm	tʰivtsɹm	tɨzɨfum̩ ~ tɨzfum̩
a023	肘	pʰiᵈzɹ (「肘」をpʰittsʊ ~ pʰiᵈzʊ)	pʰidʑɹ	pʰidʑɨ
a024	傷	kʰiᵈzɹ	kʰidʑɹ	kʰidʑɨ

番号	単語	池間	狩俣	島尻
a025	血	akatsï	haːtsï (「赤い」は haːmunu)	aχatsɤ
a026	膿	ŋːku	nːku	–
a027	痒い	kaumunu	koːgaŋ / pasˌkʰoːmunu（軽い痒さ）	–
a028	骨	huni	pʰuni	pʰuni
a029	腹（はら）	bata	bada	–
a030	肝・心臓	tsïmu (肝臓) (fuː (臓の一つ))	kˢïmu	kˢɤmu
a031	乳	tsïː	tzïː	tssɤ
a032	膝	sïgusï	tsïgasï / pʰïdza	tugusɤ ~ tugasɤ
a033	あし(脚)	hadzï	pʰagɯ / karasuni (脛)	pʰagɤ ~ pʰagᶻɤ
a034	あし(足)	stabija（靴を履く部分）	pssa	pssabᶻɤᶻa / pssa (足の裏)
a035	あし(脛)	kuvva	kuʊʊa	kuvva ~ kuʊva
a036	くるぶし	amambuni	amambuni	–
a037	体	duː	duː	–
a038	肛門	tɕiːnuŋ	tɕibiɾuŋ	tɕibuɾuŋ
a039	屁	hiː	pˢïː	–
a040	睾丸	tani fugui	tʰani / fugaɯ（全体は fugazdani ~ fugɯdani）(「男根」は maɾa)	–
a041	私	baː	ban (banoːbaː (私は))	baŋ
a042	私たち	banti	banta	bantɕi
a043	お前	vva	ʊva（vは弱い）	vva
a044	お前たち	vvaduː	ʊataː	vvatɕi
a045	叔父	budʑa (親戚) / uja～uibituuja (年上の人) (buba (親戚の叔母) / haːmma (年上の人))	budʑa (「叔母」は buba, 「年寄り男性」は ɕuː)	buda/budasa (「一番下の叔父」budagaː /「一番上の叔父」upuzza /「(叔母」buba～bubama)
a046	叔父たち	–	budʑata	budata
a047	父	zza ~ ᵈza	uja / ïza（稀）	–
a048	母	mma	anna	–

番号	単語	大浦	久貝	与那覇
a025	血	haːʦɿ	akaʦï	akʰḁʦɿ
a026	膿	–	mːku	–
a027	痒い	–	kʰoːmunu	–
a028	骨	pʰuni	pʰuni	puni
a029	腹（はら）	–	batʰa	–
a030	肝・心臓	kˢɿmu	kˢˢïmu	kˢɿ̥mu/basanaɿ
a031	乳	ʦɿ	ʦï˙	ʦɿː
a032	膝	sugasɿ	ʦïgusï	ʦɿgʊsɿ
a033	あし(脚)	pʰagɿ ～ pʰagᶻɿ	pʰadʑï	pʰagᶻɿ
a034	あし(足)	pssa	psa	pˢɿ̥sa /pˢɿ̥safʊgᶻɿ (足首)
a035	あし(脛)	NR	kuvva (摩擦は強い)	kʰʊːʊa
a036	くるぶし	–	amambuni	–
a037	体	–	duː	–
a038	肛門	ʨibuɾuŋ	ʨibinum	ʨibinʊm
a039	屁	–	pʰiː	–
a040	睾丸	–	tʰani (「男根」は maɾa)	–
a041	私	baŋ / baː (私の) / baja (私は)	baŋ	baŋ
a042	私たち	bagaː / bagaː (私達の)	banta	bantaː
a043	お前	ʊʊa	vva	ʊʊa
a044	お前たち	ʊda ～ uda	vvata	ʊʊataː
a045	叔父	buʤa	buʤa	bʊʤa
a046	叔父たち	buʤaːta	buʤataː	bʊʤatʰaː
a047	父	–	aːza	–
a048	母	–	ani̠	–

番号	単語	上地	来間	砂川
a025	血	aχḁʦɨ ～ akḁʦɨ	akatsï [A]// a^{k}xatsï [B]	akḁʦɿ ～ akḁʦɿ
a026	膿	–	mːku	–
a027	痒い	–	koʔokoː	–
a028	骨	puni	p^{h}uni	pu̥ni ～ p^{h}uni
a029	腹（はら）	–	bata	–
a030	肝・心臓	k^{ɕ}ɨmu ～ kɨmu	ʦïmu	ksmu ～ k^{s}ɿmu
a031	乳	ʦɨ	tsï [A]// tssï [B]	ʦɿː
a032	膝	ʦɨgusɨ	ʦïgusï	ʦgusɿ ～ ʦɿgusɿ
a033	あし(脚)	pagɨ	p^{h}aʥï	pagʐ̩
a034	あし(足)	p^{ɕ}ɨʥa / pi̥sa	p^{h}aʥïbzza	pʂ̩sa ～ pʂ̩sḁ
a035	あし(脛)	–	kuvva	ku̥v̥va ～ ku̥ʋʋa
a036	くるぶし	–	amambuni	–
a037	体	–	duː	–
a038	肛門	ʨibinum	ʨibinum	ʨi̥binum̩
a039	屁	–	p^{h}iː	–
a040	睾丸	–	t^{h}ani / fuguɭ ～fuguz	t^{h}an^{j}i ～ tḁn^{j}i/fʊ̩gu^{z}ɿ（あまり使わない）
a041	私	du̞（長母音か？）/ ban	baŋ	baŋ
a042	私たち	bantaː (「同じ仲間」は duːθaː / ʥaɾaːka)	bantaː	bant^{h}a
a043	お前	vva	vva	vva (vbaに聞こえるくらいの狭めがある感じ)
a044	お前たち	vvataː	vvataː	vvataja
a045	叔父	buʨagama (buʥagama もか)	buʥa, buʥasa	buʥa ～ bu^{d}za
a046	叔父たち	buʨagamataː (buʥagamataːもか)	buʥataː / buʥasataː	buʥataː ～ bu^{d}zataː
a047	父	–	uja	–
a048	母	–	anna	–

番号	単語	保良	伊良部	国仲
a025	血	akʰḁʦɑ	axḁʦɑ ～ ahaʦɑ / ahamunu (赤い)	akˣḁʦɨ
a026	膿	mːkʊ (「おでき」は nʊbʊta)	umku	ŋːku̟
a027	痒い	kʰaʊ̆kaʊ	kʰoːmunu	kau̟munu
a028	骨	pʰʊ̆ni ～ pʊ̆ni	pʰuni	puni
a029	腹（はら）	bḁta	bata	bata
a030	肝・心臓	kˢɑmʊ	ʦɑmuʊʦɑ (心臓) / ʦɑmu (肝)	ʦɨmu
a031	乳	ʦsɑ / ʦssʊ (乳を)	ʦɑː	ʦɨ
a032	膝	ʦɑgʊsɑ	ʦɑgusɑ	ʦɨgusɨ
a033	あし(脚)	pʰaᵈzɑ ～ pʰagᶻɑ	pʰadʑɑ	pazɨ (pazカ)
a034	あし(足)	pssa / kʰaɾasɑni (脛)	pssafʊ̥ʦɑ	psafuzɨ
a035	あし(脛)	kʊ̆vva / mʊ̆mʊ̆tɑ (腿)	kʰuvva	ku̟ʊʊa
a036	くるぶし	amambuni	amambuni	−
a037	体	dʊː	upʰuduː	amambuni / du̟ː
a038	肛門	ʨi̥biɾʊm	ʨibinum	ʨibinum̩
a039	屁	pʰiː	pʰiː	piˑ
a040	睾丸	tʰani（人間の）/ fʊgʊɑ	fugu(ᶻ)ɑ	fugu⌊
a041	私	bḁŋ / bḁja (私は)	aŋ	baŋ
a042	私たち	bḁntaː / bḁntaːja (私たちは) / bḁntaga (私たちの)	duːgadʑiːna / duːdʑiːnaː / duː	du̟ːta / aɣu̟ta / dujuta
a043	お前	vva ～ ʊva	jaː	ʊʊa
a044	お前たち	ʊvataː / ʊvataːja (お前たちは)	iti	ʊʊato
a045	叔父	bʊ̥dʑa / bʊ̥dʑagama / sʊ̆dʑa (兄さん)	budʑa	buda (「伯父」は u̟ᶠubuda / u̟ᶠuoja , 「叔父」は budagama)
a046	叔父たち	bʊ̥dʑata	budʑati	budata
a047	父	zza (高齢の方のみ使う)	ʊja	uja / asa / ⁱzza（平民）
a048	母	anna (祖母」は mma)	anna	anna（士族） / m̩ma

番号	単語	池間	狩俣	島尻
a049	妻	tudʑï	tudʑï	tʰudʑ˥
a050	美しい	apaɾagi (「美しい女」を apaɾagimiduŋ)	apʰaɾagi	−
a051	夫	butu	budu	butu
a052	夫婦	tudʑïbutu	miːtu̯ɾa	mjuːtu / mjuːtaɾa
a053	子供（子孫）	ffa	ffa	faː / mmaga (孫)
a055	子供（未成年）	jaɾabi	jaɾabi	−
a054	生まれる	mmaɾigamatadoː (生まれそうだ)	ffoː nas̬gumuta (子を産むだろう)	mmaɾiᶻ˥ / mmaɾigumata（生まれるべき）
a056	老人	uibitu	uipstu	−
a057	姪	mʲuːi	mʲuːï	mjuːᶻ˥
a058	男	bikiduŋ	bigiduŋ	bikiduŋ
a059	女	miduŋ	miduŋ	miduŋ
a060	人	pʰi̥tu ~ çtu ~ çto	pstu	ttu
a061	皆	mːnanai (皆で)	nːna	nːna
a062	蚊	kadʑaŋ	gaᵈzaŋ	gadaŋ
a063	蜘蛛	kumo	kuː	kʰuma
a064	蜘蛛の巣	kumonujaː	ku·gasï	kʰumanuss˥
a065	蝶々	tɕoːtɕoː	tɕoːtɕoː	tɕoːtɕoː
a066	蟻（あり）	akai	haːɯ	aχaᶻ˥
a067	ミミズ	dʑïmiːdʑï	mïːmidʑï	miːmidʑ˥
a068	カタツムリ	haɾunna	nːna	nna / pʰaɾinna（小さい種類）
a069	猫	maju	maju	−
a070	鼠	jumunu	jamunu	jamunu
a071	馬	nuːma	nuːma	nuːma

番号	単語	大浦	久貝	与那覇
a049	妻	tʰuᵈzɿ	tʰudʑï	tʰʊdʑᶻɿ
a050	美しい	–	(花の場合は) kʰagimunu / (人の場合は) apaɾagi	–
a051	夫	butu	butʰu / bikiɾʲa [古]	bʊtʰʊ
a052	夫婦	mjuːtu	tʰudʑïbutu / mʲuːtʰu	mʲʊːtʰʊ / mʲʊːtʊɾa
a053	子供（子孫）	faː	ffa	ffa
a055	子供（未成年）	jaɾabi	jaɾabi [新]	–
a054	生まれる	mmaɾi	mmaɾi	mmaɾiː
a056	老人	–	uipstu	–
a057	姪	mʲuːɿ	mʲuːz	mʲuːᶻɿ (甥・姪) / bikimʲuːᶻɿ (甥) / midʊmʊmʲuːᶻɿ (姪)
a058	男	bikiduŋ	bikidum	bikidʊmʊ
a059	女	miduŋ	midum	midʊmʊ
a060	人	pstu	pstu	pˢɿ̥tʰu
a061	皆	nːna	mːna	mːna
a062	蚊	gaᵈzaŋ / gaᵈzammu (蚊を)	gadʑam	gadʑam
a063	蜘蛛	kʰumu	kʰuv	kʰʊː ～ kʰʊʋ (昆布と同じ)
a064	蜘蛛の巣	kʰumunusɿː	kʰuvnukʰaːpaz / kʰuvnugadʑapaɾaɕi	kʰʊːnʊssˢɿ
a065	蝶々	NR	tɕoːtɕoː	NR
a066	蟻（あり）	haːɿ ～ xaːɿ	ak̠aːzˌ (k̠ = 後ろ寄りの k)	akaːᶻɿ
a067	ミミズ	miːmaᵈzɿ	miːmiᵈzï	miːmiᵈᶻɿ
a068	カタツムリ	nna ～ nːna	mːna	nna / pʰi̥ɕinna (サザエ)
a069	猫	maju	maju	–
a070	鼠	jumunu	jumunu	jʊmʊnʊ / ʊjadʑa
a071	馬	numa	nuːma	nʊːma

番号	単語	上地	来間	砂川
a049	妻	midum ～ miðum (女，妻) (tudʑɨ は沖縄本島の言葉)	midumu (tʰudʑï は使わない)	tudʑɲ
a050	美しい	－	kʰagi (花が) / apʰaɾagi (女が)	－
a051	夫	bikidum ～ bikidʑum	bikidumu (butu は使わない)	butʰu
a052	夫婦	mjuːtu̟	mʲuːtu	mjuːtʰu
a053	子供（子孫）	ffa	ffa / ffaːma	f̬fa
a055	子供（未成年）	jaɾabi	jaɾabi	jaɾabi
a054	生まれる	naɕuː	naɕi(-du) / ffoː-du nas (子を産む)	m̬maɾiɲ
a056	老人	－	uipstu	－
a057	姪	mjuəᶻ / mjuəffa (「姪っ子」では z 落ちる)	mʲuːï ～ mʲuːz	mʲuːz
a058	男	bikidum	bikidumu	bikidum̬ ～ bikid̥um̬
a059	女	midum ～ miᵈðum	midumu	midum̬
a060	人	pɨ̥su	pstu	pstu̥ ～ pstu̥
a061	皆	m̬ːna	muz̰tu (z̰ はきしみ声の z) / mːna	mːna
a062	蚊	gadʑam	gadʑam	gadʑam̬
a063	蜘蛛	kumo (共通語形)	jaːbaɾigaŋ	jamakuʊ̥ ～ jamakuʊ̥
a064	蜘蛛の巣	kuːgasɨ (kas̥ɨ は「糸」の意)	jaːbaɾi /jaːbaɾigannussï	NR
a065	蝶々	tɕoːtɕo (共通語形)	tɕoːtɕo	tɕoːtɕoː
a066	蟻（あり）	akˣɑːɭ	akaɭ [A]// akaz [B]	az̬gaɾa
a067	ミミズ	mimidʑɨ	miːmidʑï	mindʑɲ
a068	カタツムリ	m̬ːna	mːna	nna
a069	猫	－	maju	－
a070	鼠	jumunu	jumuna [A]// jumudʑa [B]	jumuɾḁ
a071	馬	nuːma	nuːma	nuːmḁ

番号	単語	保良	伊良部	国仲
a049	妻	tʰʊʤɿ	tʰuʤɿ	tu̟ʤɨ
a050	美しい	apʰaɾagi	apʰaɾagimunu	kagimunu (美人) / apaɾagi
a051	夫	b̥ʊtʰʊ	butu	bu̟tu
a052	夫婦	mʲʊːtʊɾa	mʲuːtuɾa	mjuːtu/ mjuːtuɾa / tu̟ʤɨbu̟tu
a053	子供（子孫）	ffa	ffa	ffa
a055	子供（未成年）	jaɾabi	jaɾabi	jaɾabi
a054	生まれる	mmaɾi	mmaɾi	m̩maɾi / (ffa)nasɨ
a056	老人	ʊipstʊ	uipstu ～ oipstu	uipi̥tu
a057	姪	mʲʊːɿ ～ mʲʊːᶻɿ	mʲuːᶻɿ	mjuːɭ ～ mjuːɭᶻ
a058	男	bikidʊm	bikidum	bikidum̩
a059	女	midʊm	midum	midum̩
a060	人	pstʊ	pstu	pʰɨ̥tu (ptuか)
a061	皆	mːna	mːna	m̩ːna
a062	蚊	gaᵈzam	gaʤam	kadam̩
a063	蜘蛛	kʰʊʊ ～ kʰʊv / kʰʊvvʊ ～ kʰʊʊvʊ (蜘蛛を)	NR	jaːku̟ʊ
a064	蜘蛛の巣	kʰʊvnʊsɿː	NR	jaːku̟ʊnusɨ
a065	蝶々	pʰabiɿ (大きくて黒い)	ʨoːʨoː	ʨoːʨo
a066	蟻（あり）	aᶻɿgaɾa [保良]// akʰaːᶻɿ [新城]	ahaːɿ	akaːɭ
a067	ミミズ	mimʤɿ	mimiʤɿ	ʤɨmiʤɨ
a068	カタツムリ	nna / maːnna（小さい種類） / paɾinna（稀）	ʦɿnami	paɾunna
a069	猫	majʊ	maju	maju
a070	鼠	jʊmʊɾʊ	jumunu	jumunu
a071	馬	nʊːma	nuːma	nu̟ːma

番号	単語	池間	狩俣	島尻
a072	雄山羊	bikihindʑa / hindʑa (山羊) / miːhindʑa (雌山羊)	bigipindʑa / pindʑa (山羊) / miːbindʑa (雌山羊)	–
a073	角	nnu	ʦn̥u (n̥ は最初無声の意)	ʦɤnu
a074	尾	dʑuː	dʑuː	duː
a075	豚	waː	waː	ʋaː
a076	豚などの肉	sïːsï	mïː/ sïːsï（脂のない肉）	ɕiːsɤ
a077	鳥	tui	tuɯ	$t^{h}u^{ʐ}$ɤ
a078	鳥の巣	tuinusïː / tuinujaː	sïː	ssɤ
a079	卵	tunuka	tunuɡa	t^{h}unaʁa
a080	鳩	hatu	p^{h}atu	–
a081	魚	zzu ～ dʑu	ïzu	zzu
a082	鱗	ʦïːdʑï / iːki	ïːki	–
a083	亀	kami	kami	–
a084	蟹	kaŋ (「ヤシガニ」は makugaŋ)	kaŋ	k^{h}aŋ
a085	貝	nna	pɕɕinna (さざえ) (nːnaはかたつむり)	pi̥ɕinna (さざえ) / t^{h}a̯χanna
a086	ウニ（バフンウニ）	uŋ / kadʑïʦï	juːuŋ / kadʑïkï / bïɡïjuːuŋ ～ bzɡïjuːuŋ / kadʑïkïjuːuŋ	uŋ / aχauŋ
a087	ウニなどの肉・身	miː	mïː	$mi^{ʐ}$ɤ
a088	塩	maːsu	maːsu	–
a089	塩辛い	su̥kaɾamunu	su̥kuɾaŋ (kaɾaŋは胡椒の味)	–
a090	砂糖	sata	sata（「甘い」は a^{d}zïmaŋ ）	–
a091	砂糖黍	buːdʑï	buːɡï̠	buːɡɤ ～ buːɡ^{ʐ}ɤ
a092	鎌（かま）	zzaɾa ～ ^{d}zaɾa (「斧」は juːʦï)	ïzaɾa	zzaɾa
a093	食べる	faifiiɾu (食べてください)	fai (目上には ŋkeɡisamadʑi)	fau
a094	食べ物	faimunu	faumunu	faumunu
a095	油	avva	aʊva	–
a096	粥	juː	NR	juv

番号	単語	大浦	久貝	与那覇
a072	雄山羊	–	bikipʰindʑa / pʰindʑa (山羊) / miːpʰindʑa (雌山羊)	–
a073	角	ʦɤnu	ʦïnu	ʦɤnʊ
a074	尾	dʑuː	dʑuː	dʑʊː
a075	豚	waː (「牛」は usɤ)	vaː	ʋaː
a076	豚などの肉	sɤːsɤ（赤身）	miz（集合） / ɕiːsï（部位ごと）	sɤːsɤ
a077	鳥	tʰuɤ	tʰuz	tʊᶻɤ
a078	鳥の巣	sɤː	ssï	tʊːnʊssɤ
a079	卵	tʰunaka	tunak̚ʰa	tʰʊnaka
a080	鳩	–	mːbatu (「燕」は pʰḁtu)	–
a081	魚	ɤzu	zzu	zzu ～ ɤzu
a082	鱗	–	izki	–
a083	亀	–	kʰami	–
a084	蟹	kʰaŋ	kʰaŋ	kʰaŋ
a085	貝	butaɾa	kaigaɾa (「かたつむり」は mːna)	kʰaᶻɤ
a086	ウニ（バフンウニ）	kʰḁʦɤ	kadʑaˢsa	uŋ (総称) / kʰadʑɤkˢɤ (バフンウニ)
a087	ウニなどの肉・身	miɤ	kadʑaˢsanumiz	mᶻɤː
a088	塩	–	maːsu	–
a089	塩辛い	–	sukaɾasukaɾa	–
a090	砂糖	–	sata (「甘い」は adʑïmamunu)	–
a091	砂糖黍	buːgɤ ～ buːgᶻɤ	buːgᶻï	buːgᶻɤ
a092	鎌（かま）	ᶻɤzaɾa	zzaɾa	zzaɾa
a093	食べる	foː	foˑ	foː
a094	食べ物	foːmunu	foːmunu	foːmʊnʊ
a095	油	–	avva	–
a096	粥	juʊ	juv	jʊː

番号	単語	上地	来間	砂川
a072	雄山羊	–	bikipʰindʑa / pʰindʑa (山羊) /miːpʰindʑa (雌山羊)	ʦnu ~ ʦɿ̥nu
a073	角	ʦɨnu	ʦïnu	ʦnu ~ ʦɿ̥nu
a074	尾	dʑuː	dʑuː	dzuː
a075	豚	waː	waː	ʋaː
a076	豚などの肉	sɨːsɨ (赤身) /avva (脂身)	sïːsï	ɕiːs ~ ɕiːsɿ
a077	鳥	tou	tʰuz	tuzˌ
a078	鳥の巣	sɨ / tuɭ no sɨ (鳥の巣)	tʰuɭnussï	sɿ̥ː ~ sɿː
a079	卵	tunaka	tʰunuka	tu̥naka
a080	鳩	–	pʰatu / mːbatu (山鳩) / aubatu (青鳩)	–
a081	魚	ⁱzzu	zzu̥	zzu
a082	鱗	–	izki (「ふけ」も)	–
a083	亀	–	kʰame	–
a084	蟹	kˣaŋ (気音を伴う k か)	kaŋ	kḁŋ
a085	貝	mˌna ~ mˌːna	asaɭ ~ asaz (mːna は貝の一種)	NR
a086	ウニ（バフンウニ）	ɑkχoːŋ	uŋ (akauŋ, ffuuŋ, boːdzïuŋ がある)	uŋ
a087	ウニなどの肉・身	mɨː	mïː	mzˌː
a088	塩	–	maːsu	–
a089	塩辛い	–	su̥kuɾa	–
a090	砂糖	–	sḁta (「甘い」は azïmaː̰ azïma)	–
a091	砂糖黍	buːgɨ	buːdzï	buːgzˌ
a092	鎌（かま）	ⁱzzaɾa	zzaɾa	zzaɾa
a093	食べる	foː	ŋkjagisamatɕi (目上に、食べなさい) / feː (目下に、食べなさい)	fau ~ faʊ
a094	食べ物	faʲmunu	fo̥ːmunu	faumunu
a095	油	–	avva	–
a096	粥	juv / dʑuːɕʷi (おじや)	juv	juvˌ

番号	単語	保良	伊良部	国仲
a072	雄山羊	bi̥kipindʑa	bikipindʑa / pʰindʑa (山羊)	bikipinda
a073	角	ʦɤnʊ	ʦɤnu ～ ʦɤno	ʦɨnuˬ
a074	尾	dʑʊː	ᵈzuː	duˬː (「体」もduˬː)
a075	豚	ʊaː ～ waː(?)	waː	waː
a076	豚などの肉	ɤːɤ	ɤːɤ	sɨːsɨ (赤身) (動物名で言うのが普通)
a077	鳥	tʰʊɤ	tʰuᶻɤ ～ tʰuɤ	tuˬ
a078	鳥の巣	ɤː	ɤː	sɨː
a079	卵	tʰʊnaka	kʰuːga	tunuka
a080	鳩	mːbatʊ ～ mːb̥atʊ	pʰḁtu	pata
a081	魚	zzʊ ～ ɤzʊ	ᶻɤzu	(ⁱ)zzuː (切った発音は ˬ-ʒuˬ)
a082	鱗	ɤᶻːki	iᶻɤkja	iˬki
a083	亀	kʰami	kʰaːmi	kami
a084	蟹	kʰaŋ	kʰaŋ	kaŋ
a085	貝	NR / pɕɕinna (さざえ)	pɕçima / mna / nigoː(しゃこうがい)	sɨna
a086	ウニ（バフンウニ）	kʰadʑɤkˢɤ / akʰaʊŋ（非食用）	ohouŋ / kʰaᵈzɤʦɤ	akaumˬ / kadʑɨʦɨ (シラヒゲウニ)
a087	ウニなどの肉・身	mᶻɤː	miɤ	ʦɨmu（ウニ）/ mɨː
a088	塩	maːsʊ (ʊpʊ̥sʊ (潮))	maːsu	maːsu
a089	塩辛い	sʊ̥kaɾa (mʊnʊ)	sukaɾamunu	sukaɾamunu
a090	砂糖	sata ～ sḁta (「甘い」は adʑɤmaː)	sata	sḁta
a091	砂糖黍	bʊːgᶻɤ ～ bʊːdʑɤ	buːdʑɤ	buˬːdʑɨ
a092	鎌（かま）	zzaɾa	ɤzaɾa	ⁱzzaɾa
a093	食べる	faʊ / faːdi (食べよう)	foː / fai(食べなさい)	fauˬ
a094	食べ物	faʊmʊnʊ	faɤmunu	fauˬmunu
a095	油	avva ～ aʊva	avva	aʊʊa
a096	粥	jʊv ～ jʊʊ	dʑuːɕa	juˬʊ

番号	単語	池間	狩俣	島尻
a097	飯	munu (ご飯) (「おにぎり」を iː / maiiː)	mïs̩maɯ	mannuᶻʅ (握り飯) / nːnuᶻʅ (芋のお握り)
a098	味噌	nsu	nsu	nsu
a099	米	mai	maɯ	maʅ ～ maᶻʅ
a100	椀	makai	maːɯ	maχaʅ ～ maχaᶻʅ
a101	茶碗	ʨabaŋ	ʨabaŋ	–
a102	（お茶を）捨てる・こぼす	augiː / ɕtiɾu ～ stiɾu	stiɾu (捨てろ)	aʊgiᶻʅ / itaʨiʅ
a103	にんにく	hiː	pˢïː	pʰiᶻʅ
a104	韭（にら）	miːna	mïzza	miᶻʅna
a105	芽	miː	bakamiː / pʰḁʦï̥ki (発芽)	–
a106	瓜	ui (西瓜) / ŋgʲaui (胡瓜) / gauɾa (苦瓜)	uɯ (「苦瓜」は goːɾa)	–
a107	畑	hai	pʰḁtagi / pʰaɾi	pʰataki (pʰaɾi はあまり使わない)
a108	野原・草原	nuː	nuː	nuːnaχa / nuː / abaɾinuː (「荒れた畑」は abaɾibaɾi)
a109	クワズイモ	bibiːgassa	biugassa ～ bʲuːgassa	bjuːgassa
a110	木	kiː	kiː	kiː
a111	枝	juda	ida (juda とは言わない)	juda
a112	実	miː	nːta	miᶻʅ / naᶻʅ
a113	草	fu̥sa (＝ fʷsa)	fu̥sa / （家畜用）jufsa	ssa
a114	植える	ibiː fiːɾu (植えてください)	ibiɾu (植えろ)	–
a115	福木	kuʦïgi (k は無気非喉頭音)	pʰu̥kagagiː	kʰu̥pagᶻʅgiː
a116	鋸	nukuʥï	nukagï̠	nukagᶻʅ
a117	板	tana	ita	ita
a118	釘	kanifuʥï	fugï̠ ～ fugɯ	fugᶻʅ
a119	大工	sajafu	sajafu	sajafʊ
a120	針	hai	pʰaɯ	piᶻʅ

番号	単語	大浦	久貝	与那覇
a097	飯	NR	maz (「おにぎり」は nnaz)	NR (「にぎり飯)」は maᶻʅnuᶻʅ)
a098	味噌	nʦu	msu	mʦʊ
a099	米	maʅ (ssumaʅ (白いご飯))	namamaz / maz	maᶻʅ
a100	椀	makaʅ	makʰazï	makʰaᶻʅ
a101	茶碗	–	ʨʰabaŋ	–
a102	（お茶を）捨てる・こぼす	oːgiʅ / skjaːsʅ (ぐちゃぐちゃにする？)	stiɾu (捨てろ)	oːgi / itʰḁti ~ itχti
a103	にんにく	pʰiʅ	pʰiz	pʰiᶻʅ（針も）
a104	韭（にら）	miʅna	mizza	mᶻʅːna
a105	芽	–	miː	–
a106	瓜	–	uzgama (「苦瓜」は goːɾa)	–
a107	畑	pʰatagi / pʰaɾi	pʰaɾi	pʰaɾi
a108	野原・草原	nuː	nuː	nʊː (荒れ地)
a109	クワズイモ	biʊ (「クワズイモの葉) は biʊgasa~bjuːgasa)	bivgasa	biʊgassa
a110	木	kʰiː	kiˑ	kiː
a111	枝	ida	juda	jʊda
a112	実	naʅ	naz	kiːnunaᶻʅ
a113	草	ssa	fsa	fsa
a114	植える	–	ibiɾu (植えろ)	–
a115	福木	pʰukagi	pʰukaʤgiː	pʰʊ̥kʊgiː
a116	鋸	nukagᶻʅ	nukugz	nʊkʊgᶻʅ
a117	板	ita	itʦa	NR
a118	釘	kʰanifugʅ	kʰanifugz / fugz	fʊgᶻʅ
a119	大工	sajafu	sajafu	sajafʊ
a120	針	piʅ	piz	pʰiᶻʅ

番号	単語	上地	来間	砂川
a097	飯	NR / gohaŋ （共通語）	maz (「おにぎり」は zz [古], nnaɾi [新]（ 芋のもご飯のも ）	(maz̩ zːは使わない)
a098	味噌	mʂu	mːsu [A]// mːso [B]	mʂu ～ mʂu̥
a099	米	mal	maz [A]//maɭ [B]	maz̩ ～ maɿ
a100	椀	makˣal	makaɭ [A]// makaz [B]	makaz̩ ～ [sic.]
a101	茶碗	–	ʨabaŋ	–
a102	（お茶を）捨てる・こぼす	sɨtɨɾu / sɨtɨɾuŋ	stiz	jaz̩ ～ stiz̩
a103	にんにく	pʰil / pʰilʨi̥kina	piz (piɭ と発音しないという)	piz̩ ～ pi̥z̩
a104	韭（にら）	miɮla ～ milna	mïːna	nʲiɾa / miz̩na ～ miɿna
a105	芽	–	miː	–
a106	瓜	–	uz (「苦瓜」は goːɾa)	–
a107	畑	pʰaɾi	pʰaɾi	pḁɾi pḁɾi
a108	野原・草原	nuː	tʰusaɾi（草ぼうぼうの土地）/ nuː（草の種類）	nuː
a109	クワズイモ	bivgassa	biv (その葉は bivgassa)	biv̩gassa
a110	木	kiː	kiː	kiː ～ ki̥ː
a111	枝	juda	ida	juda
a112	実	naᶻ ～ naɮ ～ naɯ	(kiːnu) naz̩	naz̩
a113	草	fu̥sa	fsa	fʂa
a114	植える	–	–	–
a115	福木	pu̥kukugi (g に口蓋化なし)	pukuʦïgiː (buŋgiː とも？)	pu̥ku̥kukiː ～ pu̥kukug̥i
a116	鋸	nukugɨ ～ nufugɨ	nukudʑï	nukugz̩
a117	板	jufa ～ jukˣa (「壁板」は kabejukˣa)	iʨa	itʰḁ iʦa
a118	釘	fugɨ	fudʑï / kʰanfudʑï	fg̥z̩
a119	大工	sajafu	sajafu	sḁjafʊ̥ ～ sajafʊ
a120	針	pʰiᶻ ～ pʰiʎ ～ pʰiɯˇ (にんにくと同じ)	pʰiz (裁縫のは ʦïnnubiz)	pʰi̥z̥

番号	単語	保良	伊良部	国仲
a097	飯	ᶻʅː / nigᶻʅ (おにぎり)	maʅnuʅᶻː / um	maɭnu̟ᶻɨ（おにぎり）(「米の飯」の意)
a098	味噌	mʦʊ	msu	nˌsu̟
a099	米	maᶻʅ	maʅ	maɭ
a100	椀	makaᶻʅ	maxaʅ ～ mahaʅ	makaɭ
a101	茶碗	ʦabaŋ	ʦabaŋ	－
a102	（お茶を）捨てる・こぼす	itḁti	waːgiɿ / itakiɿ	itḁkiɭ (誤ってこぼす) / itḁki·sɨtiɭ
a103	にんにく	pʰiᶻʅ	pʰiʅ	pʰiɭ
a104	韭（にら）	sʅʊna ～ sʅʊna (「ねぎ」は mʅzna)	nubiʅ (「ねぎ」は sʅmna)	mɨɭna
a105	芽	miː	bahabuɾa / miː	uju / wakame̟
a106	瓜	ʊᶻʅ	uᶻʅ	uɭ（「苦瓜」は gaoɾa)
a107	畑	pʰaɾi	pʰataki / pʰaɾu	pḁtaki
a108	野原・草原	nʊː	nuː	nu̟
a109	クワズイモ	biʊgasa	biʊgassa	biʊgassa
a110	木	kʰiː	kʰiː	ki·
a111	枝	jʊda	ida	juda
a112	実	naᶻʅ	naʅ	naɭ
a113	草	fʊ̥sa	fu̥sa	fˌsa
a114	植える	ibi / ibiɾʊ（命令形？）	ibiʅ	－
a115	福木	fʊ̥kʊkʅgiː [新]	kupuʦʅgi	pu̥kuʦɨgi·
a116	鋸	nʊkʊgᶻʅ	nukʰadʑʅː	nu̟ku̟dʑɨ
a117	板	iʦa [保良]// ita [新城]	iʦa	ita
a118	釘	fʊgᶻʅ	fudʑʅ	kanifudʑɨ / fudʑɨ とも
a119	大工	sajafʊ	sajafu	saɪfu ～ sajafu
a120	針	pʰjaᶻʅ	pʰaʅ	paɭ

番号	単語	池間	狩俣	島尻
a121	着物	tsïŋ	kˢïŋ	kˢʳŋ
a122	帯	su̥ku: ～ sï̥ku:	sïpʰugɯ	safugᶻʳ ～ sapugᶻʳ
a123	襟	tsïnnufudʑï	fugɯ	fugᶻʳ
a124	鏡	kagaŋ	kʰagaŋ	kʰaʁaŋ
a125	火	umatsï	u̥matsï	mmatsʳ
a126	灰	karahai	karapaɯ	karapaᶻʳ
a127	水	midʑï	mi(ᵈ)zï	midʑʳ
a128	濡れる	mmi(j)ui (濡れている)	mmi-	m:mi
a129	風	kʰadi	kʰadʑi	kʰadʑi
a130	竜巻	amaunau	ino:	amaino:
a131	地震	nai	naɯ	nai
a132	雲	m̥mu(「雨雲」は amimmu)	fumu	fuma (「空」は tsiŋ)
a133	雨	ami	ami	－
a134	虹	NR	o:natsï (青大将も)	NR
a135	色	iru ～ iro	iru	－
a136	青い	aumunu	o:	aukaŋ (「黒い」ffu ,「赤い」aχa)
a137	稲光	kannai	nnapskaɯ	nnapskaᶻʳ
a138	眩しい	miɸu̥taimunu ～ miᵖɸu̥taimunu	mipada:sïmunu	mi:putsikaŋ
a139	光	çi̥kai	pskaɯ	pskaᶻʳ
a140	蔭	kagi	kagi	kʰagi
a141	太陽	tida	tida	tsida
a142	月(天体・暦)	tsïtsï (「一ヶ月」を çi̥totsïtsï)	tskssu	tskʳ ～ tskˢʳ (「来月」は ŋgitaʳtskʳ,「先月」は kˢʳtskʳ)
a143	東	agai	a:ɯ /「東風」a:gadʑi	aʁaʳ
a144	北	niɕi	ui /「北風」uigadʑi	ui
a145	西	i:	nisï /「西風」niskadʑi	iᶻʳ
a146	南	haibara	pʰai /「南風」pʰaigadʑi	pʰai
a147	右	migi	ŋgɯ	ŋgᶻʳ

番号	単語	大浦	久貝	与那覇
a121	着物	kˢɤŋ / fuku (服)	kˢïŋ	kˢɤŋ / kˢɤmʊnʊ
a122	帯	subagɤ	sïpugz	sˢɤ̞pʊgᶻɤ
a123	襟	fugɤ	kˢïnnufugz	fʊgᶻɤ
a124	鏡	kʰagaŋ / kʰagammu (鏡を)	kʰagam	kʰagam
a125	火	mmoːʦɤ	umuʦï	ʊmaʦɤ
a126	灰	kʰaɾapaɤ	kʰaɾapʰaz / pʰaz(ï)	kʰaɾapaᶻɤ
a127	水	midʑɤ / mitʦu (水を)	midʑï	miᵈzɤ
a128	濡れる	mmiɤ / mminjaːŋ (濡れてしまった)	mmi	mmiː
a129	風	kʰadʑi	kʰadʑi	kʰadʑi (「火事」も同じ)
a130	竜巻	amainoː	ama.inoː	amainoː
a131	地震	nai	nai	nai
a132	雲	kʰumu	fumu	fʊm
a133	雨	–	ami	–
a134	虹	timpaʊ ～ timpau (pau は「ヘビ」)	tʰimbav	timpaʊ ～ timpaʊ
a135	色	–	iɾu	–
a136	青い	oːoː / oːmunu / oːkaŋ	oː	oːnʊ
a137	稲光	nnapsɤkaɤ / kʰannaɤ (雷)	mːnapskaz	nnapˢɤkaᶻɤ
a138	眩しい	mipudasɤmunu	makˢïːmaks	mipʰʊ̞taᶻɤnʊ
a139	光	pskaɤ	pskaz	pˢɤ̞kaᶻɤ
a140	蔭	kʰagi	kʰagi	kʰagi
a141	太陽	tʰida	tʰida	tʰida
a142	月(天体・暦)	ʦkɤ	ʦkssu	ʦɤkˢɤ / ʦɤkˢɤnʊ̞jʊː
a143	東	(agaɤ ～) aːɤ	ag¯az (g¯＝後ろ寄りのg) /「東風」ag¯azkʰadʑi	agaᶻɤ
a144	北	tʰuɾanpaː / niːnupaː	nisï ～ nsï / uinagi /「北風」nsïkʰadʑi	nisɤ
a145	西	iɤ / nisɤ	iᶻ /「西風」 iᶻkʰadʑi	iᶻɤ
a146	南	mmanupaː / pʰai	pʰai /「南風」pʰaikʰadʑi	pai
a147	右	nːgɤ	ŋgz	ŋgᶻɤ

番号	単語	上地	来間	砂川
a121	着物	kɨŋ	ʦïŋ	ksn̩
a122	帯	supɯgɯ (supɨgɨ か)	sïpuʤï	spugz̩
a123	襟	fugɯ (fugɨ か)	fuʤï	eɾi
a124	鏡	kagam̩	kagam	kagam̩
a125	火	umaʦɨ	umaʦï / pˢï [古]	umaʦ ~ umaʦɿ
a126	灰	kaɾapʰaʎ ~ kaɾapʰaᶻ	kaɾabaɭ [A]// kaɾabaz [B]	kaɾapaz̩
a127	水	miʤɨ	miʤï	miʤɿ
a128	濡れる	m̩midu ~ m̩miðu	mmiː(duː)	m̩mi
a129	風	kaʤi	kʰaʤi	kaʤi
a130	竜巻	amainouˇ	ama.inoː	amainau
a131	地震	nai	nai	nai
a132	雲	kumu / fumu (誘導)	fumu	ɸu̥mu
a133	雨	–	ami	–
a134	虹	timbaʊ (paʊ は「蛇」)	niʤi (timbav は死語)	timb̥aʊ ~ timpaʊ
a135	色	–	iɾu	–
a136	青い	oːか（「青空」は oːdiŋ , 「青海」は oːumi)	au / auiɾu	au ~ aʊ
a137	稲光	m̩napˢɣal (l は舌背)	nnabïkaɭ [A]// nnapskaɭ [B]	nnapsk̩az̩
a138	眩しい	miptɯᶻ/ mipt̪	miːpu̥tiɭ [A]// miːpu̥tiz [B]	mipu̥tɿ
a139	光	pᶜkal	pskaɭ	psk̩az̩
a140	蔭	kagi̩ (やや中舌的)	kagi	kag̩i ~ kagi
a141	太陽	tʲida (「ひなた」は pˢɨmu)	tida	ti̥da ~ tida
a142	月(天体・暦)	ʦi̥k̩iju·	tsïtsï [A]// tsïtsïnuju: [B]	ʦks̩
a143	東	aɣal	agaɭ [A]// agaz [B]	agaz̩
a144	北	ninupa / nisɨ	nisï	nisɿ ~ nis
a145	西	l: (ʎ:か)	iɭ [A]// iz [B]	z̩:
a146	南	pʰai	pʰai	pʰai
a147	右	ŋgɨ	nʤï	ŋ̊gz̩

番号	単語	保良	伊良部	国仲
a121	着物	kˢɑŋ	tˢɑŋ	ʦɨŋ
a122	帯	spʊᵈzɑ	sɑkubᶻɑ	su̥ku̥bᶻɨ ～ su̥ku̥bɨ
a123	襟	fʊgɑ ～ fʊʤɑ	kʰubᶻɑ	fuʤɨ
a124	鏡	kʰagam	kʰaaˢm	kagam̩
a125	火	mmaʦɑ	umaʦɑ	u̥maʦɨ
a126	灰	kʰaɾapaɑ ～ kʰaɾapaᶻɑ	kʰaɾa paɑ	kaɾapa˩
a127	水	miᵈzɑ	miᵈzɑ	miʤɨ
a128	濡れる	mmiː	mniː / niːŋ (ぬれてしまった) / mnuddo (ぬれるよ)	m̩mɨ
a129	風	kʰaᵈʥi	kʰaʤi	kaʤi
a130	竜巻	amainoː	amainoː	amaɪnaʊ
a131	地震	nai	nai	ʤiɕiŋ / naɪ (誘導)
a132	雲	fʊmʊ	fumu	fumu
a133	雨	ami	ami	－
a134	虹	tʰimbaʊ ～ tʰimbaʊ (pav ～ paʊは「蛇」)	tʰimbav (pʰav は「ヘビ」)	ʨimbaʊ (ʨiŋ は「空」、 paʊ は「蛇」)
a135	色	iɾʊ	iɾu	－
a136	青い	aʊaʊ / aʊkaː	oː / oːiɾo / oːhɾiba / oːhaɑ	aŭ
a137	稲光	nnapskaᶻɑ	mnapskaɑ	m̩nabɨka˩
a138	眩しい	mipʊtʊɑ / mipʊtʊːɑ mipʊtʊɑ	miːpʰutiɑ / miːpʰutiɑmunu	mipu̥ta˩
a139	光	pskaɑ	pˢkaɑ	pɨ̥ka˩
a140	蔭	kʰagi	kʰaːgi	kaːgi
a141	太陽	pssʊma	tʰida	ʨida
a142	月(天体・暦)	ʦkɑ	ʦtʦu ～ ʦtʦu(?) (「来月」は tʰataʦʦɑ)	ʦɨ̥ttu̥
a143	東	agaɑ	aˢaɑ	aga˩
a144	北	nisˑ ～ nisɑ̥	ui	nisɨ
a145	西	iᶻɑ	iᶻɑ	i˩
a146	南	pʰai	pʰai	paɪbaɾa
a147	右	ŋgᶻɑ	miːʦɑ	n̩ʦɨ

番号	単語	池間	狩俣	島尻
a148	左	çidai	bïdaɯ ～ bzdaɯ	bᶻˀdaᶻˀ
a149	前	mai (「後ろ」を tibi)	mafkʲa (「後ろ」はtɕibi)	–
a150	道	ntsï	ntsï	ntsˀ
a151	嶺	mmi	mmi	mmi
a152	霧	NR	NR	kˢˀː
a153	露	tsïː	tsïju	tɕiʊ
a154	朝	çi̥tumuti	stumuti	stumatɕi
a155	昼間	hiːma	psm̥a	pˢˀnaχa / pˢˀma
a156	夕方	jusɾabi	jusɾabi	–
a157	夜	junaka	juːnaː	juːᶻˀ
a158	今	nnama	nnama	nnama
a159	今日	kʲuː	kjuː	kʰjuː
a160	明日	atɕa	atsa	ata
a161	明後日	mmʲa miːka	asadi	astɕi
a162	来年	jaːni	jaːni	jaːni
a163	昨日	nnu	ksn̥u	kˢˀnu
a164	去年	kudʑu	kudʑu	kʰudu
a165	昔	ŋkʲaːŋ	ikjaːŋ	ŋkjaːŋ
a166	夏	–	natsï	–
a167	暖かい	nfumunu	fumuɾaŋ	nufkaŋ
a168	寒い	ɕɕimunu	pɕimunu	pi̥ɕikaŋ
a169	冷たい	higuɾumunu	bzguɯ	bᶻˀguɾu
a170	海	iŋ	iŋ	iŋ
a171	濁る	mugaiɾiː duːi (濁っている)	mugaɾi	janavvi / mugaiɾi
a172	船	funi	funi	funi
a173	珊瑚礁	pi̥ɕi	uɾubuni（海に生えているもの) (「瀬」は pɕɕi)	pi̥ɕi
a174	砂	nnagu	nnagu	nnagu

番号	単語	大浦	久貝	与那覇
a148	左	bᶻɑdaɑ	pzdaz	pˢ̥daᶻɑ
a149	前	–	mai (「後ろ」は ʨibi)	–
a150	道	nʦɑ	mʦï	mʦɑ
a151	嶺	mmi	mmi	mmi
a152	霧	kʰaːvva	ksï	kˢɑː
a153	露	ʦɑv	ʦïv	ʦˢɑʊ
a154	朝	stumuti	ṣtumuti	sɑtʰʊmʊti
a155	昼間	pˢɑma	psïma	pˢ̥ɑma
a156	夕方	–	jusaɾabi	–
a157	夜	juːɑ	junʲaːŋ	jʊː / jʊnai
a158	今	nnama	nnama	nnama
a159	今日	kʰʲuː	kju·	kʰʲʊː
a160	明日	aʦa	atʦa (「下駄」も atʦa)	aʦa
a161	明後日	asatti	asati	asḁtʰi
a162	来年	jaːni	jaːni	jaːni
a163	昨日	kˢɑnu	ksïnu	kˢ̥ɑ̃nʊ
a164	去年	kʰuᵈzu	kuʤu	kʰʊʤʊ
a165	昔	ŋkʲaːŋ	ŋkjaːŋ	ŋkʲaːŋ
a166	夏	–	naʦï	–
a167	暖かい	nufkaŋ / aʦɑkaŋ	ŋko.ŋku	nʊᶻɑnʊ（ぬるい？）
a168	寒い	pɕɕikaŋ	pɕimunu	pʰi̥ɕiːnʊ
a169	冷たい	bᶻguɾukaŋ	psïguɾumunu	pˢ̥ɑ̃gʊɾʊːnʊ
a170	海	iŋ / immu (海を)	im	im
a171	濁る	mugʲaːɾi	ŋguvju· (海が濁る) / mugjaz (コップの水が濁る)	–
a172	船	funi	funi	fʊni
a173	珊瑚礁	pɕɕi	jamoːɾa (「瀬」は pɕɕi)	ɕiː / pʰi̥ɕi
a174	砂	nnagu	m·nagu	nnagʊː

番号	単語	上地	来間	砂川
a148	左	pɨdal ～ pɨda	pʰïdaɭ [A]// psdaz [B]	psˌdazˌ ～ psˌdaɿ
a149	前	–	mai	–
a150	道	mˌʦɨ	mʦï	mˌʦ ～ mˌʦɿ
a151	嶺	mˌmɨ (↔su̥ku)	mːni	mˌmi
a152	霧	kᶜɨ·u̥ɾi	NR	ksˌː
a153	露	NR	ʨuf	ʦʊˌ ～ ʦɿ̥ʊ
a154	朝	sɨtu̥muti (「朝食」は asamunu	stumuti	stumuti̥ ～ stumuti
a155	昼間	pˢɨma (「昼食」は aɕi、10時頃の間食は sanakḁ)	pssïma	pˢɿːma
a156	夕方	jusaɾabi (夕食」は jul ～ juʎ)	jusaɾabi	–
a157	夜	junaka	juneː	junai
a158	今	nˌnama	nnama	nˌnama
a159	今日	kjuː	kʲuː	kjuː ～ kju̥ː
a160	明日	aɕa / aʨ	aʨa	aʦḁ
a161	明後日	asḁti	asate	asḁti
a162	来年	jaːnʲi	jaːni	jaːnʲi
a163	昨日	kˢɨnu	ʦïno	ksˌnuː
a164	去年	kuʤu	kʰuʤu	ku̥ᵈz̥u
a165	昔	ŋˌkjaːŋ	ŋkjaːŋ	ŋkjaːŋ
a166	夏	–	naʦï	–
a167	暖かい	aʦɨsa / nufsa (誘導)	nuffuː / nuffuːu nuffuː	nuɸu̥ː ～ nuɸu̥ / nuɸu̥ːnuɸu̥ (これは reduplicate の形で形容詞)
a168	寒い	pˢɨsa	pɕimunu	pi̥ɕiːpi̥ɕi
a169	冷たい	pˢɨsa ～ pᶜɨsa	pzɡuɾoː	psˌɡuɾuːpsˌɡuɾu
a170	海	imˌ	im	imˌ
a171	濁る	muɡailʲ ～ muɡaiʎ	muɡʲaːɾi（濁っている）	nʲiɡuɾi / cf. muɡaiɾi (川や海の水がかき混ざっている)
a172	船	funʲi	funi	ɸu̥nʲi
a173	珊瑚礁	pɕi̥ ～ pɕi	pɕi	pi̥ɕi
a174	砂	mˌnaɡu / (「粉」は ku)	mːnaɡu	nˌnaɡu

番号	単語	保良	伊良部	国仲
a148	左	pˢʳdaɿ ～ pˢʳdaᶻʳ	pʰidiɿ	pˢɨdaɭ
a149	前	mai	mauki: (「後ろ」は ʨibi)	–
a150	道	mʦɿ	mʦɿ	n̩ʦɨ
a151	嶺	mmi	mni	m̩mi
a152	霧	kˢɿ:	kʰiɾi	ʦɨ: / akˣḁʦɨ (黄砂)（akˣa茶）「白い霧」は au̟ʦɨ)
a153	露	ʦʊv ～ ʦɿʊ	ʦɿv	tu̟ʊ
a154	朝	s·tʊmʊti	stumuti	sɨ̥tu̟mutɕi
a155	昼間	pˢɿ:ma	pˢɿ:ma	pʰɨɭ:ma
a156	夕方	jʊsaɾabi	jusaɾabi	–
a157	夜	jʊnai / 夕飯jʊ:ɿ	juᶻʳnaᶻʳ	ju̟nai
a158	今	nnama	nnami	n̩nama
a159	今日	kʰʲʊ:	kʰju:	k j u̟
a160	明日	aʦa	aʦa	ata
a161	明後日	asatti	asatti	ataɕi
a162	来年	ja:ni	jaini	ja:ni
a163	昨日	kˢɿnʊ:	ʦɿnu:	ʦɨnu̟
a164	去年	kʰʊʤʊ	kʰudu	ku̟du̟
a165	昔	ŋkʲa:ŋ	mki:ŋ	ŋkja:ŋ
a166	夏	naʦɿ	naʦɿ	–
a167	暖かい	nʊfʊ:nʊ	nufumunu	nufumunu / aʦumunu
a168	寒い	pɕɕi:pɕɕi ～ pi̥ɕi:pi̥ɕi	pɕɕimunu	pi̥ɕimunu
a169	冷たい	pˢɿgʊɾʊ:nʊ	pˢɿguɾumunu	pʰɨguɾumunu
a170	海	im	im	im̩
a171	濁る	mʊgaɿ / mʊgaɾi（中止形）	mugaiɿ	kinu̟uʊi ～ kinu̟ʊi
a172	船	fʊni	funi	funi
a173	珊瑚礁	pɕɕi ～ pi̥ɕi	pɕɕi	saŋgo / u̟ɾu̟ʊu̟sɨ (枝サンゴ) (「浅瀬」は pi̥ɕi)
a174	砂	nnagʊ:	mnagu	m̩nagu

番号	単語	池間	狩俣	島尻
a175	行く・去る	haitti (行って)	pʰʲaːɾi	ikˢˤ / piᶻˤ
a176	速い	hʲaːmunu (ç にあらず)	pʰʲaːmunu	pjaːmunu
a177	土	nta ～ mta (m は m͡n)	nta	nta
a178	庭	minaka	aːɾa / minaː	–
a179	家	jaː	jaː	–
a180	埃	ɸu̥ki	pʰu̥ki	–
a181	汚い	ɕi̥ɕana	ɕɕanaŋ	ɕɕana
a182	戸	jadu	jadu	–
a183	門	muŋ / ʤau	ʤoː	dau (「入り口」paᶻˤftsˤ)
a184	前・正面	maukʲaː	taŋkaː / maukjaː (前の家)	mafkjaː (「向かい」は ŋkaᶻˤ)
a185	村	mmaɾiʤïma	sïma	sˤma
a186	墓	haka	pḁka	pḁχa
a187	あそこ	kama	kama	kama
a188	そこ	uma	uma (「ここ」も同じ)	–
a189	ない	nʲaːŋ	nʲaːŋ	–

番号	単語	大浦	久貝	与那覇
a175	行く・去る	pʰiɾinʲaːŋ (行ってしまった)	pʰiɾi（行け） / pʰizdus（行くよ）	pʰi̥ᶻɿ
a176	速い	pʰʲaːkaŋ	pʰjaːmunu	pʰʲaːnu
a177	土	nta	mt̩a	mtʰa
a178	庭	−	minaka	−
a179	家	jaː	jaː	−
a180	埃	−	pʰu̥ki / jaːbuki (わたぼこり)	−
a181	汚い	ɕɕana / sputaɿ	ɕɕana	ɕɕanaːnu
a182	戸	−	jadu	−
a183	門	ʥoːfuʦɿ (入口)	ʦïmbu (建造物) / ʥoː (門柱間の空間)	ʥoː
a184	前・正面	mai (maibaɾa (前の家) , ɕɕibaɾa (後ろの家))	maf̩kʲa ～ mafï̥kʲa	maʊkʰʲaː
a185	村	sɿma	buɾaku (sïma は宮古島全体)	NR
a186	墓	pʰaka	pʰḁka	pʰaka
a187	あそこ	kʰama	kʰama	kʰama
a188	そこ	NR (「それ」は ui)	uma (「ここ」は kuma)	−
a189	ない	−	nʲaːŋ	−

番号	単語	上地	来間	砂川
a175	行く・去る	ɨkˢɨ / kˢɨ / paᶻ ～ palᶻ	pʰiɾi（行け！）	pi̥z̩ ～ pi̥ᶻɲ
a176	速い	pjaːmunu	pjaːmunu	pjaːmunu
a177	土	mt̩a ～ mt̩ḁ（「石」は isɨ）	mta	mt̩a
a178	庭	–	minaka	–
a179	家	–	jaː	–
a180	埃	–	pʰu̥ki	–
a181	汚い	ɕːana / ɕːanamunu	ɕɕana	jaɾimunu
a182	戸	–	jadu	–
a183	門	ʤo·	ʤoː	ʤau
a184	前・正面	mafkjaː（「後ろ」は ɕiːbaɾa）	moːtʰu / moːtʰumai / maibaɾa	mavkjaː ～ maʊkjaː
a185	村	NR	bantaʤïma	s̩ma ～ s̩m̥a
a186	墓	pḁka	pḁka	pḁka
a187	あそこ	kama	kama	kʰḁmaː
a188	そこ	kuma (umaは不使用) / amakuma (あちこち)	uma (「ここ」は kuma)	–
a189	ない	–	nʲaːŋ	–

番号	単語	保良	伊良部	国仲
a175	行く・去る	pʰiᶻɿ	pʰiɿ / pʰiɾi (行け)	ifu ～ iki / pjaɭi
a176	速い	pʰʲaːmʊnʊ / pʰʲa̰ːpʰja	pʲaːmunu	pjaːmunu
a177	土	mta	mta	nˌta
a178	庭	minaka	minaha	－
a179	家	jaː	jaː	－
a180	埃	pʰʊ̥ki / mtabʊki (土のほこり)	gumi / pʰuki	－
a181	汚い	ɕɕana	ɕɕanamunu	ɕɕanamunu / sɨːgatamunu
a182	戸	jadʊ	jadu	－
a183	門	ʥoː [保良]// ʥaʊ [新城]	ʥoːvʦɿ	dau̯
a184	前・正面	maʊkʲaː / maibaɾa (前の家)	maʊkjaː	maʊkjaː / maɪ
a185	村	sɿma	sɿma	muɾa (sɨmaとは言わない)
a186	墓	pʰḁka	pʰaː ～ pʰa̰ː	pḁka
a187	あそこ	kʰama	kʰama ～ kʰamaː	kama
a188	そこ	ʊma (「ここ」は kʰʊma	umahama (あっちこっち)	ku̟ma
a189	ない	nʲaːŋ	noːmai niːŋ (何もない)	－

宮古方言基礎語彙ｂ　データ

番号	単語	池間	狩俣
b001	目（め）	meː	[mi/[miː
b002	歯（は）	haː	[pa
b003	爪（つめ）	ʦume (共通語の可能性あり)	ʦɯ[me (気息なし)
b004	鼻（はな）	hana	pana (ゆっくりの時 pa[na)
b005	臍（へそ）	mˌːbusu	[mːbu
b006	胸（むね）	mˌmiuʦu	miɸ[ʦu (または miɸu[ʦɯ)
b007	面（かお）	mihana	mipa[na
b008	耳（みみ）	min	[miɴ
b009	皮（かわ）	kaː (木や果物の皮も)	[kaː
b010	脛・足（あし）	hazɤ (膝から下) (「腿」はmumu)	pa[ɡɨ
b011	尻（しり）	ʨiːnun/ʦɤːnun	ʨi[bidalˌ (ゆっくりの時 ʨibida)
b012	肩（かた）	katamuɕiː	ka[tamusɨ (ゆっくりの時 ka[tamusɨ)
b013	筋（すじ）	haiʦ	pˢɨ[kɨbaü (ゆっくりの時 pɨ[kɨbaɨ)
b014	眉（まゆ）	maju	[maju (または ma[ju)
b015	汗（あせ）	aɕi	a[ɕi
b016	鼻血（はなぢ）	hanaʨi	pa[naʦɯ (「鼻汁」は [mbana)
b017	涎（よだれ）	judai	ju[dalˌ (ゆっくりの時 judaɨ)
b018	刺青（いれずみ）	NR	NR (オバアの頃。[iɾeʤɯmi)
b019	一つ	ɕiːʦɤ	p[tiːʦɯ (または pɯ̥[tiʦɯ ただし p のあと母音殆ど聞こえない)
b020	二つ	ftaːʦɤ	ɸ[taːʦɯ (ɸ のあと母音がほとんど聞こえない)
b021	三つ	miːʦɤ	[miːʦɨ (または [miːʦɯ ただし ɯ~ɨ の間で揺れる)
b022	四つ	juːʦɤ	juː[ʦɨ (または juːʦɯ̥)
b023	五つ	iʦɤʦɤ	[iʦɯ̥ʦɯ (または [iʦɯ̥ʦu)
b024	六つ	mːʦɤ	[nːʦɨ (または nːʦu)
b025	七つ	nanaʦɤ	na[naʦɯ (または nanaʦu)
b026	八つ	jaːʦɤ	[jaːʦɯ (または jaːʦu)
b027	九つ	kuk̚unuʦɤ (語頭の k 破裂弱い)	ku̥[kunu]ʦɯ (または kukunuʦu ただし円唇性がはっきりしているのは nu のみ)
b028	十（とお）	tuː	toˡːˡ
b029	一人	taukaː	[taɸkʲaː
b030	二人	huˌtaːi	ɸ[taːl̩/ɸtaːɯ
b031	三人	nˌʨaːi	nˌ[ʦaːlˌ
b032	四人	jutaːi	ju[taːɯ
b033	五人	iʦunuçi̥tu	[iʦɨ̥nuɸtu (または ʔiʦɨnupɯ̥[tu)
b034	六人	mujunuçi̥tu	mu[inuɸtu (ɸ が p に近い)

番号	単語	島尻	大浦
b001	目（め）	miː	miː
b002	歯（は）	pʰaː	paː
b003	爪（つめ）	ʦɾmi	ʦɾmi
b004	鼻（はな）	pʰana	pana
b005	臍（へそ）	mːbu	mːbu
b006	胸（むね）	mmɪ	mni
b007	面（かお）	mipana	nipana
b008	耳（みみ）	miŋ	miŋ
b009	皮（かわ）	kaː	kaː
b010	脛・足（あし）	kaɾasɾɲi	pagɾ
b011	尻（しり）	ʨibitaɾ ～ ʨibitaᶻɾ	ʨibitai
b012	肩（かた）	ibiɾa / kʰḁta (kʰḁta は共通語という認識)	katamusu
b013	筋（すじ）	pʰaɕiʥɾ	pskipaɾ
b014	眉（まゆ）	maju	maju
b015	汗（あせ）	aɕi	aɕɕi
b016	鼻血（はなぢ）	pʰanatsɾ̥ʦɾ	panaʦɾ
b017	涎（よだれ）	judaɾ ～ judaᶻɾ	–
b018	刺青（いれずみ）	sɾntʦɾkɾ ～ sɾntʦɾks (おそらくこれであろうという回答)	–
b019	一つ	ttuːʦɾ	pʰitiːʦɾ
b020	二つ	ftaːʦɾ	ɸu̥taːʦɾ
b021	三つ	miːʦɾ	miːʦɾ
b022	四つ	juːʦɾ	juːʦɾ
b023	五つ	itsɾ̥ʦɾ	itsʦɾ
b024	六つ	nːʦɾ	nnʦɾ
b025	七つ	nanaʦɾ	nanaʦɾ
b026	八つ	jaːtsɾ	jaːʦɾ
b027	九つ	ku̥kunutsɾ	kukunuʦɾ
b028	十（とお）	tuː	tʰuː
b029	一人	tʰafkjaː	tavkʲaː (vの摩擦弱め)
b030	二人	ftaːɾ	ɸutaːᶻɾ(ᶻɾの摩擦弱い。舌尖の方の母音)
b031	三人	mitaːɾ	miʦʲaːᶻɾ (ᶻɾの摩擦弱い)
b032	四人	jutaːɾ	jutaːᶻɾ
b033	五人	itsɾ nu ttu	itsɾnupstu
b034	六人	muju nu ttu	mʊinupstu

番号	単語	野原	保良
b001	目（め）	miː	miː
b002	歯（は）	paː	pʰaː
b003	爪（つめ）	ʦɾmi	ʦɨmi
b004	鼻（はな）	pana	pʰana
b005	臍（へそ）	mbu / mbusu	mːbu
b006	胸（むね）	mmiʊʦɾ	mnigu: (mn の同時調音？)
b007	面（かお）	mipana	mipʰana
b008	耳（みみ）	mim	mim
b009	皮（かわ）	kaː (手の皮)	kʰa
b010	脛・足（あし）	pagɾ (足) (「脛」は karasuni)	pagɯ / ʦɨgusɨ (膝) / mumu(ni) (腿) / psaːbza 足（靴を履く部分）/ amaŋguː buni (くるぶし)
b011	尻（しり）	ʦibiguː / ʦibitaɾ とも	ʦibiɾuŋ
b012	肩（かた）	kat̪amusɾ̥~ kat̪amusɾ / kat̪a	kʰata
b013	筋（すじ）	psɾ̥kɾpaɾ (丁寧)~ psɾ̥kupaɾ(普通)	pˢkl̪pal̪̩ ~ pˢkᶻpal̪̩ ~ pˢkl̪pal̪̩ᶻ
b014	眉（まゆ）	maju	maju
b015	汗（あせ）	aɕi	aɕi
b016	鼻血（はなぢ）	panatsɾ̥ɾ	pandal̪̩ᶻ
b017	涎（よだれ）	judaᶻɾ (摩擦強い)	judal̪̩
b018	刺青（いれずみ）	piɾsɾ̥kɾ	pʰiᵈzɨkʰɯ
b019	一つ	pˢ̥ti:ʦɾ	psti:ʦɨ
b020	二つ	futaːʦɾ	ftaːʦɨ
b021	三つ	miːʦɾ̥	miːʦɨ
b022	四つ	juːʦɾ	juːʦɨ
b023	五つ	itsɾ̥ʦɾ	itsɨ̥ʦɨ
b024	六つ	mːʦɾ	mmʦɨ
b025	七つ	nanaʦɾ	nanaʦɨ
b026	八つ	jaːʦɾ	jaːʦɨ
b027	九つ	kuk̥unutsɾ	kukunuʦɨ
b028	十（とお）	tuː	tʰu
b029	一人	taʊkjaː	taʊkʲaː
b030	二人	fut̪aːᶻɾ (摩擦強い)	ftaːl̪̩ᶻ
b031	三人	mitɕaːᶻɾ	mitɕaːl̪̩
b032	四人	jutaːᶻɾ	jutaːl̪̩
b033	五人	itɾnupstu	guniŋ
b034	六人	mujunupstu	ɾukuniŋ

番号	単語	伊良部	国仲
b001	目（め）	miː	miː
b002	歯（は）	paː	paː
b003	爪（つめ）	ʦɿmi	ʦɨmi
b004	鼻（はな）	pana ～ pḁna	pana
b005	臍（へそ）	mːbusu	mːbu
b006	胸（むね）	mniuʦɿ	mmiʋʦɨ
b007	面（かお）	mipana ～ miɸana	mipana
b008	耳（みみ）	mim̩	mim
b009	皮（かわ）	kaː	kʰaː
b010	脛・足（あし）	paz / ʦɿɡɿsɿ（ひざ）/ kaɾasunʲi (すね)	paʥɨ
b011	尻（しり）	ʨibitaz̯	ʨibital
b012	肩（かた）	kḁtamuɾasɿ	katamusu̥
b013	筋（すじ）	paz̩ʦɿː	palʦɨː
b014	眉（まゆ）	miːnu maju	maʦɨɡi
b015	汗（あせ）	aɕi	aɕi
b016	鼻血（はなぢ）	panatsɿː	panatsɨ
b017	涎（よだれ）	judaz̯ ～ judaɿ	judal
b018	刺青（いれずみ）	pazts̩ʦɿ	palʥumi
b019	一つ	pitɿʦɿ	pitiʦɨ
b020	二つ	f̩taːʦ	ɸu̥taːʦɨ
b021	三つ	miːʦɿ	miːʦɨ
b022	四つ	juːʦɿ	juːʦɨ
b023	五つ	iʦɿʦɿ ～ iʦuʦɿ	iʦɨ̥ʦɨ
b024	六つ	m̩ːʦɿ	mːʦɨ
b025	七つ	nanaʦɿ	nanaʦɨ
b026	八つ	jaːtsɿ	jaːtsɨ
b027	九つ	kukunutsɿ	ko̯ko̯no̯tsɨ
b028	十（とお）	tuː	tu̯ː
b029	一人	taʋkiː	taʋkjaː
b030	二人	ftaːz̯	ɸutaːl
b031	三人	mitaːz̯	mˢɨtaːl
b032	四人	jutaːz̯	jutaːl
b033	五人	iʦɿnu pstu	iʦunupˢɨtu
b034	六人	mujunu pstu	mujunupˢɨtu

番号	単語	池間	狩俣
b035	七人	nananuçi̥tu	na[na]nuɸtu
b036	八人	jaːnuçi̥tu	[jaːnuɸtu
b037	九人	kununuçi̥tu/kukununuçi̥tu	ko̥[konu]nuɸtu
b038	十人	tuːnuçi̥tu	[tuːnuɸtu
b039	いくら	ikassaɡaː (値段。いくらか)	[no]np[saː (または nonnupsaː　終助詞 saː は分離すべきだったがしていない。おそらく nonpů が当該語形と思われる。疑問詞が単独で出にくいようだった)
b040	いつ	itsɿɡaː (いつか)	nan̩ʥi　ni / itsɯ　nu (ni, nu は終助詞。分離すべきだったがしていない。疑問詞が単独で出にくいようだった)
b041	だれ	taɾuɡaː/taɾuɡa (だれか)	ta[ɾuː
b042	どこ	iʥanuçi̥tu (どこの人)	n̩[ʥai / n̩[ʥan̩ / n̩[ʥa
b043	どれ	idiɡa (どれか)	n̩[ʥaɡa du / n̩[ʥiɡa du (du は終助詞。分離すべきだったがしていない。疑問詞が単独で出にくいようだった)
b044	なぜ	naujahiːɡa (なぜか)	no[sun̩]tɕi　du / noː[sun̩]tɕi　[du] (du は終助詞。分離すべきだったがしていない。疑問詞が単独で出にくいようだった)
b045	なに	nauɡa (なにか)	[noː
b046	いくつ	ifutsu (uvaɡa tussa ifutsuɡa (お前の歳はいくつか))	[iɸtsɯ
b047	昼（ひる）	hiːma (正午) (「真夜 中」は junaka)	pˢɨ[ma (ゆっくりの時 pˢɯ[ma)
b048	田（た）	taː (田んぼは無い)	[taː / ɸḁ[ta]ɡɨ / pḁ[taɡɨ
b049	星（ほし）	hoɕi	p[sɨ (ゆっくりの時 puː[sɨ)
b050	道（みち）	n̩ts	n[tsɨ / nː[tsɯ
b051	山（やま）	jama	ja[ma (cf.坂saː[ma)
b052	島（しま）	ɕima	ɕi[ma / sɨ[ma (自由会話では中舌になっている)
b053	浜（はま）	hida	bɨ[ʥa / pa[ma
b054	花（はな）	hana	pa[na
b055	泡（あわ）	awa	a[wa
b056	穴（あな）	ana	a[na
b057	空（そら）	soɾa (共通語形か)	ti[ɴ (cf.「土地」は ʥɨː)
b058	烏賊（いか）	ika	i[ka
b059	海老（えび）	ibi	e[bi
b060	羽（はね）	hani	pa[ni

番号	単語	島尻	大浦
b035	七人	nana nu ttu	nananupstu
b036	八人	jaː nu ttu	jaːnupstu
b037	九人	kukunu nu ttu	kukunupstu
b038	十人	tuː nu ttu	tuːnupstu
b039	いくら	{nau ～ nou} nu pssa （これはいくらか？）	noːnu psaɡa
b040	いつ	itsɿ̥	itsɿ ɡa
b041	だれ	tʰaɾu	taɾu ɡa
b042	どこ	nda	nᵈza ɡa
b043	どれ	ndʑi	nᵈʑi ɡa
b044	なぜ	noui ～ naui	noː sttiɡa
b045	なに	nou ～ nau	uɾe noːɡa
b046	いくつ	iftsɿ	iftsɿ ɡa
b047	昼（ひる）	pssuma ～ pɿsuma	pˢɿːma
b048	田（た）	taː	ta
b049	星（ほし）	psɿ ～ puɿ̥	psɿ
b050	道（みち）	ntsɿ	ntsɿ
b051	山（やま）	jama (木があるところ)	mmi
b052	島（しま）	sɿma	sɿma
b053	浜（はま）	pʰama	pama
b054	花（はな）	pʰana	pana
b055	泡（あわ）	awa (共通語？)	saɸuŋ
b056	穴（あな）	ana	abu·
b057	空（そら）	tɕin	tiŋ
b058	烏賊（いか）	ikʰa	ika
b059	海老（えび）	ɿbɿɡan ～ ɿbᶻɿɡan (イセエビ) / saɿ ～ saᶻɿ (小さいエビ)	saᶻɿ
b060	羽（はね）	pʰaɲi	pani

番号	単語	野原	保良
b035	七人	nananupstu	nananiŋ
b036	八人	jaːnupstu	hatɕiniŋ
b037	九人	kukunupstu	kuniŋ
b038	十人	tuːnupstu	dʑuːniŋ
b039	いくら	noː nu pusa ga（いくらか？）/ iska (いくら)とも	isaka
b040	いつ	itsɿ / itsɿ ga kɿga（いつ来るの？）	itsɨ
b041	だれ	toːga ga kɿgumatarjaː（誰が来るの？）	tʰaʊ
b042	どこ	ndza / ndzaŋ kairʲaː (どこにか？）/ ndzaŋga (どこで)	ndza
b043	どれ	ndʑi / ndʑinuga zoːkarjaː（どれが良いの？）	ndʑi
b044	なぜ	{noːtɕiga / noːtiga} nakjuːrjaː（何故泣いているの？）	naotiː
b045	なに	noː / noːju ga pukarjaː（何が欲しいの？）	naonu ~ noːnu
b046	いくつ	ifutsɿ ga kaːttɕaː（いくつ買う？）	ifutsɨ
b047	昼（ひる）	pɿru	pʲsɨːma / stumuti (朝) / junai (夜)
b048	田（た）	taː (「畑」は pari)	tʰaː
b049	星（ほし）	pusɿ	psɨ ~ psɨ̞
b050	道（みち）	mtsɿ	mtsɨ
b051	山（やま）	jama	jama
b052	島（しま）	sɿma	sɨma
b053	浜（はま）	pama	pʰama
b054	花（はな）	pana	pʰana
b055	泡（あわ）	aʊa ~ awa//abuku	aːtsɨʊ ~ aːtsɨβ
b056	穴（あな）	aːna	aːna
b057	空（そら）	tin~tiŋ	tiŋ
b058	烏賊（いか）	ikʲa	ikʲa
b059	海老（えび）	saᶻɿ (摩擦弱い)	ibz / pʰaʊ (蛇)
b060	羽（はね）	pani	pʰani

番号	単語	伊良部	国仲
b035	七人	nananu pstu	nananupˢɨtu
b036	八人	jaːnu pstu	jaːnupˢɨtu
b037	九人	kukununu pstu	ko̯ko̯no̯nopˢɨtu
b038	十人	tuːnu pstu	tu̯ːnopˢɨtu
b039	いくら	isˌkiga（いくらか？）	kuɾjaː ikassa ga （これはいくらか？）
b040	いつ	itsɿ	itsɨ̥du ɸuːga （いつ来るか？）　音声環境によりtsではなくsのようになる。
b041	だれ	taɾuga（誰か？）	ʋʋa taɾu gaː （あなた誰？）
b042	どこ	n(ᵈ)za	idaŋ kai gaː （どこ行くの？）
b043	どれ	ndʑi	idʑiŋkai du̥ aɸudʑi ga ː（どれにするの？）
b044	なぜ	noːsˌtiːga	naʋtɕiː du namagami gaː （なぜ遅れたの？）
b045	なに	noː	naʊ judu aɕuː ga （なにやってるの？）
b046	いくつ	if(u)tsɿ	iɸutsɨ du al gaː （いくつあるの？）
b047	昼（ひる）	pˢɿːma	pɨlma
b048	田（た）	taː	ta
b049	星（ほし）	pusˌ ~ pu̥sˌ	pu̥sɨ
b050	道（みち）	mtsɿ	mtsɨ
b051	山（やま）	jama	jama
b052	島（しま）	sˌma	sɨma
b053	浜（はま）	pama	pama
b054	花（はな）	pana	pana
b055	泡（あわ）	abuku	awa
b056	穴（あな）	ana	ɸu̥guŋ
b057	空（そら）	timˌ	soɾa
b058	烏賊（いか）	ikʲa	ika
b059	海老（えび）	sazˌ（総称）／ɿbzgaŋ（大きいもの）	ebi
b060	羽（はね）	pani	pani

番号	単語	池間	狩俣
b061	牛（うし）	uɕɿ (ussɿkaːdi～ussukaːdi (牛を飼う))	u[sɨ / ɯ[sɨ
b062	蝿（はえ）	hai	pai / paɯ
b063	犬（いぬ）	in	i[n̩ (iɴ と書いてもよい)
b064	蛸（たこ）	taku	tʰa[ko̥ / taʰ[ku̥
b065	蚤（のみ）	nun	[nun̩
b066	烏（からす）	ɡaɾasa	ɡa[ɾasɯ / ɡa[ɾa]sa
b607	雀（すずめ）	ffʲaduɾa	[utʦa
b068	葉（は）	haː	kiːnu[paː
b069	穂（ほ）	huː	[puː / [maɯnupuː ～ mal̩nupuː (稲の穂)
b070	根（ね）	niː	niba[l̩
b071	竹（たけ）	taki	ta[ke
b072	松（まつ）	maʦɿ	ma[ʦɯ
b073	藁（わら）	NR	ba[ɾa
b074	種（たね）	tani (サネも)	ta[ni]
b075	くば（びろう樹）	kuba	ku[ba
b076	ソテツ	tʨuːʦɿ	sɨ[su]ʥɯ / s[tɨ]ʦɯ / s[su]ʥɯ
b077	こずえ・砂糖黍の先端	nai	su[ɾa (buː]ɡɯnusɯ[ɾa)
b078	菜（な）	naːʑu/naːʑuː	[paːʥuː (葉物野菜。cf.「野菜」は suː)
b079	酒（さけ）	saki	saʰ[ki̥]
b080	豆（まめ）	mami	ma[me
b081	麦（むぎ）	muzɿ	mu[ɡɨ
b082	餅（もち）	muʨiː	mu[ʦɨ
b083	ミカン	funʲuː	ɸni[n̩ / ɸni[ɯ / ɸ[nʲɯ
b084	糸瓜（へちま）	nabʲaːɾa	na[bʲaːɾa
b085	親（おや）	uja (「父」は uza，「母」は m̩ma)	ɯ[ʥaɯ[ma / oja (父親) / ɯ[ʥaɯ[ma (父母) / ojafa: (親子)
b086	いとこ	itʨu̥fu	i[ʦůɸu
b087	兄（あに）	suʑa (男第一子) / uʑaɡama (男末っ子) / nakasuʑa (第一子と末っ子の間の人(達))	a[ʥa
b088	姉（あね）	haːni (女第一子) / ʊbaɡama (女末っ子) / aniɡama (女末っ子の一つ上) / ʊbaɡama (女末っ子、最初の音は labiodental approximant, not a vowel)	[aŋ]ɡa
b089	兄弟（きょうだい）	utuʑa (男女とも)	NR / [kʲoː]dai (?)
b090	親戚（しんせき）	utuʑa (itʨumu（お祝いの時）)	u[ja]ku
b091	鉢（はち）	haʨi	NR / ha[ʨi
b092	瓶・甕（かめ）	kami	ka[mi / mi[ʥɯɡami

番号	単語	島尻	大浦
b061	牛（うし）	usɤ	usɤ
b062	蝿（はえ）	paz ～ paɤ	pa^{z}ɤ
b063	犬（いぬ）	iŋ	iŋ
b064	蛸（たこ）	t^{h}ḁku	tak^{h}u
b065	蚤（のみ）	nuŋ	nuŋ
b066	烏（からす）	gaɾasa	ga:ɾ(ɾ)sa
b607	雀（すずめ）	maɕa	padɯi
b068	葉（は）	pa:	ki·nupa: (木の葉)
b069	穂（ほ）	pu:	p^{h}u:
b070	根（ね）	ɲi:	ni:
b071	竹（たけ）	t^{h}ḁki	taki
b072	松（まつ）	matsɤki:	matsɤki
b073	藁（わら）	baɾa	baɾa
b074	種（たね）	taɲi	tani
b075	くば（びろう樹）	kuba	kuba
b076	ソテツ	NR	－
b077	こずえ・砂糖黍の先端	suɾa	sɤ:ɾa nu pa / sɤ·ɾa
b078	菜（な）	NR / (野菜なら su:)	na·zu:
b079	酒（さけ）	sḁki	saki
b080	豆（まめ）	mami	mami
b081	麦（むぎ）	mugz ～ mugɤ	mug^{z}ɤ
b082	餅（もち）	mutsɤ	mutsɤ̥
b083	ミカン	fɯnɤ	funi^{z}ɤ (ᶻɤ 摩擦弱い)
b084	糸瓜（へちま）	nabja:ɾa	nab^{j}o:ɾa
b085	親（おや）	ujamma:sa	ndza mma (mma の最初の m は m と n の同時調音)
b086	いとこ	itu̥fɯ	itsɤɸu
b087	兄（あに）	suda / adʑa	azza:
b088	姉（あね）	anga	aŋga
b089	兄弟（きょうだい）	k^{j}o:dai	－
b090	親戚（しんせき）	ut^{h}ada	utɤdʑa
b091	鉢（はち）	patsɤ (odʑiŋ お膳？)	
b092	瓶・甕（かめ）	k^{h}ami	kami

番号	単語	野原	保良
b061	牛（うし）	usɿ	ussɨ
b062	蝿（はえ）	paᶻɿ (摩擦弱い)	paz ～ paɨz
b063	犬（いぬ）	in～iŋ	iŋ
b064	蛸（たこ）	tḁku	tḁku
b065	蚤（のみ）	num	num
b066	烏（からす）	ɡaɾasa	kaɾasɨ ～ ɡaɾasɨ / ɡaɾasa
b607	雀（すずめ）	maɕa	pʰadu̥ɾa
b068	葉（は）	paː	kiː nu pʰa (木の葉) / upu ni nu pʰa (大根の葉)
b069	穂（ほ）	puː	aː nu pʰuː (粟の穂)
b070	根（ね）	niː	niː
b071	竹（たけ）	tḁki	tḁki
b072	松（まつ）	matsɿ	matsɨɡiː
b073	藁（わら）	waɾa / baɾa	baɾa
b074	種（たね）	sani (sanʲuː makɿ (種をまく)) / sanimunu	tʰani
b075	くば（びろう樹）	kuba	kuba
b076	ソテツ	sutitsɿ	ʃukʰatsɨ̥
b077	こずえ・砂糖黍の先端	suɾapana	(buːzl̥nu (砂糖黍の)) baɾam
b078	菜（な）	naː	naː
b079	酒（さけ）	saki	saki
b080	豆（まめ）	mami	mami
b081	麦（むぎ）	mugᶻɿ (摩擦弱い)	mɡl̥ᶻ
b082	餅（もち）	mutsɿ	mɪ̥tsɨ
b083	ミカン	funiɿ (摩擦弱い)	funil̥ᶻ
b084	糸瓜（へちま）	nabjaːɾa	nabʲaːɾa
b085	親（おや）	uja (「父」はuja，「母」は anna)	zzamma / uja (父) / anna (母)
b086	いとこ	itsɿ̥fu	itsɨ̥fu
b087	兄（あに）	at̬tsa	sɨ(ᵈ)za / attsa
b088	姉（あね）	aŋɡa	aŋɡa
b089	兄弟（きょうだい）	kjoːdai	kʲoːdai (標準語形か?)
b090	親戚（しんせき）	utsut̬tsa	ututtsa
b091	鉢（はち）	hatɕi // pḁtsɿ	pḁtsɨ
b092	瓶・甕（かめ）	kami	kʰami

番号	単語	伊良部	国仲
b061	牛（うし）	usɤ	usɨ
b062	蝿（はえ）	paz̩	paᶻɨ
b063	犬（いぬ）	in (im (海))	in
b064	蛸（たこ）	ta̰ku	tʰa̰ko
b065	蚤（のみ）	num̩	num
b066	烏（からす）	garasa	garasɨ
b607	雀（すずめ）	f(u)sadurʲa matɕa	ffadorja
b068	葉（は）	paː	paː
b069	穂（ほ）	puː	puː(少し口唇の震えを伴う)
b070	根（ね）	nʲiː	niː
b071	竹（たけ）	ta̰ki	tʰa̰ke
b072	松（まつ）	matɕɤgi	matɕɨgiː
b073	藁（わら）	gara	gisɨ̰tɕɨ
b074	種（たね）	tanʲi	tani
b075	くば（びろう樹）	kuba	kuba
b076	ソテツ	sditsɤ	so̰tetɕɨ
b077	こずえ・砂糖黍の先端	buːz̩nu s̩ra	kiːnu sura(＊木の先)
b078	菜（な）	naː / suː（やさい）	paː
b079	酒（さけ）	sa̰ki	sake
b080	豆（まめ）	mami	mami
b081	麦（むぎ）	nuz̩	mugi
b082	餅（もち）	mutsɤː	mutɕɨ
b083	ミカン	f(u)nʲiz	ɸunʲiu
b084	糸瓜（へちま）	nabʲaːra	nabjaːra
b085	親（おや）	uja	uja / uja anna
b086	いとこ	itɕfu	itʰo̰ko
b087	兄（あに）	a(ᵈ)za	ada
b088	姉（あね）	ani	ani
b089	兄弟（きょうだい）	kʲoːdai / bikitu (ᵈ)zara / miːtu (ᵈ)zara	kʲoːdai
b090	親戚（しんせき）	ujaku	utuda
b091	鉢（はち）	pa̰tɕ(ɤ)	pʰa̰tɕɨ
b092	瓶・甕（かめ）	kami	kami

番号	単語	池間	狩俣
b093	箆（へら）	hiɾa	pi[ɾa
b094	笠・傘（かさ）	sana	sa[na / mi[nokas̥a = ku[baːsa
b095	糸（いと）	itu	[i]ʦu
b096	緒（お）	buː / attɕa nu buː (下駄の鼻緒)	[buː/pa[nabuː
b097	柄（え）	juɾu	[ʔɨ]ː
b098	網（あみ）	an	[ʔaɴ
b099	桶（おけ）	taɾu	NR / ta[rɯ
b100	枕（まくら）	maffa	maɸ[ɸa
b101	薬（くすり）	fus̥ui (視覚的に唇歯性低い。接触弱い。hus̥ui か)	ɸ[sɯɨ / ɸusujɯ
b102	斧（おの）	jutsɿ	na[ta (その場で書いた絵を見せて確認したが斧のことらしい)
b103	鎌（かま）	zzaɾa (最初の z は初め摩擦性低い)	ɯ[za]ɾa
b104	鍬（くわ）	ffatsɿ	[ɸɸatsɯ
b105	笊（ざる）	sauki	[soːgi
b106	鋤（すき）	NR (牛がいなかった)	NR (sɯ̥[ki 絵を示したがNR。男の人なら分かる。馬につける)
b107	釜（かま）	hagama	pa[gama (「かまど」は o[kama)
b108	しゃもじ	kina	miɯ̥ski[na (「メシのしゃもじ」は miɯ̥[sɯ, 「お玉」は ki[na)
b109	杖（つえ）	diːgiː	gu[ɕan
b110	欠		
b111	紙（かみ）	kabiː	ka[bɨ (s 音はついていない)
b112	綱（つな）	n̥naː/n̥na	ʦɯ̥[na
b113	煙管（きせる）	t'iː (ttiː か)	kˢɨ[sɨɯ
b114	名（な）	namai	[naː
b115	帆（ほ）	huː	[puː
b116	荷（に）	niː	[niː
b117	金（かね）	kani	ka[ni
b118	金銭（かね）	din	ʤi[n̩
b119	音（おと）	NR (…nu narijuɴ (…が鳴る) の形で出た)	u[tu
b120	歌（うた）	aːgu	[aː]gu
b121	橋（はし）	NR (橋は存在しなかった。「桟橋」は sambaɕi)	ha[ɕi
b122	石（いし）	iɕi	i[sɯ (たくさんだと [issaʤaɾi)
b123	糞（くそ）	ɸu̥su	ɸ[sɯ (ゆっくりの時 ɸɯ[sɯ)
b124	粒（つぶ）	NR	düː[ʤɯ¨/ʤüː[ʤü (「米粒」は maɯduʤu,「石鹸粒」は sekkenʤuʤu)

番号	単語	島尻	大浦
b093	箆（へら）	piɾa	piɾa
b094	笠・傘（かさ）	sana	sana
b095	糸（いと）	itu	itu
b096	緒（お）	buː	buː
b097	柄（え）	iː	iː
b098	網（あみ）	aŋ	aŋ
b099	桶（おけ）	kubadʑɑː	tagu (g の閉鎖弱め)
b100	枕（まくら）	maffa	maffa
b101	薬（くすり）	ssuɑ / ssuɑzu ～ ssuzzu (薬を)	fsui / ssui
b102	斧（おの）	juksɑ	jukkᶻɑ
b103	鎌（かま）	zzaɾa	zzaɾa
b104	鍬（くわ）	ffatsɑ̥	ffatsɑ
b105	笊（ざる）	baːki (深いもの) / soːki (浅いもの)	–
b106	鋤（すき）	ski	maːjama
b107	釜（かま）	ukama	ukama
b108	しゃもじ	kina	kʰina
b109	杖（つえ）	guɕaŋ	–
b110	欠		
b111	紙（かみ）	kabᶻɑ	kabᶻɑ
b112	綱（つな）	tsɑ̥na	tsɑna
b113	煙管（きせる）	kiɕ̥iɑ	kiɕiᶻɑ (ᶻɑ 摩擦弱い)
b114	名（な）	naː	naː
b115	帆（ほ）	puː	puː
b116	荷（に）	ɲimutsɑ̥	niː
b117	金（かね）	kaɲi	kani
b118	金銭（かね）	dʑiŋ	dʑiŋ
b119	音（おと）	NR / (oto)	kannaᶻɑ (かみなり)
b120	歌（うた）	aːgu	aːgu(ː)
b121	橋（はし）	pʰasɑ	pasɑ
b122	石（いし）	isɑ	isɑ
b123	糞（くそ）	ssu	ssu
b124	粒（つぶ）	tsɑbu	gumadani

番号	単語	野原	保良
b093	箆（へら）	piɾa	pʰiɾa
b094	笠・傘（かさ）	sana	sana
b095	糸（いと）	itu / kḁɕi (織糸)	nuʑʑuː ～ nuzjuː
b096	緒（お）	buː	pʰanabuː　(下駄の鼻緒)
b097	柄（え）	iː	ʔiˑ
b098	網（あみ）	am	am
b099	桶（おけ）	uːki / taɡu (頭に乗せて水を運ぶもの)	tʰaɾu
b100	枕（まくら）	maffa	maffa
b101	薬（くすり）	fu̥suːᶻɿ	fsɨːz ～ fsɨl̥ᶻ
b102	斧（おの）	juːkᶻɿ	juks
b103	鎌（かま）	ɿzaɾa	zzaɾa ～ ɹzaɾa
b104	鍬（くわ）	ffatsɿ̥ (f 弱い)	ffatsɨ
b105	笊（ざる）	soːki / baːki	sau̟ki
b106	鋤（すき）	maːjama（小さく掘り起こすもの）/ sɿ̥ki	s(ɯ̥)ki / jama
b107	釜（かま）	paɡama	ʔukama
b108	しゃもじ	miskai	kina
b109	杖（つえ）	ɡuɕaŋ	ɡuɕaŋ
b110	欠		
b111	紙（かみ）	kabᶻɿ	kabl̥ᶻ (kabitul̥ᶻ「凧」＝紙＋鳥)
b112	綱（つな）	tsɿna	tsɨna
b113	煙管（きせる）	ki̥ɕiᶻɿ	kʰiɕiːl̥ᶻ
b114	名（な）	naː (名前)。「自分の名前」は duːɡa　naː	naː
b115	帆（ほ）	puː	(funi nu) puː
b116	荷（に）	niː	niː
b117	金（かね）	kani	kʰani
b118	金銭（かね）	dʑiŋ	dʑiŋ
b119	音（おと）	utu	nal̥ᶻ
b120	歌（うた）	aːɡu	aːɡu
b121	橋（はし）	pḁsɿ	NR
b122	石（いし）	isɿ	isɨ
b123	糞（くそ）	fu̥su	fsu
b124	粒（つぶ）	sɿdʑɿ	NR

番号	単語	伊良部	国仲
b093	箆（へら）	piɾa	piɾa
b094	笠・傘（かさ）	sana / kubaːsa（クバ笠）	sana
b095	糸（いと）	itu	ito
b096	緒（お）	buː	buː (唇の開きが非常に狭いので、やや震えることあり)
b097	柄（え）	iː	jiː
b098	網（あみ）	am̩	am
b099	桶（おけ）	uːki / taɾai（たらい）	NR / uːki とは言わない。使ったことなし
b100	枕（まくら）	maf(ʊ)ɾa	maɸɸa
b101	薬（くすり）	fs̩z̩	ɸusul
b102	斧（おの）	buːnu	ono
b103	鎌（かま）	zzaɾa	lzaɾa
b104	鍬（くわ）	ffatsɿ	ɸɸatsɨ
b105	笊（ざる）	soːki / baːki	soːki
b106	鋤（すき）	su̥ki	sɨki
b107	釜（かま）	ukama / ukuma	ukama
b108	しゃもじ	kina	kina
b109	杖（つえ）	guɕaŋ	guɕan
b110	欠		
b111	紙（かみ）	kabz	kabɨː
b112	綱（つな）	tsna	tsɨna
b113	煙管（きせる）	ttɕ(ɿ)z	tɕil
b114	名（な）	naː	naː
b115	帆（ほ）	puː	puː (少し口唇の震えを伴う)
b116	荷（に）	nʲiː	niː
b117	金（かね）	kani	
b118	金銭（かね）	dʑiŋ	dʑiŋ
b119	音（おと）	naːz̩	utu
b120	歌（うた）	ajagu ～ ajago	aːgu
b121	橋（はし）	pasz ～ pasˢɿː	pʰḁsɨː
b122	石（いし）	isɿ	isɨ
b123	糞（くそ）	ɸu̥su	ɸu̥sɨ
b124	粒（つぶ）	tsubu	tsɨbu

番号	単語	池間	狩俣
b125	命（いのち）	nn̩utsɿ	ɯ[nutsɯ
b126	豚小屋、便所	waːnuɕɕi	[tuːwa / [tuˇːwa / waːnuja
b127	病気（びょうき）	jamijuɿ (動詞)	ja[mi]ɯ / jamijɯ (名詞が出にくい)
b128	柱（はしら）	hala (l は歯茎より少し後ろか。hassa は「帆柱」)	pa[ɾa
b129	真似（まね）	maːbi	mʲaː[bi
b130	うそ	bakuɾau/bakuɾoː (ɾ は l か)	da[ɾa]ɸu
b131	匂い	kadʑa	ka[dʑa / ka[basɯ̥kan̩
b132	表（おもて）	aːgi (裏表の表) (「裏」は ɕita, ɕitaːɾa)	[maːsɨma (cf.裏 kaisɨma)
b133	外（そと）	aɾa	[aː]ɾa
b134	内（うち）	naka (中(なか))	naː (中。「家の中」は [jaːna]ː)
b135	上（うえ）	aːgi	[waːgu
b136	下（した）	ɕit̥a/ɕit̥aːɾa	sɨ[taːɾa
b137	も（助詞）	ha[na]mai (鼻も) / ha[na]mai (花も)	–
b138	少し（＋指小辞）	hiːtɕagama	[piːŋ]kaː
b139	もっと	mn̩mʲahi	–
b140	たくさん	haːsa	u[poː]sa
b141	小さい	imiimi	i[miŋ]kaː / i[miŋ]ga
b142	大きい	gabaː	u[ɸoːbi / u[ᵖɸoːbi
b143	低い	ssabana/ssamunu (munu は形容詞形か)	–
b144	同じ	junusui / junuɕɕi (同じ歳)。 ɕɕi は「歳」	–
b145	短い	maːku	–
b146	丸い	maːku / maːɾa	–
b147	それ	ui (範囲は不明。cf.「遠く」は kaːma)	–
b148	もの、物	munu	–
b149	くださる	fiːsama	ɸiːsamai
b150	貸す	karasɿ	–

番号	単語	島尻	大浦
b125	命（いのち）	nnutɕา	nnutɕา
b126	豚小屋、便所	waː nu jaː	waː nu jaː / ɸuᶻา (ᶻา 摩擦弱い)
b127	病気（びょうき）	jaŋ	jaŋ/bʲoᵈza
b128	柱（はしら）	paɾa	paɾa
b129	真似（まね）	ɲaːbi	naːbi
b130	うそ	daɾaxa	daɾaɸu̥
b131	匂い	kʰada	kadʥa
b132	表（おもて）	aːɾa	waːbi
b133	外（そと）	aːɾa / puka (puka は誘導による)	pʰuka
b134	内（うち）	naxa ～ naka (自然な発話では x)	naka
b135	上（うえ）	waːgi	waːbi
b136	下（した）	sta (ゆっくりだと sːta)	staːɾa
b137	も（助詞）	－	－
b138	少し（＋指小辞）	pittagaː	pittɕaː
b139	もっと	－	－
b140	たくさん	－	－
b141	小さい	imikaŋ	imittɕa (「小さい島)」は imisาma / imizาma)
b142	大きい	uːgatakaŋ	upujaɾabi (「大きい子」の意) (「とても大きい」は upoːupu)
b143	低い	－	－
b144	同じ	－	－
b145	短い	－	－
b146	丸い	－	－
b147	それ	－	－
b148	もの、物	－	－
b149	くださる	fiːsamaา	fiː(ᶻา) (ᶻา 摩擦弱い)
b150	貸す	－	－

番号	単語	野原	保良
b125	命（いのち）	nnutsɿ	nnutsɿ
b126	豚小屋、便所	waːnu jaː (トイレの意味は含まない) 「便所」は　fuːɿ　という。	NR
b127	病気（びょうき）	jam	jam
b128	柱（はしら）	paɾa	paɾa ～ para
b129	真似（まね）	naːbi	naːbi
b130	うそ	janadzai / damasai（だまされ）/ daɾaka　ともいう。	daɾaka
b131	匂い	kadza	kʰadz(ʲ)a
b132	表（おもて）	umuti	maːsma / kaisma (うら)（着物ののみ、紙の表裏は waːbi と si̥ta)
b133	外（そと）	pu̥ka // aːra	aɾaː
b134	内（うち）	naka / utsɿ	(jaː) naka
b135	上（うえ）	waːbi / waːgu	waːbi
b136	下（した）	sɿ̥ta / sɿtaːɾa	si̥ta
b137	も（助詞）	–	–
b138	少し（＋指小辞）	ipiːʔttagama	ipittsa ～ ipiːtsa / ipiːttsagama
b139	もっと	–	–
b140	たくさん	–	–
b141	小さい	imiːtta	imiːmi / imimunu（「小さいもの」は imiːmi nu munu , imiːmi munu とはあまり言わない)
b142	大きい	upoːupu	upuːpu / upumunu (「大きいもの」は upuːpu nu munu)
b143	低い	–	–
b144	同じ	–	–
b145	短い	–	–
b146	丸い	–	–
b147	それ	–	–
b148	もの、物	–	–
b149	くださる	fiː (くれる) / fiːsamaɿ (くださる)	fiːsamal̥ᶻ (敬語) / fiː
b150	貸す	–	–

番号	単語	伊良部	国仲
b125	命（いのち）	nnutɕɿ	nnutɕɨ
b126	豚小屋、便所	waːnu jaː / NR（便所）	ɸu̥ʂɨ mal ʦubu （求められている回答ではないようだ）
b127	病気（びょうき）	jam̩	jam
b128	柱（はしら）	paɾa	paɾa
b129	真似（まね）	maːbi	maːbi
b130	うそ	skas̩ / daɾafu	taɾaɸu
b131	匂い	kadʑa	kusamunu / kabasumunu (臭い匂い / いい匂い)
b132	表（おもて）	umuti	mae̞ <cf.>裏はʨibi
b133	外（そと）	aɾiː	pu̥ka
b134	内（うち）	naka（中）	naka
b135	上（うえ）	waːɾa	ʋaːɾa
b136	下（した）	s̩taːɾa	sɨtaːɾa
b137	も（助詞）	−	
b138	少し（＋指小辞）	joː tʲaːi (ffiɾu)	ipiːta ɡama
b139	もっと	−	
b140	たくさん	−	
b141	小さい	imiːimi	imimunu ɡama
b142	大きい	upoːup ～ opoːup	opo.opu (母音はu～oで揺れがある)
b143	低い	−	
b144	同じ	−	
b145	短い	−	
b146	丸い	−	
b147	それ	−	
b148	もの、物	−	
b149	くださる	ffiz	fiːsamatal (くださった)
b150	貸す	−	

宮古方言文法項目 データ

N-155B-1	共通語	鳩も　鷹も　飛ぶ。	調査者
N-155B-1	池間	ffjaduɾamai（雀も） takamai tubi（当該方言の/h/は h~ɸ~f で揺れている。インフォーマントは何度か言い直しや言い淀み等があり、調査者 4 人のデータもまちまちである。この報告では仮に f で統一する）	N,N,D,U
N-155B-1	狩俣	pʰḁtu mai tʰḁkamai tubi	N,M
N-155B-1	久貝	mːbatumai tḁkamai tubᶻɿ	N,H,N,M
N-155B-1	与那覇	tuᶻɿja tubansuɡa mbataː tubɿdu sɿ （鳥は飛ばないが鳩は飛ぶ）	S
N-155B-1	来間	pḁtumeː tḁkameː {tubzˌ / tubzˌdu} sɿː tḁkanudu tubzˌ	K,U,D
N-155B-1	宮国	{tuzmai/tuɿmai} tḁkamai butuki̥	K,T
N-155B-1	砂川	mˌbatumai takamai tuviːdu uᶻɿ	N,I,O
N-155B-1	保良	mbatumai takamai tubzˌ	K,T
N-155B-2	共通語	今日は　天気が　悪いから　飛行機は　飛ばない。	
N-155B-2	池間	kjuːja {teŋkinu / suɾanu} baikaiba tubimunumai tubaɴ	N,N,D,U
N-155B-2	狩俣	kjuːja {teŋkinu / ɯaːʦïkinu} ɯasï̥kaɾiba çikoːkija tubampaᶻï	N,M
N-155B-2	久貝	kʲuːja ʋaːʦɿkɿnu {baskaːba / basɿ̥kaːba} hikoːkjaː tubaŋ	N,H,N,M
N-155B-2	与那覇	kʲuːja waːʦɿ̥kɿnu baᶻɿkaɾiba çikoːkʲaː tubaɴ	S
N-155B-2	来間	kʲuːja tintsɿ̥nu bazˌkaɾiba çi̥koːkʲaː tubaŋ ‖ kʲuːja ʋaːtstsɿ̥nu janakaɾiba çi̥koːkʲaː tubaŋ	K,U,D
N-155B-2	宮国	kjuːja tiŋki {bazkaiba / baɿkaiba} hi̥koːkja ituŋ	K,T
N-155B-2	砂川	kʲuːja waːᵗskɿ baᶻɿkaɾiba çikoːkʲaː tubaŋˌ	N,I,O
N-155B-2	保良	kʲuːja waːʦkˢɿnu bazˌkaɾiba çi̥koːkjaː tubaŋ	K,T
N-155B-3	共通語	風で　帽子が　飛んだ。	
N-155B-3	池間	kadiçiː kavvimunumai tubahaɾiɲaːɴ	N,N,D,U
N-155B-3	狩俣	kaʥi ndu boːɕinu {tubiuᶻï / tubjuː}	N,M
N-155B-3	久貝	kaʥiɕidu boːɕinu tubinʲaːŋ (tubᶻɿtaː は未確認)	N,H,N,M
N-155B-3	与那覇	kˢɿnaː çikoːkʲaː {tubɿdu sɿ̥taː / tubɿtaː} (昨日は飛行機は飛んだ)	S
N-155B-3	来間	kaʥinu ʦu̥ːkaɾibadu boːɕimeː tubi ‖ kaʥinu {ʦuːkaɾibadu / ʦuːkaɾibadʊ} boːɕimeː {tubzˌtazˌ / tubzˌtaɿ}	K,U,D
N-155B-3	宮国	kazindu bo:sinu {tubipiː/tubasaɾiɾjaː}	K,T
N-155B-3	砂川	kaʥiɕidu boːɕinu tuvᶻɿtaᶻɿ	N,I,O
N-155B-3	保良	kaʥiɕiː boːɕinu tubzˌtaː	K,T
N-155B-4	共通語	親鳥が　飛んで、小鳥が　飛んだ。	
N-155B-4	池間	mmaduinu tubi ffaduinu tubiui	N,N,D,U

N-155B-4	狩俣	mmaduɾinu tubidu ffaːduïnu du bjuː	N,M
N-155B-4	久貝	mmaduᶻ˥nu tubibadu ffaduᶻ˥mai tubᶻ˥ (シテ形 tubis˥̥ 採れず)	N,H,N,M
N-155B-4	与那覇	mmadu˥nu tubitti ffadu˥mai {tub˥taː/ tub˥taɴ}（tub˥taɴ でなく tub˥ta˥ か）	S
N-155B-4	来間	mmaduzn̩u tubittidu ffaduzza {tubzt̩az̩ / tubzt̩a˥}	K,U,D
N-155B-4	宮国	mmaduzdu tubiː ibiːnu tuzgamanu tubipiɾijaː	K,T
N-155B-4	砂川	ujaduᶻ˥nu tuvitti(du) ffaduᶻ˥nu tub˥taᶻ˥	N,I,O
N-155B-4	保良	mmadu˥nu tubittɕi f̩fadu˥nu tubzt̩aː	K,T
N-155B-5	共通語	そこから　飛んで　みろ。	
N-155B-5	池間	umakaɾa tubi miːɾu	N,N,D,U
N-155B-5	狩俣	umaːɾa tubi miːru	N,M
N-155B-5	久貝	umakaɾa tubi miːɾu	N,H,N,M
N-155B-5	与那覇	umakaɾa tubi miːˈɾu	S
N-155B-5	来間	umakaɾa tubi miːɾʊ	K,U,D
N-155B-5	宮国	umakaɾa tu̟bimiɾu	K,T
N-155B-5	砂川	umakaɾa tuvi miːɾu	N,I,O
N-155B-5	保良	umakaɾa tubi miːɾu	K,T
N-156B-1	共通語	みんなで　舟を　漕ぐ。	
N-156B-1	池間	nnaçi fuɲuː kugi	N,N,D,U
N-156B-1	狩俣	nːnaɕi fuɲiu kugi	N,M
N-156B-1	久貝	mːnaɕiː funʲuː kugᶻ˥	N,H,N,M
N-156B-1	与那覇	mːnaɕiː funʲiu kug˥ （funʲiu の iu は曖昧な二重母音）	S
N-156B-1	来間	haːɾiːnu f̩nʲuːbaː muzt̩uɕiːdu kudz˥ / ＜cf.＞ muzt̩uɕiː fnʲuː kuge (皆で舟を漕げ)	K,U,D
N-156B-1	宮国	mːnasi fniu kugi	K,T
N-156B-1	砂川	mn̩ːnaɕiː {funiju / funʲuː} {kuguˢ˥ / kuguᶻ˥}	N,I,O
N-156B-1	保良	mːnaɕi fʊn̩ʲuː kugz̩	K,T
N-156B-2	共通語	誰も　舟を　漕がない。	
N-156B-2	池間	{tarumai / nːna} {fuɲaː kugaɴ / fuɲuːba kugadʑaːɴ}	N,N,D,U
N-156B-2	狩俣	taɾumai fuɲi(ː)ba kugaɴ	N,M
N-156B-2	久貝	taːmai funʲuːbaː kugaŋ	N,H,N,M
N-156B-2	与那覇	toːmai funʲiubaː kugaɴ	S
N-156B-2	来間	toːmeː fnʲuːbaː ku̟gaŋ	K,U,D
N-156B-2	宮国	toːmai fniubaː kugaŋ	K,T

N-156B-2	砂川	taɾuːmai funʲuː kugaŋ̩	N,I,O
N-156B-2	保良	taːmai fʊn̩ʲuːbaː kugaŋ̩	K,T
N-156B-3	共通語	昔は　よく　舟を　漕いだ。	
N-156B-3	池間	ŋkjaːnna juːdu fuɲuːba kugitai	N,N,D,U
N-156B-3	狩俣	ŋkjaːnna juːdu fuɲuːba kuːdaï	N,M
N-156B-3	久貝	ŋkʲaːnna juːdu funʲuː kugᶻɹtaː	N,H,N,M
N-156B-3	与那覇	ŋkʲaːnna juːdu funʲiubaː kugɹtaː	S
N-156B-3	来間	ŋkʲaːnna fnʲuːbaː juːdu kudztaɹ	K,U,D
N-156B-3	宮国	ŋkjaːnna uɾusi̥ku fniubaː kugiuta	K,T
N-156B-3	砂川	ŋ̩kʲaːn̩na juːdu funʲuː kugᶻɹtaᶻɹ	N,I,O
N-156B-3	保良	ŋkʲanna jaudu f̩nʲuː kugzta:	K,T
N-156B-4	共通語	舟を　漕いで、そのあと　休め。	
N-156B-4	池間	fuɲaː kugittikaɾa jukui	N,N,D,U
N-156B-4	狩俣	fuɲuː kugidu atuɲi jukoːdai	N,M
N-156B-4	久貝	funʲuː kugittikaɾa jukui	N,H,N,M
N-156B-4	与那覇	funʲaː kugitti: uɾiga atuɴ jukui（funʲaːは「舟は」）	S
N-156B-4	来間	fnʲuː kugitti unu atu̩ːbaː jukui	K,U,D
N-156B-4	宮国	fnia {kugicci / kugiccjaː} unuatoː bugaɾikaiba jukui	K,T
N-156B-4	砂川	funʲuː kugittikaɾa jukui	N,I,O
N-156B-4	保良	f̩nʲaː kugittɕi unu atuŋ̩ jukui	K,T
N-156B-5	共通語	一人で　舟を　漕いできた。	
N-156B-5	池間	{taʊkaːçiː / tavkaːçiː} fuɲaː {kugiːfiːɾu（漕いでくれ）/ kugittai（漕いだ）}	N,N,D,U
N-156B-5	狩俣	taʊkjaːɕidu fuɲuː kugikiɕi	N,M
N-156B-5	久貝	tḁfkʲaːɕidu funʲuː kugikˢɹ̥taː	N,H,N,M
N-156B-5	与那覇	tɔʊkʲaːɕiːdu funʲaː kugɹdu sɹ̥taː（funʲaːは「舟は」）	S
N-156B-5	来間	{tḁfkʲaːɕiːdu / tḁfkʲaːɕiːdʊ} fnʲuː kugitsta:	K,U,D
N-156B-5	宮国	taʊkjaːsidu fniu kugiksta:	K,T
N-156B-5	砂川	tavkʲaːɕidu {funiju / funʲuː} {kugiᵏstaɹ / kugᶻiᵏstaɹ}	N,I,O
N-156B-5	保良	taʊkʲaːɕidu f̩nʲuː kugiksta:	K,T
N-157-1	共通語	毎日　海へ　行く。	
N-157-1	池間	juiçiː iŋkai ifu	N,N,D,U
N-157-1	狩俣	maiɲitsï iŋgai ifu	N,M
N-157-1	久貝	mainitsɹ imkai ikˢɹ	N,H,N,M

N-157-1	与那覇	mainʲitsɿdu imkai ikˢɿ（強調して maːinʲitsɿdu とも発音される）	S
N-157-1	来間	maiːnʲits imˌkeːdu {its / itsɿ}	K,U,D
N-157-1	宮国	maiːnicï imkai ikʒgamata	K,T
N-157-1	砂川	{itsɿːmai / mainitsɿ} imˌkai {ikˢɿ / ikɿs}	N,I,O
N-157-1	保良	maiːnʲitsɿ imˌkai {iksˌ / pizˌ}	K,T
N-157-2	共通語	父は　天気が　悪いから　海へは　行かない。	
N-157-2	池間	（otoːɰa）　kjuːja teŋkinu baikaiba iŋkaija ikaɴ	N,N,D,U
N-157-2	狩俣	ujaː ɰaːtsïkinu basï̥kaɾiba iŋgaija ikaɴ	N,M
N-157-2	久貝	ᶻɿzaː ʋaːtsɿkˢɿ javviːdu imkaija ikaŋ　＊但し N-165-3 で「父」は aːʥa というと言い替えた。ᶻɿzaː → aːʥaː	N,H,N,M
N-157-2	与那覇	ʋjaˡː waːtsɿkɿnu baᶻɿkaɾibadu imkaija ikaɴ	S
N-157-2	来間	ujaː ʋaːtstsɿ̥nu bazˌkaɾiba imˌkeːja ikaŋ	K,U,D
N-157-2	宮国	ujaː {ciŋkzga / ciŋkɿga} bazkaiba imkaija ikazjaŋ	K,T
N-157-2	砂川	ujaː waːᵗskɿnu baᶻɿkaɾiba imˌkaija ikaŋˌ	N,I,O
N-157-2	保良	ujaː waːtsˌkˢɿnu bazˌkaɾiba imˌkaija ikaŋ	K,T
N-157-3	共通語	昨日も　海へ　行った。	
N-157-3	池間	fu̥nuː iŋkai ifu̥tai	N,N,D,U
N-157-3	狩俣	kinumaidu iŋgai {ifu̥tai / iftai}	N,M
N-157-3	久貝	kˢɿnumai imkai pi̥ˑtaː	N,H,N,M
N-157-3	与那覇	kɿnumaidu imkai ikˢɿ̥taː	S
N-157-3	来間	tsnumeː ʋaːtstsɿ̥nu bazˌkaɾiba imkeː itstaɿ ‖ tsnoː ʋaːtstsɿ̥nu bazˌkaɾibadʊ imˌkeː itstaɿ	K,U,D
N-157-3	宮国	kïnuːmai imkai ikstaː	K,T
N-157-3	砂川	ᵏsɿnuːmai imˌkai {iksɿtaᶻɿ / ikstaː}（ks はほぼ同時調音、以下同様）	N,I,O
N-157-3	保良	tsɿnuːmai imˌkai {iksˌtaː / pizˌtaː}	K,T
N-157-4	共通語	海へ　行って、泳いで　きた。	
N-157-4	池間	iɲɲi ikiː uːgittai	N,N,D,U
N-157-4	狩俣	iŋgai ikidu uigi {fu̥tai / ftai}	N,M
N-157-4	久貝	imkai ikiːdu uːgi kˢɿ̥taː　＊シテ形採れず	N,H,N,M
N-157-4	与那覇	im ikidu ʋːgitti kɿ̥sɿ (ikidu はアリ中止。im ikittiː ʋːgidu kɿ̥sɿ はどうかと聞き返したら OK が出た。但し話者はこの例文を発話していない）	S
N-157-4	来間	imkeː {ikiːdu / iki̥ttidʊ} uːgi tstaɿ	K,U,D

N-157-4	宮国	{imkai / immikidu} ikiccie̯ uːgʒːtaː	K,T
N-157-4	砂川	imkai ikitti uːgi {ksɤtaː / kstaɤ}	N,I,O
N-157-4	保良	imkai ikittɕidu uːgi ksta̯ː	K,T
N-157-5	共通語	海へは　一人で　行って　こい。	
N-157-5	池間	iŋkaija {taʊ̈kaː / taʊkaː} {ikiː / iki̯ː ku̯ː}（ʊ̈ は後舌（中舌寄り）狭（半狭寄り）母音。ʊ は唇歯接近音）	N,N,D,U
N-157-5	狩俣	iŋgaija taʊkjaːɕi iki kuː	N,M
N-157-5	久貝	imkai ta̯fkeːɕiː iki kuː	N,H,N,M
N-157-5	与那覇	imkaija taʊkʲaːɕiː {ikitti kuː / iki fugʲaːnna}（ikitti はシテ中止、後者 iki fugʲaːnna 「行ってくれないか」の iki がアリ中止）	S
N-157-5	来間	imkeːja ta̯fkʲaːɕiː {iki̯tti kuː / iki̯kuː}	K,U,D
N-157-5	宮国	imkaija taʊkjaː iki̯ kuː	K,T
N-157-5	砂川	imkaija tavkʲaːɕiː ikikuː	N,I,O
N-157-5	保良	imkaija taʊkʲaːɕi iki̯ kuː	K,T
N-158-1	共通語	今日は　父が　家に　来る。	
N-158-1	池間	kjuːja ᶻïzagadu jaːŋkai fuː	N,N,D,U
N-158-1	狩俣	kjuːja ujaːdu jaːju ffu	N,M
N-158-1	久貝	kʲuːja ᶻɤzanudu jaːŋkai {kˢɤ̯ɤ̯ / ksː}	N,H,N,M
N-158-1	与那覇	kʲuːja ʊjagadu jaːŋkai kɤ̯ɤ̯	S
N-158-1	来間	kʲuːja ujagadu jaːŋkeː mmʲaɤ / mmʲaᶻɤ （いらっしゃる）<cf.> dusnudu jaːŋkeː ɕsɤ （友が家に来る）	K,U,D
N-158-1	宮国	kjuːja ujagadu jaːŋkai kïː	K,T
N-158-1	砂川	kʲuːja ujagadu jaːŋkai {ksɤː / ksᶻɤː} (mmʲaᶻɤ いらっしゃる(敬語))	N,I,O
N-158-1	保良	kʲuːja ujagadu jaːŋkai kˢɤː	K,T
N-158-2	共通語	今日は　母は　来ない。	
N-158-2	池間	kjuːja mmagadu kuːɴ	N,N,D,U
N-158-2	狩俣	kjuːja annaː {kuːɴ / fuːɴ}	N,M
N-158-2	久貝	kʲuːja aneː kuːŋ	N,H,N,M
N-158-2	与那覇	kʲuːja annaː kuːɴ	S
N-158-2	来間	kʲuːja annaː kuːŋ	K,U,D
N-158-2	宮国	kjuːja annaː kuːŋ	K,T
N-158-2	砂川	kʲuːja anna̯ː kuːŋ	N,I,O
N-158-2	保良	kʲuːja annaː kuːŋ	K,T
N-158-3	共通語	昨日　父が　家に　来た。	

N-158-3	池間	{fu̥nuː/nn̥uː} ᶻïzaɡa jaːŋkai {ttai / t'ai}	N,N,D,U
N-158-3	狩俣	kinudu ujaː jai kiɕi	N,M
N-158-3	久貝	kˢʳnoː ᶻʳzanudu jaːŋkai kˢʳt̥taː	N,H,N,M
N-158-3	与那覇	kɹnaː ʊjaɡadu {jaːŋkeː / jaːŋkai} kɹ̥ɾt̥taː	S
N-158-3	来間	ʦnoː ujaɡadu jaːŋkeː mmʲaɹtaɹ （いらっしゃった） / {ʦstaɹ / ʦtaɹ}（来た）	K,U,D
N-158-3	宮国	kïnuːdu ujaɡa jaːŋkai kïːtaː	K,T
N-158-3	砂川	ksɹnuː ujaː jaːŋ̍kai {ksɹtaː / ksɹtaᶻʳ}	N,I,O
N-158-3	保良	ʦɹnuː ujaɡadu jaːŋ̍kai ks̍taː	K,T
N-158-4	共通語	こっちへ　来て、家に　戻った。	
N-158-4	池間	kumattikaɾa jaːŋkai muduitai	N,N,D,U
N-158-4	狩俣	umai {kiɕidu / kiɕi̥ɕidu} jai muduta	N,M
N-158-4	久貝	kumaŋkai {kˢʳt̥ɕittikaɾa / kit̥ɕittikaɾa} jaːŋkai pit̥taː	N,H,N,M
N-158-4	与那覇	kumaŋkai kɹ̥ɕit̥tidu jaːŋkai piːtaː	S
N-158-4	来間	kumaŋkeː ʦit̥ɕittidu jaːŋkeː {piɹtaɹ / piᶻʳtaɹ}	K,U,D
N-158-4	宮国	kumaŋkai kis̥iccidu jaːŋkai muduɹtaː	K,T
N-158-4	砂川	kumaŋ̍kai kiɕit̥tidu jaːŋ̍kai muduɾi piᶻʳtaᶻʳ (戻って行った)	N,I,O
N-158-4	保良	kumaŋkai kit̥ɕittʦidu jaːŋkai piz̍taː	K,T
N-158-5	共通語	こっちへ　早く　来い。	
N-158-5	池間	kumaŋkai hajamaɾi kuː	N,N,D,U
N-158-5	狩俣	umai haːɾi kuː	N,M
N-158-5	久貝	umaŋkai peːpeːtiː kuː	N,H,N,M
N-158-5	与那覇	kumaŋkai pʲaːkai kuː	S
N-158-5	来間	kumaŋkeː pʲaːkaɾi kuː	K,U,D
N-158-5	宮国	kumaŋkai pjaːpjaː kuː	K,T
N-158-5	砂川	kumaŋ̍kai pʲaːpʲaːti kuː	N,I,O
N-158-5	保良	kumaŋ̍kai pʲaːkaɾi kuː	K,T
N-158-5	共通語	こっちへ　来て　みろ。	
N-158-5	池間	umatti miːɾu	N,N,D,U
N-158-5	狩俣	{umai / umaːi} kiɕi miːɾu	N,M
N-158-5	久貝	umaŋkai {kˢʳt̥ɕi / kit̥ɕi} miːɾu	N,H,N,M
N-158-5	与那覇	kumaŋkai kɹ̥ɕi miːˌɾu	S
N-158-5	来間	kumaŋkeː {ʦit̥ɕit̥miːɾʊ / ʦit̥ɕi̥miːɾo}	K,U,D
N-158-5	宮国	kumaŋkai kis̥i miɾu	K,T

N-158-5	砂川	kumaŋ̩kai {ki̥ɕi / kiɕi} miːɾu	N,I,O
N-158-5	保良	kumaŋ̩kai ki̥ɕi miːɾu	K,T
N-159-1	共通語	2 月は　よく　雨が　降る。	
N-159-1	池間	{fuːʥïʦïnna / fuːʥïʦïnda} juːdu {aminu / amjaː} fuː	N,N,D,U
N-159-1	狩俣	ɲigaʦunna juːdu aminu {ffu/fuː}	N,M
N-159-1	久貝	nigatʦa juːdu aminu fuᶻɿ	N,H,N,M
N-159-1	与那覇	nʲigatʦa juːdu aminu ffɿ̥	S
N-159-1	来間	nʲigaʦɿ̥nna aminudu juː ffʊ̩	K,U,D
N-159-1	宮国	nigacunna unusï̥kˢu aminu fuɿ	K,T
N-159-1	砂川	nigatʦa juːdu aminu fuᶻɿ	N,I,O
N-159-1	保良	nʲigaʦaː juːdu aminu fʊ̩z̩	K,T
N-159-2	共通語	明日は　雨は　降らない。	
N-159-2	池間	aʨaː amjaː ffaɴ	N,N,D,U
N-159-2	狩俣	aʨaː amjaː ffaɴ	N,M
N-159-2	久貝	aʦaː ameː fuɾaŋ	N,H,N,M
N-159-2	与那覇	aʦuː amʲaː ffaɴ（aʦuːは「明日」(Ø 格)か）	S
N-159-2	来間	aʨaː amʲaː f̩faŋ	K,U,D
N-159-2	宮国	acʲaː amjaː ffaŋ	K,T
N-159-2	砂川	aʦaː amʲaː ffaŋ̩	N,I,O
N-159-2	保良	ataː amʲaː f̩faŋ̩	K,T
N-159-3	共通語	昨日は　雨が　降った。	
N-159-3	池間	nnuː amjaː fuːtai	N,N,D,U
N-159-3	狩俣	kinoː aminudu {ffi / fu̥fi}	N,M
N-159-3	久貝	kˢɿnoː aminudu fuᶻɿtaː	N,H,N,M
N-159-3	与那覇	kɿnaː aminudu ffu̥ttaː	S
N-159-3	来間	ʦɿnoː aminudu f̩f̩taɿ	K,U,D
N-159-3	宮国	kïnuːja aminudu fuztaː	K,T
N-159-3	砂川	ksɿnuːja aminudu {fᶻɿtaᶻɿ / fᶻɿtaː}	N,I,O
N-159-3	保良	ʦɿnuːja aminudu fʊ̩z̩taː	K,T
N-159-4	共通語	大雨が　降って、日照りが　続いている。	
N-159-4	池間	gabaː aminu ffiː ntanu（土が） kaːkijui（乾いている）	N,N,D,U
N-159-4	狩俣	upu aminudu fiɕite pjaːinu ʦïʥïkiːjuɴ	N,M
N-159-4	久貝	{abᶻɿza’ami / abᶻɿzaːmi} fuɾiːdu pʲaːᶻɿnu ʦɿʥɿkʲuː（ ’ は切れ目（ヒアートゥス）の意）	N,H,N,M

N-159-4	与那覇	upu aminudu ffitti pʲaɾnu ʦuzukiu（ʦuzukiu の iu は曖昧な二重母音。ʦuzukʲuː のようにも聞こえる）	S
N-159-4	来間	upuaminu ffi̥ttidʊ pʲaːɾinu ʦuːkaɾ ＜cf.＞ pʲaːɾinu {ʦɾ̥ʤɾkʲuː / ʦɾʤɾkʲuː} (日照が強い)	K,U,D
N-159-4	宮国	up.aminu ficcidu waːci̥kinu cuzukiu	K,T
N-159-4	砂川	upuː aminu ffitti(du) atoː pʲaːᶻɾ ʦʤɾki uz (日照りが続いている)	N,I,O
N-159-4	保良	upuaminu f̩fitʦidu pʲaːɾinu ʦɾʤɾkʲuː	K,T
N-159-5	共通語	いま　雨が　降っている。	
N-159-5	池間	nːnama aminu ffjuːui	N,N,D,U
N-159-5	狩俣	nnamaː aminudu {fjuː / ffjuː}	N,M
N-159-5	久貝	nnamaː aminudu fuɾʲuː	N,H,N,M
N-159-5	与那覇	nnamadu aminu ffiuː（ffiuː の iu は曖昧な二重母音。ffʲuːのようにも聞こえる）	S
N-159-5	来間	n̩namaː aminudu {f̩fʲuːɾ / f̩fʲuːᶻɾ}	K,U,D
N-159-5	宮国	nnama aminu fjuː	K,T
N-159-5	砂川	namaː aminudu {ffiuᶻɾ / fʲuːᶻɾ}	N,I,O
N-159-5	保良	n̩namadu aminu f̩fʲuː	K,T
N-159-5	共通語	雨が　降って　きた。	
N-159-5	池間	aminu ffiː fuːdoː	N,N,D,U
N-159-5	狩俣	aminudu ffi ki̥ɕi	N,M
N-159-5	久貝	aminudu　fuɾi {kˢɾ̥ː / ksː}	N,H,N,M
N-159-5	与那覇	aminudu ffi kɾ̥ˢɾ	S
N-159-5	来間	aminudu ffi̥ ʦi̥ɕuːɾ （降ってきている）	K,U,D
N-159-5	宮国	aminudu ffikʒ	K,T
N-159-5	砂川	aminudu ffi ksɾː	N,I,O
N-159-5	保良	aminu f̩fiː kˢɾː	K,T
N-160-1	共通語	みんな　ここで　降りる。	
N-160-1	池間	nːnanai umakaɾa uɾiɾu	N,N,D,U
N-160-1	狩俣	nːna umandu uɾiui （uɾipaᶻɨ 降りるはず。uɾaɕi 降ろせ）	N,M
N-160-1	久貝	mːna umaŋ uɾiᶻɾ	N,H,N,M
N-160-1	与那覇	mːna kumaɴ uɾiɾu （uɾiɾu は命令形か）	S
N-160-1	来間	muːz̩tu kumaŋkeː uɾiɽ ‖ muːᶻɽtʊ kumaŋkeː uɾiᶻɽ	K,U,D
N-160-1	宮国	mːna {kumau / kumaŋkai} uɾiɾu	K,T

N-160-1	砂川	m̩ːna kuman̩ uɾittɕaː（おりるよ；意志。断定採れず）	N,I,O
N-160-1	保良	m̩ːna umanḍu uɾi	K,T
N-160-2	共通語	私は　ここでは　降りない。	
N-160-2	池間	baː umanna uɾidʑaːɴ	N,N,D,U
N-160-2	狩俣	baː umanna uɾidaɾaɴ （「降りられない」か？）	N,M
N-160-2	久貝	bajaː umanna uɾiŋ	N,H,N,M
N-160-2	与那覇	bajaː kumanna {uɾudʲaɴ / uᶻʔdʑaɴ}	S
N-160-2	来間	abaː kumaŋkeː {uɾuŋ / uɾɯŋ / uɾudʑaːŋ}	K,U,D
N-160-2	宮国	bajaː kumaŋkaija uɾuzjaːŋ	K,T
N-160-2	砂川	bajaː kumaṇna ʊɾu {ɾʲaŋ̩ / dʲaŋ̩}	N,I,O
N-160-2	保良	bajaː umaṇna uɾuŋ̩	K,T
N-160-3	共通語	ここで　バスを　降りた。	
N-160-3	池間	umandu basukaɾa uɾitai	N,N,D,U
N-160-3	狩俣	uma uɾidu bassudu uɾitai （uɾidu の uɾi はよく分からない）	N,M
N-160-3	久貝	umandu basː uɾitaː	N,H,N,M
N-160-3	与那覇	kumandu {bassu / basukaɾa} uɾitaː（basukaɾa は「バスから」に対応）	S
N-160-3	来間	kumaŋkeːdu bassa {uɾitaz̩ / uɾitaʔ}	K,U,D
N-160-3	宮国	kumaŋkaidu {bassu / basu̥kaɾa} uɾitaː	K,T
N-160-3	砂川	kumaṇdu bassuː {uɾitaː/uɾitaᶻʔ}	N,I,O
N-160-3	保良	umaṇdu basṣu uɾitaː	K,T
N-160-4	共通語	バスを　降りて、電話　かけろ。	
N-160-4	池間	basukaɾa uɾiː denɥau jaːŋkai kakiɾu	N,N,D,U
N-160-4	狩俣	bassu uɾiɕi̥ti deˀɥau aɕi kuː	N,M
N-160-4	久貝	bas uɾitti demʊoː kḁkiɾu	N,H,N,M
N-160-4	与那覇	basu̥pa uɾitti demʊɔː kakiɾu	S
N-160-4	来間	baskara uɾittidu demʊao kḁkiɾu	K,U,D
N-160-4	宮国	basu̥kaɾa uɾitte̞ deũwau kḁkiɾu	K,T
N-160-4	砂川	bassu uɾitti demwaubaː kḁkiɾu	N,I,O
N-160-4	保良	basaː uɾittɕi demʊau kḁkiɾu	K,T
N-160-5	共通語	妹が　バスから　降りて　きた。	
N-160-5	池間	uttunu midunnu basukaɾa uɾittɕuːi	N,N,D,U
N-160-5	狩俣	utudunudu basukaɾa uɾi ki̥ɕi	N,M
N-160-5	久貝	ututunudu basː uɾi ksː	N,H,N,M

N-160-5	与那覇	bunaɿnudu basu̥kaɾa uɾi kɿ̥sɿ̥	S
N-160-5	来間	utu̥tu̥nudu baskaɾa uɾi {ʦtaɿ / ʦsṭaɿ}	K,U,D
N-160-5	宮国	utu̥tu basu̥kaɾa uɾi kï̥taː	K,T
N-160-5	砂川	aŋgaga (姉が) basu̥kaɾa {uɾiksṭaᶻɿ / uɾiksɿtaᶻɿ}	N,I,O
N-160-5	保良	utu̥tunudu baskaɾa uɾi ksṭaː	K,T
N-161-1	共通語	猿も　木から　落ちる。	
N-161-1	池間	saɾumai kiːkaɾa utiːjui	N,N,D,U
N-161-1	狩俣	saɾumai kiːgaɾadu {utidu / utɕi}	N,M
N-161-1	久貝	saɾumai kiːkaɾa utiᶻɿ	N,H,N,M
N-161-1	与那覇	iʦuːmaidu kiːkaɾa utiː（「(枝が弱いから)いつも木から落ちる」）	S
N-161-1	来間	saɾumeː kiːkaɾa {utidus / utidusɿ̥}（落ちぞする）＜cf.＞ antɕiː itadʑɿraɕuːkaː umakaɾa uti̥mdoː（そんないたずらをしているとそこから落ちるぞ）	K,U,D
N-161-1	宮国	saɾumai kiːkaɾa uci	K,T
N-161-1	砂川	saɾuːmai kiːkaɾa utidu {sɿː / sɿᶻɿ}（utiᶻɿ では言いにくいとのこと。sɿːは僅かに摩擦を伴うことあり）	N,I,O
N-161-1	保良	saɾumai kiːkaɾa utɕi	K,T
N-161-2	共通語	木を　揺らしても　実（蜜柑）は　落ちない。	
N-161-2	池間	kiː juɾugaɕimmai kiːnunaija dʑïːŋkaija utiɴ	N,N,D,U
N-161-2	狩俣	kiːju juɾugaɕɕaːmai nːtaː utiɴ	N,M
N-161-2	久貝	kiːju juɾaɕiːmmai naᶻɿza utiŋ	N,H,N,M
N-161-2	与那覇	kiːju juɾugaɕaːmai funʲizza utuɴ	S
N-161-2	来間	kiːju juɾugaɕaːmeː mikanna utu̥ŋ	K,U,D
N-161-2	宮国	kiːu juɾugasibam mikanna utuŋ	K,T
N-161-2	砂川	kiːju ujukasabaŋ̩ nazᶻɿa utuŋ̩	N,I,O
N-161-2	保良	kiːju jaɾasaːmai nazza̩ utuŋ̩	K,T
N-161-3	共通語	兄が　木から　落ちた。	
N-161-3	池間	sudʑanu kiːkaɾa sandʑaɾi ɲaːɴ （kaːɾanu utitai 瓦が落ちた）	N,N,D,U
N-161-3	狩俣	addʑaː (兄は) kiːgaɾa uti ‖ addʑandu (兄が) kiːgaɾa utɕi	N,M
N-161-3	久貝	sudʑanudu kiːkaɾa utitaː	N,H,N,M
N-161-3	与那覇	azagadu kiːkaɾa utitaː	S
N-161-3	来間	adʑaŋadu kiːkaɾa {uti̥ / utiː / uti̥taz̩}	K,U,D
N-161-3	宮国	azʲaga kiːkaɾa uci̥taː	K,T
N-161-3	砂川	azagadu kiːkaɾa {utitaᶻɿ / utitaː}	N,I,O

N-161-3	保良	adʑagadu kiːkaɾa utɕi̥taː	K,T
N-161-4	共通語	兄は　木から　落ちて、今は　病院に　いる。	
N-161-4	池間	sudʑaga kiːkaɾa sandʑaɾiːti nnama iɕanujaːn uɾiui	N,N,D,U
N-161-4	狩俣	addʑa kiːgaɾa utidu nnama bjoːindu uᶻï	N,M
N-161-4	久貝	sudʑaː kiːkaɾa uti̥tidu nnamaː bʲoːiŋ uː	N,H,N,M
N-161-4	与那覇	azaː kiːkaɾa utɕittidu nnamaː bʲoːiɴ· uา（uา の า は噪音弱い）	S
N-161-4	来間	adʑaŋadu kiːkaɾa uti̥tti pḁttɕu jamaɕi̥tti bʲoːiŋkeː piztaา	K,U,D
N-161-4	宮国	azaː kiːkaɾa ucïccidu nnamaː bjoːindu uː	K,T
N-161-4	砂川	azaː kiːkaɾa utittidu namaː bʲoːiŋ̩ uᶻา	N,I,O
N-161-4	保良	adʑaː kiːkaɾa utɕittɕidu nnamaː bʲoːin uː	K,T
N-161-5	共通語	雨は　天から　落ちて　くる。	
N-161-5	池間	ami tiŋkaɾa utiː fuː	N,N,D,U
N-161-5	狩俣	amjaː tiŋgaɾadu utɕiː kuː	N,M
N-161-5	久貝	ameː tiŋkaɾadu uti ksː	N,H,N,M
N-161-5	与那覇	amʲaa tiŋkaɾadu uti kา̥ɾา̥	S
N-161-5	来間	amʲaː {tiŋkaɾadu / tiŋkaɾadʊ} {ffi̥tsɻ / utitsɻ}	K,U,D
N-161-5	宮国	amjaː ciŋkaɾa uci̥kuː	K,T
N-161-5	砂川	amʲaː təŋ̩kaɾadu utiksᶻา	N,I,O
N-161-5	保良	amʲaː tɕiŋkaɾadu utɕi kʿาː	K,T
N-162-1	共通語	猿が　木の実を　落とす。	
N-162-1	池間	saɾu kiːnunai utaçiːjui	N,N,D,U
N-162-1	狩俣	saɾunudu kiːnu nːtau {utasï̥ː / utasɻ}	N,M
N-162-1	久貝	saɾunudu kiːnu naᶻาzubaː utasา̥	N,H,N,M
N-162-1	与那覇	saɾunudu kiːnu nazzu utusา̥	S
N-162-1	来間	saɾunudu kiːŋkeː nuːɾiː iki （木にのぼっていって） kiːnu {nazzu / nazzʊ} utu̥sา	K,U,D
N-162-1	宮国	saɾuga kiːnu nazzu utu̥su	K,T
N-162-1	砂川	saɾua kiːnu {nazᶻาɯ / nazᶻาu} utusา	N,I,O
N-162-1	保良	saɾunudu kiːnu nazzu {utu̥s / utusา}	K,T
N-162-2	共通語	この　猿は　木の実を　落とさない。	
N-162-2	池間	kunu saɾuː kiːnunaijuːba utahaɴ	N,N,D,U
N-162-2	狩俣	kunu {saɾoː / saɾᵘo} kiːnu nːtau utasaɴ	N,M
N-162-2	久貝	kunu saɾoː kiːnu naᶻาzubaː utasaŋ	N,H,N,M
N-162-2	与那覇	kunu saɾaː kiːnu naᶻาubaː utusaɴ	S

N-162-2	来間	kuɾu saɾoː kiːnu nazzubaː utu̥saŋ	K,U,D
N-162-2	宮国	kunu saɾoː kiːnu miːubaː utu̥saŋ	K,T
N-162-2	砂川	kunu saɾua kiːnu nazᶻɿbaː utusaŋ̩	N,I,O
N-162-2	保良	kunu saɾaː kiːnu naz̩zubaː utusaŋ	K,T
N-162-3	共通語	昨日　井戸に　石を　落とした。	
N-162-3	池間	nnu kaːŋkai issï utaɕitai	N,N,D,U
N-162-3	狩俣	kinuːndu kaːi issu utaɕitai	N,M
N-162-3	久貝	kˢɿnuː kaːŋkai issu utastaː	N,H,N,M
N-162-3	与那覇	kɿnuːdu issu kaːŋkai utusɿ̥taː（「昨日石を井戸に落とした」の意)	S
N-162-3	来間	ʦnoː issudu kaːŋkeː {utu̥staz̩ / utu̥staɿ}	K,U,D
N-162-3	宮国	kunu kaːŋkai issu utu̥staː	K,T
N-162-3	砂川	ksɿnuː kaːŋ̩kai issuː {utus̩taᶻɿ / utus̩taˑ}	N,I,O
N-162-3	保良	ʦɿnuːdu ʦɿːgʲaːŋkai issu utu̥staː	K,T
N-162-4	共通語	帽子を　落として、取りに　行った。	
N-162-4	池間	kavvimunu ʥïːŋkai utaçi tuiɡa ikitai	N,N,D,U
N-162-4	狩俣	boːɕiu utaɕidu tuiɡa iki	N,M
N-162-4	久貝	boːɕuː utaɕi̥tidu tuᶻɿɡa ikˢɿ̥taː	N,H,N,M
N-162-4	与那覇	boːɕaː utuɕittidu tuᶻɿɡa ikˢɿtaː（boːɕaːは「帽子は」か）	S
N-162-4	来間	boːɕuː utu̥ɕi̥tidʊ tuz̩ɡa {ikʲuːtaz / ikʲuːtaɿ}	K,U,D
N-162-4	宮国	boːsjuː utu̥si̥ttˢi tuɿɡa ikɿ̥taː	K,T
N-162-4	砂川	boːɕuː utuɕitti tuᶻɿɡa iksɿtaᶻɿ	N,I,O
N-162-4	保良	boːɕuː utu̥ɕi̥ʦidu tuz̩ɡa ikʲuːtaː （行っていた）	K,T
N-162-5	共通語	木に　登って　実を　落として　くれ。	
N-162-5	池間	kiːnu hanaŋkai nuːɾiː naimunun utaçi fiːɾu	N,N,D,U
N-162-5	狩俣	kiːŋɡai nuːɾi nːtau utaɕi {fiːɾu / fiɾu}	N,M
N-162-5	久貝	kiːŋkai nuːɾi ikiː naᶻɿzu u tḁɕi fiːɾu	N,H,N,M
N-162-5	与那覇	kiːŋkai nuːɾiː nazzu utuɕi ffiɾu	S
N-162-5	来間	kiːn naɾʲuːz̩ mikannu tuɾi utu̥ɕi̥ fiːɾu （木に成っているみかんをとっておとしてくれ） ‖ kiːn nuːɾi iki utu̥ɕi̥ fiːɾu （木にのぼっていっておとしてくれ）	K,U,D
N-162-5	宮国	kiːŋkai nu:ɾicci nazzu utu̥si fiːɾu	K,T
N-162-5	砂川	kiːŋ̩kai nuːɾitti {nazᶻɿ / nazᶻɿŋ̩kai} utuɕi ffiɾu	N,I,O
N-162-5	保良	kiːn nuːɾiː naz̩zu utu̥ɕi̥ fiːɾu	K,T
N-163-1	共通語	馬も　人を　蹴る。	

N-163-1	池間	nuːmamai {fi̥tu / ɸi̥tu} uba kiː tausu	N,N,D,U
N-163-1	狩俣	nuːmamai pˢï̥tuudu kiː	N,M
N-163-1	久貝	nuːmamai pstuː kiᶻʅ	N,H,N,M
N-163-1	与那覇	nuːmaːmai pʅ̥tuːˈu {kʅːdusu / kizʅ}	S
N-163-1	来間	nuːmameː psˌtuːdu {kizˌ / kiʅ}	K,U,D
N-163-1	宮国	nuːmamai {pï̥tubaː / pï̥tuː} kiz	K,T
N-163-1	砂川	nuːmamai pstuːbaː {kiᶻʅ / kiᶻʅdu sˢʅ}（utiᶻʅ では言いにくいとのこと。sʅːは僅かに摩擦を伴うことあり）	N,I,O
N-163-1	保良	nuːmamai psˌtuː kizˌ	K,T
N-163-2	共通語	おとなしい　馬は　人を　蹴らない。	
N-163-2	池間	manai nuːmaː fi̥tu uba kiɾaɴ	N,N,D,U
N-163-2	狩俣	nuːmaː pˢï̥tuuba kiɾaɴ	N,M
N-163-2	久貝	nukaːnukanu nuːmaː pstuːbaː kiɾaŋ	N,H,N,M
N-163-2	与那覇	nukaːnu nuːmaː pʅ̥tuːba kiɾaɴ	S
N-163-2	来間	nukaːnu nuːmaː psˌtubaː ki̥ɾaŋˌ	K,U,D
N-163-2	宮国	nukaːnukanu nuːmaː {pï̥tubaː / pï̥tuba} kiɾaŋ	K,T
N-163-2	砂川	nukaːnukanu nuːmaː pʰʅ̥tuːbaː {kʅ̥saŋˌ / kʅsaŋˌ}	N,I,O
N-163-2	保良	manaiːmanainu nuːmaː psˌtuː kiɾaŋˌ	K,T
N-163-3	共通語	昨日　あの　馬は　人を　蹴った。	
N-163-3	池間	nnuː kanu nuːmaː kiːtai	N,N,D,U
N-163-3	狩俣	kinoː kanu nuːmaː pˢï̥tuudu kiɾi （pˢïtu は pstu~pˢu̥tu か？）	N,M
N-163-3	久貝	kˢʅnuː kanu nuːmaː pstuːdu {kiᶻʅ̥taː / kiᶻʅtaː}	N,H,N,M
N-163-3	与那覇	kʅnaː kanu nuːmaː pʅ̥tuːdu kizʅtaː（kʅnaːは「昨日は」）	S
N-163-3	来間	ʦnudu kanu nuːmaː pstuː {kizˌtaz / kizˌtaʅ}	K,U,D
N-163-3	宮国	kïnuː kanu nuːmaː pï̥tuː kiztaː	K,T
N-163-3	砂川	ksnuː kanu nuːmaː psʅtuː kˢʅtaᶻʅ	N,I,O
N-163-3	保良	ʦʅnuːja kanu nuːmaː psˌtu kizˌtaː	K,T
N-163-4	共通語	主（あるじ）を　蹴って、逃げ去った。	
N-163-4	池間	nussu kiɾiː çiŋgiː haɾiːɲaːɴ	N,N,D,U
N-163-4	狩俣	nussïdu kiɾiɕiti piŋgitai	N,M
N-163-4	久貝	nussu kiɾitidu piŋgi pi̥taː	N,H,N,M
N-163-4	与那覇	aɾuʑiba kiɾittidu piŋgi piːtaː	S
N-163-4	来間	nuːmanu nussudu kiɾittidu ‖ nussu ki̥ɾittidʊ piŋgi pizˌtaʅ （うまの主をけってぞにげていった）	K,U,D

N-163-4	宮国	aɾuzzadu kʒɾi piŋgasi piɾasï̥taː	K,T
N-163-4	砂川	nussɿː kiɾittidu piŋ̩gitaː	N,I,O
N-163-4	保良	nus̩su kiɾittɕi piŋ̩gi piz̩taː	K,T
N-163-5	共通語	その　ボールを　ここに　蹴って　くれ。	
N-163-5	池間	unu maːiju kumaŋkai kiɾiː fiːɾu	N,N,D,U
N-163-5	狩俣	unu boːɾu umai kiɾi fiːɾu	N,M
N-163-5	久貝	unu {boːɾuː / boːru'o} umaŋkai kiɾi fiːɾu（ boːru'o は方言ではない）	N,H,N,M
N-163-5	与那覇	unu maːᶻɿu kumaŋkai kiɾi fiɾu	S
N-163-5	来間	unu maːzzʊ （まりを） kiɾi fiːɾʊ ‖ kumaŋke kiɾi jaɾaɕe （けってくれ）＜cf.＞ vvaga kiɾe （おまえがけれ）	K,U,D
N-163-5	宮国	unu maːzzu kumaŋkai kiɾi fiːɾu	K,T
N-163-5	砂川	unu boːruː kumaŋ̩kai kiɾi jaɾaɕi	N,I,O
N-163-5	保良	unu boːɾuː kumaŋkai kiɾi fiːɾu	K,T
N-163B-1	共通語	父が　毎日　ゴミを　捨てる。	
N-163B-1	池間	{ᶻïzaga / zzaga} mainitsi gumiubaː sïtiː	N,N,D,U
N-163B-1	狩俣	ujaː mainitsï gomiu {sïti/sïtidu}（sïtiui 捨てている）	N,M
N-163B-1	久貝	ᶻɿzanudu mainitsɿ gumʲuː stiᶻɿ	N,H,N,M
N-163B-1	与那覇	ujaga maiːnʲitsɿ̥ gumiu sutiᶻɿ	S
N-163B-1	来間	ujaŋadʊ gʊmʲuːbaː mainʲitsɿ {stiɿ/stiz̩}	K,U,D
N-163B-1	宮国	ujagadu maiːnicï gumiu sï̥ciu	K,T
N-163B-1	砂川	ujagadu mainɿtsɿ gumʲuː s̩ti	N,I,O
N-163B-1	保良	ujagadu mainʲitsɿ gumʲuːbaː s̩tɕi	K,T
N-163B-2	共通語	祖母は　古い　着物も　捨てない。	
N-163B-2	池間	obaːja jaɾi dzïm（nu？）mai sïtiɴ	N,N,D,U
N-163B-2	狩俣	obaːja jaɾi kïnnuba sï̥tiɴ	N,M
N-163B-2	久貝	aːmaː fuᶻɿkˢɿnnumai sɿ̥tiŋ	N,H,N,M
N-163B-2	与那覇	mmaː fuɾuːnu kɿnnumai sutuɴ	S
N-163B-2	来間	paːmmaː fʊ̥ɾumiː tsnnumeː stuŋ	K,U,D
N-163B-2	宮国	mmaː fzːfznu kïnnumai sï̥tuŋ	K,T
N-163B-2	砂川	m̩maː fuᶻɿfuᶻɿnu ksn̩numai s̩tuŋ̩	N,I,O
N-163B-2	保良	mmaː fz̩ːfz̩nu tsɿn̩numai s̩tuŋ	K,T
N-163B-3	共通語	古い　道具は　おととい　捨てた。	
N-163B-3	池間	jaɾi daʊgu miːkanai sïtiɴ	N,N,D,U

N-163B-3	狩俣	jaɾi dovva bututuᶻïdu sï̥ti	N,M
N-163B-3	久貝	fuᶻɿ doːʋʋubaː bututuᶻɿdu sɿ̥titaː	N,H,N,M
N-163B-3	与那覇	fuɾuːnu doːɡɿubaː bututuɿdu su̥titaː	S
N-163B-3	来間	fʋ̥ɾufʋ̥naɾiːnu ʦkaːɾuŋ doːvvaː （古くなった使えない道具は）{ʦnudu stitaɿ / buttuz̩du {sti̥taz̩ / sti̥taɿ}}	K,U,D
N-163B-3	宮国	{fzːfznu / fɿːfɿnu} doːɡubaː butu̥tuɿdu sɿ̥titaː	K,T
N-163B-3	砂川	fuᶻɿfuᶻɿnu doːʋ̩baː bututuᶻɿ {s̩titaᶻɿ / stitaː}	N,I,O
N-163B-3	保良	f̩z̩ːf̩z̩nu daːvvubaː butu̥tuz̩ s̩ʨitaː	K,T
N-163B-4	共通語	古い　ものは　捨てて、新しい　ものを　買え。	
N-163B-4	池間	jaɾi munuba sïtiː miː munu kai	N,N,D,U
N-163B-4	狩俣	jaɾi munuba sï̥tiɕiti mːmiː munuː kai	N,M
N-163B-4	久貝	fuᶻɿmunubaː sɿ̥titi meːᶻɿmunuːba kai	N,H,N,M
N-163B-4	与那覇	fuɾuːnu munuːbaː sutittiː aɾaːnu munuː kai	S
N-163B-4	来間	f̩ɾumunuːbaː sti̥tti aɾamunuː keː	K,U,D
N-163B-4	宮国	{fzːfznu / fɿːfɿnu} munuːbaː sï̥cïccï kaɡiːnu munuː kai	K,T
N-163B-4	砂川	fuᶻɿfuᶻɿnu munuubaː stitti mᶻɿːmᶻɿːnu munuː kai	N,I,O
N-163B-4	保良	f̩z̩munuːbaː s̩ʨittʨi mʲaːmʲaːnu munuː kai	K,T
N-163B-5	共通語	ゴミを　そこに　捨てて　くれ。	
N-163B-5	池間	janamunubaː kumaŋkai sï̥tiː kuː（捨てて来い）‖ sï̥tiɾu（捨てろ）	N,N,D,U
N-163B-5	狩俣	ɡumjuːba umai sï̥ti fiːɾu	N,M
N-163B-5	久貝	gumju： umaŋkai sɿ̥ti fiːɾu	N,H,N,M
N-163B-5	与那覇	ɡumiu umaŋkai su̥ti fiɾu	S
N-163B-5	来間	ɡumʲuːbaː umaŋkeː stifiːɾo ＜cf.＞ stiɾo 捨てろ（命令形）	K,U,D
N-163B-5	宮国	ɡumiu umaŋkai {sï̥tiɾu / sï̥tˢi fiːɾu}	K,T
N-163B-5	砂川	ɡumiubaː uman̩ sɿti ffiɾu	N,I,O
N-163B-5	保良	ɡumʲuː umaŋkai sʨi fiːɾu	K,T
N-164-1	共通語	長い　木の　枝を　切る。	
N-164-1	池間	kiːnu judau kiɾi	N,N,D,U
N-164-1	狩俣	naɡa kiːnu idau kiɾi	N,M
N-164-1	久貝	naɡaːnaɡanu kiːnu judoː ki̥ɕi	N,H,N,M
N-164-1	与那覇	naɡaːnu kiːnu judoːdu kɿ̥sɿ̥ （「枝」の Ø 格形式は juda）	S
N-164-1	来間	naɡaːnu kiːnu idoːbaː ʨi̥ɕe (切れ) ‖ baŋa ʦsade (私が切ろう) ‖ bam̩meː ʦs̩tu s̩to (私も切りぞするよ) ‖ kanu pstunudu {ʦs̩ / ʦsɿ̥} (あの人が切る)	K,U,D

N-164-1	宮国	nagaːnu kiːnu itau̥ kï̥si	K,T
N-164-1	砂川	nagaːnaganu kiːnu judau ksᶻɿ	N,I,O
N-164-1	保良	nagaːnaganu kiːnu judau kˢɿː	K,T
N-164-2	共通語	夜には　爪を　切らない。	
N-164-2	池間	junakaː ʦïmjuba kiɾaɴ	N,N,D,U
N-164-2	狩俣	juːnanna ʦïmiuba kï̥saɴ	N,M
N-164-2	久貝	juneːnna ʦɿmiːubaː kˢɿ̥saŋ	N,H,N,M
N-164-2	与那覇	junainna ʦumiuba kɿsaɴ	S
N-164-2	来間	juneːja （夜は） ʦmʲuːbaː ʦsaŋ	K,U,D
N-164-2	宮国	junainna cumiu̥baː kï̥saŋ	K,T
N-164-2	砂川	junaija ffaffunaɾiːkaɾaja ʦɿ̥mijubaː {kɿ̥saŋ̩ / kɿsaŋ̩}	N,I,O
N-164-2	保良	junainna ʦɿmʲuːbaː ksˌsaŋ	K,T
N-164-3	共通語	私が　ガジマルは　切った。	
N-164-3	池間	bagadu gadʑimaɾunu kiːja kiɾitaidoː	N,N,D,U
N-164-3	狩俣	baːdu gadʑimaɾudu kiːsï̥ta	N,M
N-164-3	久貝	baːdu gadʑamagiːjubaː kˢɿ̥taː	N,H,N,M
N-164-3	与那覇	bagadu gazɿmagiːuba kɿ̥sɿ̥taː	S
N-164-3	来間	bagadu gadʑimaɾukiːju {ʦsˌtaɿ / ʦsˌtaz̩}	K,U,D
N-164-3	宮国	baga gazimaɾubaː kïːtaː	K,T
N-164-3	砂川	bagadu gadʑimaɾubaː {kstaᶻɿ / ksɿːtaᶻɿ}	N,I,O
N-164-3	保良	bagadu gadʑɿmagiːjubaː ksˌsˌtaː	K,T
N-164-4	共通語	その　長い　髪は　切って、お祝いに　行けよ。	
N-164-4	池間	kunu nagai kaɾadʑïː（ba？） kiɾiː juːïŋkai ikijaː	N,N,D,U
N-164-4	狩俣	unu naga kaɾatʦuba kiɕi̥ɕiti joːiŋgai ikijo	N,M
N-164-4	久貝	unu nagagaɾadʑɿba ki̥ɕitti joːᶻɿfoːga iki	N,H,N,M
N-164-4	与那覇	unu naga kaɾazzuba kɿ̥ɕitti jɔːɿŋkai iki	S
N-164-4	来間	nagakaɾaᵈdʑubaː {fˌfaɕi̥tti / ʦi̥ɕitti} joːɿŋkeːja iki	K,U,D
N-164-4	宮国	unu nagaːnu kaɾazziubaː kï̥sïtte̥ joːɿŋkaija ikˢi	K,T
N-164-4	砂川	unu nagaːnaganu kaɾatʦˢɿbaː {ki̥ɕɕiti / kiɕɕiti} joːᶻɿŋˌkai(ja) iki joː	N,I,O
N-164-4	保良	unu nagakaɾaddʑubaː ki̥ɕittɕi jaːzˌŋkai piɾijo	K,T
N-164-5	共通語	この　紐を　三つに　切って　くれないか。	
N-164-5	池間	kunu boː（棒を） miːʦïŋkai kiɾiː fiː samati（samati の ti は不詳）	N,N,D,U

N-164-5	狩俣	unu naːju（縄を） miːʦïŋɡai ki̥ɕi fiːɾu	N,M
N-164-5	久貝	kunu himoː miːʦɿŋkai ki̥ɕi fiːʥaːnna	N,H,N,M
N-164-5	与那覇	kunu ʦunoː miːʦunʲkai kɿ̥ɕi fuɾʲaːnna（ʦunoːは「綱を」）	S
N-164-5	来間	unu buːjubaː miːʦɿ̥ŋkeː ʨi̥ɕi̥fiːɾu	K,U,D
N-164-5	宮国	kunu cïnau miːcuŋkai kï̥sï fuːzjanna	K,T
N-164-5	砂川	kunu ʦˢɿnaubaː miːʦˢɿŋ̩kai {ki̥ɕi / kiɕi} ffiɾʲan̩na	N,I,O
N-164-5	保良	unu buːjubaː miːʦɿŋ̩kai ki̥ɕi fiːɾu	K,T
N-165-1	共通語	鶏が　逃げないよう　（両）足を　縛る。	
N-165-1	池間	mjaːtuiju çiŋɡiɲjoːn sïmai	N,N,D,U
N-165-1	狩俣	tuinu piŋɡiɲoːm paɡïju sïmaɾi	N,M
N-165-1	久貝	tuᶻɿnu piŋɡiŋ joːŋ fu̥tapaɡᶻɿzu sɿmaᶻɿ	N,H,N,M
N-165-1	与那覇	tuɿnu piŋɡunʲ joːɴ paɡɿu sɿmaɿ	S
N-165-1	来間	tuɿnu piŋɡuɴ joːndu pattɕu s̩maɾʲuːʦ(ɿ) ‖ kaɾiɡadu pattɕubaː samaɿ （彼が足をしばる）	K,U,D
N-165-1	宮国	mmaduɿɡa piŋɡiɾaɾuŋ ftapaɡu fuʑʑiukiba	K,T
N-165-1	砂川	tuᶻɿnu piŋɡuŋ̩joŋ̩ fɿtapaɡᶻɿdu sɿmaɾi	N,I,O
N-165-1	保良	tuz̩nu piŋɡuŋ joːŋ paʥuː {s̩maz̩ / f̩tʦ}	K,T
N-165-2	共通語	足も　羽も　縛らない。	
N-165-2	池間	hazïmai haɲimai ɕimaɾaɴ	N,N,D,U
N-165-2	狩俣	paɡjuːmai panjuːmai sïmaɾaɴ	N,M
N-165-2	久貝	paɡᶻɿmai panʲuːmai sɿmaɾaŋ	N,H,N,M
N-165-2	与那覇	paɡᶻɿumai panʲiumai sɿmaɾaɴ	S
N-165-2	来間	pattɕumeː panʲuːmeː {smaɾaŋ / sɿmaɾaŋ}	K,U,D
N-165-2	宮国	paɡïɿmai paniumai fuzzjaŋ	K,T
N-165-2	砂川	paɡᶻɿmai paniumai sɿmaraŋ̩	N,I,O
N-165-2	保良	paʥɿmai panʲuːmai {s̩maɾaŋ̩ / f̩ttaŋ̩}	K,T
N-165-3	共通語	父が　鶏を　縛った。	
N-165-3	池間	zzaɡa mjaːtuiju ɕïmaɾitai	N,N,D,U
N-165-3	狩俣	ujaːdu tuᶻï {sïmaɾiː / sïmaida（sïmaidai か？）}	N,M
N-165-3	久貝	aːʥaɡadu tuᶻɿzu sɿmaɿtaː	N,H,N,M
N-165-3	与那覇	ujaɡadu tuzzu sɿmaᶻɿtaː	S
N-165-3	来間	ujaŋadu tuzzu {sɿmaɿtaɿ / smaztaɿ}	K,U,D
N-165-3	宮国	ujaɡa tuzzu {fuztaː / fɿztaː}	K,T
N-165-3	砂川	ujaɡadu tuᶻɿbaː sɿmaᶻɿtaᶻɿ	N,I,O

N-165-3	保良	ujaɡadu tuz̩zu {smaz̩taː / f̩tʦtaː}	K,T
N-165-4	共通語	鶏を　縛って、籠に　入れてね。	
N-165-4	池間	mjaːtui sïmaɾiː hakunu nakaŋkai iɾiɲaː	N,N,D,U
N-165-4	狩俣	tuᶻï sïmaɾiː pʰḁkuŋɡai（箱に） idʑi uki	N,M
N-165-4	久貝	tuᶻˀzu sˀmaɾitti kaɡuŋkai ᶻˀʑi fiːɾu	N,H,N,M
N-165-4	与那覇	tuzzu sˀmaittiː kaɡuŋkai ˀzi fiɾu	S
N-165-4	来間	tuzzu {smaɾi kaɡuŋke zʑitaˀ / smaɾitti kaɡuŋke zʑiɾo}	K,U,D
N-165-4	宮国	tuzzu sïmaɾi kaɡuŋkai zzi fiːɾu	K,T
N-165-4	砂川	tuzᶻˀ ɕimaɾitti kaɡoŋ̩kai {iʑiɾujoː / idʑiɾujoː}	N,I,O
N-165-4	保良	tuz̩zu {smaɾittɕi / f̩tʦittɕi} kaɡuŋkai {ʑʑiɾu / iʑiɾu}	K,T
N-165-5	共通語	おまえが　鶏を　縛って　くれ。	
N-165-5	池間	vvaɡa tuijuba sïmaɾiː fiːɾu	N,N,D,U
N-165-5	狩俣	vva tuᶻᶻï（tuᶻïuba か？） sïmaɾi uki	N,M
N-165-5	久貝	vvaɡa tuᶻˀzu sˀmaɾi fiːɾu	N,H,N,M
N-165-5	与那覇	vvaɡa tuzzu sˀmaɾi fiɾu	S
N-165-5	来間	vvaŋa tuzzubaː {smaɾi / sˀmaɾi} fiːɾo ‖ vvaŋa smaɾe (おまえがしばれ)	K,U,D
N-165-5	宮国	vvaɡa tuzzu sïmaɾi fiːɾu	K,T
N-165-5	砂川	v̩vaɡa tuᶻˀba sˀmaɾi ffiɾu	N,I,O
N-165-5	保良	vvaɡa tuz̩zuba {smaɾi / fttɕiː} fiːɾu	K,T
N-166-1	共通語	毎日　芋を　掘る。	
N-166-1	池間	kjuː（今日） kaːju（井戸を） fuɾadi	N,N,D,U
N-166-1	狩俣	abuː {ᵖɸˀ / ᵖɸː}	N,D,U
N-166-1	与那覇	NR/「いつもここを掘る」itsɯːmeː kumaudu puzˀ	H
N-166-1	来間	mainˀʦˀ mmu̥ puˀ（ï は ˀ に統一して書いた）	K,I,T
N-166-1	宮国	mainitʦɨ m̩mo̥ {po̥zka / po̥l̩ka}	T,N
N-166-1	砂川	mainitʦɨ kaːu (井戸を) puᶻɨ ‖ itʦɨːmai (いつも) puɾiuᶻɨ (掘っている)	N,U,D
N-166-1	保良	maiːnʲitʦˀ aːbuːdu puzˀ̥ (a:bu は「穴」)	S,M
N-166-2	共通語	母親は　今日は　芋を　掘らない。	
N-166-2	池間	kjuːja kaːjuba fuɾadʑaːɴ	N,N,D,U
N-166-2	狩俣	{abuba / abußa} ᵖɸuɾaŋ̩	N,D,U
N-166-2	与那覇	NR /「ここでは穴は掘らない」kumanna anoːba puran	H
N-166-2	来間	anna kʲuːja mmuba pɾaŋ	K,I,T

N-166-2	宮国	anna kʲuːja m̩mo̯ po̯ɾan	T,N
N-166-2	砂川	annaː kjuːja {kaːu/kaːuba} puɾaŋ	N,U,D
N-166-2	保良	annaː kʲuːja mmuba puɾaɴ (puzɾ̥taːは puzɾ̥taɾ のようにも聞こえる)	S,M
N-166-3	共通語	昔　井戸を　掘った。	
N-166-3	池間	ŋkjaːŋ kaːju fuitai	N,N,D,U
N-166-3	狩俣	abuba puɾidə （də は[u]より前舌の音色）	N,D,U
N-166-3	与那覇	NR/「犬が穴を掘った」innudu anoː puztaː	H
N-166-3	来間	ŋkaːnna kaːjudu puztaɾ	K,I,T
N-166-3	宮国	ŋkʲaːŋ kaːju po̯zta:	T,N
N-166-3	砂川	ŋkjaːnna (昔は) kaːudu puᶻɨtaᶻɨ	N,U,D
N-166-3	保良	ŋkʲaːɴ kaːju puzɾ̥taː	S,M
N-166-4	共通語	穴を　掘って、休め。	
N-166-4	池間	anaː fuɾiː jukui	N,N,D,U
N-166-4	狩俣	aboː puɾiɕi̥ti jukui	N,D,U
N-166-4	与那覇	NR/「穴を掘ってから休め」anaː puɾitti jukui	H
N-166-4	来間	anaː puɾi juke̯ː	K,I,T
N-166-4	宮国	anaɯ po̯ɾittɕi jukui	T,N
N-166-4	砂川	anau puɾitti jukui	N,U,D
N-166-4	保良	aːnau puɾittɕi jukui	S,M
N-166-5	共通語	あそこの　地面を　掘って　こい。	
N-166-5	池間	kamanu ʥïː fuɾiː ku	N,N,D,U
N-166-5	狩俣	anu abu puɾi （形はアリ中止，意味は命令）	N,D,U
N-166-5	与那覇	NR/「あっちを掘ってこい」kamau puɾi kuː	H
N-166-5	来間	kamanu zz puɾiku̯ː	K,I,T
N-166-5	宮国	kamano̯ ʥɨzoo po̯ɾi ko̯:	T,N
N-166-5	砂川	kamanu ʥɨːu puɾi kuː	N,U,D
N-166-5	保良	kamaːnu ʥɾ̥ːju {puɾittɕi kuː / puɾi fiːɾu} (puɾittɕi はシテ中止、後者 puɾi fiːɾu 「ほってくれ」の puɾi がアリ中止)	S,M
N-167-1	共通語	庭に　荷物を　出す。	
N-167-1	池間	minakaŋkai jaːnu（家の） dauvu（道具を） idaɕi	N,N,D,U
N-167-1	狩俣	aːɾaŋ̩kai {muɕi / məɕi} ki	N,D,U
N-167-1	与那覇	minakankeː nimuttsubaː idasɾ	H

N-167-1	来間	minakaŋkeː nimuttɕu idaɕeː (k はかなり奥の方で h と聞き間違う)	K,I,T
N-167-1	宮国	niwaŋkai {nimottsu / nimottsʲu} idaɕi (前庭＝minaka とも)	T,N
N-167-1	砂川	minakaŋkai niːju idasɨ	N,U,D
N-167-1	保良	uɾuːba utu̥tunudu idasɿ̥ (「それは弟が出す」の意)	S,M
N-167-2	共通語	雨の　ときには　外には　荷物を　出さない。	
N-167-2	池間	aminu tukjanna minakaŋkai（庭に） idanaɴ	N,N,D,U
N-167-2	狩俣	NR / nimutsba idasn̩a （出すな 命令禁止 ＊否定の形とれず）	N,D,U
N-167-2	与那覇	amifuunu tukjanna nimuttsuba aɾaːnkeː idasan	H
N-167-2	来間	ami fnna pu̥kaŋkeɛ {idasaŋ （3 人称）/ idasadʲaːŋ （1 人称）} （eɛ は曖昧な二重母音）	K,I,T
N-167-2	宮国	ameno tʰo̥kʲaːnna pukaŋkai nimottsɯ idasadʑaːŋ	T,N
N-167-2	砂川	aminu tukjaːnna pukaŋkaija niːjuba idasaŋ	N,U,D
N-167-2	保良	aminu tu̥kʲaːnna aɾaːŋkaija attauba idasaɴ (atta は「ゲタ」)	S,M
N-167-3	共通語	友達が　荷物を　外に　出した。	
N-167-3	池間	dusïnu davvu idaɕitai	N,N,D,U
N-167-3	狩俣	ᵏsnudu nimutsɿ̥ubaː aːɾaŋ̩kai idaɕi̥	N,D,U
N-167-3	与那覇	dusɿnu nimuttsu aɾaːnkeː idasɿtaː	H
N-167-3	来間	dusunudu nimuttɕu pu̥kaŋkeː idastaɿ	K,I,T
N-167-3	宮国	dosɯnodo/dosɯno nimottsu pukaŋkai {idaɕita / idasɨta}	T,N
N-167-3	砂川	dusɨnudu niːju pukaŋkai idasɨtaᶻɨ	N,U,D
N-167-3	保良	dusɿnudu issu aɾaːŋkai idasu̥taː (iss は「イス」)	S,M
N-167-4	共通語	荷物を　外に　出して、それから　帰れ。	
N-167-4	池間	minakaŋkai davvu idaɕikaɾa jaːŋkai（家へ） iki（行け）	N,N,D,U
N-167-4	狩俣	aːɾaŋ̩k'ai idaɕite {jukui (休め）/ ŋ̩giɾu (帰れ)}	N,D,U
N-167-4	与那覇	nimuttsu aɾaːnkeː idasitti piɾi	H
N-167-4	来間	nimuttɕu hu̥kaŋkeɛ idasi̥ti piɾe （eɛ は曖昧な二重母音）	K,I,T
N-167-4	宮国	nimottsu pukaŋkai idaɕitɕi kaɾa pʰiɾi	T,N
N-167-4	砂川	niːju pukaŋkai idaʃi̥tti uŋkaɾa piɾi	N,U,D
N-167-4	保良	issu aɾaːŋkai idaɕitɕi nnamakaɾa piɾi (iss は「イス」)	S,M
N-167-5	共通語	早く　荷物を　出して　こい。	
N-167-5	池間	hajamaɾitiː nimuttsï idaçiː kuː	N,N,D,U
N-167-5	狩俣	isgi idaɕi kuː	N,D,U

N-167-5	与那覇	pjaːkaɾiti nimuttsu idasitti kuu（ シテ中止がでており、アリ中止をとり損ねた）	H
N-167-5	来間	pʲaːkaɾi nimuttɕu idasi̥ ku̥ː （1 つ目の k はかなり奥の方で h と聞き間違う）	K,I,T
N-167-5	宮国	pʲaːpʲaːtɕi nimottsu idaɕitɕi kuː	T,N
N-167-5	砂川	pjaːpjaːti niːju {idaʃi / idaʃitti} kuː	N,U,D
N-167-5	保良	pʲaːpʲaːtɕi issu idaɕiː kuː（iss は「イス」）	S,M
N-168-1	共通語	弟は　いつも　荷物を　一人で　持つ。	
N-168-1	池間	utuɡamaː itsïmai tavkaːçiː mutiː fu	N,N,D,U
N-168-1	狩俣	mainits {tafkʷʲaː / tafɡʲaː} ɕi̥du nimotsuba mutsɿ̥	N,D,U
N-168-1	与那覇	ututaː itsɯːmeː nimuttsu taukeːsiː mutsɿ	H
N-168-1	来間	utu̥tua itsumeː nimuttɕuba tafkʲaːsidu mutsu (ua は曖昧な二重母音）	K,I,T
N-168-1	宮国	ot̪ʰut̪ʰoo itsɿʔmai {tavkʲaːɕi / taukʲaːɕi} nimottsu mot̪sɨ	T,N
N-168-1	砂川	utsu̥toː itsɨːmai niːju taʊkjaːʃi mutʃuːᶻɨ（持っている。 mutsɨ 持つ）	N,U,D
N-168-1	保良	utu̥tʰaː itsɿːmai issuba toːkʲaːɕiːdu mutsɿ̥ (iss は「イス」）	S,M
N-168-2	共通語	祖母は　荷物を　持たない。	
N-168-2	池間	haː mmaː niːjubaː mutɕaɴ	N,N,D,U
N-168-2	狩俣	NR / niːba mutsna （持つな 命令禁止 ＊否定の形とれず）	N,D,U
N-168-2	与那覇	mmaː nimuttsubaː mutan	H
N-168-2	来間	paːmma nimuttɕuba {mutsuna / mutɕaŋ}	K,I,T
N-168-2	宮国	m̩ma: {nimottsu / nimottsʲu} mot̪aʤaːŋ	T,N
N-168-2	砂川	mmaː {niːjuba / niːju} mutaʤaːŋ （mutaŋ は他部落 / mutadi 持とう / mutatʃaː これから持つよ）	N,U,D
N-168-2	保良	mmaː kabannuba mutaɴ (kaban は「カバン」）	S,M
N-168-3	共通語	祖父が　むしろを　持った。	
N-168-3	池間	ujaɡa mussuuba muttai	N,N,D,U
N-168-3	狩俣	{ɕuːɡado / ɕuːɡadu} mussoːbaːdə mutsɿ̥	N,D,U
N-168-3	与那覇	sjuːɡa mussuu mutsɿtaː	H
N-168-3	来間	ɕuːɡa mussuː mutɕiuɿ	K,I,T
N-168-3	宮国	ɕuːja mussuː mot̪ɕi̥taː	T,N
N-168-3	砂川	{ʃuːɡa / ʃuːɡadu} mussuː mutsɨtaᶻɨ	N,U,D
N-168-3	保良	ɕuːɡadu mussuˈu mutsɿ̥ta(ː)	S,M

N-168-4	共通語	父が　酒　持って、母が　食べ物を　持つ。	
N-168-4	池間	uzaɡa saki mutiː mmaː faimunu muttai	N,N,D,U
N-168-4	狩俣	ɕuːɡadu（祖父が） {ɕḁki̥ba / ɕakeba} mutɕiː usaijubaː obaːɡa（祖母が） mutɕi	N,D,U
N-168-4	与那覇	ujaɡa sakjuː mutɕitti annaɡa foːmunuu mutsɹtaː	H
N-168-4	来間	ujaɡa sḁkʲuː mutsɹːː annaɡa toːmunuː mutsɹ	K,I,T
N-168-4	宮国	ɔjaa sḁkʰeo̞ motsɯ annaa {ɸoomono / ɸoumono} motsɯ	T,N
N-168-4	砂川	ujaː sḁkjuː {mutʃitti / mutsɨ} annaː faumunuː mutsɨ	N,U,D
N-168-4	保良	ujaɡa sḁkiu mutɕittɕi annaɡa faʊ munuˠu mutsɹ̥ (faʊ は fɔː のようにも聞こえる)	S,M
N-168-5	共通語	早く　酒を　持って　こい。	
N-168-5	池間	hajamaɾiː sakjuː mutiː kuː	N,N,D,U
N-168-5	狩俣	pʲaːɾiti ɕḁki mutɕi {k’uː / ɡuː}	N,D,U
N-168-5	与那覇	pjaːkaɾiti sakjuː mutɕi kuː	H
N-168-5	来間	pʲaːŋkaɾi sḁkʲuː mutɕi̥ ku̞ː	K,I,T
N-168-5	宮国	pʲaːpʲaːtɕi sḁkʰeu motɕi kuː	T,N
N-168-5	砂川	pjaːpjaːti sḁkjuː mutʃi kuː	N,U,D
N-168-5	保良	pʲaːpʲaːtɕi sḁkiu mutɕi kuː	S,M
N-169-1	共通語	太郎は　いつも　煙草を　買う。	
N-169-1	池間	taɾoːja itsïmai tabukuː kau	N,N,D,U
N-169-1	狩俣	baː（私は） issɹmai tabakudu koː（issɹmai の ɹ の左肩に摩擦無し）	N,D,U
N-169-1	与那覇	taroːja itsɯːmeː tabakoː koː	H
N-169-1	来間	taɾoːja itsumeː tabu̞kuːdu koː	K,I,T
N-169-1	宮国	taɾooja itsɨˀɯmai tabu̥kᵘo̞ kau	T,N
N-169-1	砂川	taɾoːja itsɨːmai {tabakoː / tabakuːdu} {kau / kaiuᶻɨ (買っている)}	N,U,D
N-169-1	保良	taɾoːja itsɹːmai tabakoudu kʰaʊ	S,M
N-169-2	共通語	誰も　芋を　買わない。	
N-169-2	池間	taɾumai nːnuba kaːɴ	N,N,D,U
N-169-2	狩俣	taʊ̯mai m̩muba kaːŋ̩	N,D,U
N-169-2	与那覇	toːmeː mːmuba kaːn	H
N-169-2	来間	ˀtoːmeː mmuba kaːŋ	K,I,T
N-169-2	宮国	toˀomai m̩mo kaːn	T,N

N-169-2	砂川	toːmai mːuba kaːŋ	N,U,D
N-169-2	保良	taʊmai mːba kʰaːɴ	S,M
N-169-3	共通語	昨日　魚を　買った。	
N-169-3	池間	nnu zzː kautai	N,N,D,U
N-169-3	狩俣	ksnoː ɾzʷɾnudu kai （ɾzʷɾ の最初の ɾ の左肩に摩擦無し）	N,D,U
N-169-3	与那覇	ksnaː zzuu koːtaː	H
N-169-3	来間	ʦɾnu zːbaː koːtaɾ	K,I,T
N-169-3	宮国	kˢɨnoo zzuː kautaː	T,N
N-169-3	砂川	kˢɨ̥nuː ɨzuː kautaᶻɨ	N,U,D
N-169-3	保良	ʦɾ̥nuː ɾzu˩u kaʊta(ː) (ɾzu は zzu とも撥音される)	S,M
N-169-4	共通語	私が　魚を　買って、友達は　肉を　買った。	
N-169-4	池間	baɡa ᶻïː kai dusïja butaniku kaʊtai	N,N,D,U
N-169-4	狩俣	baː ɾzʷɾ kai dussa {mʷɾːdu / məːdu} kai （mʷɾː は弱い摩擦で məː は摩擦無し）	N,D,U
N-169-4	与那覇	baɡa zzuu kaitti dussa nikuu koːtaː	H
N-169-4	来間	abaː zzuːkai dussa nikuːdu koːtaɾ	K,I,T
N-169-4	宮国	{baɡa / baja} zzuː kau do̯ssa niku kautaː	T,N
N-169-4	砂川	baja ɨzuu {kautaᶻɨ / kau / kaittidu} dussa nikuː kautaᶻɨ	N,U,D
N-169-4	保良	bajaː ɾzuː kaittɕi(du) dussa ʊaːju kaʊta(ː) (ʊaːは「豚(肉)」)	S,M
N-169-5	共通語	油を　買って　こい。	
N-169-5	池間	avvau kaikuː	N,N,D,U
N-169-5	狩俣	ɕḁkʲuː (酒を) kai k’uː	N,D,U
N-169-5	与那覇	avvoː keː kuː	H
N-169-5	来間	avva kai kuː	K,I,T
N-169-5	宮国	avvao̯ kʰai kuː	T,N
N-169-5	砂川	aʊʊau kai kuː （ʊ は弱い唇歯音）	N,U,D
N-169-5	保良	avvau kai kuː	S,M
N-170-1	共通語	毎日　野菜を　売る。	
N-170-1	池間	sïːju vvʲjuː	N,N,D,U
N-170-1	狩俣	mainiʦ suːnu paːidu ʊ̞ː （ʊ に摩擦無し）	N,D,U
N-170-1	与那覇	mainitsɾ jasaiju {ʊːtaː / uːtaː}（ ʊː と発音しているようだが、uː でも許容される）	H
N-170-1	来間	mainiʦɾ suːjudu vː	K,I,T
N-170-1	宮国	maʔiniʦɨ suːju {uː / uv} (uv の v は弱い)	T,N

N-170-1	砂川	itsɨːmai suːju {ʊː / ʊʊu}	N,U,D
N-170-1	保良	itsɿːmai suːjudu vvɿ̥	S,M
N-170-2	共通語	彼は　自分の　豚を　売らない。	
N-170-2	池間	kaɾaː naɾaɡa ɰaːjubaː vvaɴ	N,N,D,U
N-170-2	狩俣	NR / {kaɾʲaː / kanu} pstoː waiba uʊadaɾaŋ （ɕuːdoː）	N,D,U
N-170-2	与那覇	kaɾjaː unaɡaduunu waːjuba {vvan / vvadjaːn}	H
N-170-2	来間	kaɾʲaː naɾa waːjuba vvaŋ	K,I,T
N-170-2	宮国	kaɾʲaː do̯ːa waːiba ᵘvaŋ	T,N
N-170-2	砂川	kaɾjaː duːnu {ʊaːju / ʊaːuba} ʊʊaŋ	N,U,D
N-170-2	保良	kaɾʲaː duːɡa ʊaːjubaː vvaɴ	S,M
N-170-3	共通語	去年　山羊を　売った。	
N-170-3	池間	kudʑu çindʑau vvitai	N,N,D,U
N-170-3	狩俣	{kuᵈᶻɿdu /kᵈᶻɿdu} pinzoː {ʊ̩ːdaᵈᶻɿ / ʊ̩ʊi / ʊːdan̩}	N,D,U
N-170-3	与那覇	kudzaː pinzoːba ʊːdusɿtaː	H
N-170-3	来間	kuʑu pindʑau uːtaɿ （au は曖昧な二重母音）	K,I,T
N-170-3	宮国	kudʑu pʰindʑau {uːtaː / uᵛtaː / uʊtaː}	T,N
N-170-3	砂川	kudʑu pindʑau ʊːtaᶻɨ	N,U,D
N-170-3	保良	kududu pindau vvita(ː)	S,M
N-170-4	共通語	山羊を　売って、豚を　買った。	
N-170-4	池間	çindʑau vviː ɰaːjuː kaitai	N,N,D,U
N-170-4	狩俣	pin̩zoː uʊiɕi̥tidu waju koːtaᵈᶻɿ （ᵈᶻɿ の摩擦弱い）	N,D,U
N-170-4	与那覇	pinzaː vvittidu waːju koːtaː	H
N-170-4	来間	pindʑao vvitti waːju koːtaɿ （ao は曖昧な二重母音）	K,I,T
N-170-4	宮国	pʰindʑau uvittɕi waːju kautaː	T,N
N-170-4	砂川	pindʑau ʊittidu ʊaːju kautaᶻɨ	N,U,D
N-170-4	保良	pindau vvittɕidu ʊaːja kaʊtaː	S,M
N-170-5	共通語	その　豚を　売って　ください。	
N-170-5	池間	kunu ɰaːju vviː fiː samati	N,N,D,U
N-170-5	狩俣	kanu baːju uʊʊi fiːɾu	N,D,U
N-170-5	与那覇	unu waːju vvi firu	H
N-170-5	来間	unu waːju vvifiːɾu	K,I,T
N-170-5	宮国	unu waːju uvi ɸiiɾu	T,N

N-170-5	砂川	unu {ʋaːju / ʋaːu} {ʋʋi fiːɾu （売ってくれ）/ ʋʋadʒaːna （売ってくれませんか）}	N,U,D
N-170-5	保良	unu ʋaːju vvi(ː) ffiːɾu (ffiːɾu は fiːɾu とも発音される)	S,M
N-170B-1	共通語	いつも　私は　弟に　お菓子を　やる。	
N-170B-1	池間	itsmai baː uttuɴ kaːssu {fiː / fiː ui / fiː jui}	M,Y,S,T
N-170B-1	狩俣	itsɾ̥mai utuduŋ̩gadu kaːs {fɾ / fɾ̥}（tsɾ̥ の帯気音強い。Fɾ の有声弱い）	N,D,U
N-170B-1	与那覇	itsɯːmeː banun ututaː kaːsɾ firu（「弟は私にお菓子をくれる」になってしまっている可能性がある）	H
N-170B-1	来間	itsɾmeː abaː utu̥tuŋ koːsuba fiːɾ	K,I,T
N-170B-1	宮国	itsɨʔmai bajaː o̞tʰu̥tuŋ koosu ɸiː（菓子単独＝koosɯ）	T,N
N-170B-1	砂川	itsɨːmai bajaː {ututuŋkai / utsu̥tuŋkai} koːsɨ {ffiuᶻɨ / ffjuᶻɨ}	N,U,D
N-170B-1	保良	itsɾːmai bajaː utu̥tuŋkaidu kaːssu ffiː	S,M
N-170B-2	共通語	弟は　兄に　お菓子を　やらない。	
N-170B-2	池間	uttuː sudʑanna kaːssubaː fiːɴ	M,Y,S,T
N-170B-2	狩俣	NR / baː azan̩na kaːs̩ba fiːdaɾaŋ̩ （くれられない）	N,D,U
N-170B-2	与那覇	ututaː adzankeː kaːsɾ fudjaːn（「やらない」が意志否定の形になっていて、単純な否定形がとれていない）	H
N-170B-2	来間	utu̥toa {azanna / suʑanna} koːsubaː fuːŋ (oa は曖昧な二重母音)	K,I,T
N-170B-2	宮国	o̞tʰu̥too adʑan koosuba ɸuːŋ	T,N
N-170B-2	砂川	utsu̥toː azaŋkai koːssu ffudʑaŋ	N,U,D
N-170B-2	保良	utu̥tʰa sudaŋkaija kaːssuba fuːɴ (suda の s は気息が強め。また ɕuda とも)	S,M
N-170B-3	共通語	昨日　弟に　飴を　やった。	
N-170B-3	池間	n̩nuː uttuɴ amʲuː fiːtai	M,Y,S,T
N-170B-3	狩俣	ksnudu utuduŋ amidʑatoː fiːt’aᶻɾ	N,D,U
N-170B-3	与那覇	ksnaː ututun amjoː fiːtaː	H
N-170B-3	来間	tsɾnuː utu̥tunna amiu fiːtaɾ	K,I,T
N-170B-3	宮国	kˢɨnuː o̞tʰu̥tuŋ amʲuː ɸiitaː	T,N
N-170B-3	砂川	kˢɨ̥nuː utsu̥tuŋkai amjuː ffitaᶻɨ	N,U,D
N-170B-3	保良	tsɾ̥nuː utu̥tuŋkai amʲuː ffiːtaː	S,M
N-170B-4	共通語	馬に　草を　やって、畑に　行った。	
N-170B-4	池間	nuːmaɴ f̩saː fiː haiŋkai ikitai	M,Y,S,T

N-170B-4	狩俣	nuːmaṇnu ifsoː fiːɕi̥ti paɾ ɿŋ̩kai {iftaɿ / istal̩ }（ɾ ɿ に摩擦無し、taɿ に弱い摩擦）	N,D,U
N-170B-4	与那覇	nuːman fsaː fitti paɾinkeː piːtaː	H
N-170B-4	来間	nuːmaŋ fsaː fiːtti paɾiŋkeː piztaɿ	K,I,T
N-170B-4	宮国	nuumaŋ ɸsau ɸitʦi paɾiŋkai ikˢɨtaː	T,N
N-170B-4	砂川	nuːmaŋkai fu̥sau ffitti paɾiŋkai ikˢɨ̥taᶻɨ	N,U,D
N-170B-4	保良	nuːmaŋkai fsau fiːtʦi(du) paɾiŋkai ikɿta(ː)　(ikɿtaː は ikɿtaɿ のようにも聞こえる)	S,M
N-170B-5	共通語	牛に　草を　やって　ごらん。	
N-170B-5	池間	{uɕiɴ / usɿɴ} fsau fiː miːɾu	M,Y,S,T
N-170B-5	狩俣	{usn̩ / usɿ̥n} {isso / ifs̩o} fiː kuː　（来い）	N,D,U
N-170B-5	与那覇	usɿn fsoː fiː miːru	H
N-170B-5	来間	usüŋ fsoa fiːmiːɾu　（oa は曖昧な二重母音）	K,I,T
N-170B-5	宮国	usɨn ɸsau ɸiː miɾu	T,N
N-170B-5	砂川	usɨŋkai fu̥sau ffi miːɾu	N,U,D
N-170B-5	保良	usɿŋkai fsau fiː miɾu	S,M
N-171-1	共通語	漁師から　魚を　もらう。	
N-171-1	池間	iĩɕakaɾa zzuː dʥitai	M,Y,S,T
N-171-1	狩俣	imm̩uɾipstuᶻɿᶻɿːkaɾadu imm̩unu iʑitaᶻɿ	N,D,U
N-171-1	与那覇	zzusjaːkaɾa zzuu zzitaː	H
N-171-1	来間	imʲɕaːkḁɾa zː muɾoa　（oa は曖昧な二重母音）	K,I,T
N-171-1	宮国	imboo kaɾa zzuː moɾautaː	T,N
N-171-1	砂川	imboːkaɾa {ɨzuu / zzuː / zuu} muɾau ＜cf.＞ muɾautaᶻɨ（もらった）　/ muɾaːdakanaɾaŋ　（もらわないといけない）	N,U,D
N-171-1	保良	iʦɿːmaidu impɿ̥tukaɾa ɿzuu iː（iʦɿːmaidu は「いつも」）	S,M
N-171-2	共通語	小さい　カニは　誰も　もらわない。	
N-171-2	池間	imiːimi kannubaː taɾuːmai {ʑʑiɴ / dʥiɴ}	M,Y,S,T
N-171-2	狩俣	imiːn kanu kam̩muba taɾumai iʑiŋ̩　（iʑiŋ̩ の最初の i のきこえが弱い）	N,D,U
N-171-2	与那覇	imiːnu kannubaː toːmeː zzun	H
N-171-2	来間	imiːnu kannubaː toːmeː muɾaŋ	K,I,T
N-171-2	宮国	imiˀinu kʰannuba toˀomai moɾaːŋ	T,N
N-171-2	砂川	imiːnu kanjuːba toːmai muɾaːŋ	N,U,D

N-171-2	保良	imiːttɕanu kannubaː taʊmai ju(ː)ɴ (taʊ は tɔː のようにも聞こえる)	S,M
N-171-3	共通語	隣の　家から　大根を　もらった。	
N-171-3	池間	tunainu jaːkaɾa uɸunʲau dʑitai	M,Y,S,T
N-171-3	狩俣	tananu pstukaɾadu uᵖɸunʲuː iʑitaᶻˀ（iʑitaᶻˀ の最初の i のきこえが弱い）	N,D,U
N-171-3	与那覇	tunaˀnu pstukaɾa upunjuː zzitaː	H
N-171-3	来間	tunaˀnu jaːkaɾa upniu muroːtaˀ（k はかなり奥の方で h と聞き間違う）	K,I,T
N-171-3	宮国	{tunaᶻɨ / tunal̩} nu jaːkaɾa upuniu {morautaː / moɾootaː}	T,N
N-171-3	砂川	tunaᶻɨnu jaːkaɾa upunjuː {muɾautaᶻɨ / muɾoutaᶻɨ}	N,U,D
N-171-3	保良	tu̥naɾunu jaːkaɾa upunʲiu iːta	S,M
N-171-4	共通語	大きな　魚を　もらって、みんなで　分けた。	
N-171-4	池間	gabaːzzu dʑiː n̩ːnaçiː bakitai	M,Y,S,T
N-171-4	狩俣	uᵖɸoːbinu iʑidu {m̩ːnaɕi / n̩ːnaɕi} {bagət'aᶻˀ/bagədaᶻˀ}	N,D,U
N-171-4	与那覇	upoːnu zzuu zzitti mːnasiː bakitaː	H
N-171-4	来間	upoːnu zː muɾai mːnasi bakit̥aˀ	K,I,T
N-171-4	宮国	upuˀunu ᶻzuː moɾaittɕi m̩ˀnaɕi nakaːᶻɨtaː	T,N
N-171-4	砂川	upuːnu {zzuu / zzuː / ɨzuu} muɾaittidu mːnaŋkai bakitaᶻɨ	N,U,D
N-171-4	保良	upuːupunu ˀzuː iːttɕidu mːnaɕiː bakita(ː)	S,M
N-171-5	共通語	親戚から　味噌を　もらって　きた。	
N-171-5	池間	haɾauzˀkaɾa n̩suː dʑittai	M,Y,S,T
N-171-5	狩俣	ujakigaɾadu n̩suː iʑiftaᶻˀ （ᶻˀ の摩擦弱い）	N,D,U
N-171-5	与那覇	utudzakaɾa ntsuu zzi kstaː	H
N-171-5	来間	utɕudʑakaɾa msuː muɾaitsˀt̥aˀ （k はかなり奥の方で h と聞き間違う）	K,I,T
N-171-5	宮国	utsudʑa kaɾa du m̩su morai {kˢɨːtaː / kˢɨᶻtaː / kˢɨta}	T,N
N-171-5	砂川	utsɨdʑakaɾa msuː muɾai kˢɨ̥ːtaᶻɨ	N,U,D
N-171-5	保良	utu̥dakaɾa msuˀu iː kˀta(ː)	S,M
N-172-1	共通語	喉が　乾いたら　水を　飲む。	
N-172-1	池間	nudunu kaːkitigaː middʑu {numi / nuɴ}	M,Y,S,T
N-172-1	狩俣	nudunudu kaɾaːᵗidu mitɕi {nuŋ̩taᶻˀ（飲んだ）/numaɾi}	N,D,U
N-172-1	与那覇	ubui nu kaːrakikaː middzu num	H
N-172-1	来間	nudu kaːkibaːnna miᵗtɕudu num	K,I,T

N-172-1	宮国	nubuinu kaːkitɕi̥kaː midʥu no̯maː（ 単独では midʥɨ)	T,N
N-172-1	砂川	nudunu kaːɾakˢɨtikaː {mitʥu / mitʦu} num	N,U,D
N-172-1	保良	nudunudu {kaːɾakʲuːtaɾibadu / kaːɾaki uɾibadu} mizuu num	S,M
N-172-2	共通語	私の　夫は　酒を　飲まない。	
N-172-2	池間	baɡa butuː sḁkʲuːbaː numaɴ	M,Y,S,T
N-172-2	狩俣	baː biɡidum̩ma ɕə̥kiubaː numaŋ̩	N,D,U
N-172-2	与那覇	baɡa bikidumaː sakjuːbaː numan	H
N-172-2	来間	baɡa bikidumuu sḁkʲuːbaː numaŋ	K,I,T
N-172-2	宮国	baɡa bikidumma sakʰi̥uba no̯maŋ	T,N
N-172-2	砂川	baɡa butoː sḁkjuːba numaŋ	N,U,D
N-172-2	保良	{baɡa / baɣa} bikidumma sḁkiuba numaɴ	S,M
N-172-3	共通語	お茶は　さっき　飲んだ。	
N-172-3	池間	ʨaːja ki̥sadu nuntai	M,Y,S,T
N-172-3	狩俣	ʨaːjuba main̩du numi （ヌンタズ系をとれず）	N,D,U
N-172-3	与那覇	tɕaːjubaː {sadaɾidu/pjaːsidu} numtaː	H
N-172-3	来間	ʨaibaː nnamaɡatadu numutaɿ	K,I,T
N-172-3	宮国	ʨaːja kʲˢaˀatu no̯m̩taː	T,N
N-172-3	砂川	ʧaːja nnamadu numtaᶻɨ	N,U,D
N-172-3	保良	ʨaːjubaː ki̥ɕaːdu numta	S,M
N-172-4	共通語	薬を　飲んで、早く　寝ろ。	
N-172-4	池間	ffʊija numiː {haimaɾi / hajamaɾi} nʲivvi	M,Y,S,T
N-172-4	狩俣	fu̥sɿ̥du {numiɕi̥ti / numiɕiti} pʲaːɕi niʊi	N,D,U
N-172-4	与那覇	fsuᶻɿzuba numitti pjaːpjaːti nivvi	H
N-172-4	来間	fsuzu numitti pʲaːŋkaɾi nivvi	K,I,T
N-172-4	宮国	ɸsuzu no̯mitʨi pʲˀaːpʲaːʨi nivvi	T,N
N-172-4	砂川	{fu̥sɨzzu / fu̥sɨᶻɨzu} numitti pjaːpjaːti nivvi	N,U,D
N-172-4	保良	fsu̥zzu numitʨi pʲaːpʲaːʨi nʲivvi	S,M
N-172-5	共通語	この　薬は　甘いから　飲んで　みなさい。	
N-172-5	池間	kunu ffʊija azɿmajaiba numiː miːɾu	M,Y,S,T
N-172-5	狩俣	unu aᶻɿman̩diba numi miːɾu	N,D,U
N-172-5	与那覇	unu fsuᶻɿza adzɿmaːnu jaɾiba numiː miːru	H
N-172-5	来間	kunu fsuzza azumakaɾiba numimiːɾu	K,I,T
N-172-5	宮国	kunu ɸsuzza aʥɨmaːnu jaiba no̯mimiːɾu	T,N

N-172-5	砂川	kunu {fu̥sɨzza / fu̥sɨᶻɨza} amakaɾiba numi miɾu	N,U,D
N-172-5	保良	kunu fsu̥zza azumakḁɾʲa numi miːɾu	S,M
N-172B-1-1	共通語	ここでは　ヘチマを　食べる。	
N-172B-1-1	池間	kumanna {nabʲaːɾau / nabʲaːɾaʊ} {fau / faʊ}　（両唇の摩擦 ɸ も唇歯の摩擦 f もある）	M,Y,S,T
N-172B-1-1	狩俣	fumanʲa nabʲaːɾadu {foː / ɸoː}	N,D,U
N-172B-1-1	与那覇	kumanna nabjaːɾoː foːdusɿ（（何を食べるか？）「砂糖を食べる」satoːdu foː）	H
N-172B-1-1	来間	kumanna nabiaɾoa foː　（oa は曖昧な二重母音）	K,I,T
N-172B-1-1	宮国	kumanna nabʲaːɾao̯ba {ɸoodusɨː / ɸaodo̯sɨː}	T,N
N-172B-1-1	砂川	kumaŋ nabjaːɾau fau	N,U,D
N-172B-1-1	保良	kumanna nabʲaːɾaudu fɔʊ	S,M
N-172B-1-2	共通語	本土の人は　ヘチマを　食べない。	
N-172B-1-2	池間	jamatunu çituː nabʲaːɾaubaː faːɴ	M,Y,S,T
N-172B-1-2	狩俣	jamatu pstoː nabʲaɾawa {ɸaŋ̩ / faŋ̩}	N,D,U
N-172B-1-2	与那覇	jamatunu pstaː nabjaɾoːbaː faːn	H
N-172B-1-2	来間	jamatunu pi̥toa nabeaɾoaba faːŋ　（oa, ea は曖昧な二重母音）	K,I,T
N-172B-1-2	宮国	naitɕi pˢɨto: nabʲaːɾao̯ba ɸaːŋ	T,N
N-172B-1-2	砂川	jamatunu pˢi̥toː nabjaːɾauba faːŋ	N,U,D
N-172B-1-2	保良	jamatu(nu) pɲ̥taː nabʲaːrauba faːɴ	S,M
N-172B-1-3	共通語	ニガウリは　昨日　食べた。	
N-172B-1-3	池間	gauɾau nnu {faitai / fautai / faʊtai}	M,Y,S,T
N-172B-1-3	狩俣	goːɾoːba ksn̩udu {foːtaᶻɾ / ɸoːtaᶻɾ }（ᶻɾ の摩擦弱い）	N,D,U
N-172B-1-3	与那覇	goːɾoːbaː ksnudu foːtaː	H
N-172B-1-3	来間	goːɾᵒa tsɾnudu foːtaɾ　（ᵒa は曖昧な二重母音）	K,I,T
N-172B-1-3	宮国	gauɾao̯ba kˢɨnoːdo ɸootaː	T,N
N-172B-1-3	砂川	gauɾaː kˢi̥nuːdu {foːtaᶻɨ / fautaᶻɨ}	N,U,D
N-172B-1-3	保良	gɔʊɾaubaː kˢɾnuːdu fɔʊta	S,M
N-172B-1-4	共通語	昼ご飯を　食べて、寝ろ。	
N-172B-1-4	池間	jamatunu çituː nabʲaːɾaubaː faːɴ	M,Y,S,T
N-172B-1-4	狩俣	jamatu pstoː nabʲaɾawa {ɸaŋ̩ / faŋ̩}	N,D,U
N-172B-1-4	与那覇	jamatunu pstaː nabjaɾoːbaː faːn	H
N-172B-1-4	来間	jamatunu pi̥toa nabeaɾoaba faːŋ　（oa, ea は曖昧な二重母音）	K,I,T
N-172B-1-4	宮国	naitɕi pˢɨto: nabʲaːɾao̯ba ɸaːŋ	T,N

N-172B-1-4	砂川	jamatunu pˢɨ̥toː nabjaːɾauba faːŋ	N,U,D
N-172B-1-4	保良	jamatu(nu) pɿ̥taː nabʲaːrauba faːɴ	S,M
N-172B-1-5	共通語	夕ご飯は　食べて　きた。	
N-172B-1-5	池間	juiju faittai	M,Y,S,T
N-172B-1-5	狩俣	juːᶻɿba faidu ku̥ɕi̥	N,D,U
N-172B-1-5	与那覇	juːɿba feːtidu kstaː（feːtti でも feːti でもいいようだ。 アリ中止：feː miːɾu ）	H
N-172B-1-5	来間	juːzuba faitti ʦɿtaɿ	K,I,T
N-172B-1-5	宮国	juzzuba ɸaido̞ kˢɨtaː	T,N
N-172B-1-5	砂川	juzza faidu kˢɨ̥taᶻɨ	N,U,D
N-172B-1-5	保良	juzza faitʨidu kɿ̥taː (faitʨi はシテ中止) ＜cf.＞ ɡɔʊɾau fai miːɾu (ニガウリを食べてみろ) (fai はアリ中止)	S,M
N-172B-2-1	共通語	山羊は　草を　食う。	
N-172B-2-1	池間	çinʥaː {fsaudu / fsaʊdu} {fau / faʊ}	M,Y,S,T
N-172B-2-1	狩俣	pin̩zaː {issoːbaː / ifsoːbaː} {ffoːᵈzuɕɿ̥ / ffoːᵈzɿɕɿ̥}	N,D,U
N-172B-2-1	与那覇	pindzaː fsoːdu foː	H
N-172B-2-1	来間	pinʥaː fsoːdu foː	K,I,T
N-172B-2-1	宮国	pinʥaː ɸsao̞do ɸau	T,N
N-172B-2-1	砂川	pinʥaː fu̥saudu {fou / fau}	N,U,D
N-172B-2-1	保良	pindaː fsaudu fɔʊ	S,M
N-172B-2-2	共通語	山羊は　紙を　食わない。	
N-172B-2-2	池間	çinʥaː kabijubaː {faːɴ / ffaːɴ}	M,Y,S,T
N-172B-2-2	狩俣	未調査。動物が「食べる」と人間が「食べる」で、言い方は変わらないとのこと。	N,D,U
N-172B-2-2	与那覇	pindzaː kabᶻɿzuba faːn	H
N-172B-2-2	来間	pinʥaː kabzba faːŋ	K,I,T
N-172B-2-2	宮国	pinʥaː kʰabɨzo̞ba ɸaːŋ	T,N
N-172B-2-2	砂川	pinʥaː kabᶻɨzuba faːŋ	N,U,D
N-172B-2-2	保良	pindaː kabɿuˡba faːɴ	S,M
N-172B-2-3	共通語	猫が　魚を　食った。	
N-172B-2-3	池間	majun zzuː {fautai / faʊtai}	M,Y,S,T
N-172B-2-3	狩俣	未調査。動物が「食べる」と人間が「食べる」で、言い方は変わらないとのこと。	N,D,U
N-172B-2-3	与那覇	majunudu zzuː foːtaː	H

N-172B-2-3	来間	majunudu zzːbaː foːtaɹ	K,I,T
N-172B-2-3	宮国	majuː zzuːba ɸoodosɨː	T,N
N-172B-2-3	砂川	majunudu {zzuː / ɨzuu} {foutaᶻɨ / fautaᶻɨ}	N,U,D
N-172B-2-3	保良	majuːnudu ɹzuu fɔʊta (fɔʊta は foːta のようにも聞こえる)	S,M
N-172B-2-4	共通語	魚を　食って、すぐに　逃げた。	
N-172B-2-4	狩俣	未調査。動物が「食べる」と人間が「食べる」で、言い方は変わらないとのこと。	N,D,U
N-172B-2-4	来間	zzaː feːttidu pjaːpjaːti piːtaː	K,I,T
N-172B-2-4	宮国	zzː faitte̞ sugu piŋgitaɹ	T,N
N-172B-2-4	砂川	zzuː ɸiːdu sugu {pʰiŋgitaː / ɸiŋgitaː}	N,U,D
N-172B-2-4	保良	ɹzaː faittɕidu nnama piŋgita (ɹzaːは「魚は」か。)	S,M
N-172B-2-5	共通語	全部　食って　しまった。	
N-172B-2-5	池間	n̩nanai fai nʲaːɴ	M,Y,S,T
N-172B-2-5	狩俣	未調査。動物が「食べる」と人間が「食べる」で、言い方は変わらないとのこと。	N,D,U
N-172B-2-5	与那覇	mːnadu foːtaː	H
N-172B-2-5	来間	{muːstu / muːɹdu} fainʲaːŋ （nʲ は ɲ ほどには口蓋化せず）	K,I,T
N-172B-2-5	宮国	m̩ˀnado ɸaido̞ {pʰiːtaː / ɸiitaː}	T,N
N-172B-2-5	砂川	mːnadu {fai njaːŋ / foutaᶻɨ～fautaᶻɨ （食べた）}	N,U,D
N-172B-2-5	保良	mːna fai nʲaːɴ	S,M
N-173-1	共通語	暗く　なるまで　外で　遊ぶ。	
N-173-1	池間	ffaf̩ nai {kʲataːçiː / kitaːçiː} aɾaɴ {aɕibi ui / aɕibʲuːi}	M,Y,S,T
N-173-1	狩俣	faffuː naskʲaːdu ᵖɸukaŋgi asuʊi	N,D,U
N-173-1	与那覇	ffaːffa naɹkjaːɡamidu minakan appɹtaː	H
N-173-1	来間	ffafu naɹkʲa pu̥kaŋ aspi	K,I,T
N-173-1	宮国	ɸɯ̥ˀaɸɸa {naʊkʲaː / nazkʲaː} pʰukaɴ asɯpʲuː	T,N
N-173-1	砂川	fˀfaːffa naᶻɨkjaːdu pukaŋ asɨp̚ˢɨ	N,U,D
N-173-1	保良	ffaːffa sukʲaːdu aɾaːɴ asɹp̚ˢɹ̥ (asɹp̚ˢɹ̥ は asɹ̥bɹ̥ のようにも聞こえる)	S,M
N-173-2	共通語	暗く　なったら、誰も　遊ばない。	
N-173-2	池間	ffaf nai tuː taɾumai aɕibaɴ	M,Y,S,T
N-173-2	狩俣	fafu nadiɡaː {taʊmai / taɡumai} asuːbaŋ̩	N,D,U
N-173-2	与那覇	ffaːffa nakkaː toːmeː appan	H
N-173-2	来間	ffafu naɹkkaː toːmeː aspaŋ	K,I,T

N-173-2	宮国	ɸɯ̥ˀaɸɸa nazʦikaː toˀomai asɨpaŋ	T,N
N-173-2	砂川	ffːffa naᶻɨtikaː toːmai asɨ̞paŋ	N,U,D
N-173-2	保良	ffaːffa naɾi̥ɕikaː taʊmai asɹ̞pʰaɴ (asɹ̞pʰaɴ は asɹ̥baɴ のようにも聞こえる)	S,M
N-173-3	共通語	昨日は　いとこと　遊んだ。	
N-173-3	池間	nn̩nuː itɕufn̩tu {aɕibitai / aɕuːtai}	M,Y,S,T
N-173-3	狩俣	ᵏsnoː {itʂfsaɾido / itʂfsaɾidu} asʊ̞da	N,D,U
N-173-3	与那覇	ksnaː itsɹfzjaːna appɹtaː	H
N-173-3	来間	ʦɹnuː itɕi̥fuːtuː aspɹtaɹ	K,I,T
N-173-3	宮国	kˢɨnuːja {itʂu̥ɸunukʲaːtu / itʂu̥ɸutudo̞ } asɨpʰɨtaː	T,N
N-173-3	砂川	kˢɨ̞nuːja itʂɨfutu asɨ̞pˢɨtaᶻɨ	N,U,D
N-173-3	保良	kˢɹnuːja ituɸu̥tudu asɹ̞pɹ̥taː (asɹ̞pɹ̥taː は asɹ̥bɹ̥taː のようにも聞こえる)	S,M
N-173-4	共通語	学校で　遊んで、家に　帰った。	
N-173-4	池間	gakkoːɴ aɕibiː jaːŋkai ikitai	M,Y,S,T
N-173-4	狩俣	gakkoːŋ̩gi asɹbiɕi̥ti jaːŋ̩kai kstaᶻɹ　(ᶻɹ の摩擦弱い)	N,D,U
N-173-4	与那覇	gakkoːndu appitti jaːnkeː kstaː (「帰った」でなく「来た」になっている)	H
N-173-4	来間	gakkᵘoːŋ aspɹtti jaːŋkeː ʦɹ̥taɹ　(ᵘo は曖昧な二重母音)	K,I,T
N-173-4	宮国	gakkoːŋ asɨpittɕidu jaːŋkai kˢɨtaː	T,N
N-173-4	砂川	gakkoːŋ asɨ̞pittidu jaŋkai kˢɨːtaᶻɨ	N,U,D
N-173-4	保良	gakkoːndu asɹ̞pittɕiː jaːŋkai kɹ̥taː (asɹ̞pittɕiː は asɹ̥bittɕiː のようにも聞こえる)	S,M
N-173-5	共通語	外で　遊んで　こい。	
N-173-5	池間	aɾaɴ aɕibiː kuː	M,Y,S,T
N-173-5	狩俣	pukaŋ̩gi asɹbi kuː	N,D,U
N-173-5	与那覇	aɾaː iki appi kuː	H
N-173-5	来間	pu̥kaŋ aspɹ kuː	K,I,T
N-173-5	宮国	pʰu̥kaɴ asɨpi kuː	T,N
N-173-5	砂川	pukaŋ asɨ̞pi kuː	N,U,D
N-173-5	保良	aɾaːŋki asɹ̞piː kuː (asɹ̞piː は asɹ̥biː のようにも聞こえる)	S,M
N-174-1	共通語	この　酒は　すぐに　酔う。	
N-174-1	池間	kunu sḁkʲaː sugu bʲuːi	M,Y,S,T
N-174-1	狩俣	ɕu̥kʲaː piŋ̩kanu maːɕinai bʲuː	N,D,U

N-174-1	与那覇	kunu sakjaː nnamantidu bjuː	H
N-174-1	来間	kunu sḁkʲaː sugudu bʲuː	K,I,T
N-174-1	宮国	kunu sḁke̥a sugu bʲuː dusɨː	T,N
N-174-1	砂川	kunu sḁkjaː sɨgudu bjuː	N,U,D
N-174-1	保良	kunu sḁkʲaː sugudu bʲuː	S,M
N-174-2	共通語	彼は　どんなに　飲んでも　酔わない。	
N-174-2	池間	kaɾaː ĩĩɕiː numammai bʲuːiɴ	M,Y,S,T
N-174-2	狩俣	kanu psto: uposa numumai {bʲuːiŋ̩ / bijuːiŋ̩}	N,D,U
N-174-2	与那覇	kanu pstaː noːsi numjaːmeː bjaːn	H
N-174-2	来間	kaɾʲaː noːsi numʲaːmeː bʲoːŋ	K,I,T
N-174-2	宮国	kaɾea noˀobaɕi no̯mibam bʲoːŋ	T,N
N-174-2	砂川	kaɾjaː isḁki numibaŋ bjoːŋ	N,U,D
N-174-2	保良	kaɾʲaː nabaɕiː numaɕaːmaidu bʲaːɴ (numaɕaːmaidu は「飲ませても」)	S,M
N-174-3	共通語	おとといは　たくさん　飲んで　酔った。	
N-174-3	池間	miːkanainna ippai numiː bʲuːitai	M,Y,S,T
N-174-3	狩俣	putuduɲza upoːsa numidu bʲuːtaɲ	N,D,U
N-174-3	与那覇	ututuzza masjeː numittidu bjuːtaː	H
N-174-3	来間	butu̥tuːza maɕaːŋ numitti bʲuːtaɲ	K,I,T
N-174-3	宮国	butu̥tuzza jaˀudake̯ no̯mittɕido bʲoːtaː	T,N
N-174-3	砂川	{butʂutuzza / bututuzza} jaudaki numittidu bjuːtaᶻɨ	N,U,D
N-174-3	保良	bututuɲza upaːtɕi numittɕidu bʲuːtaː (「おととい」は ututuɲza、「たくさん」は jamaka̯sa とも)	S,M
N-174-4	共通語	彼は　酔って、昨日の　ことを　忘れている。	
N-174-4	池間	miːkanainna ippai numiː bʲuːitai	M,Y,S,T
N-174-4	狩俣	putuduɲza upoːsa numidu bʲuːtaɲ	N,D,U
N-174-4	与那覇	ututuzza masjeː numittidu bjuːtaː	H
N-174-4	来間	butu̥tuːza maɕaːŋ numitti bʲuːtaɲ	K,I,T
N-174-4	宮国	butu̥tuzza jaˀudake̯ no̯mittɕido bʲoːtaː	T,N
N-174-4	砂川	{butʂutuzza / bututuzza} jaudaki numittidu bjuːtaᶻɨ	N,U,D
N-174-4	保良	bututuɲza upaːtɕi numittɕidu bʲuːtaː	S,M
N-174-5	共通語	酒を　飲んで　酔って　しまった。	
N-174-5	池間	sakʲaː numiː bʲuːi nʲaːɴ	M,Y,S,T
N-174-5	狩俣	bʲuːi nʲaːŋ̩	N,D,U

N-174-5	与那覇	sakjaː numittidu bjuːi utaː	H
N-174-5	来間	sḁkʲaː numitti bʲuinʲaːŋ	K,I,T
N-174-5	宮国	sḁkʰe̥o nomittɕi (du) bʲoːjo̞ːtaː	T,N
N-174-5	砂川	sḁkjuː numiːdu bjuːi njaːŋ	N,U,D
N-174-5	保良	sakʲaː numittɕidu bʲuːi nʲaɴ	S,M
N-175B-1	共通語	毎日　髪を　洗う。	
N-175B-1	池間	mainitɕi akau aɾau	M,Y,S,T
N-175B-1	狩俣	mainitʦtu kaɾa t ɕɾba aɾoː	N,D,U
N-175B-1	与那覇	mainitsɾ kaɾaddzu aɾoː	H
N-175B-1	来間	mainitsɾ kaɾattɕu aɾoa （oa は曖昧な二重母音）	K,I,T
N-175B-1	宮国	maʔinitsɨ kaɾadʑo̞ aɾau	T,N
N-175B-1	砂川	mainitsɨdu kaɾatʦu aɾau	N,U,D
N-175B-1	保良	itsɾːmaidu kaɾazuu aɾɔʊ	S,M
N-175B-2	共通語	祖父は　毎日は　髪を　洗わない。	
N-175B-2	池間	ujaː mainitɕi akaubaː aɾaːɴ	M,Y,S,T
N-175B-2	狩俣	obaja ɡabam̩maː kaɾatsᶻɾba mainitsɾ̥ aɾaːŋ̩	N,D,U
N-175B-2	与那覇	sjuːja mainitsɾ kaɾaddzubaː aɾaːn	H
N-175B-2	来間	ɕuːja mainitsɾ kaɾattɕuba aɾaːŋ	K,I,T
N-175B-2	宮国	ɕuːja maʔinittsa kaɾadʑuba aɾaːŋ	T,N
N-175B-2	砂川	ʃuːja mainittsa kaɾattsuba aɾaːŋ	N,U,D
N-175B-2	保良	ɕuːja {mainʲitʦa / mainʲitʦaː} kaɾazuːba aɾaːɴ (mainʲitʦaː は最近の言い方)	S,M
N-175B-3	共通語	手と　足を　洗った。	
N-175B-3	池間	tiːtu haddʑu aɾaitai	M,Y,S,T
N-175B-3	狩俣	tiːdu pagᶻɾudu {aɾoːdan / aɾoːdaɾ}	N,D,U
N-175B-3	与那覇	tiːtu pagzzubaː {aɾoː dusɾtaː/aɾoːtaː}	H
N-175B-3	来間	tiːtu pazutuː aɾoːtaɾ	K,I,T
N-175B-3	宮国	tɕiːtu pagɨːtu aɾautaː	T,N
N-175B-3	砂川	tiːtu pagᶻɨzu aɾautaᶻɨ	N,U,D
N-175B-3	保良	tɕiːtu pazɾudu aɾɔʊta(ː)	S,M
N-175B-4	共通語	手を　洗って、ご飯を　食べろ。	
N-175B-4	池間	tiːju aɾaiː munuː fai	M,Y,S,T
N-175B-4	狩俣	tiːja aɾaiɕi̥ti munuː {ɸai / fai}	N,D,U
N-175B-4	与那覇	tiːbaː aɾeːttidu munuːbaː feː	H

N-175B-4	来間	tiː araitti munu feː	K,I,T
N-175B-4	宮国	ʦiːo̞ araittʦi kara monoba ɸai	T,N
N-175B-4	砂川	tiːju {araitti / araittikara} {mazzu / maᶻɨzu} fai	N,U,D
N-175B-4	保良	ʦiːju araittʦi munuːba fai	S,M
N-175B-5	共通語	顔も　洗って　こい。	
N-175B-5	池間	mihanaumai {arai / sɿ̞miː / sɯ̞miː} kuː	M,Y,S,T
N-175B-5	狩俣	mipanoː arai kuː	N,D,U
N-175B-5	与那覇	mipanoːmeː areː kuː	H
N-175B-5	来間	mipanoa arai ku̞ː（oa は曖昧な二重母音）	K,I,T
N-175B-5	宮国	mipanao̞ {araittʦi / arai} ko̞ː	T,N
N-175B-5	砂川	mipanau arai kuː	N,U,D
N-176-1	共通語	暑い　ときは　帽子を　かぶる。	
N-176-1	池間	atʦukai tukʲanna {boːɕuː / buːɕuː} {kavvi / kaʊʊi}	M,Y,S,T
N-176-1	狩俣	atʦïkai tu̥kinna boːɕiu kavvi	N,M
N-176-1	砂川	atʦɨkaᶻɨ tukjaːna boːʃuː kaʊ	N,U,D
N-176-1	保良	atʦɿːatʦɿnu tu̥kʲaːn̩na boːɕuː {kaʊ̯ / kaf̩}	K,K,Y,M
N-176-1	国仲	atʦɿː tu̥kʲaːɴna boːɕoo kaʊ̯ （ʊ̯ は本人は仮名のウだと言っている）	N
N-176-2	共通語	誰も　くば笠を　かぶらない。	
N-176-2	池間	tarumai kubagasaubaː {kavvaɴ / kaʊʊaɴ}	M,Y,S,T
N-176-2	狩俣	tarumai kasauba kavvaɴ	N,M
N-176-2	砂川	toːmai kubagasauba kaʊʊaŋ	N,U,D
N-176-2	保良	taːmai kubagasaubaː kav̩vaŋ	K,K,Y,M
N-176-2	国仲	tarɯmai ko̞bagasao̞ kav̩vaɴ	N
N-176-3	共通語	若い　ころは　くば笠を　かぶった。	
N-176-3	池間	bakakaikʲaː kubagasaubaː kavvitai	M,Y,S,T
N-176-3	狩俣	bakaːsï̥kjaːja kasauba kaudai (kavvi utai かぶっていた。)	N,M
N-176-3	砂川	baxakaᶻɨkjaːja kubagasauba {kaʊtaᶻɨ / kaʊdu} si̥taᶻɨ	N,U,D
N-176-3	保良	bakaːbakanu tukʲaːn̩na kubagasau kav̩taː	K,K,Y,M
N-176-3	国仲	bakʰḁmununu juːɾʲaɴna ko̞bagasao̞ kaʊtal̩ （kʰ は x に近い、少し奥寄り。l̩ は舌尖見えている。狭い o と u の区別は厳密ではない（以下同））	N
N-176-4	共通語	くば笠を　かぶって、ぞうりを　はいた。	
N-176-4	池間	kubagasaː kavviː sabau mmitai	M,Y,S,T

N-176-4	狩俣	kasau kavvidu sabo:｛fundai / hundai｝(fummi は「はくか？」の意)	N,M
N-176-4	砂川	kubagasau kaʊʊitti sabau fu̥ntaᶻɨ	N,U,D
N-176-4	保良	kubagasau kavˌvittɕi sabau fʊˌmˌta:	K,K,Y,M
N-176-4	国仲	kubagasao̞ kavvi:du sabao̞ ɸumˌtalˌ	N
N-176-5	共通語	おまえも　くば笠を　かぶって　みろ。	
N-176-5	池間	vvamai kubagasau kavvi mi:ɾu	M,Y,S,T
N-176-5	狩俣	vvamai kasau kavvi mi:ɾu	N,M
N-176-5	砂川	ʊʊamai kubagasau kaʊʊi mi:ɾu	N,U,D
N-176-5	保良	vˌvamai kubagasau kavˌvi: mi:ɾu	K,K,Y,M
N-176-5	国仲	ɯvamai kubagasao̞ kavvi: mi:ɾu	N
N-176B-1	共通語	夜は　戸を　閉じる。	
N-176B-1	池間	junaka: jadu: ffi	M,Y,S,T
N-176B-1	狩俣	junainna jaduba ɕimiɾu	N,M
N-176B-1	保良	junainna jadu:du fʊˌ: (唇歯の接近音が母音のように機能している)	K,K,Y,M
N-176B-1	国仲	{julja / julˌlʲa} jaduo̞ ɕimidʑi	N
N-176B-2	共通語	今日は　暑いから　戸を　閉じない。	
N-176B-2	池間	kʲu:ja atsukaiba jadu:ba: ffadʑa:ɴ （志向形）＜cf.＞ kanu çitu: itsmai jadu:ba: ffaɴ （あの人はいつも戸を閉じない）	M,Y,S,T
N-176B-2	狩俣	kju:ba atsïkaɾiba {jadu:ba / jaduba ɕimiɴ}	N,M
N-176B-2	保良	kʲu:ja atskaɾiba jadu:ba: ffaŋˌ	K,K,Y,M
N-176B-2	国仲	kʲu:ja atsɿkajba jado̞o ɕimiɾu (「閉じろ」と回答した)	N
N-176B-3	共通語	ゆうべは　父が　戸を　閉じた。	
N-176B-3	池間	jubʲa: zzaga jadu: ffitai	M,Y,S,T
N-176B-3	狩俣	ju:bja: uja:du jaduba ɕimidai	N,M
N-176B-3	保良	jubʲa: ujagadu jadu: fʊˌ:ta:	K,K,Y,M
N-176B-3	国仲	{ju:beʲaa / jubja:} ojagadu jaduo̞ ɕime̞talˌ	N
N-176B-4	共通語	先生が　戸を　閉じて、さきに　行った。	
N-176B-4	池間	ɕiĩɕi:ga jadu: ffi: sadaɾi: hatai	M,Y,S,T
N-176B-4	狩俣	ɕiɪ̃ɕi:gadu jadu: ɕimi sakiŋ ŋgi	N,M
N-176B-4	保良	ɕinˌɕi:gadu jadu: ffˌittɕi satsɿnˌ pizˌta:	K,K,Y,M
N-176B-4	国仲	ɕiɴɕi:ga jado̞o ɕimii sadaɾe̞: pʲalˌtalˌ	N
N-176B-5	共通語	おまえが　閉じて　こい。	

N-176B-5	池間	vvaɡa ffiː kuː	M,Y,S,T
N-176B-5	保良	vvaɡa ffi kuː	K,K,Y,M
N-176B-5	国仲	ʷvaɡa {ɕimii / ɕimi} ko̪ː	N
N-177-1	共通語	弟は　一人で　寝る。	
N-177-1	池間	uttuː {taukaːçiː / taʊkaːçiː} nʲivvi	M,Y,S,T
N-177-1	保良	utu̥taː taʊ̩kʲaːdu niv̩	K,K,Y,M
N-177-1	国仲	o̪ttoo taᵛkʲaːdo {nivviɯ / niv̩vijɯ / niv̩vʲɯl̩ }（確認したがこれのみ）	N
N-177-2	共通語	妹は　一人では　寝ない。	
N-177-2	池間	uttuː {taukaːçiːja / taʊkaːçiːja} nʲivvaɴ	M,Y,S,T
N-177-2	保良	utu̥taː taʊ̩kʲaːja niv̩vaŋ̩	K,K,Y,M
N-177-2	国仲	{ottoo / miduɴna} taᵛkʲaːdo nivvaɴ	N
N-177-3	共通語	ゆうべは　二人で　寝た。	
N-177-3	池間	juːbʲaː ftaːçiː nʲuːtai	M,Y,S,T
N-177-3	保良	jubʲaː {ftaːz̩du / ftaɿdu} niʊtaː	K,K,Y,M
N-177-3	国仲	jubeʲaa ɸutaːl̩do̪ nivtal̩	N
N-177-4	共通語	９時に　寝て、８時に　起きた。	
N-177-3	池間	kuʥiɴ nivviː haʨiʥiɴ ukitai	M,Y,S,T
N-177-3	保良	kuʥin nivvitʨidu haʨiʥin ukitaː	K,K,Y,M
N-177-3	国仲	kuʥiɴ niv̩vii haʨiʥiɴ okital̩	N
N-177-4	共通語	今日は　一人で　寝て　みろ。	
N-177-4	池間	kʲuːja {taukʲaːçiː / taʊkʲaːçiː} nivvi miːɾu	M,Y,S,T
N-177-4	保良	kʲuːja taʊkʲaː nivvi miːɾu	K,K,Y,M
N-177-4	国仲	kʲuːja taᵛkʲaː niv̩viː miːɾu	N
N-178-1	共通語	祖父は　毎日　６時に　起きる	
N-178-1	池間	ujaː mainiʨi ɾukuʥiɴ ukiː	M,Y,S,T
N-178-1	保良	ɕuːja mainʲiʦɿ ɾokuʥindu uki	K,K,Y,M
N-178-1	国仲	ɕuːja mainiʦɿ ɾokuʥiɴ {okil̩ / okil̩li}	N
N-178-2	共通語	弟は　まだ　起きない。	
N-178-2	池間	uttuː nnaːɡʲaː ukiɴ	M,Y,S,T
N-178-2	保良	utu̥taː n̩nʲada ukuŋ̩	K,K,Y,M
N-178-2	国仲	o̪ttoo m̩mada okiɴniː	N
N-178-3	共通語	父も　６時に　起きた。	
N-178-3	池間	zzamai ɾukuʥiɴ ukitai	M,Y,S,T

N-178-3	保良	ujamai ɾokuʥindu ukit̥aː	K,K,Y,M
N-178-3	国仲	ojamai ɾokuʥiɴ o̯kital̩	N
N-178-4	共通語	早く　起きて、それから　畑に　行った。	
N-178-4	池間	çaːçiː ukiː uikaɾa haiŋkai ikit̥ai	M,Y,S,T
N-178-4	保良	pʲaːɕi uki̥ᵗʨidu uikaɾa paɾiŋ̩kai iks̩taː	K,K,Y,M
N-178-4	国仲	pʲaːɕiː o̯kii uikaɾa paiɴkai pʲal̩tal̩	N
N-178-5	共通語	おまえも　早く　起きて　こい。	
N-178-5	池間	vvamai çaːçiː ukiː kuː	M,Y,S,T
N-178-5	保良	v̩vamai pʲaːpʲaː ukiː kuː	K,K,Y,M
N-178-5	国仲	ᵘvamai pʲaːɕiː okii koː	N
N-179-1	共通語	高校生は　制服を　着る。	
N-179-1	池間	koːkoːɕeija ɕeːfkuːdu {ʦɿː / ʦɿi}	M,Y,S,T
N-179-1	保良	koːkoːɕeija ɕeif̩kuːdu kˢɿː	K,K,Y,M
N-179-1	国仲	koːkoːsʲej̩ja {sʲei̯ɸukudu / sʲei̯ɸukuu} {ʦɿː / ʦɿːi}	N
N-179-2	共通語	その服は　古いから　誰も　着ない。	
N-179-2	池間	unu fkuː jaɾimunujaiba taɾumai tʨaɴ	M,Y,S,T
N-179-2	保良	unu f̩kaː ɡabakaɾiba taːmai ks̩s̩aŋ	K,K,Y,M
N-179-2	国仲	unu ɸu̥kuu jaɾimunujaiba taɾumai ʔtaɴ	N
N-179-3	共通語	それは　昨日　着た。	
N-179-3	池間	uɾaː n̩nu ʦɿitai	M,Y,S,T
N-179-3	保良	unu fkʷaː (その服は) ʦɿnuːdu ks̩s̩taː	K,K,Y,M
N-179-3	国仲	uɾʲaː {ʦɿnuu / ʦɿnu / ʦɿnudu} ʦɿːtaː	N
N-179-4	共通語	私は　赤い　服を　着て、妹は　青い　服を　着た。	
N-179-4	池間	baː akafkuː ttiː uttuː aufkuː {ʦɿitai / ttitai}	M,Y,S,T
N-179-4	保良	bajaː aka f̩kʷaː ki̥ɕitʨidu utu̥taː ao f̩kuːdu ks̩s̩taː	K,K,Y,M
N-179-4	国仲	baː akajuː ɸukuu ʨiːdu ottoɴna aojuː ɸukuu ʦɿːtaː	N
N-179-5	共通語	おまえも　ちょっと　着て　みろ。	
N-179-5	池間	vvamai çiːʨaɡama ttiː miːɾu	M,Y,S,T
N-179-5	保良	v̩vamai piːtta ki̥ɕi miːɾu	K,K,Y,M
N-179-5	国仲	ᵘvamai ipiːʨaɡama ʨiː miːɾu	N
N-180-1	共通語	そこには　先生が　座る。	
N-180-1	池間	uman̩na ɕiĩɕiːnudu biʑi	M,Y,S,T
N-180-1	保良	uman̩na ɕin̩ɕiːɡadu bᶻɿː	K,K,Y,M
N-180-1	国仲	omaɴna ɕiɴɕiːɡa {bɿː / biʑi / bɿzɿ}	N

N-180-2	共通語	座敷には　だれも　座らない。	
N-180-2	池間	umanˌna ɕiĩɕiːnudu biʑi	M,Y,S,T
N-180-2	保良	ʥasˌkˢɿnˌna taːmai {bizzaŋ / bzˌzaŋ}	K,K,Y,M
N-180-2	国仲	omaɴna ɕiɴɕiːga {bɿː / biʑi / bɿzɿ}	N
N-180-3	共通語	昨日は　校長先生が　座った。	
N-180-3	池間	nˌnuː koːʨoːɕiĩɕiːnudu biːtai	M,Y,S,T
N-180-3	保良	ʦɿnuːja koːʨoːɕinˌɕiːgadu {bᶻɿːtaː / bzːtaː}	K,K,Y,M
N-180-3	国仲	ʦɿnuu koːʨoːɕiɴɕiːga bɿːtaː	N
N-180-4	共通語	先生は　座って、子どもたちは　立っている。	
N-180-4	池間	ɕiĩɕiːja biʑiː jaɾaimmʲaː taʨuːi	M,Y,S,T
N-180-4	保良	ɕinˌɕiːja biʑˌʑitʨidu ɕiːtaː tḁʨuːtaː	K,K,Y,M
N-180-4	国仲	ɕiɴɕiːja biʑiːdo {jaɾabiɴmʲaa / jaɾabitaa} {taʨii o̱talˌ / taʨio̱talˌ } (ゆっくり言ったときのみ i が長かったようだ)	N
N-180-5	共通語	おまえも　座って　みろ。	
N-180-5	池間	vvamai biʑiː miːɾu	M,Y,S,T
N-180-5	保良	vˌvamai biʑiː miːɾu	K,K,Y,M
N-180-5	国仲	ʷvamai biʑiː miːɾu	N
N-181-1	共通語	毎日　テレビを　見る。	
N-181-1	池間	mainiʨi teɾebʲuː miːjui	M,Y,S,T
N-181-1	保良	maiːnʲiʦɿ teɾebʲuːdu miː	K,K,Y,M
N-181-1	国仲	{mainitɕa / mainitɕi} teɾebio / mio̱lˌ　<cf.> kjuuja terebio miː ʥi (今日はテレビを見る)	N
N-181-2	共通語	父は　野球は　見ない。	
N-181-2	池間	zzaː jakʲuːjubaː miːɴ	M,Y,S,T
N-181-2	保良	ujaː jakʲuːjubaː mʲuːŋˌ	K,K,Y,M
N-181-2	国仲	ojaː {jakʲuːjubaa / jakʲuːjuba} miːɴ	N
N-181-3	共通語	昨日　虹を　見た。	
N-181-2	池間	nˌnuː imbauju miːtai	M,Y,S,T
N-181-2	保良	ʦɿnuː ʨimbavvu miːtaː	K,K,Y,M
N-181-2	国仲	ʦɿnoo {niʥio̱ / niʥoo} miːtalˌ	N
N-181-4	共通語	映画を　見て、家に　帰った。	
N-181-4	池間	eigau miː jaːŋkai ikitai	M,Y,S,T
N-181-4	保良	eigau miːtʨidu jaːŋˌkai kˢɿːtaː	K,K,Y,M
N-181-4	国仲	eːgaː miːdu jaːɴkai ɴgitalˌ	N

N-181-5	共通語	心配だから　船を　見て　こい。	
N-181-4	池間	ɕibajaiba fnʲuː miː kuː	M,Y,S,T
N-181-4	保良	ɕaː jaɾiba fn̩ʲuː miː kuː	K,K,Y,M
N-181-4	国仲	{ʃuwaː / ɕiwaː} ɕiːduiba ɸunʲuu miː kuː　ɕi	N
N-182-1	共通語	彼は　毎日　同じことを　言う。	
N-182-1	池間	kaɾaː mainitɕi junukutuː addʑi	M,Y,S,T
N-182-1	保良	kaɾʲaː mainʲitsɾ junu munuz̩zu du az̩	K,K,Y,M
N-182-1	国仲	kaɾeaː mainitsɾ jo̞no̞goː no kʰo̞toodo al̩	N
N-182-2	共通語	祖母は　嘘は　言わない。	
N-182-2	池間	haːmmaː daɾakaubaː azzaɴ	M,Y,S,T
N-182-2	保良	m̩maː daɾakuːbaː az̩zaŋ	K,K,Y,M
N-182-2	国仲	m̩maa daɾaɸuba {azzaɴ / al̩zaɴ} (z は歯音でなく歯茎に接近、l の舌への接着が弱まったものかと思う)	N
N-182-3	共通語	友達は　嘘を　言った。	
N-182-3	池間	dus̩taː daɾakau aitai	M,Y,S,T
N-182-3	保良	dus̩sa daɾakuːdu az̩taː	K,K,Y,M
N-182-3	国仲	dosɾ̥sa daɾaɸudu al̩ ＊確認したがこれのみ	N
N-182-4	共通語	「ありがとう」と　言って、帰った。	
N-182-4	池間	sdigaɸuː tti addʑiː {ikit̥ai / hatai}	M,Y,S,T
N-182-4	保良	puk̥aɾassa tɕidu azʑittɕi piztaː	K,K,Y,M
N-182-4	国仲	pukaɾassa tɕi　al̩ʑii ɴgital̩ (al̩ʑii の l̩ は弱い)	N
N-182-5	共通語	父に　「夕飯だよ」と　言って　こい。	
N-182-5	池間	zzaŋkai juidoː ti addʑiː kuː	M,Y,S,T
N-182-5	保良	ujaŋkai juz̩zu faiːtɕi (夕食を食べろと) azʑiː kuː	K,K,Y,M
N-182-5	国仲	o̞jaɴkai juːɮ tɕi aʑ (上付) ʑiː kuː	N
N-183-1	共通語	蝉は　すぐに　死ぬ。	
N-183-1	池間	tsɾmʲaː sugu ɕinʲi	M,Y,S,T
N-183-1	保良	gaːɾaː sɾgu {sɾŋ̩ / s̩n̩}	K,K,Y,M
N-183-1	国仲	{gaːl̩za / gaːzza} sugudu sɾɴ ({gaːl̩za / gaːzza} の l̩ は接着が弱い。z は歯音でなく歯茎に接近)	N
N-183-2	共通語	ゴキブリは　なかなか　死なない。	
N-183-2	池間	biːjaː nantuga ɕinaɴ	M,Y,S,T
N-183-2	保良	kuːmujaː namajaskaɾʲaː {sɾnaŋ / s̩naŋ̩}	K,K,Y,M
N-183-2	国仲	koːmɽjaː joːiɴna sɾnaɴ	N

N-183-3	共通語	ヘビが　車に　ひかれて　死んだ。	
N-183-3	池間	haunu kuɾumaɴ hikaiː ɕinʲi nʲaːɴ ＜cf.＞(ねこが死んだのでうめた) majunu sɪntaiba udʑɪmitai	M,Y,S,T
N-183-3	保良	paʊ̯nudu kuɾumaŋ faːsaɾiː {sɪn̩taː / sn̩taː}	K,K,Y,M
N-183-3	国仲	{pab / paʊ} nodo̯ kuɾumaɴ pˢɪkaii sɪɴtal̩ (pˢɪ の s は余り強くない。帯気ぐらい)	N
N-183-4	共通語	ゴキブリは　死んで、ネズミも　死んでいる。	
N-183-4	池間	biːjaː ɕinʲiː jumunumai ɕinʲiːjui	M,Y,S,T
N-183-4	保良	kuːmujamai sɪnʲittɕidu jumuɾuma sɪnʲuː	K,K,Y,M
N-183-4	国仲	koːmɲja mai sɪnii juːmunu mai sɪniol̩	N
N-183-5	共通語	カエルも　死んで　しまった。	
N-183-5	池間	untamai ɕinʲiː nʲaːɴ	M,Y,S,T
N-183-5	保良	fnatamai sɪnʲi {pigaiztaː / piz̩taː}	K,K,Y,M
N-183-5	国仲	uɴta mai sɪniː nʲaːɴ	N
N-184-1	共通語	米が　たくさん　ある。	
N-184-1	池間	mainu {ippai / haːsa} aɾiːjui	M,Y,S,T
N-184-1	保良	maɪnudu upaːɕi aɪ	K,K,Y,M
N-184-1	国仲	mal̩ nodo opaːsa alʲul̩	N
N-184-3	共通語	昔　ここには　井戸が　あった。	
N-184-3	池間	ŋkʲaːndu umanna kaːnu aɾuːtai	M,Y,S,T
N-184-3	保良	ŋ̩kʲaːn̩na kuman̩na tɕɪaːgʲaːnudu ataɪ	K,K,Y,M
N-184-3	国仲	ɴkʲaːɴna komaɴna kaːnodo atal̩	N
N-184-4	共通語	東に　学校が　あって、西に　公民館が　ある。	
N-184-4	池間	agaiɴ gakkoːnu aɾiː nsɪnn̩na koːmiŋkandu aɾiːjui	M,Y,S,T
N-184-4	保良	agaɪŋ gakkoːja 学校は aɾittɕidu iz̩nna bummʲaːnudu ataɪ	K,K,Y,M
N-184-4	国仲	agal̩ ɴna gakkoːga aɾii {ilʲiɴna / il̩ɴna} koːmiɴkaɴ nodo al̩	N
N-184-5	共通語	薬が　あって、助かった。	
N-184-5	池間	ffʊinu aɾiː taskaitai	M,Y,S,T
N-184-5	保良	fsuɪnu aɾiːdu tas̩kaɪtaː	K,K,Y,M
N-184-5	国仲	kus̥ul̩ {nu / ga} aɾiido taskaɾiol̩（ga の方がいい）	N
N-185-1	共通語	塩が　ない。	
N-185-1	池間	maːsunu nʲaːɴ	M,Y,S,T
N-185-1	保良	maːsunudu nʲaːŋ̩	K,K,Y,M
N-185-1	国仲	maːso ga nʲaːɴ	N

N-185-2	共通語	砂糖も　なかった。	
N-185-2	池間	sḁtamai {nʲaːntaɴ / nʲaːttaɴ / nʲaːndaɴ / nʲaːddaɴ}	M,Y,S,T
N-185-2	保良	sḁtamai nʲaːttam̩	K,K,Y,M
N-185-2	国仲	sata mai nʲaːɴ	N
N-185-3	共通語	包丁が　なくて、切れなかった。	
N-185-3	池間	kḁtananu naːda tɕaddaɴ	M,Y,S,T
N-185-3	保良	kḁtananu nʲaːdanaɕidu kidamaɾuttam̩	K,K,Y,M
N-185-3	国仲	kʰḁtana no nʲaːɴ niba kiɾattaːɴ（ kʰ は x に近い。奥寄り）	N
N-186-1	共通語	我が家には　犬が　いる。	
N-186-1	池間	bantiɡa jaːnna innu {uɾijui / uɾiːui}	M,Y,S,T
N-186-1	保良	ban̩taɡa jaːn̩na in̩nudu uz̩	K,K,Y,M
N-186-1	国仲	baɴtɕiɡa jaːɴna iɴ nodo̯ ol̩	N
N-186-2	共通語	隣の家には　犬は　いない。	
N-186-2	池間	tunainu jaːnna inna miːɴ	M,Y,S,T
N-186-2	保良	tunaɲnu jaːn̩na in̩na uɾaŋ̩	K,K,Y,M
N-186-2	国仲	satono jaːɴna iɴna miiɴ	N
N-186-3	共通語	昔は　猫も　いた。	
N-186-3	池間	ŋkʲaːnna majumai uɾuːtai	M,Y,S,T
N-186-3	保良	ŋ̩kʲaːn̩na majumai utaː	K,K,Y,M
N-186-3	国仲	ɴkʲaːɴna maju mai do o̯tal̩	N
N-186-4	共通語	彼は　弟が　いて、私は　兄が　いる。	
N-186-4	池間	kaɾaː uttunu uɾiː baː sudʑanu {uɾuːi / uɾijui}	M,Y,S,T
N-186-4	保良	kain̩na utu̯taː uɾittɕidu ban̩na suduanudu uz̩	K,K,Y,M
N-186-4	国仲	kaɾeaː ottono oɾe̯ːdo baː {ada / aːda} ɡa ol̩	N
N-186-5	共通語	ここに　いて　ください。	
N-186-5	池間	umaɴ uɾi {fiː / ffiː} samati	M,Y,S,T
N-186-5	保良	kumaŋ uɾi fiːɾu	K,K,Y,M
N-186-5	国仲	ko̯maɴ oɾe̯ː ɸiːɾu	N
N-187-1	共通語	彼は　酒を　飲むと　変なことを　する。	
N-187-1	池間	kaɾaː sḁkʲuː numutuː çin̩nakutuː {assɿ̥ / aɕɕi}	M,Y,S,T
N-187-1	保良	kaɾʲaː sḁkʲuː num̩tɕiḁkaː pin̩na ku̯tuːdu sɿːː	K,K,Y,M
N-187-1	国仲	kʰaɾeaː sḁkʰeo̯ nom̩ tɕiɡaa piɴnakʰo̯toodo asɿ (ea は境界が曖昧)	N
N-187-2	共通語	彼は　今日は　何も　しない。	

N-187-2	池間	kaɾaː kʲuːja naumai ɸuɴ	M,Y,S,T
N-187-2	保良	kaɾʲaː kʲuːja naːmai suːŋ̩	K,K,Y,M
N-187-2	国仲	kaɾeaː kʲoːja naɯjaː tom̩ma {ahoɴ / asoɴ}（ ea は境界が曖昧）	N
N-187-3	共通語	昨日は　たくさん　仕事を　した。	
N-187-3	池間	unuː haːsa s̩kamau {asɾtai / aɕitai}	M,Y,S,T
N-187-3	保良	ʦɾanuːja upaːɕidu sɾgutuː sɾːtaː	K,K,Y,M
N-187-3	国仲	ʦɾanoo {opaːsʲa / opaːsa} sɾgoˬtoo {asʲaːl̩ / astaːl̩}	N
N-187-4	共通語	たくさん　仕事を　して、遊びに　行った。	
N-187-4	池間	haːsa s̩kamaː çiː aɕuːga ikitai	M,Y,S,T
N-187-4	保良	upaːɕi skutaː ɕiːtʦidu appsga piz̩taː	K,K,Y,M
N-187-4	国仲	opaːsa sɾgoˬtoo ɕiːdoˬ asoˬʊga pʲal̩tal̩	N
N-187-5	共通語	休んでないで　仕事を　しろ。	
N-187-5	池間	jukuːda s̩kamau assu	M,Y,S,T
N-187-5	保良	jukaːdanaɕiː skutuː ɕiːɾu	K,K,Y,M
N-187-5	国仲	jukuu da sɾgoˬtoo asso	N
N-187-6	共通語	学校で　勉強して　こい。	
N-187-6	池間	jukuːda s̩kamau assu	M,Y,S,T
N-187-6	保良	gakkoː iki beŋkʲoːju ɕi: kuː	K,K,Y,M
N-187-6	国仲	jukuu da sɾgoˬtoo asso	N

宮古方言基礎語彙　共通語索引

	〈共通語〉	〈語彙番号〉
あ	青い	a136
	欠伸	a010
	顎先（あご）	a012
	顎（の骨）	a013
	朝（あさ）	a154
	明後日	a161
	あし（脛・足）	b010
	あし(脚)	a033
	あし(足)	a034
	あし(脛)	a035
	明日	a160
	汗	b015
	あそこ	a187
	暖かい	a167
	頭	a001
	穴	b056
	兄	b087
	姉	b088
	油	a095
	網	b098
	雨	a133
	蟻（あり）	a066
	泡	b055
	家	a179
い	烏賊	b058
	息	a009
	行く・去る	a175
	いくつ	b046
	いくら	b039
	石	b122
	板	a117
	いつ	b040
	五つ	b023
	糸	b095
	いとこ	b086
	稲光	a137
	犬	b063
	命	b125
	今	a158
	刺青（いれずみ）	b018
	色	a135
う	上	b135
	植える	a114
	牛	b061
	うそ	b130
	歌	b120
	内	b134
	美しい	a050
	腕	a017
	ウニ（バフンウニ）	a086
	ウニなどの肉・身	a087
	馬	a071
	生まれる	a054
	膿（うみ）	a026
	海	a170
	瓜	a106
	鱗	a082
え	柄（え）	b097

	枝	a111
	海老	b059
	襟	a123
お	尾	a074
	緒	b096
	大きい	b142
	桶	b099
	叔父	a045
	叔父たち	a046
	夫	a051
	音	b119
	男	a058
	同じ	b144
	斧	b102
	帯	a122
	お前	a043
	お前たち	a044
	表（おもて）	b132
	親	b085
	女	a059
か	蚊	a062
	貝	a085
	面（かお）	b007
	鏡	a124
	蔭	a140
	笠・傘	b094
	貸す	b150
	風	a129
	肩	b012
	カタツムリ	a068
	蟹	a084
	金	b117
	金銭（かね）	b118
	鎌	a092
		b103
	釜	b107
	紙	b111
	髪の毛	a002
	亀	a083
	瓶・甕（かめ）	b092
	粥	a096
	痒い	a027
	烏	b066
	体	a037
	皮	b009
き	木	a110
	傷	a024
	煙管（きせる）	b113
	北	a144
	汚い	a181
	昨日	a163
	肝・心臓（きも）	a030
	着物	a121
	今日	a159
	兄弟	b089
	去年	a164
	霧	a152
く	釘	a118
	草	a113
	櫛	a003
	薬	b101
	糞（くそ）	b123
	くださる	b149
	口	a006
	唇	a007
	九人	b037

	首	a015
	蜘蛛	a063
	雲	a132
	蜘蛛の巣	a064
	くるぶし	a036
	鍬	b104
	クワズイモ	a109
こ	睾丸	a040
	肛門	a038
	声	a011
	九つ	b027
	こずえ・砂糖黍の先端	b077
	子供・子孫	a053
	子供（未成年）	a055
	拳	a022
	米	a099
ご	五人	b033
さ	魚	a081
	酒	b079
	砂糖	a090
	砂糖黍	a091
	寒い	a168
	珊瑚礁	a173
	三人	b031
ざ	笊	b105
し	塩	a088
	塩辛い	a089
	舌	a008
	下	b136
	七人	b035
	島	b052
	しゃもじ	b108
	尻	b011
	親戚	b090
じ	地震	a131
	十人	b038
す	鋤	b106
	少し（+指小辞）	b138
	筋	b013
	雀	b607
	捨てる・こぼす	a102
	砂	a174
そ	そこ	a188
	ソテツ	b076
	外	b133
	空	b057
	それ	b147
た	田	b048
	太陽	a141
	たくさん	b140
	竹	b071
	蛸	b064
	竜巻	a130
	種	b074
	食べ物	a094
	食べる	a093
	卵	a079
だ	大工	a119
	だれ	b041
ち	血	a025
	小さい	b141
	力	a018
	乳	a031
	父	a047
	茶碗	a101
	蝶々	a065

つ	杖	b109
	月(天体・暦)	a142
	土	a177
	綱	b112
	角（つの）	a073
	粒	b124
	妻	a049
	爪	b003
	冷たい	a169
	露	a153
て	手	a021
と	戸	a182
	十	b028
	鳥	a077
	鳥の巣	a078
ど	どこ	b042
	どれ	b043
な	菜（な）	b078
	名（な）	b114
	無い	a189
	なぜ	b044
	夏	a166
	七つ	b025
	何	b045
	涙	a005
に	荷（に）	b116
	匂い	b131
	濁る	a171
	西	a145
	虹	a134
	韭（にら）	a104
	庭	a178
	にんにく	a103
ぬ	濡れる	a128
ね	根（ね）	b700
	猫	a069
	鼠	a070
の	鋸	a116
	野原・草原	a108
	蚤	b065
は	歯	b002
	葉	b068
	灰	a126
	蝿	b062
	墓	a186
	歯茎	a014
	橋	b121
	柱	b128
	畑	a107
	鉢	b091
	八人	b036
	鳩	a080
	鼻	b004
	花	b054
	鼻血	b016
	羽	b060
	母	a048
	浜	b053
	速い	a176
	腹	a029
	針	a120
ひ	火	a125
	東	a143
	光	a139
	低い	b143
	髭・毛	a016

	膝	a032
	額	a004
	左	a148
	肘	a023
	人	a060
	一つ	b019
	一人	b029
	病気	b127
	昼	b047
	昼間	a155
び	びろう樹	b075
ふ	夫婦	a052
	福木	a115
	二つ	b020
	二人	b030
	船	a172
ぶ	豚	a075
	豚小屋、便所	b126
	豚などの肉	a076
へ	屁	a039
	臍（へそ）	b005
	糸瓜（へちま）	b084
	箆（へら）	b093
ほ	埃	a180
	星	b049
	穂（ほ）	b069
	帆（ほ）	b115
	骨	a028
ま	前	a149
	前・正面	a184
	枕	b100
	松	b072
	真似（まね）	b129
	眩しい	a138
	豆	b080
	眉	b014
	丸い	b146
み	実	a112
	ミカン	b083
	短い	b145
	水	a127
	味噌	a098
	道	a150
		b050
	三つ	b021
	皆	a061
	南	a146
	嶺	a151
	右	a147
	耳	b008
	ミミズ	a067
む	昔	a165
	麦	b081
	六つ	b024
	胸	b006
	村	a185
め	芽	a105
	目	b001
	姪	a057
	飯	a097
も	も（助詞）	b137
	餅	b082
	もっと	b139
	もの、物	b148
	門	a183
や	雄山羊（やぎ）	a072

	八つ	b026
	山	b051
ゆ	夕方	a156
	指	a020
よ	涎	b017
	四つ	b022
	四人	b032
	夜	a157
ら	来年	a162
ろ	老人	a056
	六人	b034
わ	脇の下	a019
	私	a041
	私たち	a042
	藁（わら）	b073
	椀	a100

宮古方言文法項目 一覧

N-155B-1　鳩も　鷹も　飛ぶ。
N-155B-2　今日は　天気が　悪いから　飛行機は　飛ばない。
N-155B-3　風で　帽子が　飛んだ。
N-155B-4　親鳥が　飛んで、小鳥が　飛んだ。
N-155B-5　そこから　飛んで　みろ。
N-156B-1　みんなで　舟を　漕ぐ。
N-156B-2　誰も　舟を　漕がない。
N-156B-3　昔は　よく　舟を　漕いだ。
N-156B-4　舟を　漕いで、そのあと　休め。
N-156B-5　一人で　舟を　漕いできた。
N-157-1　毎日　海へ　行く。
N-157-2　父は　天気が　悪いから　海へは　行かない。
N-157-3　昨日も　海へ　行った。
N-157-4　海へ　行って、泳いで　きた。
N-157-5　海へは　一人で　行って　こい。
N-158-1　今日は　父が　家に　来る。
N-158-2　今日は　母は　来ない。
N-158-3　昨日　父が　家に　来た。
N-158-4　こっちへ　来て、家に　戻った。
N-158-5　こっちへ　早く　来い。
N-158-5　こっちへ　来て　みろ。
N-159-1　2 月は　よく　雨が　降る。
N-159-2　明日は　雨は　降らない。
N-159-3　昨日は　雨が　降った。
N-159-4　大雨が　降って、日照りが　続いている。
N-159-5　いま　雨が　降っている。
N-159-5　雨が　降って　きた。
N-160-1　みんな　ここで　降りる。
N-160-2　私は　ここでは　降りない。
N-160-3　ここで　バスを　降りた。
N-160-4　バスを　降りて、電話　かけろ。
N-160-5　妹が　バスから　降りて　きた。
N-161-1　猿も　木から　落ちる。
N-161-2　木を　揺らしても　実（蜜柑）は　落ちない。

N-161-3　兄が　木から　落ちた。
N-161-4　兄は　木から　落ちて、今は　病院に　いる。
N-161-5　雨は　天から　落ちて　くる。
N-162-1　猿が　木の実を　落とす。
N-162-2　この　猿は　木の実を　落とさない。
N-162-3　昨日　井戸に　石を　落とした。
N-162-4　帽子を　落として、取りに　行った。
N-162-5　木に　登って　実を　落として　くれ。
N-163-1　馬も　人を　蹴る。
N-163-2　おとなしい　馬は　人を　蹴らない。
N-163-3　昨日　あの　馬は　人を　蹴った。
N-163-4　主（あるじ）を　蹴って、逃げ去った。
N-163-5　その　ボールを　ここに　蹴って　くれ。
N-163B-1　父が　毎日　ゴミを　捨てる。
N-163B-2　祖母は　古い　着物も　捨てない。
N-163B-3　古い　道具は　おととい　捨てた。
N-163B-4　古い　ものは　捨てて、新しい　ものを　買え。
N-163B-5　ゴミを　そこに　捨てて　くれ。
N-164-1　長い　木の　枝を　切る。
N-164-2　夜には　爪を　切らない。
N-164-3　私が　ガジマルは　切った。
N-164-4　その　長い　髪は　切って、お祝いに　行けよ。
N-164-5　この　紐を　三つに　切って　くれないか。
N-165-1　鶏が　逃げないよう　（両）足を　縛る。
N-165-2　足も　羽も　縛らない。
N-165-3　父が　鶏を　縛った。
N-165-4　鶏を　縛って、籠に　入れてね。
N-165-5　おまえが　鶏を　縛って　くれ。
N-166-1　毎日　芋を　掘る。
N-166-2　母親は　今日は　芋を　掘らない。
N-166-3　昔　井戸を　掘った。
N-166-4　穴を　掘って、休め。
N-166-5　あそこの　地面を　掘って　こい。
N-167-1　庭に　荷物を　出す。
N-167-2　雨の　ときには　外には　荷物を　出さない。
N-167-3　友達が　荷物を　外に　出した。
N-167-4　荷物を　外に　出して、それから　帰れ。

N-167-5　早く　荷物を　出して　こい。
N-168-1　弟は　いつも　荷物を　一人で　持つ。
N-168-2　祖母は　荷物を　持たない。
N-168-3　祖父が　むしろを　持った。
N-168-4　父が　酒　持って、母が　食べ物を　持つ。
N-168-5　早く　酒を　持って　こい。
N-169-1　太郎は　いつも　煙草を　買う。
N-169-2　誰も　芋を　買わない。
N-169-3　昨日　魚を　買った。
N-169-4　私が　魚を　買って、友達は　肉を　買った。
N-169-5　油を　買って　こい。
N-170-1　毎日　野菜を　売る。
N-170-2　彼は　自分の　豚を　売らない。
N-170-3　去年　山羊を　売った。
N-170-4　山羊を　売って、豚を　買った。
N-170-5　その　豚を　売って　ください。
N-170B-1　いつも　私は　弟に　お菓子を　やる。
N-170B-2　弟は　兄に　お菓子を　やらない。
N-170B-3　昨日　弟に　飴を　やった。
N-170B-4　馬に　草を　やって、畑に　行った。
N-170B-5　牛に　草を　やって　ごらん。
N-171-1　漁師から　魚を　もらう。
N-171-2　小さい　カニは　誰も　もらわない。
N-171-3　隣の　家から　大根を　もらった。
N-171-4　大きな　魚を　もらって、みんなで　分けた。
N-171-5　親戚から　味噌を　もらって　きた。
N-172-1　喉が　乾いたら　水を　飲む。
N-172-2　私の　夫は　酒を　飲まない。
N-172-3　お茶は　さっき　飲んだ。
N-172-4　薬を　飲んで、早く　寝ろ。
N-172-5　この　薬は　甘いから　飲んで　みなさい。
N-172B-1-1 ここでは　ヘチマを　食べる。
N-172B-1-2 本土の人は　ヘチマを　食べない。
N-172B-1-3 ニガウリは　昨日　食べた。
N-172B-1-4 昼ご飯を　食べて、寝ろ。
N-172B-1-5 夕ご飯は　食べて　きた。
N-172B-2-1 山羊は　草を　食う。

N-172B-2-2 山羊は　紙を　食わない。
N-172B-2-3 猫が　魚を　食った。
N-172B-2-4 魚を　食って、すぐに　逃げた。
N-172B-2-5 全部　食って　しまった。
N-173-1　暗く　なるまで　外で　遊ぶ。
N-173-2　暗く　なったら、誰も　遊ばない。
N-173-3　昨日は　いとこと　遊んだ。
N-173-4　学校で　遊んで、家に　帰った。
N-173-5　外で　遊んで　こい。
N-174-1　この　酒は　すぐに　酔う。
N-174-2　彼は　どんなに　飲んでも　酔わない。
N-174-3　おとといは　たくさん　飲んで　酔った。
N-174-4　彼は　酔って、昨日の　ことを　忘れている。
N-174-5　酒を　飲んで　酔って　しまった。
N-175B-1　日　髪を　洗う。
N-175B-2　祖父は　毎日は　髪を　洗わない。
N-175B-3　手と　足を　洗った。
N-175B-4　手を　洗って、ご飯を　食べろ。
N-175B-5　顔も　洗って　こい。
N-176-1　暑い　ときは　帽子を　かぶる。
N-176-2　誰も　くば笠を　かぶらない。
N-176-3　若い　ころは　くば笠を　かぶった。
N-176-4　くば笠を　かぶって、ぞうりを　はいた。
N-176-5　おまえも　くば笠を　かぶって　みろ。
N-176B-1　夜は　戸を　閉じる。
N-176B-2　今日は　暑いから　戸を　閉じない。
N-176B-3　ゆうべは　父が　戸を　閉じた。
N-176B-4　先生が　戸を　閉じて、さきに　行った。
N-176B-5　おまえが　閉じて　こい。
N-177-1　弟は　一人で　寝る。
N-177-2　妹は　一人では　寝ない。
N-177-3　ゆうべは　二人で　寝た。
N-177-4　９時に　寝て、８時に　起きた。
N-177-4　今日は　一人で　寝て　みろ。
N-178-1　祖父は　毎日　６時に　起きる
N-178-2　弟は　まだ　起きない。
N-178-3　父も　6時に　起きた。

N-178-4　早く　起きて、それから　畑に　行った。
N-178-5　おまえも　早く　起きて　こい。
N-179-1　高校生は　制服を　着る。
N-179-2　その服は　古いから　誰も　着ない。
N-179-3　それは　昨日　着た。
N-179-4　私は　赤い　服を　着て、妹は　青い　服を　着た。
N-179-5　おまえも　ちょっと　着て　みろ。
N-180-1　そこには　先生が　座る。
N-180-2　座敷には　だれも　座らない。
N-180-3　昨日は　校長先生が　座った。
N-180-4　先生は　座って、子どもたちは　立っている。
N-180-5　おまえも　座って　みろ。
N-181-1　毎日　テレビを　見る。
N-181-2　父は　野球は　見ない。
N-181-3　昨日　虹を　見た。
N-181-4　映画を　見て、家に　帰った。
N-181-5　心配だから　船を　見て　こい。
N-182-1　彼は　毎日　同じことを　言う。
N-182-2　祖母は　嘘は　言わない。
N-182-3　友達は　嘘を　言った。
N-182-4　「ありがとう」と　言って、帰った。
N-182-5　父に　「夕飯だよ」と　言って　こい。
N-183-1　蝉は　すぐに　死ぬ。
N-183-2　ゴキブリは　なかなか　死なない。
N-183-3　ヘビが　車に　ひかれて　死んだ。
N-183-4　ゴキブリは　死んで、ネズミも　死んでいる。
N-183-5　カエルも　死んで　しまった。
N-184-1　米が　たくさん　ある。
N-184-3　昔　ここには　井戸が　あった。
N-184-4　東に　学校が　あって、西に　公民館が　ある。
N-184-5　薬が　あって、助かった。
N-185-1　塩が　ない。
N-185-2　砂糖も　なかった。
N-185-3　包丁が　なくて、切れなかった。
N-186-1　我が家には　犬が　いる。
N-186-2　隣の家には　犬は　いない。
N-186-3　昔は　猫も　いた。

N-186-4　彼は　弟が　いて、私は　兄が　いる。
N-186-5　ここに　いて　ください。
N-187-1　彼は　酒を　飲むと　変なことを　する。
N-187-2　彼は　今日は　何も　しない。
N-187-3　昨日は　たくさん　仕事を　した。
N-187-4　たくさん　仕事を　して、遊びに　行った。
N-187-5　休んでないで　仕事を　しろ。
N-187-6　学校で　勉強して　こい。

6　宮古方言研究文献目録

有元光彦（1997）「琉球諸方言の動詞活用形の研究データ篇　宮古方言（宮古島）」『方言規則地図の提唱とその理論的研究　平成 8 年度文部省科学研究費補助金　奨励研究(A)研究成果報告書』

伊豆山敦子（2002）「琉球・宮古（平良）方言の文法基礎研究」『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究（2）「環太平洋の言語」日本成果報告書』

伊豆山敦子（2002）「琉球・宮古（平良西仲）方言の名詞語末音と語形変化」『獨協大学外国語学部言語文化学科　マテシス・ウニウェルサリス』第 3 巻第 2 号

稲垣正幸（1966）「琉球宮古島アクセントの研究」『都留文化大学研究紀要』3,

岩本忠（1981）「宮古伊良部方言調査について」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』2-3,

内間直仁（1984）「宮古諸島の方言」『講座方言学 10―沖縄・奄美地方の方言―』国書刊行会

内間直仁（1984）『琉球方言文法の研究』笠間書院

内間直仁（2002）「宮古伊良部島長浜方言」『平成 12 年度～平成 13 年度科学研究費補助金研究成果報告書』

内間直仁（2002）「沖縄県宮古・八重山方言の調査研究―伊良部島長浜・西表島祖納方言を中心に―」『平成 12 年度～平成 13 年度科学研究費補助金研究成果報告書』

内間直仁（2004）「古代日本語のワ行子音の[ｂ]音化について―宮古・八重山方言を中心に―」『国語学』55-2

内間直仁・山口栄臣（2002）「宮古伊良部島長浜方言」『沖縄県宮古・八重山方言の調査研究―伊良部島長浜・西表島祖納方言を中心に―』

浦崎安常（1972）『宮古の俚諺格言』宮古の俚諺格言研究会

大城健（1975）「琉球宮古島の童名について」『人類科学』27, 九学会連合

大野眞男ほか（1998）「宮古大神島方言の音声　―単語と文法―（付．狩俣方言）」『平成８～９年度文部省科学研究費成果報告書』

沖縄県教育委員会（1978）『多良間島の方言＜琉球方言緊急調査第 3 集＞』

沖縄国際大学高橋ゼミ（1983）「多良間方言調査報告」『沖縄方言研究』5

奥平博尚（1996）『宮古方言散歩路　平良的表現』新報出版

垣花恵美（2003）「伊良部島長浜方言の動詞」『方言第 11 号下巻』沖縄国際大学野原ゼミ

加治工真市（1983）「沖縄県平良市方言」『全国方言辞典１』角川書店

加治工真市ほか（1977）「宮古大神島方言」『琉球の方言』3

加藤正信（1976）「宮古方言の親族名と人称詞」『沖縄―自然・文化・社会―』弘文堂

兼島和枝（2003）「宮古・平良市字島尻方言の音韻研究」『方言第 11 号下巻』沖縄国際大学

野原ゼミ
かりまたしげひさ（1982）「宮古方言のフォネームについて」『琉球の言語と文化―仲宗根政善先生古稀記念―』仲宗根政善先生古稀記念論集刊行委員会
かりまたしげひさ（1984）「琉球宮古島・城辺町保良方言の研究―動詞形態論のための素描―」『沖縄言語研究センター資料』52, 沖縄言語研究センター
かりまたしげひさ（1984）「宮古方言のフォネームはいかに記述されてきたか」『沖縄言語研究センター資料』53, 沖縄言語研究センター
かりまたしげひさ（1986）「宮古方言の「中舌母音」をめぐって」『沖縄文化』66, 沖縄文化協会
かりまたしげひさ（1987）「宮古方言の成節的な子音をめぐって」『琉球方言論叢　琉球方言研究クラブ 30 周年記念』琉球方言論叢刊行委員会
狩俣繁久（1992）「宮古方言」『言語学大辞典（下巻）』三省堂
狩俣繁久（1992）「[書評]『城辺町史（第 5 巻民話篇）』城辺町史編纂委員会」琉球新報 1992 年 1 月 27 日
かりまたしげひさ（1993）「沖縄宮古大神島方言のフォネーム」『沖縄言語研究センター研究報告―琉球列島における音声の収集と研究―』沖縄言語研究センター
狩俣繁久（1993）「宮古大神島方言のフォネームについてのおぼえがき」『沖縄文化』78, 沖縄文化協会
狩俣繁久（1993）「大神方言のフォネームをめぐって」78, 沖縄文化協会
狩俣繁久（1996）「空気力学的な観点から見た宮古諸方言の音韻変化についてのおぼえがき」『言語学林（1995-1996）柴田武先生喜寿記念論文集』三省堂
かりまたしげひさ（1996）「宮古方言の音韻変化についてのおぼえがき―空気力学的な観 点から見て―」『言語学林 96-97』, 三省堂
狩俣繁久（1996）「宮古研究の先駆者ニコライ・A・ネフスキー」『琉球に魅せられた人々―外からの琉球研究とその背景―』琉球大学公開講座委員会
狩俣繁久（1997）「琉球列島の言語（宮古方言）」『言語学大辞典セレクション　日本列島の言語』三省堂
狩俣繁久（1999）「宮古諸方言の動詞「終止形」の成立について」『琉球大学法文学部紀要日本東洋文化論集』5
狩俣繁久（1999）『琉球宮古方言の音声資料の収集・研究―琉球宮古諸方言の音韻』『平成 10 年度文部省科学研究費成果報告書』
狩俣繁久（1999）「琉球宮古方言の動詞終止形について」『琉球大学法文学部紀要　日本東洋文化論集』5
狩俣繁久（2000）「日本の方言探訪・宮古のことば」『月刊言語』11 月号
かりまたしげひさ（2000）「多良間島方言の系譜―多良間島方言を歴史方言学的観点からみる―」『沖縄県多良間島における伝統的社会システムの実態と変容に関する総合的研

究』琉球大学法文学部
狩俣繁久（2002）「宮古方言研究のこれまで・これから」『国文学　解釈と鑑賞』7 月号, 至文堂
狩俣繁久（2003）「琉球語宮古諸方言の形容詞についてのおぼえがき―城辺町保良方言の形容詞の活用を中心に―」『平成 15 年度文部科学省特定領域研究成果報告書（環太平洋の消滅に瀕した言語に関する緊急調査研究）』
狩俣繁久ほか（1998）『宮古のフォークロア』砂子屋書房
川平浩二（1963）「＜南島のあいさつことば＞沖縄宮古郡多良間村塩川地方」『方言研究年報』6
日下部文夫（1973）「平良（宮古島）における所の呼びかた」『人類科学』25, 九学会連合
日下部文夫（1976）「人の一生を表わすことば」『沖縄―自然・文化・社会―』弘文堂
久野マリ子（1983）「琉球宮古方言基礎語彙の研究報告」『国学院大学日本文化研究所所報』19-5
Chew John J.（1976）“Standard Japanese and the Hirara dialect: case study of linguistic convergence”　*The Journal of the Association of Teachers of Japanese* Vol. 11, No. 2/3, pp. 235-248.
Koloskova, Yulia and Ohori, Toshio　（2008）“Pragmatic factors in the development of a switch-adjective language. A case study of the Miyako-Hirara dialect of Ryukyuan” *Studies in Language* 32-3. Special Issue on Parts of Speech: Descriptive Tools, Theoretical Constructs. pp610-636
崎村弘文（1983）「琉球先島方言のアクセント体系・再考」『鹿児島大学南方海域研究センター紀要』4-1
崎山理（1963）「琉球・多良間島・水納島の音韻」『音声の研究』10
崎山理（1963）「琉球宮古島の舌尖母韻について」『音声学会会報』112
崎山理（1963）「宮古島方言仮名表記法の歴史と一試案」『沖縄文化』10
崎山理（1963）「琉球・宮古方言比較音韻論」『国語学』54
崎山理（1964）「琉球・多良間方言の南方的要素」『民族学研究』29-1
崎山理（1965）「琉球宮古方言の舌尖母韻をめぐって」『国語学』60
佐渡山正吉（1983）「万葉歌と方言」『地域と文化』20, ひるぎ社
サムエル・H・北村（1960）「宮古方言音韻論の一考察」『国語学』41, pp 94-105.
柴田武（1971）「琉球宮古語の音韻体系と「宮古仮名」」『言語学論叢』11
柴田武（1971）「語彙研究の方法と琉球宮古語彙」『国語学』87
柴田武（1972）「宮古方言の研究とその意義」『人類科学』24
柴田武（1974）「気象と言葉―沖縄・宮古島方言の風と雨―」『言語生活』275
柴田武（1976）「宮古の人名語彙」『沖縄―自然・文化・社会―』弘文堂
柴田武（1976）「沖縄平良市方言の付属語　ｄｕおよびｎｕ、ｇａについて」『佐藤喜代治教

授退官記念国語学論集』桜楓社
柴田武（1980）「沖縄宮古語の語彙体系」『言語』9-1～12
柴田武（1981）「沖縄平良方言の音韻体系」『＜藤原与一先生古稀記念論集＞方言学論叢 1　方言研究の推進』三省堂
柴田武ほか（1974）「宮古市平良市方言における生活時間語彙」『人類科学』26
島尻沢一（1983）「琉球宮古方言の助詞―野原方言の助詞 ga と nu―」『琉大国語』2
島尻沢一（1987）「宮古野原方言の研究―格助詞を中心に―」『琉球方言論叢　琉球方言研究クラブ 30 周年記念』琉球方言論叢刊行委員会
下地賀代子（2004）「宮古多良間方言の音韻及びその変化の現象」『琉球の方言』28
下地賀代子（2006）『多良間方言の空間と時間の表現』千葉大学 博士論文
下地琴恵（1998）「宮古の語彙について（童名・姓・屋号・親族語彙）」『方言第 6 号上巻』沖縄国際大学野原ゼミ
下地朝良（1968）「宮古島方言に生きている古語」『沖縄文化』26・27, 沖縄文化協会
下地理則（2006）「南琉球語伊良部方言」中山俊秀・江畑冬生編『*文法を描く―フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ 1*』アジアアフリカ言語文化研究所
Shimoji, Michinori　(2008) *A Grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language*. オーストラリア国立大学　博士論文
Shimoji, Michinori (2011) "Quasi-Kakarimusubi in Irabu" Japanese/Korean Linguistics 18
Shimoji, Michinori and Pellard, Thomas [eds.] (2011) *An Introduction to Ryukyuan Languages* .Tokyo: ILCAA
下地良男（1964）"An Analysis of Pitch Interference in Japanese Spoken by the Miyako Speaker"　『琉球大学文理学部紀要人文篇』8
下地良男（1974）「南島宮古方言の音韻変化について」『言語』3-7
新里幸昭（1978）「宮古の文学」『沖縄言語研究センター資料』1
新里幸昭（1987）「ハワイ大学宝令文庫蔵『宮古の歌』語彙・索引集」『沖縄文化』69
新里幸昭（1987）「『宮古島の神歌』の研究」『琉球方言論叢　琉球方言研究クラブ 30 周年記念』琉球方言論叢刊行委員会
杉村孝夫（2003）『来間島方言の記述的研究』2001 年度～2002 年度科学研究費成果報告書
高橋俊三（1993）「多良間方言の語彙（中間報告）」『多良間島調査報告書（1）』沖縄国際大学南島文化研究所
高橋俊三（1993）「多良間方言の動詞の問題点」『多良間島調査報告書（1）』沖縄国際大学南島文化研究所
高橋俊三（1994）「多良間方言の語彙（中間報告 2）」『多良間島調査報告書（2）』沖縄国際大学南島文化研究所
高橋俊三（1995）「多良間方言の語彙（中間報告 3）」『多良間島調査報告書（3）』沖縄国際

大学南島文化研究所
田代安定（1888）「沖縄宮古島及沖縄島対訳方言集」『東京人類学会雑誌』3-29
津波古敏子（1979）「多良間島塩川方言の名詞形態論（中間報告）」『沖縄言語研究センター会報』10
津波古敏子（1982）「多良間島塩川の方言における音韻の考察」『琉球の言語と文化―仲宗根政善先生古稀記念―』仲宗根政善先生古稀記念論集刊行委員会
仲宗根政善（1975）「言語学から見た沖縄―宮古方言の語彙体型を求める―」『人類科学』27
仲宗根政善（1976）「宮古および沖縄本島方言の敬語法―「いらっしゃる」を中心として―」『沖縄―自然・文化・社会―』弘文堂
仲宗根政善ほか（1973）「宮古方言の研究」『宮古諸島学術調査研究報告（言語・文学編）』琉球大学沖縄文化研究所
長浜数子（1979）「宮古歌謡ピャーシグイ論（上）―歌謡と場の関連を中心に―」『沖縄文化』52
仲原穣（2002）「沖縄宮古島保良方言の音韻」『琉球の方言』26
中松竹雄（1972）「琉球語文法ノート―宮古島ウルカ方言の助詞の形態と用法―」『琉球大学教育学部紀要』16, pp1-14.
中松竹雄（1973）「伊良部島のむかしばなし―音韻仮名表記の試み―」『琉球の文化』4
中松竹雄（1978）「基礎語彙の比較的研究（3）―宮古方言・その 1―」『琉球大学教育学部紀要』22
中松竹雄（1979）「基礎語彙の比較的研究（4）―宮古諸島方言・その 2―」『琉球大学教育学部紀要』23
中松竹雄（1983）「「草鎌で草を刈る」の言語地図―伊良部島の場合―」『琉大国語』2
名嘉真三成（1978）「沖縄県宮古久松方言の形容詞」『日本語研究』1
名嘉真三成（1978）「切断動詞 [sui] [ki:] [batsi] について―沖縄・宮古西原方言の例―」『日本語研究』1
名嘉真三成（1978）「琉球方言の動詞活用の研究―宮古方言を中心に（論文要旨）」『日本語研究』1
名嘉真三成（1980）「宮古西原方言の《のぼる》と《あがる》の意味」『日本語研究』3
名嘉真三成（1981）「琉球宮古方言の動詞終止形の成立」『沖縄文化』55
名嘉真三成（1982）「琉球宮古方言の動詞の接続形」『沖縄文化』58
名嘉真三成（1982）「宮古西原方言の動詞の活用」『琉球の言語と文化―仲宗根政善先生古稀記念―』
名嘉真三成（1982）「宮古方言のふるさとあたらしさ」『国文学　解釈と鑑賞』47-9
名嘉真三成（1982）「宮古方言の上一段動詞の四段化現象」『沖縄言語研究センター会報』35

名嘉真三成（1983）「琉球宮古方言の形容詞」『琉球大学教育学部紀要』26
名嘉真三成（1983）「宮古西原方言の助詞」『琉球の方言』8
名嘉真三成（1984）「宮古方言の文法」『国文学　解釈と鑑賞』49-1
名嘉真三成（1984）「宮古西原方言の形容詞」『現代方言学の課題（第 2 巻）』明治書院
名嘉真三成（1984）「宮古のことば」『新沖縄文学』61, 沖縄タイムス社
名嘉真三成（1985）「宮古長浜方言の動詞の活用」『琉球の方言』9
名嘉真三成（1985）「宮古方言の上一段動詞の四段化現象」『沖縄文化研究』11
名嘉真三成（1986）「宮古狩俣方言の動詞の活用」『琉球の方言』10
名嘉真三成（1987）「宮古方言の代名詞」『国文学　解釈と鑑賞』52-2
名嘉真三成（1988）「ネフスキーと宮古方言」『国文学　解釈と鑑賞』53-1
名嘉真三成（1988）「宮古多良間島塩川方言の動詞の活用」『琉球大学教育学部紀要』32
名嘉真三成（1988）「宮古西原方言の語彙（I）」『琉球の方言』13
名嘉真三成（1989）「琉球宮古方言の動詞の接続形」『沖縄文化』18
名嘉真三成（1990）「宮古仲地方言の動詞の活用」『琉球大学教育学部紀要』36
名嘉真三成（1990）「宮古西原方言の語彙（II）」『琉球の方言』14
名嘉真三成（1991）「宮古西原方言のアスペクト」『国文学　解釈と鑑賞』56-1
名嘉真三成（1991）「宮古西原方言の語彙（Ⅲ）」『琉球の方言』15
名嘉真三成（1991）「宮古西原方言の語彙（Ⅳ）」『琉球の方言』16
名嘉真三成（1992）「宮古方言」『国文学　解釈と鑑賞』57-7
名嘉真三成（1995）「西原方言の形容詞の意味論的研究」『琉球の方言』18・19
名嘉真三成（1997）「沖縄宮古西原方言の文末詞」『日本語文末詞の歴史的研究』三弥井書店
名嘉真三成（1998）『琉球方言の古層』第一書房
名嘉真三成（1998）「宮古西原方言の語彙（Ⅵ）」『琉球の方言』22
名嘉真三成（1999）「宮古西原方言の語彙（Ⅶ）」『琉球の方言』23
名嘉真三成（2000）「宮古西原方言の語彙（Ⅷ）」『琉球の方言』24
名嘉真三成ほか（1974）「宮古方言母韻融合の調査報告」『沖縄言語研究センター資料』49
名嘉真三成・中本謙（2001）「宮古西原方言の語彙（Ⅸ）」『琉球の方言』25
名嘉真三成・中本謙（2002）「宮古西原方言の語彙（X）」『琉球の方言』26
中本正智（1976）『琉球方言音韻の研究』法政大学出版局
永山勇（1966）「先島（宮古・八重山）方言覚え書（2）」『国語研究』17
根間弘海（1968）『宮古方言における助詞の一部と代名詞の形態—日本語（東京方言）との対応比較において—』沖縄女子短期大学
根間弘海（1969）『宮古方言における文節音素の研究—日本語（東京方言）を副次的に—』沖縄女子短期大学
野原三義（1990）「来間方言の助詞（1）」『宮古・下地町調査報告書（地域研究シリーズ No.15）

（1)』沖縄国際大学南島文化研究所
野原三義（1991)「来間方言の助詞（2)」『宮古・下地町調査報告書（地域研究シリーズ No.15）（2)』沖縄国際大学南島文化研究所
野原三義（1992)「下地町方言助詞の研究　付 与那覇方言動物・植物語彙等」『宮古・下地町調査報告書（地域研究シリーズ No.15）（3)』沖縄国際大学南島文化研究所
野原優一（1987)「宮古野原方言の動詞活用」『琉球方言論叢　琉球方言研究クラブ 30 周年記念』琉球方言論叢刊行委員会
久野マリ子（1982)「全国的視野から琉球宮古諸島方言を観る」『国学院大学日本文化研究所所報』18-6
平沢洋一（1985)「池間方言係助詞の統語機能」『沖縄文化研究』11
平山輝男（1964)「琉球宮古方言の研究」『国語学』56
平山輝男（1966)「琉球先島方言の研究」『都立大学方言学会会報』16
平山輝男（1966)「琉球先島方言のアクセント体系」『国語学』67
平山輝男（1983)『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』桜楓社
平山輝男ほか（1967)『琉球先島方言の総合的研究』明治書院
Pellard, Thomas（2009）Ōgami — Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū　博士論文
外間守善（1968)「宮古島狩俣の神歌」『文学』36-12
松森晶子（2000)「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発ー沖永良部島の調査から」『音声研究』4(1), pp61-71.
松森晶子（2010)「多良間島の 3 型アクセントと「系列別語彙」」上野善道（監)『日本語研究の 12 章』明治書院, pp.490-503.
宮古農林高校生物クラブ（1978)『宮古島の植物方言集』
宮良当壮（1961)「方言の実態と共通語の問題点―沖縄先島―」『方言学講座（4)』東京堂
村山七郎（1987)「［書評］平山輝男編著　琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』『奄美方言基礎語彙の研究』」『国語学』149
本永守靖（1972)「平良方言の音韻法則」『琉球大学教育学部紀要』16
本永守靖（1973)「平良方言の動詞の活用」『琉球大学教育学部紀要』17
本永守靖（1978)「宮古平良方言の形容詞」『琉球大学教育学部紀要』22-1
本永守靖（1982)「伊良部方言の研究」『琉球の言語と文化―仲宗根政善先生古稀記念―』仲宗根政善先生古稀記念論集刊行委員会
本永守靖（1994)『琉球圏生活語の研究』春秋社
山口栄臣（2002)「語彙」『平成 12 年度～平成 13 年度科学研究費補助金研究成果報告書』
山田進（1972)「現代宮古方言味覚語彙考―東京方言との比較を中心に―」『沖縄文化』39
与儀達敏（1934)「宮古島方言研究」『方言』4-10, 春陽堂
与儀達敏（1937)「宮古方言を中心として」『南島論叢（伊波普猷先生還暦記念)』沖縄日報

社
吉村玄得（1974）『沖縄宮古ことわざ全集　付録 やさしい方言』
吉本隆生（1998）「夏秋冬春　夏の抄（1）ヴィブィ・ガッサァ」『EDGE　No.7』APO（Art Produce Okinawa）
琉球大学沖縄文化研究所（1968）『宮古諸島学術調査研究報告―言語・文学編―』
琉球大学方言研究クラブ（1974）「宮古・久松方言の音韻と動詞の活用体系」『琉球方言』12・13, 琉球大学方言研究クラブ

7　文化講演会

調査期間中に宮古市中央公民館で文化講演会を行った。そのときのチラシと新聞記事を以下に掲載しておく。

文化講演＆シンポジウム

「語ろう宮古島の方言」

9月3日から7日まで、国立国語研究所、琉球大学、沖縄国際大学などの方言研究プロジェクトのメンバー約40名が、宮古島で方言調査を行います。この調査は、消滅の危機にある貴重な言語を集中的に記録・収録し、方言の保存・継承と日本語の歴史の解明に活かすことを目的としています。今回、この調査に合わせ、方言について語り合う文化講演会「語ろう 宮古島の方言」を開催いたします。市民の皆様、ふるってご参加ください。

日　時：平成23年9月6日（火）
午後5時30分～7時30分
会　場：宮古島市中央公民館／大ホール
〈入場無料〉

テーマ：「語ろう　宮古島の方言」

パネリスト　○田窪　行則（京都大学教授）
○西岡　敏（沖縄国際大学准教授）
○ウェイン・ローレンス
（オークランド大学上級講師）
○林　由華（京都大学非常勤講師）
司　会　○木部　暢子（国立国語研究所教授）

■主　催：国立国語研究所・宮古島市教育委員会
■連絡先：宮古島市教育委員会 生涯学習振興課（電話0980-77-4947）

執筆者紹介

木部　暢子（国立国語研究所時空間変異研究系教授）

トマ・ペラール（フランス国立科学研究所常勤研究員）

林　由華（京都大学非常勤講師）

五十嵐　陽介（広島大学大学院文学研究科准教授）

かりまた　しげひさ（琉球大学法文学部教授）

松浦　年男（北星学園大学文学部専任講師）

中島　由美（一橋大学大学院社会学研究科教授）

徳永　晶子（一橋大学大学院社会学研究科博士課程）

諸岡　大悟（一橋大学大学院社会学研究科修士課程）

国立国語研究所共同研究報告 12-02

消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究
南琉球宮古方言調査報告書

2012年8月1日発行

編集　木部暢子（国立国語研究所時空間変異研究系）

発行　大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所

〒190-8561　東京都立川市緑町10-2

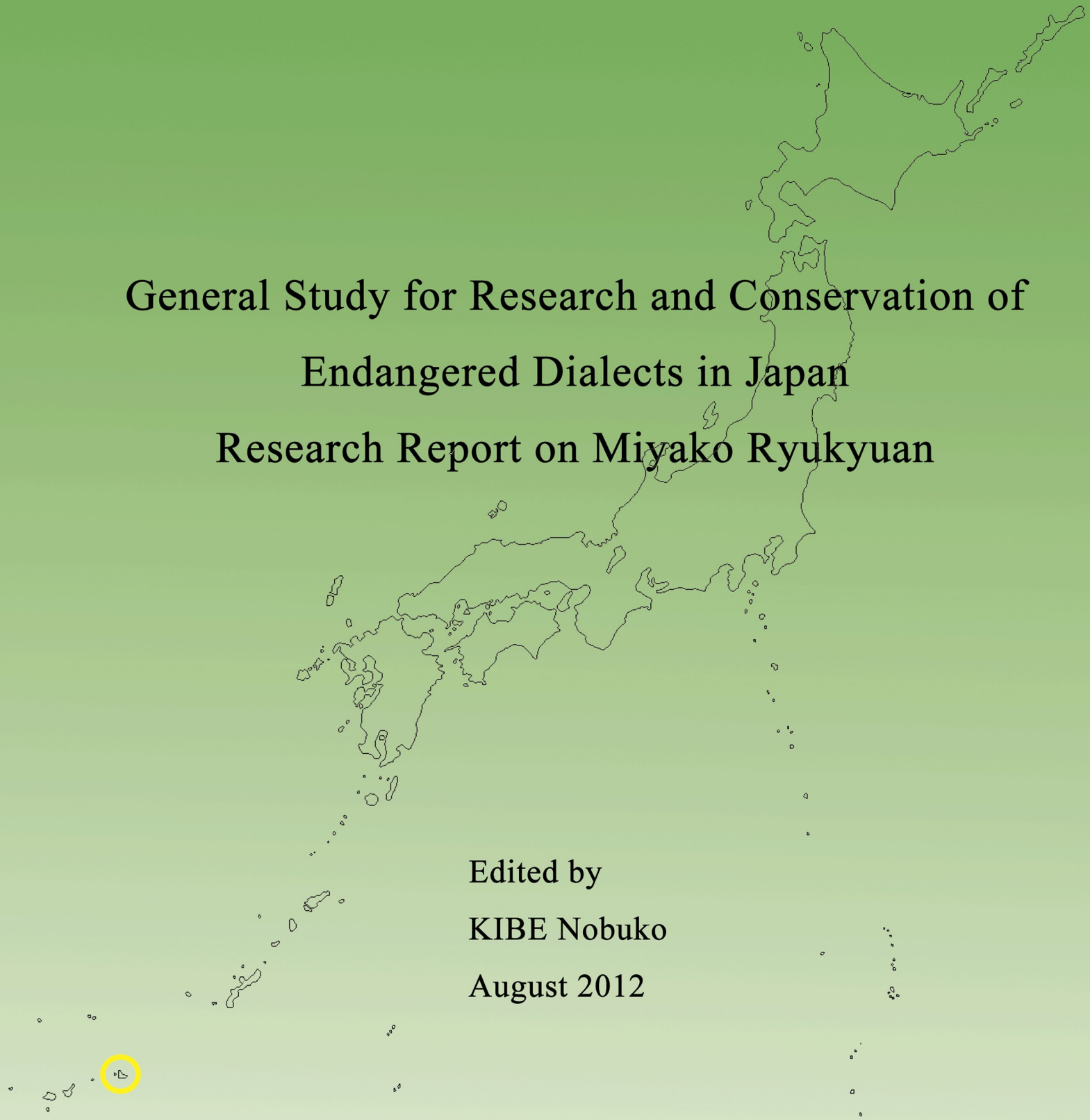
Tel.042-540-4300（代表）

http://www.ninjal.ac.jp/

ⓒ国立国語研究所

ISBN　978-4-906055-22-7　　ISSN　2185-0127

NINJAL Collaborative Research Project Reports 12-02



General Study for Research and Conservation of Endangered Dialects in Japan
Research Report on Miyako Ryukyuan

Edited by
KIBE Nobuko

August 2012

NATIONAL INSTITUTE FOR JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS